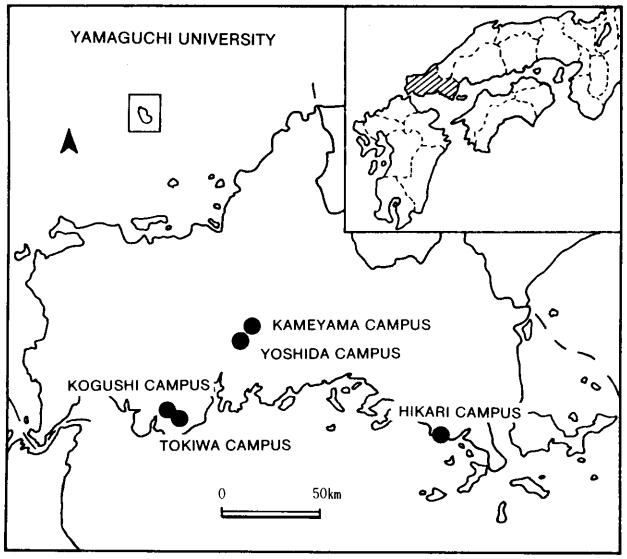
山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ

1 9 8 7

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ



1 9 8 7

山口大学埋蔵文化財資料館

発刊にあたって

このたび、本学が昭和61年度に大学構内で実施した発掘調査の記録が、『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』として刊行するはこびとなったことを喜ばしく思う。

本学での埋蔵文化財の調査は統合移転に伴い昭和41年から実施しており、とりわけ、吉田地区では縄文時代から江戸時代におよぶ一大集落であることが明らかとなっている。また、まもなく10年目をむかえる埋蔵文化財資料館の調査・研究によって、各地区におけるそれぞれの時代の集落の生活実態、変遷過程が次第に明らかとなってきており、その成果として、地域の歴史をはじめとする集落遺跡研究に寄与する知見にはゆたかなものがある。

将来の文化創造の基礎をなす文化財を、歴史・文化のなかで体系的に把握するためには、集落跡で得られた成果に加え、埋葬跡を含めた今後の調査・研究が望まれよう。

文化財を後世に末永く保存し、積極的な活用を図ることが国民的課題となっている昨今、教育・研究を通じ社会への貢献を使命とする本学においても、可視的な遺跡の利用とともに、施設・環境整備と共に進む構内遺跡の調査・研究および保護は、周知の遺跡上に立地する課題のひとつといえる。

しかし、両者は本質的には決して競合するものではなく、将来を展望した協調によって円滑に進めることができるものと確信している。

最後に、発掘調査および報告書の刊行にあたり、御理解、御協力をいただいた関係部局、各位に対し感謝の意を表したい。

昭和63年３月

山口大学

学長　粟屋和彦

序　　文

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵが発刊のはこびとなりました。この報告は、山口大学埋蔵文化財資料館により昭和61年度に実施された、吉田構内（試掘調査１件、立会調査17件）、小串構内（立会調査２件）、常盤構内（立会調査３件）、亀山構内（試掘調査１件、立会調査１件）、光構内（立会調査１件）及びその他構内（立会調査２件）の、計試掘調査２件、立会調査26件の調査記録に、２・３の研究論文を加えたものであります。

山口大学吉田遺跡は、縄文時代後期・晩期から江戸時代に至る集落跡としての全容が判明しつつあり、中でも遺跡保存地区は、昭和57・59年の再調査により、昭和40年頃学内・外で予想されたとおり椹野川流域の代表遺跡として古代建築学上貴重なものであると、調査を重ねるに従って着々成果があがっています。山口大学の吉田キャンパスは、文字どおり埋蔵文化財、遺構の上に構築されたもので、縄文から現代に至る歴史の中で、文化的創造の諸条件を模索することが行なわれてきた訳であります。この貴重な文化財を将来へ研究を重ねて行くことは、私達に与えられた重大な責務であり、次の世代に継代して行かなければならないと考えています。また亀山構内の『白石遺跡』、光構内の『御手洗遺跡』などの周知の地域、そのほか宇部地区などにおいても調査が進められ、前号の研究年報までに見られたように山口大学は勿論、周辺の山口附属学校などにおいても重要な遺跡に数々の新しい事実の発見が加えられていて、私達の夢は尽きるところがありません。

今年で吉田の地に統合移転して20年余が経ちますし、資料館が開館されて10年が過ぎました。山口大学にとっての一つの節目でございます。移転当時より埋蔵文化財の研究、調査が次々と成果を積み重ね今日に至っていますが、当初より筆舌に尽くしがたい学内・外よりの批判をあびながら、私達は絶えず学内の施設拡充、環境整備を進めて行く中で、この文化財が日本の歴史文化に寄与すべく今後とも大学当局、関係部局の御理解・御協力を頂き、努力を続けて行かねばならないと期しています。

昭和63年３月

山口大学埋蔵文化財資料館
館長　黄　　基雄

例　　言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、昭和61年度に山口大学構内で実施した調査の報告書であり、第４章第１節17は、山口市教育委員会の調査を補助したものである。また付篇Ⅰとして特に、昭和59年度の遺跡保存地区の調査を報告する。
2. 現地における調査・研究は人文学部考古学研究室、文化会考古学部、井上春樹の協力を得て資料館員河村吉行・森田孝一・杉原和恵が担当した。また、出土遺物の整理は同館員奥英子・杉原が中心となり行なったが、第３章については中規博・福田泰一郎（文化会考古学部）が援助した。
3. 調査・研究における事務一般は事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があたった。
4. 遺構の実測は、人文学部考古学研究室、文化会考古学部の協力のもと、河村・森田が行なった。遺物の実測については、土器は第２章：資料館員木村元浩、第４章：杉原、付篇Ⅰ：河村が行ない、石器・土製品は木村が行なった。第３章の遺物は資料館員の監修のもと福田・中が行なった。
   製図は、石器を木村が行なったほかは、主に奥が行ない、河村・杉原が補助した。
   本文の執筆は、河村・杉原が分担して行なった。
5. 現地における写真撮影は河村・森田が行なった。また、本冊子の遺物の写真撮影のうちカラー写真は桜プリント（企）藤本和秀氏が行ない、モノクロ写真については同氏の指導のもと河村・木村があたった。
6. 石器の石質鑑定は山口大学理学部教授　松本徑夫氏、植物遺体の鑑定は同農学部講師　宇都宮宏氏に依頼し、懇切な御教示を得た。記して感謝の意を表したい。
7. 本書の編集は館員が協力して行なった。
8. 調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。広く活用されることを希望したい。
9. 調査組織は次のとおりである（昭和61・62年度）。

調査主体	埋蔵文化財資料館	館　長	近藤　喬一	〔～昭和62年４月２日〕
		〃	黄　　基雄	〔昭和62年４月３日～〕
		館　員	河村　吉行	
		〃	森田　孝一	〔～昭和61年８月31日〕
		〃	木村　元浩	〔昭和62年４月１日～〕
		〃	杉原　和恵	
		〃	奥　　英子	〔昭和61年９月１日～昭和62年３月30日〕

事務局		事務局長	大谷　巌
	本部庶務部	部　長	内藤　信〔～昭和62年3月30日〕
		〃	田中　武雄〔昭和62年4月1日～〕
	庶務課	課　長	金谷　英夫〔～昭和62年3月30日〕
		〃	竹下　寛美〔昭和62年4月1日～〕
		課長補佐	大多和泰則
	庶務係	係　長	野村　宗成
			本田　正春
			岩佐　厚子
			深町　洋二
			中川イクミ

10. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は昭和61年度）。

山口大学事務局庶務部　人事課長　村上昭生、同課長補佐　増谷　泰、同係長　西野雅博、同係　松本胤明、池本誠也、給与係長　森田義富、同係　河内和郎、藤井純朗

経理部　部長　何木　亘、主計課長　伊藤良昭、同課長補佐　本間　健、経理課長　丹澤　満、同課長補佐　廣石輝男、総務係長　田中善人、監査係長　石崎啓介、管財係長　小林和生、用度係長　野沢章三　用度主任　谷本信之、管理主任　正司三喜男、同係　浜田千春

施設部　部長　笠井宏悦、企画課長　比嘉真義、建築課長　竹田忠文、同課長補佐　佐伯　敦、設備課長　中澤喜久雄、総務係長　梅村　馨、総務主任　三村文雄、第一工営係長　藤井　幸、同係　小川賀津夫、澤谷弘美、第二工営係長　稲垣實造、同係　河田徹也、電気係長　亦野高志、同係　小草建三、松田清司、機械係長　鈴木輝美、同係　鹿嶋正則、岡田吉彦

学生部　部長　新中康弘、次長　中山昭成、学生課長　吉村　學、同課長補佐　嶋本拓司、学生係長　佐藤正治、学生主任　五嶋幸生、同係　角井隆志、辛嶋克己

附属図書館　館長　西村　久、部長　上島順二郎、整理課長　加藤宗晴、総務係長　牧原和仁

教育学部　事務長　西澤喜昭、同補佐　柳　等、庶務係長　柳　洋二、会計係長　森本茂雄、附属幼稚園長　川口政宏、同副園長　志熊淑子、附属山口小学校長　橋尾四郎、同副校長　西村　豊、附属山口中学校長　徳冨正義、同副校長　水上義昭、附属光小学校長　三浦　肇、同副校長　藤原京次、

附属光中学校長　真田元祐、同副校長　藤澤茂樹、山口附属学校係長
林　威、光附属学校係長　長谷知之

経済学部　事務長　原田晃威、庶務係長　河本　進、会計係長　中島岩弘

農学部　事務長　原田政明、附属農場事務長　宇山隆造、同係長　山本直行、
同係　寺山幸夫、尾崎恵雄

教養部　事務長　梅原儀助、庶務係長　野中章彦、会計係長　伊藤敏穂、同係
桜井健二

医学部　事務部長　宮崎敬一、同次長　堀江　正、総務課長　坂井友造、同課長
補佐　竹腰直道、管理課長　井上隆次、同課長補佐　河野繁之、
石川俊輔、庶務係長　原　和男、管理係長　末次敏男、経理係長
松永次郎、施設係長　三浦幸一、設備係長　吉永峯生、環境係長
藤井良雄

工学部　事務長　大庭静男、同補佐　片山美徳、会計係長　石川恒夫、同主任
高崎明祈

人文学部考古学研究室

文化会考古学部

山口市教育委員会

山口シルバー人材センター

新栄ビルサービス株式会社

末広産業

調査補助員

古賀信幸、乾風千絵、岡村昌彦、杉本とも子、森下靖士、吉田　寛、米倉智美、小田信子、柏本秋生、高下洋一、定池博之、菅波正人、西本泰子、久野孝一、馬場道則、鎌田ちのい、辛嶋眞治、富樫孝志、中原章子、鱒村礼子、南　時夫、森　恒裕（以上人文学部考古研究室）、中　規博、福田泰一郎、榎本義嗣、河口亜由美、野村正芳、畑島圭太郎、平辻暢子（以上文化会考古学部）、井上春樹

作業員

石川妙子、石川好江、井手要輔、糸永　均、岡屋知子、在間淑美、重冨惇子、師子角由紀子、中川美佐子、中川裕二、西見利子、花田智都子、藤原啓子、峯重つや子、宮家静代、村田治枝

凡　　例

1. 吉田構内における調査地区および層位、遺構の位置は国土座標を基準として北から南へ１～24、西から東へＡ～Ｚの番号を付して50ｍ方眼に区画した構内地区割のＡ－24区南西隅を起点（構内座標ｘ＝０，ｙ＝０）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（Ｘ，Ｙ）と構内座標値（ｘ，ｙ）とは下記の計算式で変換される。

   $x = X + 206{,}000$

   $y = Y + 64{,}750$

2. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

   竪穴住居跡……ＳＢ，　土壙……ＳＫ，　溝……ＳＤ，　柱穴……Ｐ

3. 本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他構内では磁北を示す。

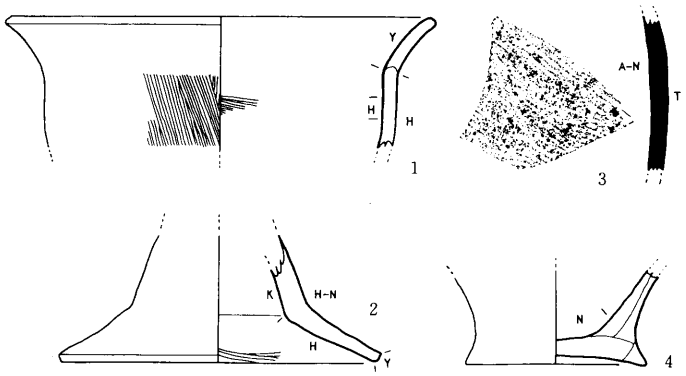
4. 標高数値は海抜標高を示す。なお、先の年報Ⅲ中で留保していた附属幼稚園・小学校内の仮点標高（ＢＭ）は、今年度の調査により32.757ｍであることを確認したので、ここに報告する。

5. 遺物・土層の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1976) に準拠した。

6. 土器の実測図は下記のように器種分類した。

   断面黒ぬり……須恵器、須恵質土器；断面白ぬり……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、瓦，断面網目……陶磁器

7. 土器の器面調整については、断面周囲に調整の境界を記し、境界間に下記の略記号より明示した。ただし、風化等による不明部分は無記入とした。



【土器実測図の調整凡例】

〔種類〕

Ｎ……ナデ（Ｎｈヘラナデ）、

Ｙ……横ナデ（Ｙｈヘラ横ナデ）

Ｈ……刷毛目、Ｍ……ミガキ、

Ｋ……ケズリ、Ｔ……タタキ、

Ａ……タタキ当て具痕、Ｃ……カキ目、

Ｊ……条痕、Ｕ……施釉、Ｘ……条線、

ＨＫ……底部ヘラ切り、ＩＫ……底部糸切り

〔先後関係〕

Ｈ-Ｎ……刷毛目のちナデ

１：口縁部内外面横ナデ。胴部は外面縦刷毛目、内面は横刷毛目が一部にみられるが調整不明。

２：外面刷毛目のちナデ。裾端部は横ナデする。内面は、脚柱部へラケズリ、裾部横刷毛目。

３：外面平行タタキ、内面はのち当て具痕をナデ消す。

４：底部内面のみナデが観察できるが、あとは内外面とも調整不明。

本　文　目　次

第１章　昭和61年度山口大学構内遺跡調査の概要 …… （河村）…… 1

第２章　亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査 …（河村・杉原）

第１節　調査の経過 …… （杉原）…… 7

第２節　教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査 …… （河村・杉原）

1　層位・遺構 …… 9

2　遺物 …… 15

3　小結 …… 22

第３節　教育学部附属山口中学校部分の調査 …… （杉原）

1　層位・遺構 …… 25

2　遺物 …… 29

3　小結 …… 36

第３章　吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査 …… （河村）

1　調査の経過 …… 39

2　層位・遺構 …… 40

3　遺物 …… 45

4　小結 …… 47

第４章　昭和61年度山口大学構内の立会調査 …… （河村）

第１節　吉田構内の立会調査

1　山口銀行現金自動支払機設営に伴う立会調査 …… 49

2　農学部附属農場農道整備に伴う立会調査 …… 51

3　農学部附属農場農道交通規制に伴う立会調査 …… 53

4　正門横（水田内）境界杭設置に伴う立会調査 …… 54

5　経済学部環境整備に伴う立会調査 …… 55

6　交通標識設置に伴う立会調査 …… 56

7　教養部自動販売機増設に伴う立会調査 …… 57
8　教養部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査 …… 58
9　経済学部散水栓取設に伴う立会調査 …… 59
10　水泳プール改修等に伴う立会調査 …… 60
11　農学部附属農場水道管埋設に伴う立会調査 …… 61
12　汚水排水管等総改修に伴う立会調査 …… 62
13　本部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査 …… 64
14　経済学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査 …… 65
15　附属図書館荷物運搬用スロープ取設に伴う立会調査 …… 66
16　教養部37番教室改修に伴う立会調査 …… 67
17　市道神郷1号および問田神郷線の送水管埋設に伴う立会調査 …… 68
第2節　小串構内の立会調査
1　医学部附属病院外来診療棟新営に伴う立会調査 …… 70
2　医学部附属病院外来療棟周辺環境整備等に伴う立会調査 …… 71
第3節　常盤構内の立会調査
1　工学部尾山宿舎排水管改修に伴う立会調査 …… 72
2　工学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査 …… 73
3　情報処理センター（常盤センター）空調設備取設に伴う立会調査 …… 74
第4節　亀山構内の立会調査
教育学部附属山口小学校電柱移設に伴う立会調査 …… 75
第5節　光構内の立会調査
教育学部附属光小学校創立記念事業に伴う立会調査 …… 76
第6節　その他構内の立会調査
1　湯田宿舎給水管改修に伴う立会調査 …… 79
2　経済学部職員宿舎下水管改修に伴う立会調査 …… 80

付篇

付篇Ⅰ

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）……河村吉行…… 85

1　調査の経過 …… 85
2　調査の概要 …… 86
3　遺構・遺物 …… 89
4　小結 …… 126

付篇Ⅱ

古墳時代における竪穴住居の各属性について ……河村吉行…… 129

付篇Ⅲ

先土器時代の山口地方－遺跡の分布と立地－ ……木村元浩…… 147

山口大学構内遺跡調査要項
山口大学埋蔵文化財資料館規則 …… 167
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則 …… 168
山口大学構内の主な調査 …… 170

Summary …… 175

図　版　目　次

〈亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査〉　本文対応頁
ＰＬ．１　(1)　幼稚園・小学校第１トレンチ全景（西から） …… 9
(2)　幼稚園・小学校第１トレンチ東壁土層断面（西から） …… 9
(3)　幼稚園・小学校第３トレンチ全景（南から） …… 12
(4)　幼稚園・小学校第４トレンチ全景（西から） …… 13
ＰＬ．２　(1)　幼稚園・小学校第５トレンチ全景（南から） …… 13
(2)　幼稚園・小学校第６トレンチ全景（南から） …… 13
(3)　幼稚園・小学校第７トレンチ全景（西から） …… 13
(4)　幼稚園・小学校第９トレンチ南壁土層断面（北から） …… 13

ＰＬ．３　(1)　幼稚園・小学校第10トレンチ全景（北から）…… 14
(2)　幼稚園・小学校第11トレンチ全景（南から）…… 14
(3)　幼稚園・小学校第12トレンチ全景（南から）…… 14
(4)　幼稚園・小学校第13トレンチ全景（北から）…… 14
ＰＬ．４　(1)　幼稚園・小学校第13トレンチ南壁土層断面（北から）…… 14
(2)　幼稚園・小学校第14トレンチ全景（北から）…… 14
(3)　幼稚園・小学校第15トレンチ全景（北から）…… 15
(4)　幼稚園・小学校第16トレンチ全景（南から）…… 15
ＰＬ．５　(1)　中学校第１トレンチ南壁土層断面（北から）…… 25
(2)　中学校第２トレンチ南壁土層断面（北から）…… 25
(3)　中学校第３トレンチ西壁土層断面（東から）…… 26
(4)　中学校第４トレンチ西壁土層断面（東から）…… 26
ＰＬ．６　(1)　中学校第５トレンチ第４～６層遺物出土状況（南から）…… 26・31～33
(2)　中学校第５トレンチ第４～６層遺物出土状況（東から）…… 26・31～33
(3)　中学校第５トレンチ第４～６層完掘状況（南から）…… 26・31～33
(4)　中学校第５トレンチ北壁土層断面（南から）…… 26
ＰＬ．７　(1)　中学校第５トレンチ完掘状況（南から）…… 26
(2)　中学校第６トレンチ全景（東から）…… 27
(3)　中学校第７トレンチ全景（北から）…… 28
(4)　中学校第８トレンチ全景（南から）…… 28
ＰＬ．８　幼稚園・小学校出土遺物(1) …… 15～17
ＰＬ．９　幼稚園・小学校出土遺物(2) …… 17～19
ＰＬ．10　中学校出土遺物(1) …… 28～32
ＰＬ．11　中学校出土遺物(2) …… 29・32・33
〈吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査〉
ＰＬ．12　吉田構内全景（北から）
ＰＬ．13　(1)　Ａトレンチ全景（北から）…… 40
(2)　Ａトレンチ遺物出土状況（東から）…… 40・45・46
(3)　Ｂトレンチ全景（北から）…… 40
(4)　Ｂトレンチ南壁土層断面（北から）…… 40

ＰＬ．14　(1)　Ｃトレンチ全景（北から）…… 43
(2)　Ｄトレンチ全景（北から）…… 43
(3)　Ｅトレンチ全景（東から）…… 43
(4)　Ｆトレンチ全景（北から）…… 44
ＰＬ．15　(1)　Ｆトレンチ地山落ち込み状況（西から）…… 44
(2)　Ｆトレンチ南壁土層断面（北から）…… 44
(3)　出土遺物 …… 45・46
〈昭和61年度山口大学構内の立会調査〉
ＰＬ．16　出土遺物(1) …… 50・52・53・63・66
ＰＬ．17　出土遺物(2) …… 68・69・76～78・82

付篇Ⅰ

〈山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）〉
ＰＬ．18　(1)　調査区全景（北東から）…… 86～125
(2)　調査区全景（南西から）…… 86～125
ＰＬ．19　(1)　第９号竪穴住居跡（東から）…… 90～92
(2)　第10～13号竪穴住居跡（南東から）…… 92～95
ＰＬ．20　(1)　第11・12号竪穴住居跡（西から）…… 92・93
(2)　第13号竪穴住居跡（北西から）…… 94・95
ＰＬ．21　(1)　第13号竪穴住居跡西隅の桁・梁材出土状況（南西から）…… 95
(2)　第13号竪穴住居跡東隅の桁・梁材出土状況（南から）…… 95
(3)　第13号竪穴住居跡の桁材縦断面（南東から）…… 95
(4)　第13号竪穴住居跡の桁材横断面（北東から）…… 95
ＰＬ．22　(1)　第13号竪穴住居跡炉跡（北西から）…… 95
(2)　第13号竪穴住居跡炉跡（南東から）…… 95
(3)　第17号竪穴住居跡（北東から）…… 97・98
(4)　第18号竪穴住居跡（南西から）…… 98
ＰＬ．23　(1)　河川跡（南東から）…… 112～116
(2)　河川跡土層断面（南東から）…… 112・113
(3)　河川跡遺物出土状況（北東から）…… 112～116
(4)　現地説明会風景

ＰＬ．24　出土遺物(1) …… 91～107
ＰＬ．25　出土遺物(2) …… 107～113
ＰＬ．26　出土遺物(3) …… 113～125
ＰＬ．27　出土遺物(4) …… 91～126

付篇Ⅲ

〈先土器時代の山口地方〉
ＰＬ．28　(1)　湯無田遺跡採集の石器群（表） …… 157･158
　　(2)　湯無田遺跡採集の石器群（裏） …… 157･158

挿　図　目　次

〈昭和61年度山口大学構内遺跡調査の概要〉
Fig.　1　山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図 …… 4
Fig.　2　山口大学小串・常盤両キャンパス位置図 …… 5
Fig.　3　山口大学光キャンパス位置図 …… 6
〈亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査〉
調査の経過
Fig.　4　調査区位置図 …… 7
教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査
Fig.　5　トレンチ設定図 …… 9
Fig.　6　土層断面図 …… 10･11
Fig.　7　第３トレンチ遺構配置図 …… 12
Fig.　8　第１トレンチ出土遺物実測図 …… 15
Fig.　9　第９トレンチ暗渠出土遺物実測図 …… 16
Fig.　10　第９トレンチ第４層出土遺物実測図 …… 16
Fig.　11　第９トレンチ第５・６・７層出土遺物実測図(1) …… 18
Fig.　12　第９トレンチ第５・６・７層出土遺物実測図(2) …… 19
Fig.　13　第10トレンチ出土遺物実測図 …… 19
教育学部附属山口中学校部分の調査

Fig. 14　トレンチ設定図 …… 25
Fig. 15　土層断面図 …… 27
Fig. 16　第3トレンチ出土遺物実測図 …… 29
Fig. 17　第4トレンチ出土遺物実測図 …… 29
Fig. 18　第5トレンチ第4・5・6層出土遺物実測図(1) …… 30
Fig. 19　第5トレンチ第4・5・6層出土遺物実測図(2) …… 31
Fig. 20　第5トレンチ第7層出土遺物実測図 …… 33
Fig. 21　第5トレンチ第9・10層出土遺物実測図 …… 33
〈吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査〉
Fig. 22　調査区位置図 …… 39
Fig. 23　トレンチ設定図 …… 40
Fig. 24　土層断面図 …… 41・42
Fig. 25　河川跡出土遺物実測図 …… 44
Fig. 26　溝状遺構出土遺物実測図 …… 44
Fig. 27　包含層その他の出土遺物実測図 …… 45
〈昭和61年度山口大学構内の立会調査〉
吉田構内の立会調査
Fig. 28　調査区位置図 …… 49
Fig. 29　出土遺物実測図 …… 50
Fig. 30　調査区位置図 …… 51
Fig. 31　出土遺物実測図 …… 52
Fig. 32　調査区位置図 …… 53
Fig. 33　採集遺物実測図 …… 53
Fig. 34　調査区位置図 …… 54
Fig. 35　調査区位置図 …… 55
Fig. 36　調査区位置図 …… 56
Fig. 37　調査区位置図 …… 57
Fig. 38　調査区位置図 …… 58
Fig. 39　調査区位置図 …… 59
Fig. 40　調査区位置図 …… 60

Fig. 41　調査区位置図 …… 61
Fig. 42　調査区位置図 …… 62
Fig. 43　出土遺物および採集遺物実測図 …… 63
Fig. 44　調査区位置図 …… 64
Fig. 45　調査区位置図 …… 65
Fig. 46　調査区位置図 …… 66
Fig. 47　出土遺物実測図 …… 66
Fig. 48　調査区位置図 …… 67
Fig. 49　調査区位置図 …… 68
小串構内の立会調査
Fig. 50　調査区位置図 …… 70
Fig. 51　調査区位置図 …… 71
常盤構内の立会調査
Fig. 52　調査区位置図 …… 72
Fig. 53　調査区位置図 …… 73
Fig. 54　調査区位置図 …… 74
亀山構内の立会調査
Fig. 55　調査区位置図 …… 75
光構内の立会調査
Fig. 56　調査区位置図 …… 76
Fig. 57　御手洗湾採集遺物実測図 …… 77
その他構内の立会調査
Fig. 58　調査区位置図 …… 79
Fig. 59　調査区位置図（2号宿舎） …… 80
Fig. 60　2号宿舎出土遺物実測図 …… 81
Fig. 61　調査区位置図（6号宿舎） …… 81
Fig. 62　6号宿舎出土遺物および周辺畑地採集遺物実測図（土器） …… 82
Fig. 63　6号宿舎周辺畑地採集遺物実測図（石器） …… 83

付篇Ⅰ

〈山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）〉

Fig. 64　調査区位置図 …… 85
Fig. 65　遺跡保存地区遺構配置図 …… 87・88
Fig. 66　第８号竪穴住居跡実測図 …… 89
Fig. 67　第９号竪穴住居跡実測図 …… 90
Fig. 68　第９号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 91
Fig. 69　第10～12号竪穴住居跡実測図 …… 93
Fig. 70　第13号竪穴住居跡実測図 …… 94
Fig. 71　第14号竪穴住居跡実測図 …… 96
Fig. 72　第17号竪穴住居跡実測図 …… 97
Fig. 73　第18号竪穴住居跡実測図 …… 98
Fig. 74　第11～13・18号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 99
Fig. 75　第30～32・35号土壙実測図 …… 101
Fig. 76　第33・36・37号土壙実測図 …… 102
Fig. 77　第30・31・33・36・39号土壙出土遺物実測図 …… 103
Fig. 78　第38・39・43・44号土壙実測図 …… 105
Fig. 79　第45～48号土壙実測図 …… 106
Fig. 80　第49号土壙実測図 …… 108
Fig. 81　第44～46・49号土壙出土遺物実測図 …… 109
Fig. 82　第４・11・14号溝出土遺物実測図 …… 110
Fig. 83　柱穴出土遺物実測図 …… 112
Fig. 84　第１・２号河川跡土層断面図 …… 113
Fig. 85　第１・２号河川跡出土遺物実測図(1) …… 114
Fig. 86　第１・２号河川跡出土遺物実測図(2) …… 115
Fig. 87　攪乱壙出土遺物実測図 …… 117
Fig. 88　トレンチ出土遺物実測図 …… 119
Fig. 89　出土状況不明の遺物実測図 …… 120

付篇Ⅱ

〈古墳時代における竪穴住居の各属性について〉

Fig. 90　県内における主な古墳時代の竪穴住居跡検出遺跡の分布 …… 131
Fig. 91　県内における主な弥生～古墳時代の竪穴住居の時期 …… 132

Fig. 92　竪穴住居の平面形態変化 …… 133
Fig. 93　竪穴住居の床面積 …… 134
Fig. 94　床面積に占める主柱間床面積(1) …… 136
Fig. 95　床面積に占める主柱間床面積(2) …… 137

付篇Ⅲ

〈先土器時代の山口地方〉
Fig. 96　山口地方地域別遺跡分布 …… 147
Fig. 97　湯無田遺跡の石器群 …… 156
Fig. 98　先土器時代遺跡分布図(1) …… 160
Fig. 99　先土器時代遺跡分布図(2) …… 161
Fig.100　先土器時代遺跡分布図(3) …… 162

Fig.101　山口大学吉田構内地区割および調査区位置図 …… 177・178
Fig.102　山口大学小串構内調査区位置図 …… 179・180
Fig.103　山口大学常盤構内調査区位置図 …… 181・182
Fig.104　山口大学亀山構内（幼稚園・小学校部分）調査区位置図 …… 183・184
Fig.105　山口大学亀山構内（中学校部分）調査区位置図 …… 185・186
Fig.106　山口大学光構内調査区位置図 …… 187・188

表　目　次

〈昭和61年度山口大学構内遺跡調査の概要〉
Tab. 1　昭和61年度山口大学構内遺跡調査一覧表 …… 1・2
〈亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査〉
Tab. 2　出土遺物観察表 …… 20・21
Tab. 3　出土遺物観察表 …… 34・35
〈吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査〉
Tab. 4　出土遺物観察表 …… 46
〈昭和61年度山口大学構内の立会調査〉

Tab. 5　出土遺物および採集遺物観察表 …… 63
Tab. 6　御手洗湾採集遺物観察表 …… 77
Tab. 7　出土遺物および採集遺物観察表 …… 84

付篇Ⅰ

〈山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）〉

Tab. 8　出土土器観察表 …… 121～124
Tab. 9　出土石器観察表 …… 125

付篇Ⅱ

〈古墳時代における竪穴住居の各属性について〉

Tab. 10　竪穴住居の主柱数 …… 135
Tab. 11　県内の主な古墳時代の竪穴住居一覧表 …… 141～146

付篇Ⅲ

〈先土器時代の山口地方〉

Tab. 12　地域別石器内容一覧表 …… 149
Tab. 13　地域別使用石材一覧表 …… 151
Tab. 14　各遺跡における器種別使用石材 …… 151
Tab. 15　山口地方先土器時代遺跡地名表 …… 163～166

Tab. 16　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員 …… 169
Tab. 17　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員 …… 169
Tab. 18　山口大学構内の主な調査一覧表 …… 170～174

第１章　昭和61年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての集落跡として著名な吉田地区（吉田遺跡）をはじめ、県内各地に分散する附属施設を含む地区に周知の遺跡が埋存している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各地区において現状変更を伴う諸工事に際し、埋蔵文化財保護の観点から調査・研究を行なっている。すなわち、埋蔵文化財調査を要する場合は、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、周辺における既往の調査結果や工事内容等を勘案しながら、埋蔵文化財に対する影響の度合に応じて立会、試掘および事前に区分した各調査方法によって発掘調査を実施し、保護措置を講じている。

今年度は試掘調査２件、立会調査26件の計28件の調査を実施した（Tab.　1）。

Tab.　1　昭和61年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査地区	構内地区	構内地区割	調査面積 (m²)	調査期間	挿図番号
試掘調査	教育学部山口附属学校 汚水排水管布設予定地	亀山構内	幼稚園・小学校部分 中学校部分	57 20	9月22～27日 10月１～15日 10月22～31日	Fig.104－４ Fig.105－２
	国際交流会館新営予定地	吉田構内	N-22・23区	70	12月４～25日	Fig.101－73
立会調査	山口銀行現金自動支払機設営地区 (電線路埋設地区)	吉田構内	I・J-19・20区	11	４月17日	Fig.101－74
	農学部附属農場農道整備地区	吉田構内	S-20, U-19区	165	４月21日	Fig.101－75
	農学部附属農場農道交通規制地区 (施錠ポール設置地区)	吉田構内	Q-15・16, L-10区	2	５月12日	Fig.101－76
	正門横(水田内)境界杭設置地区	吉田構内	I-10区	0.25	５月16日	Fig.101－77
	経済学部環境整備地区 (樹木移植・記念碑建立地区)	吉田構内	M-20区	3	６月19日	Fig.101－78
	交通標識設置地区	吉田構内	H-23, J-9, P-22, S-20, W-16区	3	６月27日	Fig.101－79
	市道神郷１号線および 問田神郷線の送水管埋設地区	吉田構内		2100	８月11～29日	Fig.101－80
	教養部自動販売機増設地区 (屋根設置および観覧席移動地区)	吉田構内	K・L-18区	3.5	８月19日	Fig.101－81

昭和61年度山口大学構内遺跡調査の概要

調査区分	調査地区	構内地区	構内地区割	調査面積 (m²)	調査期間	挿図番号
立会調査	教養部身体障害者用スロープ取設地区	吉田構内	L-15・16区	3	9月2日	Fig.101 −82
	経済学部散水栓取設地区	吉田構内	L・M-20区	4	12月1日	Fig.101 −83
	水泳プール改修地区等	吉田構内	E・F-16, H-15区	26.5	12月8・10日	Fig.101 −84
	農学部附属農場水道管埋設地区	吉田構内	S-12区	3	12月9日	Fig.101 −85
	汚水排水管等総改修地区	吉田構内	Q-15・16, M-18区	15.5	12月23日 1月12・19日	Fig.101 −86
	本部身体障害者用スロープ取設地区	吉田構内	L-14区	12	2月25日	Fig.101 −87
	経済学部身体障害者用スロープ取設地区	吉田構内	K-20, L-18～20区	88	3月13・17・23日	Fig.101 −88
	附属図書館荷物運搬用スロープ取設地区	吉田構内	L-16区	8	3月16日	Fig.101 −89
	教養部37番教室改修地区	吉田構内	K-16区	1	3月24日	Fig.101 −90
	医学部附属病院外来診療棟新営地区	小串構内		5	5月20・26日 6月20・27日 7月24日	Fig.102 −13
	医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備地区等（雨水桝埋設地区）	小串構内		18	3月24日	Fig.102 −14
	工学部尾山宿舎排水管改修地区	常盤構内		6	7月8日	Fig.52
	工学部身体障害者用スロープ取設地区	常盤構内		29	8月21日	Fig.103 −4
	情報処理センター（常盤センター）空調整備取設地区	常盤構内		30	8月21日	Fig.103 −5
	教育学部附属山口小学校電柱移設地区	亀山構内		0.5	7月9日	Fig.104 −5
	教育学部附属光小学校創立記念事業地区（ブロンズ像建立地区）	光構内		2.5	10月20日	Fig.106 −4
	湯田宿舎給水管改修地区	山口市湯田温泉		35	11月11・15・19・21日	Fig.58
	経済学部宿舎下水管改修地区	山口市旭通り 山口市水の上町		1 7	3月14・19日	Fig.61 Fig.59

吉田構内の調査（本部、人文・教育・経済・理・農の各学部、教養部：山口市大字吉田1677-1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在）

試掘調査１件、立会調査17件の計18件の調査を実施した。

試掘調査はキャンパスの南端中央部に位置する、国際交流会館新営予定地で実施した。新営予定地北半部では旧耕土、床土が残存しておらず、表土直下が地山である。統合移転時の造成による大規模な削平が行なわれたものと考えられ、わずかに中～近世の溝状遺構を検出したにすぎない。しかし、南半部では弥生時代前期末～古墳時代後期を主体とする遺物を含み、東から西へ走向する幅約19ｍ以上の河川跡を検出した。調査面積、遺物の出土量とも少ないため、機能していた時期は明確ではない。出土遺物には弥生土器、須恵器の壺などのほか、姫島産黒曜石製の加工痕ある剝片がある。なお、今回の調査地域の北西約100ｍの地点でも同規模の河川跡が検出されており、同一河川の可能性がある。試掘調査の結果を踏まえ、河川の流路部分については、後日、立会調査を実施することとなった。

立会調査では17件のうち９件の調査で遺物あるいは遺物包含層・遺構が認められた。

遺物包含層は２件の立会調査で検出した。キャンパス西端部の水泳プールの改修地域では遺物は出土しなかったが、その西側のテニスコートフェンス改修時に確認された弥生～古墳時代の遺物を含む茶褐色粘質土と同一層が認められ、遺物包含層の東への拡がりが確認された。また、キャンパス南西部、遺跡保存地区の北東に隣接する地域では、現金自動支払機設営を伴い立会調査を実施した。現地表から75㎝下位で弥生時代中期の土器を包含する黒褐色粘質土の堆積が見られ、工事路線内では幅５ｍ以上、層厚は少なくとも35㎝の規模をもつ。その下位には砂礫が堆積し、出土遺物の磨滅も激しいことなどから河川跡、溝などの埋土の可能性が高い。なお、今回の調査地域の北東約70ｍの地点では弥生時代中期後半～後期初頭の大溝が検出されており、同一遺構かもしれない。

遺構は２件の立会調査で検出した。キャンパス南東端部に位置する果樹園での農道整備では、崖面の切り土を行った。攪乱部分を除いて工事範囲内の全面に室町時代の柱穴が分布していたため、関係部局と協議の結果、整備に伴う切り土は農道としても機能可能なこの攪乱部分に限定して実施することとなった。隣接して行われた器材庫設置に伴う調査でも、同時期の溝が検出され、現状変更せずに設置する配慮がなされた。また、キャンパス中央部よりやや南の経済学部構内では、身体障害者用スロープ取設に伴い４箇所を掘削した。そのうちの一箇所である第一学生食堂付近では、弥生～古墳時代の柱穴が検出されたため、関係部局と協議の結果、遺構を破壊しない範囲内で工事を実施することとなった。

遺物包含層、遺構は検出されなかったが、以下の４件の立会調査地域およびその周辺で

遺物を採集した。キャンパス中央部に位置する附属図書館西側の荷物運搬用スロープ工事では、弥生時代前期のものと思われる壺の破片、南東部に位置する独身寮東側の交通標識設置工事では時期、器形不明の須恵器片がそれぞれ埋め土中から出土した。各遺物は過去に周辺で同時期の遺物包含層、遺構が検出されており、統合移転時の造成により、これらから遊離したものであろう。キャンパス中央部よりやや東に位する実験水田北側の農道では須恵器蓋坏、甕、土師器を採集した。水田の側溝を再掘削した際に出土したものと思われ、須恵器蓋坏は7世紀後半のものである。キャンパス中央部よりやや北東に位置する第二学生食堂の擁壁工事では、表土中から土師質土器の鼎脚部が出土した。また、調査中に東に隣接する農学部害虫学実験畑で、須恵器坏身、甕、土師器甑の把手等を採集した。大半は8世紀代におさまるもので、第二学生食堂敷地部分で検出されている竪穴住居跡が古墳時代前期の所産であることから、付近に時期の異なる遺構ないしは遺物包含層が埋存している可能性を推測させた。

Fig. 1　山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図

また、キャンパスの南縁部を巡る市道での送水管埋設に伴い、山口市教育委員会が立会調査を実施し、当資料館も調査協力を行なった。その結果、家畜病院付近で墨書のある須恵器、土師器、六連式製塩土器等が出土した奈良～平安時代の河川跡、ハンドボール場前、南門前では溝（状）遺構が新たに検出された。遺物包含層は野球場南東端部から南門にかけての少なくとも幅約160mの範囲に集中分布している。二層に分層され、上層か

らは須恵器が出土しているが、量的には極めて少ない。下層は弥生時代前期末～後期終末の遺物を包含しており、なかでも、前期末～中期初頭の土器は出土量が比較的多く、壺、甕などの良好な資料も少なくない。なお、南門からラグビー場付近までは遺物包含層の下層が大学側の断面にのみ部分的に検出され、地山がこの部分で不規則に落ち込んでいることから、前期末～中期初頭の遺構の存在を予想させる。

小串構内の調査 (医学部、医療技術短期大学部、医学部附属病院：宇部市大字小串1144所在)

キャンパスの東部に位置する外来診療棟周辺で、２件の立会調査を実施した。過去の調査で検出されている遺物包含層の堆積は認められたが、遺物は出土していない。

常盤構内の調査 (工学部、工業短期大学部：宇部市常盤台2557、尾山宿舎：同上野中所在)

３件の立会調査を実施した。調査地域は、キャンパスの中央部の東講義棟、北端中央部の学生食堂、南西部の情報処理センター各周辺およびキャンパスの南東約300ｍに位置する尾山宿舎敷地部分である。各地点とも後世の削平が激しく、遺物包含層、遺構は認められなかった。

亀山構内の調査 (教育学部附属幼稚園：山口市白石三丁目1-2、同山口小学校：同三丁目1-1、同山口中学校：同一丁目9-1所在)

小学校のグラウンド部分が「白石遺跡」として周知されている。試堀調査１件、立会調査１件の計２件の調査を実施した。

試掘調査は汚水排水管布設に伴い、各校内で実施した。幼稚園部分では弥生土器を含む

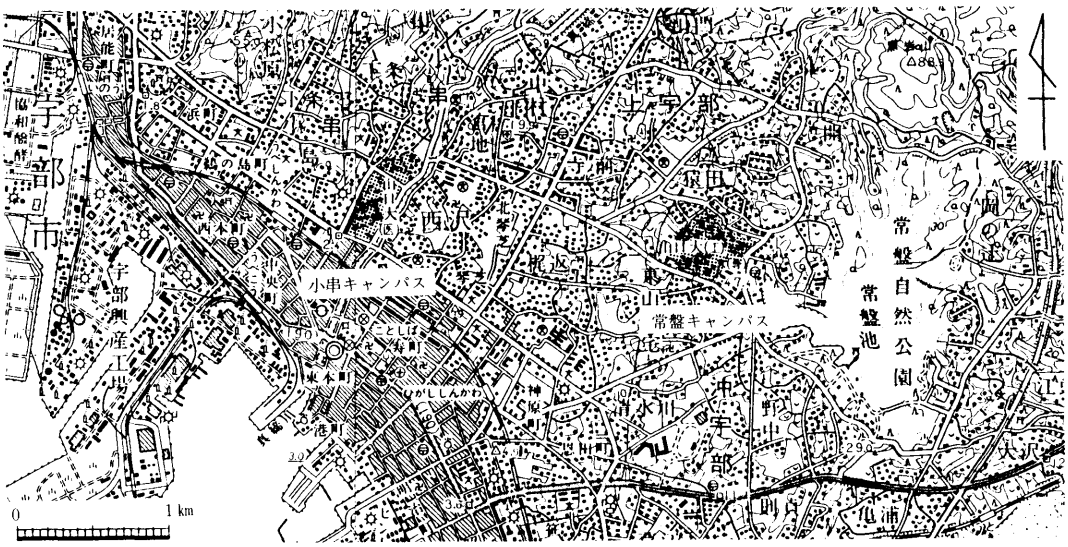


Fig. 2　山口大学小串・常盤両キャンパス位置図

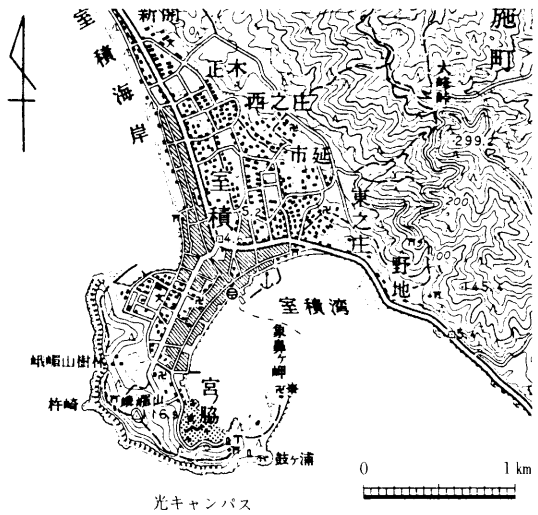


Fig. 3　山口大学光キャンパス位置図

遺物包含層、室町時代の遺構を検出した。

小学校部分では12箇所のトレンチのうち5箇所で遺物が出土した。とくに南東部のトレンチでは、布留式土器の終末期に位置づけられる遺物包含層を確認した。過去の調査では、広義の布留式併行の竪穴住居跡が検出されており、庄内式の新段階の遺物を含む溝状遺構も認められていることから、当校内に庄内式、布留式各新段階の、少なくとも二時期の遺構、遺物包含層が存在する可能性が提起された。したがって、とくにこの部分の施設、環境整備については遺物包含層の分布範囲の把握を含めた事前の調査が必要となった。

中学校の敷地部分でも明確な遺構は検出していないが、8箇所のトレンチのうちの2箇所で未周知の遺物包含層を確認した。とくに第5トレンチでは少なくとも二層に分層され、下層は植物遺体を含む縄文後・晩期の単純層で、上層からは庄内併行期の土器が多量に出土した。また、隣接する第3トレンチでも大内館跡B式土器を含む中世の土師器を主体とした堆積層を検出した。弥生～江戸時代の遺物が混在しており、周辺からの流入品と考えられる。他にも同時期の遺物が原位置を遊離した遺物包含層から出土した。遺物の集中範囲は本校内の西半部に限定され、この部分での工事に際しては事前の調査が必要である。

光構内の調査（教育学部附属光小学校、同光中学校：光市大字室積浦1-1所在）

「御手洗遺跡」として周知されている地域である。立会調査1件を実施した。キャンパス中央部付近の中庭での工事で、表土直下の海成砂層上面から須恵器、歴史時代土師器が出土した。また、本構内の北に面する海岸で古墳時代後期～江戸時代の遺物を採集した。

その他構内の立会調査

山口市湯田温泉六丁目8-29に所在する湯田職員宿舎、また山口市旭通り二丁目3-32、水の上町6-9に所在する経済学部の職員宿舎において、それぞれ立会調査を実施した。旭通りに所在する6号宿舎では、埋め土中から室町時代後半頃の瓦質土器擂鉢が出土した。また、周辺の畑地では同時期の瓦質土器鍋、擂鉢、土師質土器鼎等の遺物が多量に採集され、周辺に未周知の遺跡が存在している可能性が指摘されるにいたった。　　（河　村）

第２章　亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査

第１節　調査の経過

山口市街を臨む亀山の西裾に開けた白石の地には、教育学部附属の幼稚園･山口小学校･山口中学校（山口附属学校と総称）が所在する。去る昭和58年度、小学校・幼稚園部分で初めて調査を行なうこととなったが、その際、小学校グラウンドから、鳥形木製品とそれを取り付ける杆（さお）をはじめとして鋤（すき）・鍬（くわ）など多量の木製品、また竈（かまど）をもつ古墳時代前半期の竪穴住居跡など、貴重な遺物・遺構が発見され、当小学校グラウンド部分は「白石遺跡」として知られるところとなった。[1)]

白石遺跡の北側では、国道９号バイパス建設時に鴻峰（こうのみね）山南麓に沿って多くの古墳・石棺群が発見され、また西側でも、鴻峰山から南にのびる丘陵（通称茶臼山）を削った際に古墳・石棺群がみつかり、弥生時代終末～古墳時代の墓地についてはかなり明らかになりつつある。反面、亀山と障子岳（しょうじがだけ）にはさまれた、これらの墓地に伴うと思われる地域の同時期の生活跡については、この白石遺跡が実に初めての発見例であり、他は、山口高校敷地で遺物包含層が確認されているにすぎない。白石遺跡の存在は重要なものであるといえる。

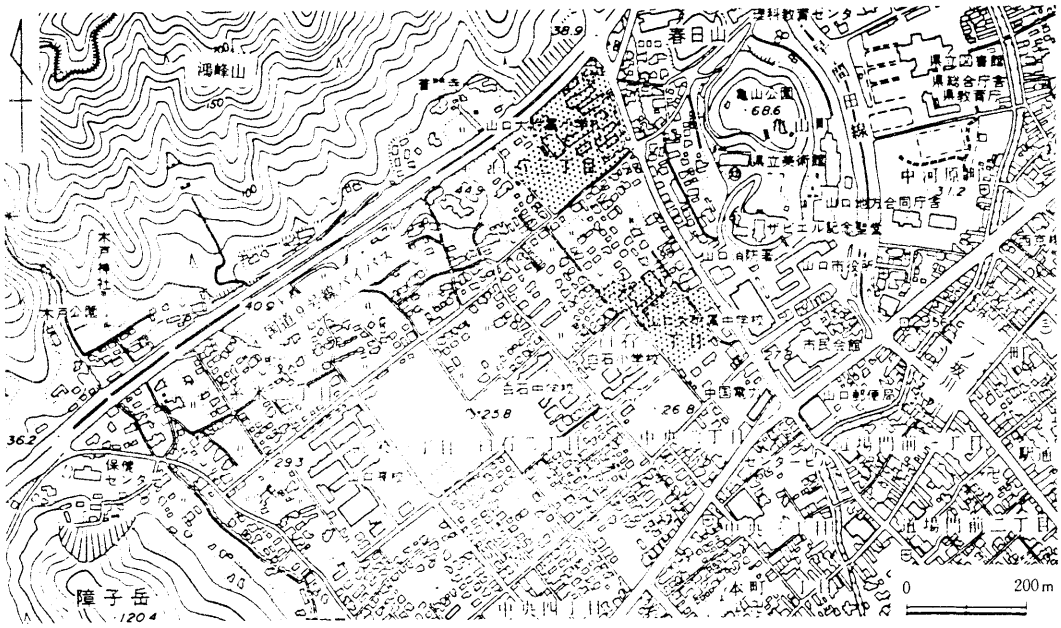


Fig. 4　調査区位置図

この幼稚園・小学校部分の敷地は、1.5m前後の大きな段差二段をもって都合三面に造成されている。白石遺跡とされている小学校のグラウンドが最も低い面で、その東に小学校校舎の建ち並ぶ一段高い面がある。そして北がさらにもう一段高く、幼稚園の敷地やプールとなっている。58年度調査がグラウンド部分のみに限られたため、これらの段差は、敷地内の遺構の拡がり・遺跡立地等を推測する上で、大きな障害となっていた。以来、上二段部分で若干の立会調査を行なったが得られる知見に乏しく、[2]上段部分の地下の状況の解明が急がれていた。また幼稚園・小学校部分の南約200mに位置する中学校部分でも、昭和60年度に初めて立会調査を試み、やはり周辺に遺構の存在が推察されていた。[3]

昭和61年度に至り、山口附属学校全域において、公共下水道使用開始に伴い、汚水排水管を新規埋設する工事が計画された。これを請けて当館運営委員会は、管の埋設予定路線内の埋蔵文化財の有無を確かめ、本格的調査の必要性を判断する資料を得るという目的で、試掘調査を行なうこととした。予定される管路の掘削総面積は、幼稚園・小学校部分で約900㎡、中学校部分で約450㎡である。調査は、配管工事の際特に深い掘削を必要とするマンホールの埋設予定ヵ所でおもに行なうこととし、幼稚園・小学校部分で16ヵ所、中学校部分で8ヵ所を選定し、それぞれに2m×2mを基本規模とするトレンチを設定した。

調査方法は、構内の敷地造成の際の置土は重機を使用して除去し、以下、地山まで手掘りによる分層発掘を行なったのち、トレンチ端部をマンホール基底面まで深掘りして土層の観察を行なうものである。特に幼稚園・小学校部分では、園児・児童の安全確保の観点から、一日一トレンチの掘削・調査を完了し埋め戻すことを基本としたが、重機の搬入手続き上、置土の除去だけは数トレンチまとめて行なうこととなった。

アスファルト・カッター使用の都合上、予め小学校部分9月9日、中学校部分10月15日に調査区を設定した後、幼稚園で9月22日から27日まで、小学校で10月1日から15日まで、中学校は同22日から31日まで、人文学部考古学研究室の援助を得て調査を行なった。(杉原)

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)。以下、「58年度調査」と略称する。周辺の地理・歴史的環境はこちらをご覧いただきたい。

2）a　山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校散水栓改修に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)。

b　山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属幼稚園環境整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)。

c　山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校電柱移設に伴う立会調査」(本書第4章第4節)。

3）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口中学校球技コート整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)。

第２節　教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査

１　層位・遺構

幼稚園部分で４ヵ所、小学校部分で12ヵ所の全16ヵ所にトレンチを設定し、調査順に通し番号を付した。調査総面積約57㎡。予定される管路掘削総面積の約6.3％にあたる。なお58年度調査時に小学校の体育館倉庫脇に設定した仮点[1)]（BM）は、標高32.757ｍであることを確認したので、今回調査との比較の際には参考とされたい。

＜幼稚園部分＞

幼稚園部分の敷地面は当構内で最も高くなっており、現地表面は標高ほぼ35.7ｍ前後に造成されている。

第１トレンチ　　幼稚園敷地のほぼ中央、１ｍ×３ｍのトレンチ。西半分には既設の配管があり、土層の観察不能。東半部では、厚さ約80㎝の造成時の置土・攪乱土の下に、弥

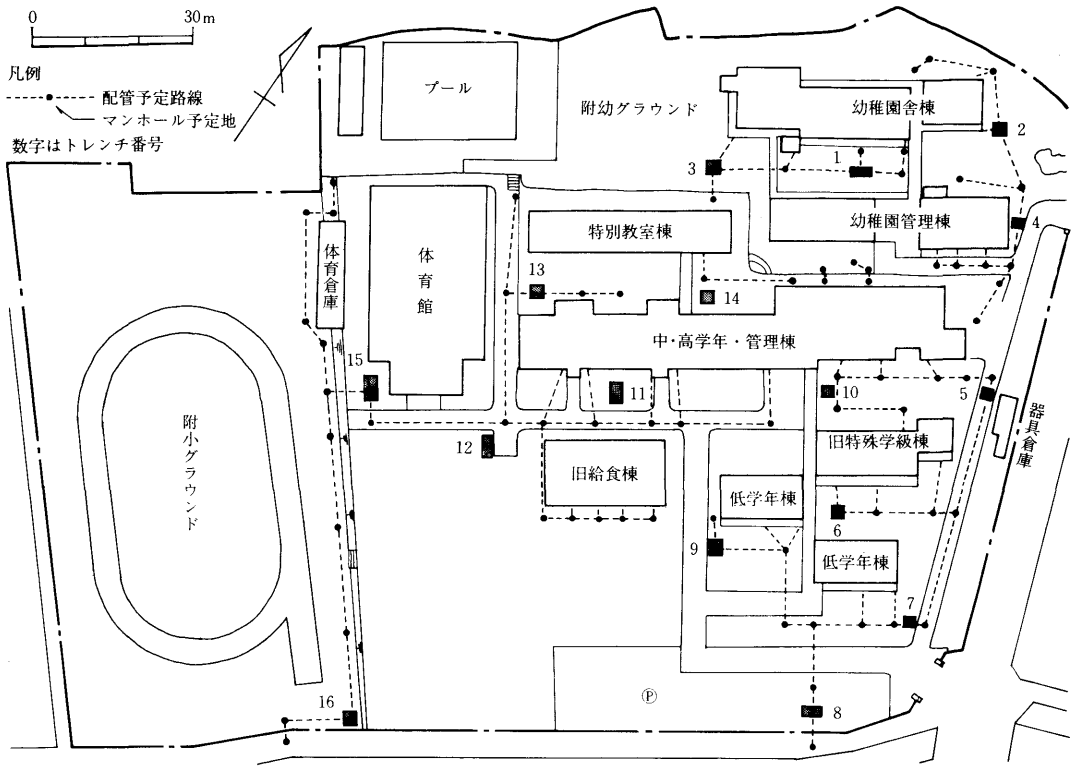


Fig. 5　トレンチ設定図

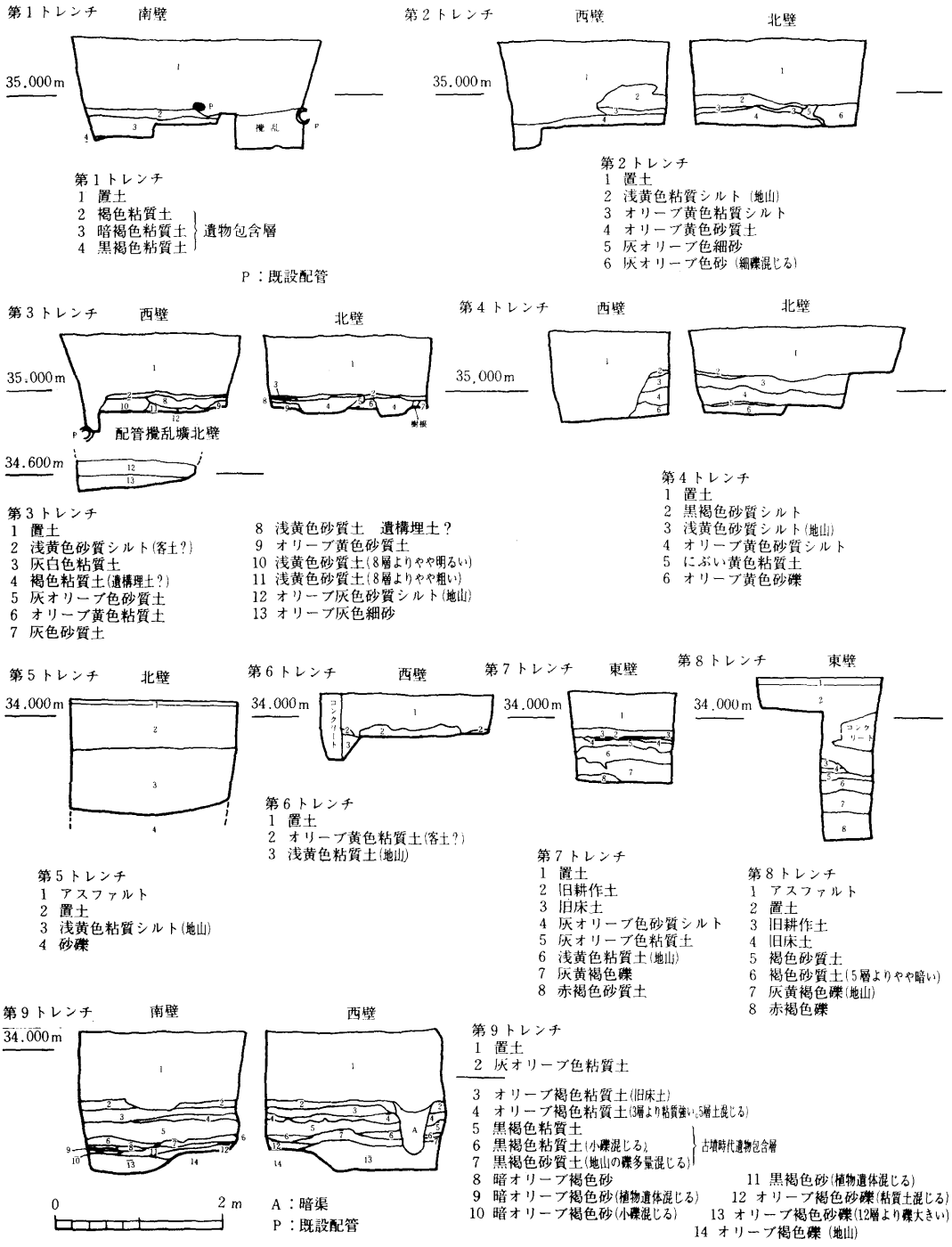
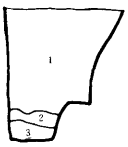

第1トレンチ
南壁
35.000m
撹乱
P
第1トレンチ
1 置土
2 褐色粘質土
3 暗褐色粘質土
4 黒褐色粘質土
遺物包含層
P：既設配管
第2トレンチ
西壁
北壁
35.000m
第2トレンチ
1 置土
2 浅黄色粘質シルト（地山）
3 オリーブ黄色粘質シルト
4 オリーブ黄色砂質土
5 灰オリーブ色細砂
6 灰オリーブ色砂（細礫混じる）
第3トレンチ
西壁
北壁
35.000m
34.600m
配管撹乱壙北壁
第3トレンチ
1 置土
2 浅黄色砂質シルト（客土？）
3 灰白色粘質土
4 褐色粘質土（遺構理土？）
5 灰オリーブ色砂質土
6 オリーブ黄色粘質土
7 灰色砂質土
8 浅黄色砂質土　遺構埋土？
9 オリーブ黄色砂質土
10 浅黄色砂質土（8層よりやや明るい）
11 浅黄色砂質土（8層よりやや粗い）
12 オリーブ灰色砂質シルト（地山）
13 オリーブ灰色細砂
第4トレンチ
西壁
北壁
35.000m
第4トレンチ
1 置土
2 黒褐色砂質シルト
3 浅黄色砂質シルト（地山）
4 オリーブ黄色砂質シルト
5 にぶい黄色粘質土
6 オリーブ黄色砂礫
第5トレンチ
北壁
34.000m
第5トレンチ
1 アスファルト
2 置土
3 浅黄色粘質シルト（地山）
4 砂礫
第6トレンチ
西壁
34.000m
コンクリート
第6トレンチ
1 置土
2 オリーブ黄色粘質土（客土？）
3 浅黄色粘質土（地山）
第7トレンチ
東壁
34.000m
第7トレンチ
1 置土
2 旧耕作土
3 旧床土
4 灰オリーブ色砂質シルト
5 灰オリーブ色粘質土
6 浅黄色粘質土（地山）
7 灰黄褐色礫
8 赤褐色砂質土
第8トレンチ
東壁
34.000m
コンクリート
第8トレンチ
1 アスファルト
2 置土
3 旧耕作土
4 旧床土
5 褐色砂質土
6 褐色砂質土（5層よりやや暗い）
7 灰黄褐色礫（地山）
8 赤褐色礫
第9トレンチ
南壁
西壁
34.000m
A
0
2m
A：暗渠
P：既設配管
第9トレンチ
1 置土
2 灰オリーブ色粘質土
3 オリーブ褐色粘質土（旧床土）
4 オリーブ褐色粘質土（3層より粘質強い，5層土混じる）
5 黒褐色粘質土
6 黒褐色粘質土（小礫混じる）
7 黒褐色砂質土（地山の礫多量混じる）
古墳時代遺物包含層
8 暗オリーブ褐色砂
9 暗オリーブ褐色砂（植物遺体混じる）
10 暗オリーブ褐色砂（小礫混じる）
11 黒褐色砂（植物遺体混じる）
12 オリーブ褐色砂礫（粘質土混じる）
13 オリーブ褐色砂礫（12層より礫大きい）
14 オリーブ褐色礫（地山）

Fig. 6 土

教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査（層位・遺構）

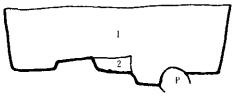
第10トレンチ　南壁

34.000m



第11トレンチ　東壁

34.000m

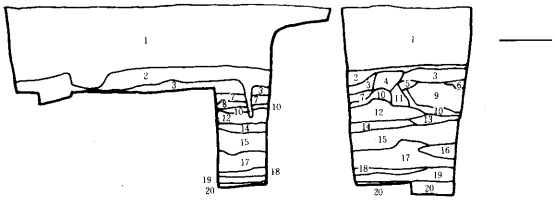


第10トレンチ
1　置土
2　黒褐色砂質土(古墳時代遺物包含層)
3　青灰色粘質土(地山。明褐色含む)

第11トレンチ
1　置土
2　にぶい赤褐色粘質土
3　明赤褐色粘質土（地山）

第12トレンチ　西壁　北壁

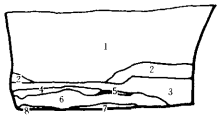
34.000m



第12トレンチ
1　置土
2　褐色砂質土(客土？)
3　黄褐色粘質土(地山)
4　褐色シルト
5　黄褐色砂質土
6　オリーブ褐色粘質土
7　黄褐色砂質土(5層より粗い)
8　暗灰黄色礫
9　暗灰黄色礫(礫大きい)
10　灰オリーブ色砂質土
11　オリーブ灰色シルト
12　灰オリーブ色砂礫
13　にぶい黄色砂礫
14　灰オリーブ色砂質土
15　にぶい黄色砂質土
16　灰オリーブ色砂質土(以下湧水)
17　明黄褐色砂質土
18　灰黄色粘質土
19　にぶい黄橙色粘質土
20　オリーブ黄色砂質土

第13トレンチ　南壁

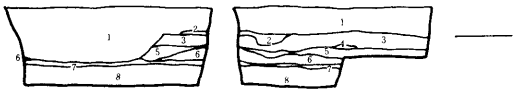
34.000m



第13トレンチ
1　置土
2　にぶい黄褐色砂礫
3　灰オリーブ色砂質土(地山)
4　緑灰色砂質土
5　暗灰黄色砂質土
6　暗灰黄色砂礫
7　灰オリーブ色砂
8　緑灰色砂質土(4層より粘性強い)

第14トレンチ　東壁　南壁

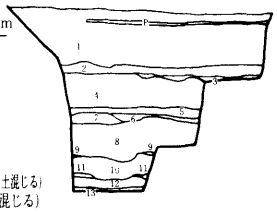
34.000m



第14トレンチ
1　置土
2　灰オリーブ色砂質土(地山)
3　灰オリーブ色砂礫
4　灰オリーブ色砂質土(5層より粗い)
5　灰オリーブ色砂質土(2層より粗い)
6　オリーブ黄色粘質土
7　にぶい黄褐色粘質土
8　オリーブ黄色粘質土

第15トレンチ　西壁

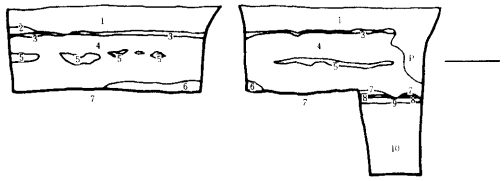
34.000m



第15トレンチ
1　置土
2　灰オリーブ色粘質土(旧耕作土)
3　オリーブ褐色粘質土(旧床上)
4　明黄褐色粘質土(客土、砂、橙色・灰白色の粘質土混じる)
5　オリーブ褐色粘質土(旧耕作土、小礫混じる)
6　オリーブ褐色粘質土(旧床上、小礫混じる)
7　オリーブ褐色粘質土(砂礫混じる)
8　オリーブ褐色粘質土(客土？、赤色の小礫多量混じる)
9　暗オリーブ色砂質(地山)
10　暗オリーブ色砂礫
11　灰オリーブ色砂
12　灰オリーブ色粘質土
13　灰オリーブ色砂

第16トレンチ　西壁　北壁

32.000m



0　2 m

第16トレンチ
1　置土
2　暗オリーブ色粘質土(旧耕作土)
3　黄褐色粘質土(旧味土)
4　灰オリーブ色砂質土(客土？)
5　灰オリーブ色砂質土(客土？、小礫混じる)
6　オリーブ黒色砂
7　黄褐色粘質土（地山）
8　暗灰黄色粘質土
9　にぶい黄褐色粘質土
10　灰オリーブ色砂礫

層　断　面　図

生土器を含む遺物包含層が3層残存していた。うち第4層：黒褐色砂質土は、その下面が東に向かって落ち込んでおり、土自体にもしまりがないことから遺構埋土の可能性があるが、今回の調査では拡がりを確認できなかった。掘削深度内では地山は検出されない。

遺物は、図化しえないが各包含層から弥生土器小片多数が出土したほか、配管の攪乱壙から弥生土器・近代磁器が出土した。いずれもやや摩耗している。

第2トレンチ　幼稚園敷地の北東隅、2m×2mのトレンチ。置土・攪乱土直下に、地山と思われる浅黄色粘質シルト層が部分的に残存するが、置土に混入したブロックかもしれない。第4層以下は激しく湧水する砂礫層となる。遺構・遺物は検出されない。

第3トレンチ　幼稚園グラウンドの南東隅、58年度調査のHトレンチの南東約25mの地点に設定した2m×2mのトレンチ。南端部はすでに配管がとおり、攪乱されていた。

二時期の遺構と思われるものを確認した。検出面は双方とも第2・3層下面であるが、この面で樹根が切れていることから、すでに遺構上部は後世の削平を受けているものと思われる。古い方の遺構は、第8・9層：浅黄色・オリーブ黄色の砂質土を埋土とするか、もしくはこのトレンチにみえる第5～11層がすべて遺構埋土の範囲内となる可能性がある。遺物はなく詳細は不明であり、第1トレンチ同様、遺構の拡がりの把握を含めた周辺の精査が望まれる。新しい方の遺構は、古い遺構の埋土を掘り込んでおり、第4層：褐色粘質土を埋土とする。この層からは室町時代の土師器坏口縁片が出土している。

なお、第2層から土師器・須恵器の小片、配管攪乱壙から弥生土器・土師器・瓦質土器・

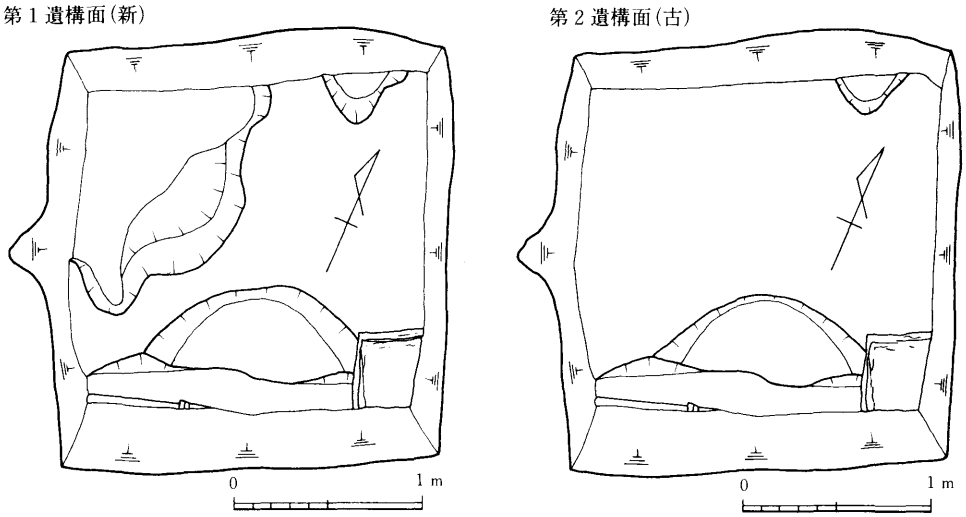


Fig. 7　第3トレンチ遺構配置図

不明鉄製品を検出した。

第４トレンチ　幼稚園管理棟の東、1.3m×２mのトレンチ。南半は構内造成により大きく削られている。北半では現地表下約50cmで薄い黒褐色砂質シルト層をはさんで浅黄色砂質シルトの地山に達し、以下、自然堆積層が続く。遺構・遺物は検出されない。

＜小学校部分＞

現地表面の標高が、34.1～34.5mに造成される校舎面に11ヵ所、一段低く、32.5～32.8mに造成されるグラウンド面で１ヵ所を選び、それぞれにトレンチを設定した。

第５トレンチ　小学校器具倉庫脇、２m×２mのトレンチ。置土・攪乱土直下、現地表から約60cmで、浅黄色粘質シルトの安定した地山となる。下部は次第に砂質度が強くなり、礫層に達して湧水する。遺構・遺物は検出されない。

第６トレンチ　旧特殊学級棟前、２m×２mのトレンチ。置土は現地表下40～50cmまでと比較的薄く、オリーブ黄色砂質土をはさんで浅黄色粘質土の地山に達するが、トレンチの対角線上に小学校設置以前の建造物の基礎が埋設されており、両層とも大きく攪乱を受ける。顕著な遺構・遺物は検出されない。

第７トレンチ　1.3m×1.5mのトレンチ。厚さ約50cmの置土直下に旧耕作土・床土が残存する。以下、自然堆積層２層をはさんで浅黄色粘質土の地山へと達し、角礫を含む礫層、そして赤褐色砂質土層と続く。第４層：灰オリーブ色砂質シルト層から土師器の小片が出土しているが、遺構は確認できなかった。

第８トレンチ　小学校正門横の駐車場南端、1.5m×３mのトレンチ。トレンチ内は過去の建造物に伴うと思われるコンクリート基礎が厚く堆積し、掘削できたのは南東端部のみである。置土は、多くの貝殻が混入し、厚さ１m～1.2mにおよぶ。その直下は北半部にのみ旧耕作土・床土が残存し、以下は自然堆積層が続き、第７層以下は湧水する。第７・８層は、第７トレンチの第７・８層にそれぞれ対応するものと思われるが、第７トレンチでみられた浅黄色粘質土の地山はここでは確認できず、遺構・遺物も検出されない。

第９トレンチ　低学年棟前、２m×２mのトレンチ。厚さ90cmの置土の直下に、一部攪乱を受けるが旧耕作土・床土が残存する。この耕作土上面を掘り込んで東西に走る暗渠が検出された。下面には小枝等を敷き、その上に礫（第14層の礫を含む）を詰めている。

床土下に第４層：オリーブ褐色粘質土をはさんで、黒褐色の遺物包含層が30cmあまりにわたって堆積する。この包含層は３層に分層され、最上層は厚さ15～25cmの粘質土層であるが、下層になるほど砂礫の混入が多くなる。３層の包含層の遺物は、一応各層ごとに分

けて取り上げたが、その段階では第6層を、トレンチ南東隅のみのブロックとして捉えていた。トレンチ西壁にみえる第6層は、後の断面観察により第7層から分離したもので、したがって西半分では第6層の遺物を第7層に含めて取り上げたことになる。

南壁にのみ確認される第8・9・10層は、礫と植物遺体の有無によって分層した。第11層は植物遺体を多量に含む。第12層以下は激しく湧水する礫層となる。地山とみられる第14層は、トレンチ南西隅で急に高くなる。

包含層からは古墳時代の土師器が多量に出土し、他に弥生土器・歴史時代土師器・青磁、黒曜石剝片、不明鉄製品の混入がみられる。暗渠埋土からは同様の土師器のほかに弥生土器・須恵器・瓦質土器が出土しており、第4層でも同様の土師器と須恵器片が出土。

第10トレンチ　1.2m×1.5mのトレンチ。約1.1mの厚い置土の直下に第2層：黒褐色砂質土の遺物包含層が堆積する。その下は、明褐色土を含む青灰色粘質土の不安定な地山で、湧水する。第2層からは5世紀代の土師器が出土しているが、量的には少ない。

第11トレンチ　1.5m×3.1mのトレンチ。トレンチ南半は配管の埋設、北端は校舎建築時の掘削により、それぞれすでに大きく攪乱されており、土層の観察不能。わずかにトレンチ中央部で、厚さ50cmの置土直下に、にぶい赤褐色粘質土の堆積が残っており、この層から土師器甕の破片が出土した。その下はすぐに明赤褐色粘質土の地山となる。

第12トレンチ　旧給食棟横、1.5m×3mのトレンチ。コンクリートの基礎やレンガを含む厚さ60～70cmの置土の下に、しまりのない褐色粘質土をはさんで、黄褐色粘質土の地山が検出される。褐色粘質土は、客土の可能性もある。南端部で、地山を掘り込んだ不明瞭なピットを検出したが、遺構かどうかは不明。深掘りの結果、第16層以下湧水。土師器甕の破片と格子タタキをもつ土師質土器片が検出されているが、出土層位は不明。

第13トレンチ　2m×2mのトレンチ。北半部には旧建造物のコンクリート基礎があるため掘削不能。南半部の観察では、厚さ50～60cmの置土以下はすぐに砂礫と砂質土との互層になるが、顕著な湧水は認められず、第14トレンチにみられる黄色系統の粘質土が、さらに下部に堆積するものと思われる。遺構・遺物なし。

第14トレンチ　第13トレンチの東約30m、2m×2mのトレンチ。北半部は大きく削られているが、置土直下は砂質土・砂礫の互層となる第13トレンチ同様の層位である。しかしそれ以下に、黄色系統の比較的安定した粘質土が堆積することから、この砂礫層は、時期は明らかでないが付近の河川等が氾濫した際運ばれてきたものかと思われる。置土の厚さも30cm足らずであり、もともとの地形が第13トレンチより高かったことが窺える。遺

構・遺物は認められない。

第15トレンチ　体育館横、グラウンドとの高低差が約1.5mある大きな段差の上端に設定した、0.8m×2mのトレンチ。厚さ約60cmの構内造成時の置土の下には、約35cmの厚い客土をはさんで上下にそれぞれ旧耕作土・床土がある。その下の第7・8層もさら客土の可能性がある。第9層以下が地山で、湧水する。遺構・遺物は認められない。

第16トレンチ　小学校校舎面から一段落ちたグラウンド南東隅に設定した2m×2mのトレンチ。58年度調査で竈を付設した竪穴住居を検出したGトレンチは、この西約25mの地点に位置し、周辺での遺構ないしは遺物包含層の存在を把握する必要があった。

約20cmの薄い置土の下に旧耕作土・床土が残存している。その下に、小礫をブロック状に含み厚さ約60cmにわたって厚く堆積している灰オリーブ色砂質土（客土の可能性あり）をはさんで、黄褐色粘質土の地山となる。地山直上で、有機質の黒褐色粘質土ブロックがごくわずかと、オリーブ黒色砂のブロックが観察されたが、遺構・遺物はない。

西端の深掘りの結果、この地山自体もわずか5cmの厚さしか残っておらず、グラウンド南西隅で行なった「電柱移設に伴う立会調査」の所見ではこの地山が1.5mにもおよぶ厚さをもっていたことから、[2)]グラウンドの東寄りの段の真下あたりは大幅に削平され、遺構があったとしてもすでに消失しているものとみられる。以下、薄い粘質土が2層続き、その下には湧水する灰オリーブ色砂礫が少なくとも80cm堆積する。（杉　原）

2　遺　物

遺物は、第1・3・7・9・10・11・12トレンチでそれぞれ出土しているが、第3・7・11・12トレンチ出土のものは小片のため図化しえない。

第1トレンチ出土遺物（Fig. 8, PL. 8）

各包含層から弥生土器片多数、配管の攪乱壙から弥生土器・近代磁器が出土したが、ほとんどが摩耗した小片で、器形を知りうるものは少ない。

図示したのは配管の攪乱壙から出土した弥生土器壺の底部で、厚く大きい平底になるものと思われ、弥生時代前期に遡る可能性をもつものである。

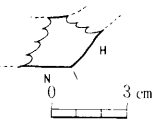


Fig. 8　第1トレンチ出土遺物実測図

第9トレンチ出土遺物（Fig. 9～12, PL. 8・9）

第5～7層（遺物包含層）から多量に出土した。また、第4層および旧耕作土を掘り込んだ暗渠からの出土遺物もある。

暗渠出土遺物（Fig. 9）

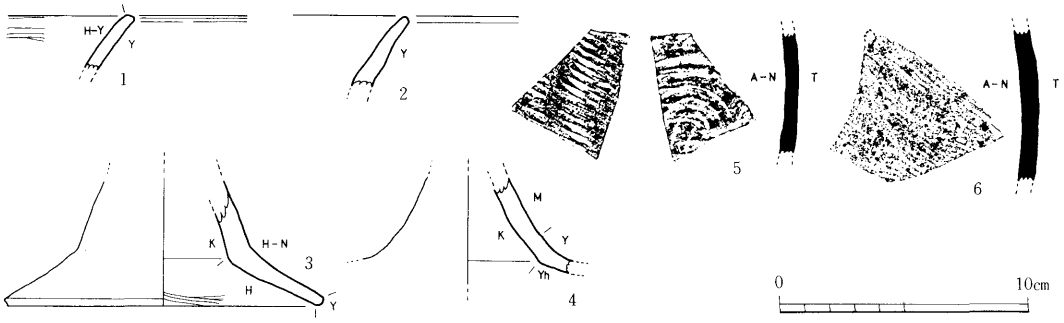


Fig. 9　第9トレンチ暗渠出土遺物実測図

主体は古墳時代の土師器で、他に弥生土器・須恵器・瓦質土器が出土している。

1～4は土師器。1・2は甕口縁部で、1は口縁上面にほぼ水平な面をもち、端部を外につまみ出すもの。2は端部に小さな面をもち、口縁中位が膨らむもの。甕には他にタタキを施す破片がある。3・4は高坏の脚部。3は裾端部に面をつくるもので内外面とも刷毛目がややナデ残っている。4は裾部を欠損し、外面は脚柱部のみをヘラミガキする。

5・6は須恵器片。ともに外面は平行タタキであるが、内面は同心円の当て具痕の上を5は後にややナデており、6はほとんど当て具痕が残らないくらいにナデ消している。6はタタキが細かく、外面には自然釉の付着がみられる。

これらの遺物は、本来遺物包含層に含まれていたものが暗渠掘削によって遺物包含層から遊離し、暗渠内部を被覆する際に混入したものと思われる。

第4層出土遺物（Fig. 10）

土師器・須恵器片が若干出土している。弥生土器かと思われるものもある。

図は、須恵器の破片で、器形はわからない。外面には平行タタキの後、一部にカキ目がみえる。内面は丁寧なナデが施され、当て具の痕跡は全く残らない。　（杉　原）

第5・6・7層出土遺物（Fig. 11・12）

遺物包含層は3層に分層できるが、層位の項で述べたとおり、遺物取り上げの段階で第6・7層が混合しており、それに加えて第5層と第6・7層との遺物が接合するため、分層はしたものの、ここでは一括して取り扱うことにする。上層には摩耗した小片が多く、下層になるに従って遺存状態がよくなるが、全体の器形が窺えるほどの大きさの破片はない。

Fig. 10　第9トレンチ第4層出土遺物実測図

古墳時代の土師器が圧倒的に多く、他に弥生土器・歴史時代土師器・青磁片各1点、黒曜石の剝片2点、不明鉄製品1点がある。

1～27は甕で大半は口縁部の資料である。直線的に開くもの(5・7・8・13・16・21)、内彎して開くもの（6・9)、複合口縁になるもの（19・20）などがあるが、外彎しながら開くものが多い。直線的に開くものには、口縁端部に面をもつもの（5・8)、端部が肥厚ぎみに強く屈曲するもの（21)、端部が先尖りのもの（16)、丸くおさめるもの（13）などがある。また、端部内面に面をもつもの（7）もある。外彎して開くものには、短い口縁部をもち端部付近でさらに外反するもの（17）や口縁端部が肥厚し、面をもつもの（2～4)、丸くおわるもの（11）などがある。また、端部が尖りぎみに丸く終わるもの（10・15・18）のなかには15のように口縁端部直下の外面に一条の沈線が巡るものがある。内彎して開くものは、口縁端部に水平もしくは水平に近い面をもつ。口縁端部付近でわずかに外反するもの（6）や端部が肥厚するもの（40）がある。58・59は複合口縁をもつものであるが、口頸部の屈曲は弱く、外面をわずかに膨らませただけのもので屈曲部を表現する。いずれも口縁端部は尖る。22・23のように外面にタタキを残す資料はほとんどなく、大半は刷毛目仕上げである。5・6・8・9・13～15など約半数資料の外面に煤が付着する。24～27は底部で、25は円盤状の突出した底部をもつ。内面は粗いナデ仕上げで、側面には指圧による整形痕が顕著である。24は時期的に遡るものである。内外面はいずれも横ナデで、刷毛目の残るものもある。

28～34は壺。28～32は小型丸底壺と思われ、口縁部が直線的に直立もしくはそれに近く開くもの（28・29・31・32）が多い。口縁端部は尖りぎみもしくは丸くおさめる。30は口縁部の中位で内彎して立ち上がる。内外面とも横ナデであるが、28・29は横刷毛ののち横ナデおよびナデを施す。33・34は時期的に遡るものである。

35～46は高坏。35～39は坏部で、やや深いものが多いものと思われる。反転部の稜は極めて不明瞭で、下半部および上半部とも内彎して開き、口縁端部付近でわずかに外反する。口縁端部は丸いもの（35・37）と尖るもの（36）がある。40～46は脚部。脚柱部は坏部との接合部付近から開く（40～42)。脚裾部は屈曲せずそのまま端部にいたり、丸くおわるもの（43）と脚裾部で屈曲するもの（44・45）などがある。45は水平に近く屈曲する。44～46とも端部は尖る。脚柱部はナデ、他は横ナデ仕上げが多い。

47～52は埦。47～51は内彎して開く体部をもち、47・48は口縁端部が短く外反する。横ナデもしくはナデ仕上げで、50は外面へラミガキを施す。

53・54は剝片でいずれも上端部を欠損し、打点、打面は残存していない。54は正面下半部、右半部に自然面を残す縦長剝片で、ヒンジフラクチャーをおこしている。

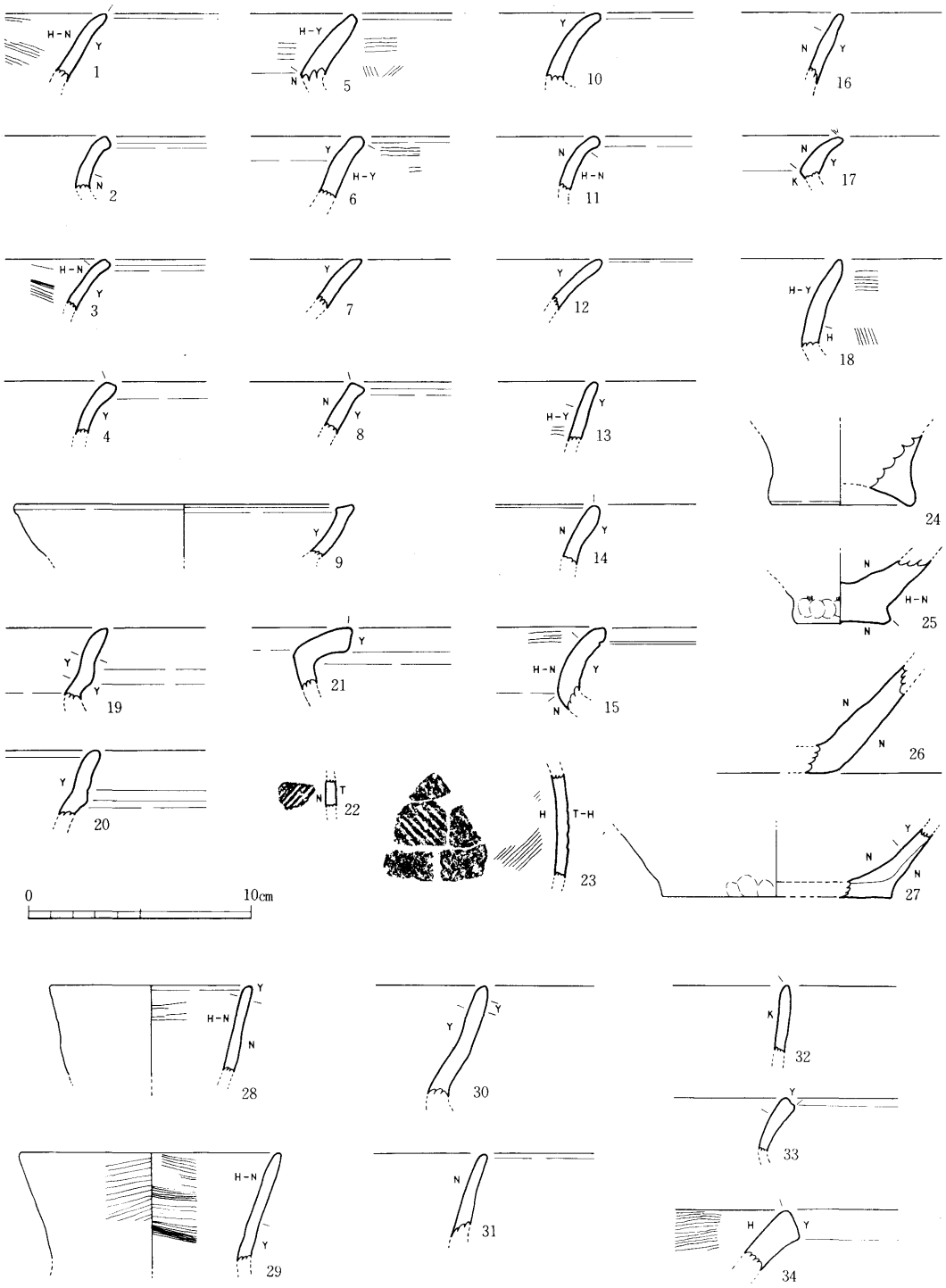


Fig. 11　第５トレンチ第５・６・７層出土遺物実測図（１）

Fig. 12　第5トレンチ第5・6・7層出土遺物実測図（2）

第10トレンチ出土遺物（Fig. 13, PL. 9）

1は甕口縁部で、端部にしっかりした面をつくる。2は甕肩部で、頸の粘土接合痕を未調整のまま残す。

3は小形器台の坏部。脚部との接合は貼り付け式で貫通しない。口縁外面には赤色顔料の痕跡がある。

遺物はすべて第2層から出土。5世紀代を主とする土師器であるが、量的には少ない。　（河　村）

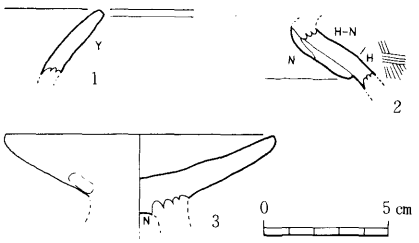


Fig. 13　第10トレンチ出土遺物実測図

Tab. 2　出土遺物観察表

法量（　）は現存値

No	器　種	口径 ＊底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色　調	胎　土	焼成	備　考
第1トレンチ（Fig. 8）							
―	弥生土器　壺	―	(2.1)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好　2mm以下の石英を多量に含む	良好	
第9トレンチ暗渠（Fig. 9）							
1	土師器　甕	―	(2.1)	外面－にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面－にぶい橙色(7.5YR6/4)	良好　1mm程度の石英を含む	良好	
2	土師器　甕	―	(2.7)	外面－にぶい橙色(7.5YR6/4) 内面－にぶい橙色(10YR7/3)	良好　1mm程度の石英を含む	良好	
3	土師器高坏	＊12.4	(5.0)	外面 内面 } にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好　ほとんど不純物を含まない	やや甘い	
4	土師器高坏	―	(3.8)	外面 内面 } 浅黄橙色(10YR8/3)	精良	きわめて良好	
5	須恵器	―	(4.8)	外面－緑灰色(10GY6/1) 内面－灰　色(N5/0)	良好　1mm以下の石英・長石を含む	良好	
6	須恵器	―	(6.1)	外面－明青灰色(5B7/1) 内面－灰　色(N6/0)	精良　不純物は含まない	きわめて良好	
第9トレンチ第4層（Fig.10）							
―	須恵器	―	(1.5)	外面 内面 } 灰色(N6/0)	良好　1mm程度の石英を含む	良好	
第9トレンチ第5・6・7層（Fig.11・12）							
1	土師器　甕	―	(2.8)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	きわめて良好	
2	土師器　甕	―	(2.3)	外面－にぶい黄褐色(10YR5/3) 内面－灰黄褐色(10YR5/2)	精良　1mm以下の石英・長石を含む	良好	
3	土師器　甕	―	(2.2)	外面－にぶい橙色(7.5YR7/3) 内面－灰黄褐色(10YR6/2)	普通　2mm程度の石英を含む	良好	
4	土師器　甕	―	(2.3)	外面－灰黄褐色(10YR6/2) 内面－にぶい黄褐色(10YR6/3)	粗い　4mm以下の石英を含む	きわめて良好	
5	土師器　甕	―	(3.0)	外面－灰黄色(2.5Y6/2) 内面－にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好　1mm以下の長石、2mm程度の銀色鉱物を含む	良好	外面煤付着
6	土師器　甕	―	(2.7)	外面－にぶい褐色(7.5YR6/3) 内面－にぶい橙色(7.5YR7/3)	普通　2mm以下の石英を含む	きわめて良好	外面煤付着
7	土師器　甕	―	(2.1)	外面 内面 } 淡黄色(2.5Y8/3)	良好　1.5mm以下の砂粒を少量含む	きわめて良好	
8	土師器　甕	―	(2.1)	外面－にぶい褐色(7.5YR6/3) 内面－にぶい橙色(7.5YR7/3)	普通　2mm以下の石英を含む	良好	外面煤付着
9	土師器　甕	15.2	(2.2)	外面－にぶい褐色(7.5YR6/3) 内面－にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好　1mm程度の石英、長石の砂粒含む	良好	外面煤付着
10	土師器　甕	―	(3.0)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好　1mm以下の石英を多く含む	きわめて良好	
11	土師器　甕	―	(2.4)	外面 内面 } にぶい橙色(5YR6/3)	精良　3mm以下の石英を若干含む	良好	
12	土師器　甕	―	(2.2)	外面 内面 } にぶい橙色(7.5YR7/4)	普通　1mm以下の石英を含む	良好	
13	土師器　甕	―	(2.6)	外面－にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面－明赤褐色(2.5YR5/6)	普通　2mm程度の石英を含む	良好	外面煤付着
14	土師器　甕	―	(2.5)	外面 内面 } 橙色(7.5YR7/6)	普通　2mm以下の石英を含む	きわめて良好	外面煤付着
15	土師器　甕	―	(3.6)	外面－黒色(10YR1.7/1) 内面－褐灰色(7.5YR5/1)	良好　1mm程度の石英を含む	良好	外面煤付着
16	土師器　甕	―	(3.0)	外面－にぶい橙色(5YR7/4) 内面－にぶい橙色(5YR6/4)	良好　2mm以下の石英を若干含む	きわめて良好	
17	土師器　甕	―	(1.9)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好　1mm以下の砂粒少量含む	良好	外面煤付着
18	土師器　甕	―	(3.9)	外面－にぶい黄橙色(10YR7/3) 内面－浅黄橙色(10YR8/3)	良好　1mm程度の石英、1mm以下の長石、1mm程度の赤色鉱物(チャート風)含む	きわめて良好	外面煤付着
19	土師器　甕	―	(3.2)	外面－淡黄色(2.5Y8/3) 内面－にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや粗い　2mm以下の石英を含む	普通	
20	土師器　甕	―	(2.9)	外面 内面 } にぶい褐色(7.5YR6/3)	やや粗い　2mm以下の石英、1mm以下の長石を含む	きわめて良好硬質	
21	土師器　甕	―	(2.7)	外面 内面 } 浅黄橙色(10YR8/3)	良好　1mm程度の石英、赤色の鉱物を含む	良好	
22	土師器　甕	―	(1.3)	外面－灰黄褐色(10YR6/2) 内面－にぶい黄橙色(10YR7/2)	普通　2mm程度の石英を含む	良好	外面煤付着
23	土師器　甕	―	(4.6)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/3)	普通　2mm以下の石英を含む	やや甘い	外面煤付着

24	弥生土器　甕	＊5.2	(3.1)	外面－灰白色(10YR8/1) 内面－灰白色(10YR8/2)	良好	2㎜程度の砂粒を若干含む	良好	
25	土師器　甕	＊3.9	(2.9)	外面－灰白色(10YR8/2) 内面－浅黄橙色(10YR8/3)	良好	1㎜程度の石英・長石の砂粒含む	きわめて良好	
26	土師器　甕	－	(4.9)	外面－にぶい黄橙色(10YR7/3) 内面－灰色(7.5Y4/1)	普通	2㎜以下の石英、赤色の礫を含む	良好	
27	土　師　器	＊10.0	(3.1)	外面－にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面－にぶい橙色(7.5YR6/4)	精良	石英・長石等の砂粒を含む	良好	
28	土師器　壺	8.9	(3.8)	外面－灰黄褐色(10YR5/2) 内面－灰黄褐色(10YR6/2)	精良	1㎜以下の石英を若干含む	良好	
29	土師器　壺	11.5	(4.8)	外面－にぶい黄橙色(10YR7/3) 内面－にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	1㎜以下の石英を若干含む	良好	
30	土師器　壺	－	(4.9)	外面－橙色(7.5YR6/6) 内面－明赤褐色(5YR5/6)	良好	1㎜以下の石英を含む	良好	
31	土師器　壺	－	(3.6)	外面・内面 にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	2㎜以下の石英を含む	きわめて良好	
32	土師器　壺	－	(3.0)	外面・内面 にぶい黄橙色(10YR7/4)	普通	1㎜以下の長石他含む	やや甘い	
33	土師器　壺	－	(2.4)	外面－黄灰色(2.5Y5/1) 内面－にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	1㎜以下の石英・長石を含む、角閃石、雲母含む	良好	
34	土師器　壺	－	(2.7)	外面・内面 にぶい黄橙色(10YR6/3)	やや粗い	3㎜以下の石英他かなり含む	良好	
35	土師器高坏	－	(3.7)	外面・内面 橙色(5YR7/6)	普通	1㎜程度の石英を若干含む	やや甘い	
36	土師器高坏	－	(3.9)	外面・内面 橙色(7.5YR7/6)	良好	1㎜程度の石英を含む	良好	
37	土師器高坏	－	(5.7)	外面－浅黄橙色(10YR8/3) 内面－橙色(7.5YR7/6)	良好	細砂含む	やや甘い	外面黒斑あり
38	土師器高坏	－	(1.9)	外面・内面 にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	2㎜以下の石英、1㎜以下の長石を含む	普通	
39	土師器高坏	－	(3.4)	外面－にぶい橙色(5YR7/3) 内面－にぶい橙色(5YR7/4)	良好		やや甘い	
40	土師器高坏	－	(3.4)	外面・内面 橙色(7.5YR7/6)	精良		やや甘い	
41	土師器高坏	－	(4.8)	外面－にぶい黄橙色(10YR7/4) 内面－にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	2㎜程度の石英を含む	きわめて良好	
42	土師器高坏	－	(8.7)	外面－灰黄色(2.5Y6/2) 内面－灰色(7.5Y5/1)	良好	1㎜程度の石英・長石を含む	きわめて良好	
43	土師器高坏	＊9.9	(3.0)	外面・内面 にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	1㎜以下の石英を含む	きわめて良好	
44	土師器高坏	＊11.1	(2.3)	外面－にぶい黄橙色(10YR7/4) 内面－にぶい黄橙色(10YR6/3)	精良		良好	
45	土師器高坏	＊11.5	(1.2)	外面・内面 橙色(5YR7/6)	精良	細粒含む	きわめて良好	
46	土師器高坏	－	(2.1)	外面・内面 にぶい橙色(7.5YR7/4)	普通	1.5㎜以下の砂粒を含む	良好	
47	土師器　鉢	－	(3.3)	外面－にぶい褐色(7.5YR5/4) 内面－にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	不純物はほとんど含まない	良好	外面煤付着
48	土師器　鉢	12.3	(4.0)	外面・内面 褐灰色(7.5YR5/1)	精良	石英、長石他の砂粒を含む	良好	
49	土師器　鉢	－	(3.0)	外面・内面 灰色(5Y4/1)	良好	1㎜以下の長石を含む	きわめて良好	
50	土師器　鉢	－	(2.9)	外面－にぶい橙色(5YR7/3) 内面－にぶい橙色(5YR7/4)	精良		やや甘い	
51	土師器　鉢	－	(4.2)	外面－灰黄色(2.5Y6/2) 内面－灰黄色(2.5Y7/2)	精良	1㎜以下の石英・長石を若干含む	良好	
52	土師器　鉢	－	(3.3)	外面－黄灰色(2.5Y6/1) 内面－灰色(7.5Y5/1)	普通	2㎜以下の石英を含む	良好	
第10トレンチ (Fig.13)								
1	土師器　甕	－	(2.6)	外面－橙色(5YR6/6) 内面－浅黄橙色(10YR8/3)	良好	1㎜程度の石英を若干含む	普通	
2	土師器　甕	－	(3.4)	外面－にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面－にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	1㎜程度の石英、1㎜以下の長石を各々若干含む	良好	
3	土師器　器台	10.7	(3.2)	外面－にぶい黄橙色(10YR7/3) 内面－にぶい黄橙色(10YR7/2)	普通	2㎜以下の石英、1㎜以下の長石を含む	良好	外面丹塗

No	器　種	長　さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	石　質	備　考
第9トレンチ第5・6・7層 (Fig.12)							
53	剝　片	(1.6)	1.7	0.6	(1.2)	黒曜石	
54	剝　片	(2.8)	3.4	0.9	(7.1)	黒曜石	

3　小　結

(1)　出土遺物と検出遺構について

第1・3・7・9・10～12各トレンチで遺物が出土した。各トレンチとも破片ばかりであるが、特に第9トレンチでは甕、壺、高坏、埦など器形のわかるほぼ同時期の資料が含まれており良好な資料である。なお、出土遺物のなかには磨滅の少ないものが含まれており、比較的近傍から流入したものと考えられる。

甕は、口縁部が外彎して開くものが多いが、内彎して開く口縁部をもち、端部がやや肥厚して水平もしくは水平に近い面をもつもの（9）がある。端部に面をもつものは他に2点ある。（6・7）。また、口頸部の退化現象によって、口頸部の屈曲が極めて弱く、外面を突帯状にわずかに膨らませただけの短い複合口縁をもつもの（19・20）がある。胴部外面にタタキがみられるものは極めて少なく、外面は刷毛ないしナデ仕上げで、内面はヘラケズリを行なうものが多い。前者は外来要素の強い布留型の甕で、下東遺跡KP－11、第Ⅳ地区KSP[3]、西遺跡第2号溝[4]等で出土例が知られ、布留式土器の新しい段階に位置づけられよう。後者は在地系の甕で、周防部に特徴的な複合口縁をもつ甕の終末期のものと考えられ、本学の吉田構内遺跡保存地区第12・13号竪穴住居跡に類品がみられる。現在までのところ、県内では両者の良好な共伴資料は得られていないが、下東遺跡KP－11出土例のように両者の折衷形態と考えられるものがあり、本校内の調査によって畿内布留式土器の流入、変化の過程と、それに合呼応する複合口縁をもつ甕の退化、消長の過程が山口盆地内で確認される日は近い。

壺は、口縁部が直線もしくは内彎して長くのびる小型丸底壺と考えられるものが多いが、口縁部と体部の大きさの比率、体部の器面調整は明らかでない。

高坏は、坏部の深さ、上半部と下半部の比率は明らかでないが、明瞭な稜をもたず、下半部は内彎して立ち上がる。上半部は緩やかに開くものと思われ、口縁端部はわずかに外反する。脚柱部は坏部との接合部付近から開き、やや膨らみぎみのものと直線的に下方に開くものとがある。脚裾部はそのまま開くものと屈曲するものとがある。

埦は、体部が内彎して開くもので、口縁端部がわずかに外反するものもある。48は西遺跡第2号溝出土例のように脚台をもつものかもしれない。

なお、第10トレンチからは小型の丸底壺、鉢、器台の小型三種土器のうち直線的に伸びる浅い皿状の受部をもつ器台が出土している。

以上のように、第9トレンチ第5～7層出土遺物は一部にやや遡るものもあるが、全般

的に畿内布留式土器の新段階に位置づけられ、5世紀前半頃の時期を与えることができよう。なお、この段階には畿内の一部を除いて初期須恵器が出現する時期にあたるが、今回の調査では出土していない。

明確な遺構は今回の調査では検出していない。しかし、幼稚園敷地部分の第3トレンチでは、遺構と思われる新旧二時期の掘り越みを確認した。切り合い関係にあり、新しい掘り込みから室町時代の土師器が出土している。また、同第1トレンチでは遺物包含層が不規則に落ち込み、土自体にもしまりがないことから遺構の存在を予想させるが、調査面積が狭いため詳細は不明で、今後の調査を待って結論を出したい。

(2) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

昭和58年度の調査では、溝状遺構、竪穴住居跡および遺物包含層を検出した。上述したように、校舎敷地部分に比べ一段低くなっている小学校のグラウンドを中心に実施したもので、その造成状況から校舎敷地部分では遺構、遺物包含層が過去に存在していたとしてもすでに削平されているものと考えられていた。今回の調査範囲は部分的ではあったが、その予想を大きく覆す結果となった。

土層観察が断片的であるため、はっきりした旧地形等の全体像はつかみかねるが、幼稚園敷地部分の第2トレンチでは砂礫、小学校敷地部分第12・13・14トレンチでは砂礫と砂質土の互層となる堆積が認められた。昭和58年度に調査した幼稚園敷地部分の第3トレンチ北西約25mに位置するHトレンチでも砂礫の堆積が確認されており、幼稚園・小学校敷地部分の東端および中央部には北から南に貫流すると思われる河川が存在する可能性がある。今回の調査では遺物が出土しておらず、時期は定かでないが、今後、その規模、時期、流路方向を把握する必要がある。

また、小学校の校舎敷地部分はほぼ平坦に造成されているが、第8・9・15トレンチでは周辺の各トレンチに比較して地山がかなり下位に存在し、埋め土も特に厚く堆積している。小学校の南東端部およびグラウンドとの段差付近の地域は、丘陵の尾根がそれぞれ南に下降していくあたりに位置しているものと考えられ、布留式土器の終末期の遺物が出土した第9トレンチの遺物包含層、昭和58年度の調査で認められた溝状遺構はこうした谷あいで検出されたものと推察される。

遺物は、前回実施したグラウンド部分の調査で、溝状遺構から庄内式土器の新段階の遺物が多量に出土しているが、今回の調査ではその段階まで遡る資料はない。また、布留式

併行の竪穴住居跡１棟も検出されているが、広義の布留式土器の範疇で取り扱っている。第９トレンチの一括土器群中には、竪穴住居跡出土遺物と同形態のものが含まれていることから、小学校敷地部分には庄内式新段階および布留式新段階の、少なくとも新旧二時期の遺物包含層もしくは遺構が存在する可能性が提起された。

今回の調査は幼稚園・小学校敷地内全面について実施したものではないが、本構内における今後の施設、環境整備に関する有意義な資料を提供した。とくに、遺物包含層ないしは遺構と考えられる掘り込みが検出されている第１・３トレンチ周辺の幼稚園中央部付近、第９・10トレンチ周辺の小学校南東部では遺物包含層の分布範囲の把握を含めた工事に先立つ事前の調査が必要である。また、小学校グラウンドで認められた竪穴住居跡の検出面と同様な、安定した地山も数箇所のトレンチで確認されていることから、遺構が存在する可能性は十分考えられ、立会調査等によってその存否を確認する必要がある。（河　村）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。この報告当時は、標高を、このＢＭを基準とした相対値であらわしていた。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校電柱移設に伴う立会調査」（本書第４章第４節、1987年）。

3）建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」（『下東遺跡・荻峠遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第30集、1975年）。

4）山口市教育委員会『西遺跡』（山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年）。

第3節　教育学部附属山口中学校部分の調査

1　層位・遺構

全8ヵ所にトレンチを設定。調査順にトレンチ番号をふった。調査総面積は約20m²で、予定される管路掘削総面積の約5.7%にあたる。附属山口中学校の敷地は、標高ほぼ28.2～28.4mに造成されている。北端のプール部分と東端のテニスコート部分がやや高くなり、西の敷地外は、脇の市道が一段低く、白石小学校がさらにもう一段低くなっている。

第1トレンチ　　0.8m×2.5mのトレンチ。厚さ40cmの置土直下がオリーブ灰色シルトの地山で、以下、同色系統の砂・粘質土の互層となる。ただし、トレンチ東半の深掘り部分で地山を削り込んだような落ち込みがみられ、そこに黄系統の粘質土が3層堆積し、上に灰オリーブの砂礫がかぶさっている。断言はできないが、河川跡の埋土の可能性がある。遺物は検出されない。湧水するが、どの層からかは確認していない。

第2トレンチ　　第1トレンチの西約15m、1m×2.5mのトレンチ。厚さ約40cmの置土直下の地山：灰オリーブ色シルトは、第1トレンチ第7層に対応すると思われるが、以下は黄褐色砂礫の単一層となり、第1トレンチと異なる。遺構・遺物は検出されない。

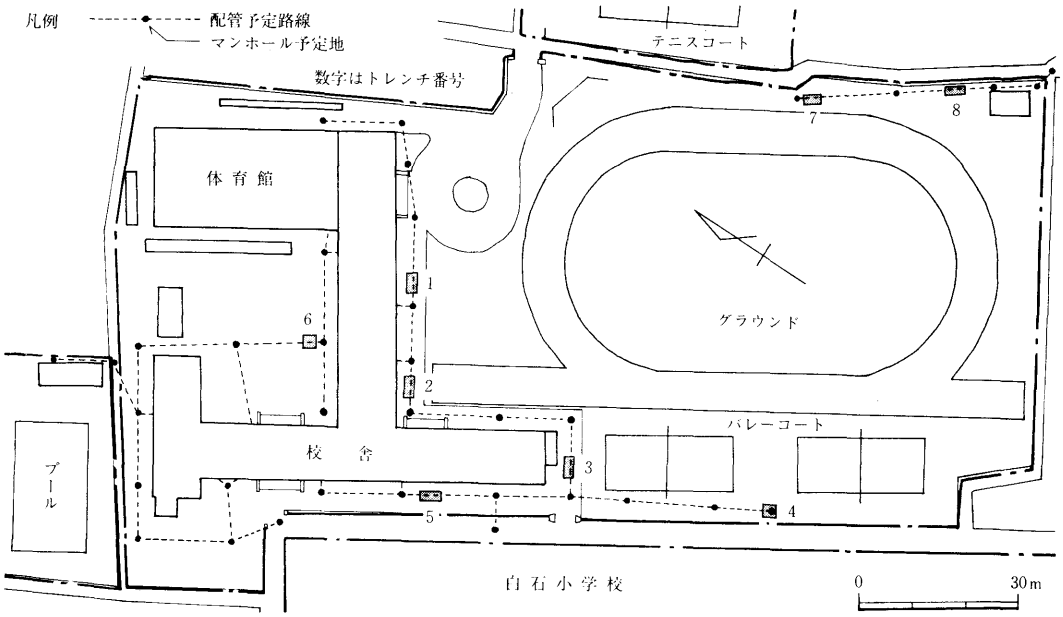


Fig. 14　トレンチ設定図

第３トレンチ　　１ｍ×2.5ｍを設定したが、調査は東半部にとどめた。北端部は既設の配管埋設時に攪乱を受けている。厚さ70㎝の置土の下に旧耕作土が残存、その直下に３層の遺物包含層が厚さ70～80㎝にわたって堆積し、湧水する砂礫層の地山にいたる。

遺物包含層は、自然木を含む湿気の多い粘質土で、河川の氾濫等に起因する二次堆積層と思われるため遺物は一括して取り上げた。石鏃２本のほか、弥生土器・土師器（中世中心）・須恵器・瓦質土器・陶器・磁器がある。遺構は検出されなかった。

第４トレンチ　　グラウンドの西端、１ｍ×2.5ｍのトレンチ。30㎝前後の薄い置土の下に２層の客土があり、第４層：暗緑灰色粘土の地山にいたる。第４層以下は湧水し、遺構は検出されない。２層の客土のうち下層の方は70～80㎝もの厚さがあり、第５トレンチ第４層と同一のものと思われる遺物包含層をブロック状に含んでいた。このブロックから弥生土器・土師器・磁器のほか、黒曜石剝片が出土している。

昭和60年度、隣接するバレーボールコートの支柱埋設に伴う調査の際にも、安定した地山土と思われる黄褐色粘質土、そして湿地の地山上である青灰色粘質土を、ともにブロック状に含む攪乱土が観察されていることから、[1]グラウンド西寄りの部分は造成時に周辺地域の遺物包含層・地山を削って運びこみ、盛って平地にしたものと思われる。

第５トレンチ　　校舎の西端、１ｍ×2.5ｍのトレンチ。置土は厚さ30㎝と薄く、その直下に、削平著しいが客土と思われる第３層：黄褐色粘質土がトレンチ南半部にのみ残っている。この層の上面で杭例が検出されたが、いつの時期のものか明らかでない。第３層の下には黒褐色系統の庄内式併行期の遺物包含層が３層、厚さ30㎝にわたって堆積していた。分層した３層の中では、最上層の第４層：黒褐色粘質土が最も遺物包含層が多い。第５層：暗褐色シルトは南半部のみの堆積で、掘削時には第４層に含めていた。第６層は黒色の砂礫となり遺物も少なくなる。

トレンチ南西端部では、これらの３層の遺物包含層の下に、さらに縄文土器のみを包含する第７層：灰黄褐色粗砂を確認した。以下、第13層：暗灰黄色砂礫の地山まで基本的には砂礫が続く。トレンチ北端部で地山上面に、植物遺体を含む第９・10層：黒褐色粗砂と有機土の堆積がみられ、縄文土器を検出したが、どちらの層からの出土か明らかでない。

遺物は、第３層から弥生土器・土師器・須恵器、第４～６層から弥生土器・古式土師器、第７層から縄文土器が出土した。第９・10層でも植物遺体に加えて縄文土器が出土している。第７層以下は堆積状況が不安定であり、谷状の窪地への流れ込みである可能性が高いが、縄文土器のみを出土することから、周辺に遺存のよい縄文時代の遺物包含層がある

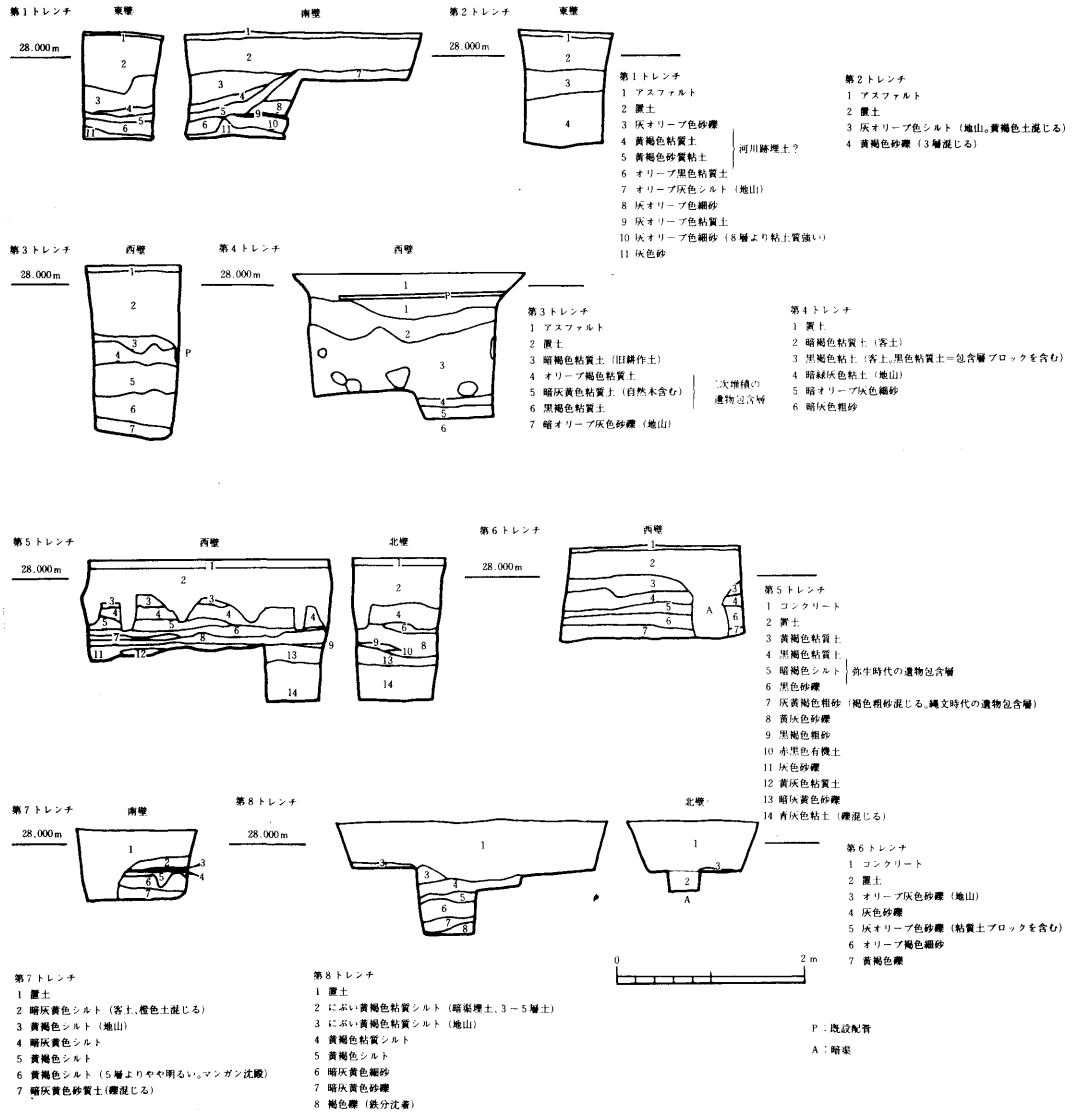


Fig. 15　土層断面図

ことは確実と思われる。

第６トレンチ　　1.8m×1.8m規模のトレンチ。置土は約30cmと薄く、以下工事掘削基底面まで、角礫を主とした砂礫層と砂層が続く。これらの砂礫層からの湧水に加えて、トレンチ内を東西方向に流れる暗渠を切断したことによる水の流れ込みが激しく、ポンプで除水しながらの作業となった。顕著な遺構・遺物は検出されない。

第７トレンチ　　グラウンド東端中央部、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ東壁に沿って、礫を敷きつめた幅30～40cmの暗渠が走る。置土はやや薄く厚さ30～40cm、その下の第２層は山土らしいものが混じり、客土の可能性がある。以下、堆積層はすべて黄色系統で、第６層までシルト層、第７層は礫を含む砂質土層となる。顕著な遺構・遺物なし。

第８トレンチ　　第７トレンチの南約25m、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ中央を南北に、第７トレンチのものにつながると思われる暗渠が走っている。厚さ50～60cmの置土直下がシルトの地山で、地山の上面は削平・攪乱が著しく、深掘りはトレンチ中央部で行なうこととなった。以下、基本層位は第７トレンチと同じで、第７層下に褐色礫層の第８層が認められた。土層の堆積は緩やかに南へ向かって下がっている。遺物は、暗渠埋土から近世の磁器片が出土したのみで、顕著な遺構は検出されない。

2　遺　物

第３トレンチ出土遺物（Fig. 16, PL. 10）

遺物は第４・５・６層から出土するが、層位の項で述べたとおり一括して取り上げた。弥生土器・古式土師器と思われる小片、須恵器、中世土師器、瓦質土器、陶器、磁器がある。炭化木材も検出された。主体となるのは中世土師器である。

１～３は土師器。１は坏口縁部で、同様の破片が他にもある。口縁は底部付近よりも厚くなり、緩く外反して尖り気味に終わる。外面の口縁下を強く横ナデするが、調整にロクロを使わない。加えて、厚手で胎土に砂粒をほとんど含まず、色調に赤みを帯びるなど、大内氏館跡Ｂ式土師器とされているものの特徴を備える。このＢ式土師器は大内氏の館継続期のなかでは後半期に出現し[2]、県下では大内氏関連の遺跡でしか出土の報告をみない[3]。他に土師器の坏、皿の口縁部はかなり出土した。それらは、口縁端部に面をもつものが若干あり、端部が丸く終わるものが残りのほとんどを占めるが、すべてロクロによる整形痕を残し、明るく焼き上げた薄手のものである。

２・３は坏または皿の底部。底部片は図示した以外にもかなりあるが、２のように体部が一旦上方に立ち上がってから外に開くようなタイプはこの資料のみで、３のように底部からすぐに外に開く器形がほとんどである。底部と体部の境の稜がやや甘くなったものも若干みられる。３は、内外面に赤色顔料の痕跡が認められる。

４・５は須恵器。４は坏口縁部で、端部はやや尖り気味に終わる。５は長頸壺の底部と思われ、内面の同心円の当て具痕はナデによりほぼ消えている。

第７トレンチ　　グラウンド東端中央部、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ東壁に沿って、礫を敷きつめた幅30～40cmの暗渠が走る。置土はやや薄く厚さ30～40cm、その下の第２層は山土らしいものが混じり、客土の可能性がある。以下、堆積層はすべて黄色系統で、第６層までシルト層、第７層は礫を含む砂質土層となる。顕著な遺構・遺物なし。

第８トレンチ　　第７トレンチの南約25m、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ中央を南北に、第７トレンチのものにつながると思われる暗渠が走っている。厚さ50～60cmの置土直下がシルトの地山で、地山の上面は削平・攪乱が著しく、深掘りはトレンチ中央部で行なうこととなった。以下、基本層位は第７トレンチと同じで、第７層下に褐色礫層の第８層が認められた。土層の堆積は緩やかに南へ向かって下がっている。遺物は、暗渠埋土から近世の磁器片が出土したのみで、顕著な遺構は検出されない。

2　遺　物

第３トレンチ出土遺物（Fig. 16, PL. 10）

遺物は第４・５・６層から出土するが、層位の項で述べたとおり一括して取り上げた。弥生土器・古式土師器と思われる小片、須恵器、中世土師器、瓦質土器、陶器、磁器がある。炭化木材も検出された。主体となるのは中世土師器である。

１～３は土師器。１は坏口縁部で、同様の破片が他にもある。口縁は底部付近よりも厚くなり、緩く外反して尖り気味に終わる。外面の口縁下を強く横ナデするが、調整にロクロを使わない。加えて、厚手で胎土に砂粒をほとんど含まず、色調に赤みを帯びるなど、大内氏館跡Ｂ式土師器とされているものの特徴を備える。このＢ式土師器は大内氏の館継続期のなかでは後半期に出現し[2]、県下では大内氏関連の遺跡でしか出土の報告をみない[3]。他に土師器の坏、皿の口縁部はかなり出土した。それらは、口縁端部に面をもつものが若干あり、端部が丸く終わるものが残りのほとんどを占めるが、すべてロクロによる整形痕を残し、明るく焼き上げた薄手のものである。

２・３は坏または皿の底部。底部片は図示した以外にもかなりあるが、２のように体部が一旦上方に立ち上がってから外に開くようなタイプはこの資料のみで、３のように底部からすぐに外に開く器形がほとんどである。底部と体部の境の稜がやや甘くなったものも若干みられる。３は、内外面に赤色顔料の痕跡が認められる。

４・５は須恵器。４は坏口縁部で、端部はやや尖り気味に終わる。５は長頸壺の底部と思われ、内面の同心円の当て具痕はナデによりほぼ消えている。

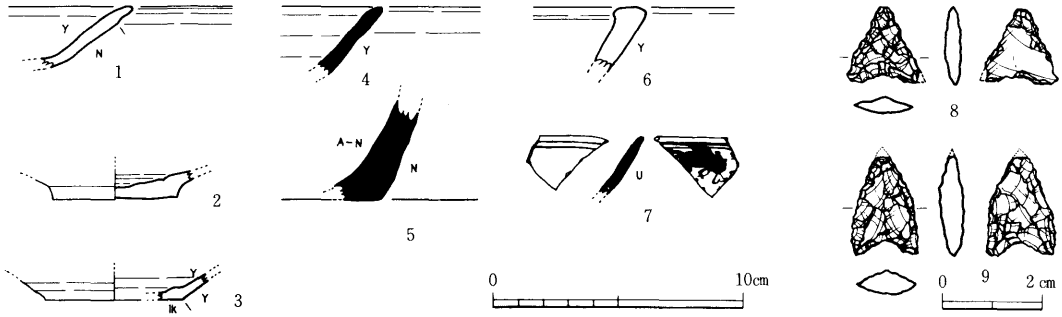


Fig. 16　第３トレンチ出土遺物実測図

６は瓦質土器の鍋口縁部。端部は肥厚して内側にやや突出し、上面は水平となる。瓦質土器には、他に格子タタキが外面に施される破片が数点ある。

７は近世の染付磁器埦の口縁部で、内外両面に２条の圏線、外面には濃淡を使い分けて唐草文を描く。陶器片もあるが図化できない。

８・９は黒曜石製の石鏃。８は抉（えぐ）りが浅く、若干基部が広がるもので、素材の腹面を大きく残す剥片鏃である。片脚部先端欠損。先端部は磨滅によるものであろうか、丸みを帯びる。９は姫島産の石材を用い、比較的厚みをもつもので、先端部を欠損する。抉りは、深いとはいえないがしっかりしている。

第４トレンチ出土遺物（Fig. 17, PL. 10）

遺物はすべて第３層内に混じる黒褐色粘質土ブロックから出土。主体は弥生時代終末～古墳時代初頭と思われる土器片であるが、やや遡る時期の土器底部や剥片が認められた。また降るものとして、端部に面をもつ歴史時代の土師器口縁部や染付磁器片が出土しているが、図化できない。

１は弥生土器甕の底部。大きな平底と思われ、内面にはコゲが厚く付着。弥生時代前期に遡る可能性がある。２は土師器かと思われる破片。外面には、先端の平たい櫛歯を使って一単位４条の波状文を施す。内面のヘラケズリには二方向がある。内面ヘラケズリの土器肩部に波状文を施す例は、庄内・布留式併行期に各地でしばしばみられる。

３は黒曜石の剥片で、腹面には打面・打点・打瘤が残り、背面は一部礫面を残すが上下両方向からの剥離を認める。

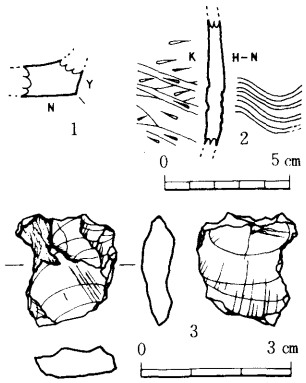


Fig. 17　第４トレンチ出土遺物実測図

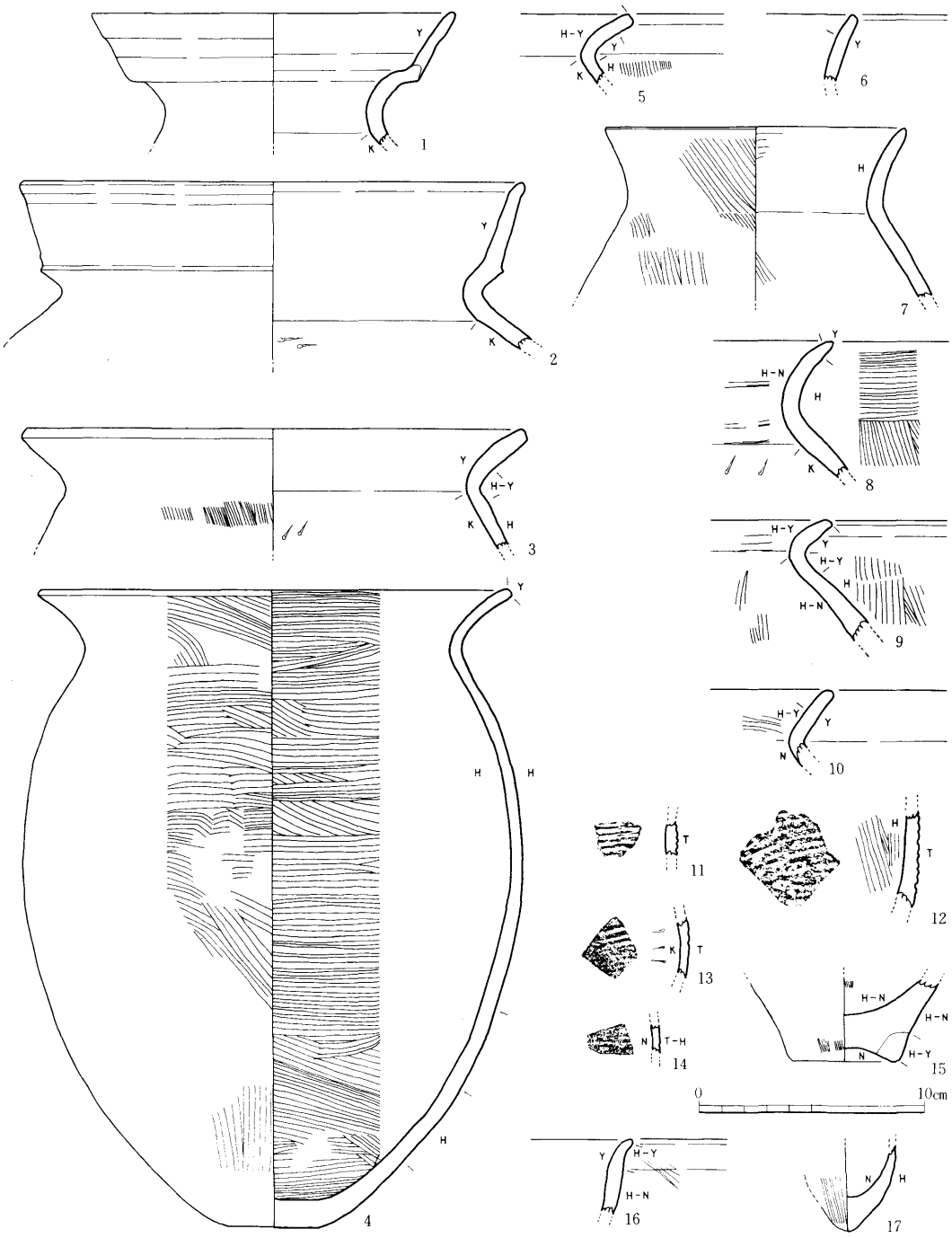


Fig. 18 第5トレンチ第4・5・6層出土遺物実測図（1）

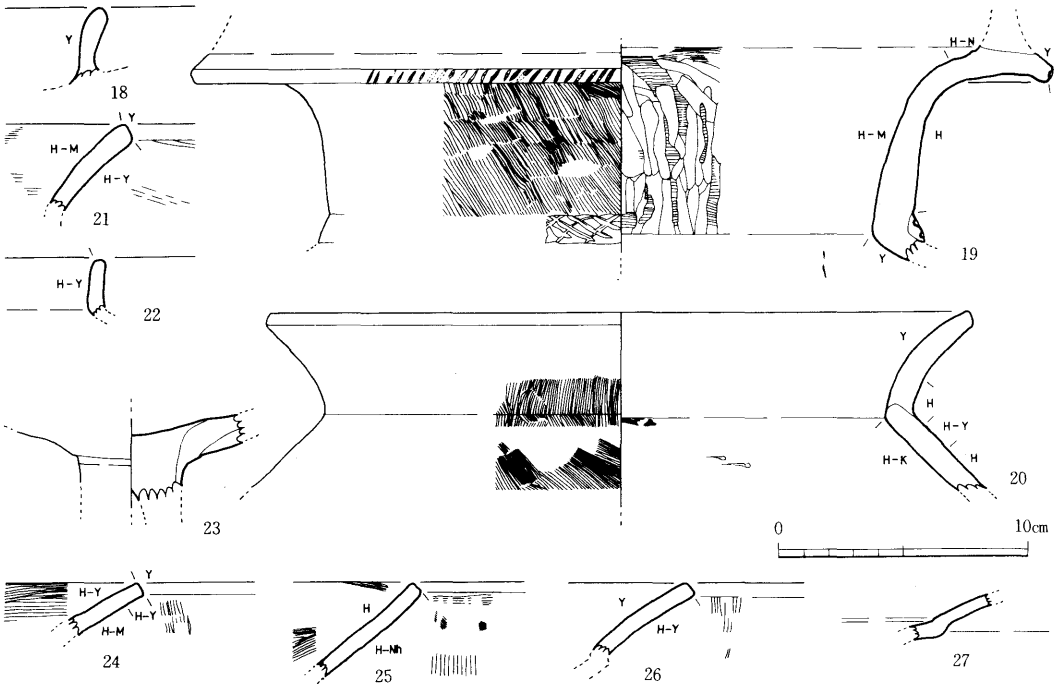


Fig. 19　第5トレンチ第4・5・6層出遺物実測図（2）

第5トレンチ出土遺物（Fig. 18～21, PL. 10・11）

遺物は、第3・4・5・6・7・9・10層からそれぞれ出土した。

客土と思われる第3層からは、下の第4～6に対応すると思われる土器小片若干（壺・甕・高坏など。顕著に刷毛目が残るが外面に赤色顔料を塗布する小片あり）のほか、糸切り底の土師器底部、古代と思われる須恵器片が出土しているが、図化しえない。

第4・5・6層出土遺物（Fig. 18・19）

第4・5層の遺物は、取り上げの段階で混合していると思われ、また第4・6層間の遺物が接合することから、第4～6層はここでは一括して取り扱うこととする。ほとんどが庄内式併行期と思われる土器で、甕・鉢・壺・高坏・有翼支脚がある。他の時期のものとしては、弥生時代中期初頭の甕が1点ある程度である。植物遺体も検出されている。

1～14は甕。1・2は明らかに山陰の影響を受けたと思われるものである。1は比較的頸が窄まり、口縁端部が尖るもので、風化しているが、外面ほぼ全面に煤の付着がみられる。2は大型。口縁端部はやや尖り気味ながら丸くおさめ、立ち上がりの段は上向きで、1より若干後出するかとも思われる。1に比べて焼成がよく、つくりが精巧で、搬入品の

可能性がある。煤の付着がなく、壺かもしれない。双方とも肩部内面は横方向のヘラケズリ、他はナデ仕上げで文様は認められない。花谷めぐむ氏編年の鍵尾A区5号墓式。[4)]

甕には、赤・黄色系統の軟質焼成のものと、黄灰色の硬質焼成のものとがある。

「く」の字に曲がる甕の口縁部（3～10）は、端部が面をもつもの（3～6）と、尖り気味になるもの（7～10）とに分けられる。4は反転して完形復原できたもので、器壁は薄く、内外面とも刷毛目仕上げ。底部付近は二次加熱による赤変が著しい。風化の著しい3・7を除いては、外面に多量の煤の付着が観察できる。

甕の胴部外面には、ほとんどの個体が刷毛目を顕著に残す。内面は刷毛目または刷毛目後ナデ仕上げのもののほか、ヘラケズリのものが多くみられる。3・8のヘラケズリは縦、5は横方向。外面にタタキの認められる破片がある（11～14）が、小片のため方向は不明。13・14は薄手で非常に硬質。搬入品であろう。14はタタキの後刷毛目を施す。

甕の底部は、完形になる4で確認できた小さな平底のほかは、弥生時代中期初頭のものと思われる上げ底のもの（15）が確認できたにすぎない。おそらく不安定な平底または丸底になると考えられるものがあるが、破片のため底部と断定できない。

鉢と思われるものには16・17がある。16は短く外反する口縁片で、ほぼ直立する。17は尖底の底部片で、小型の鉢になるものであろう。

18～22は壺。複合口縁をもつもの（18・19）と、「く」の字に外反する口縁をもつもの（20・21）とがある。18は口縁の立ち上がり部分で、精巧なつくり。19は立ち上がり部分と肩部以下を欠く。頸部はほぼ直立し、肩部との境の突帯に斜格子の刻みを入れ、立ち上がりの段の端部には刷毛目原体の小口を使って刻みを施す。内面は、ミガキの及ばなかった箇所に残る刷毛目が目立つ。20は外面に非常に繊細な刷毛目が残り、肩部内面は横方向のヘラケズリ。胎土が脆い。21は内面に横方向のミガキが施され、刷毛目がほぼ消える。硬質焼成。22は直口する短頸壺と思われる。端部は丸みを帯びながらもやや面をもつ。

壺には他に、内面粗く、外面丁寧にミガキをかけているが、外面には全体に煤の付着する底部近くの破片などがある。

23～27は高坏。23は坏底部から脚柱部にかけての破片で、脚柱は差し込み式。不器用なつくりで、器壁の厚みが場所によって全く違う。図化できる口縁（24～26）はすべて端部に平坦面をもつ。25は2種類の原体で内外面に刷毛目を施した後、外面に縦方向のヘラナデを行なう。27の坏の屈曲はしっかりしているが、胎土・焼成が悪い。

図化しなかったが、他に有翼支脚の翼部の破片が出土している（PL．11－28）。

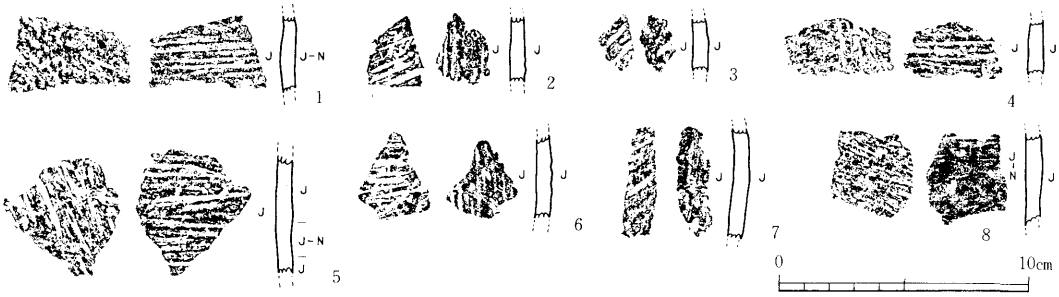


Fig. 20　第５トレンチ第７層出土遺物実測図

述べてきたとおり、第４～６層出土の遺物は、山陰系の複合口縁甕の型式、また山本一朗氏編年の弥生時代終末期にあたる防長10式に特徴的な複合口縁壺・有翼支脚の存在、[5]そしてタタキのある甕の存在などから、ほぼ庄内式併行期のものとみてよいと思われる。

第７層出土遺物（Fig. 20）

縄文土器のみが出土した。時期の断定はできかねるが、おそらく後・晩期であろう。

１～７は胎土・色調・焼成・調整ともにたいへん似通っており、同一個体かと思われるが接合しない。図化しなかったが同様の小片がもう１片ある。器形などが窺える破片はない。条痕の方向は、破片ばかりのため断定しかねるが、おそらく外面は縦および斜方向、内面は横方向で、外面は条痕の後ナデている箇所もある。内外面で条痕の工具が違う。３は内面にコゲらしいものが付着している。

８は、外面は条痕文を施すが、内面は条痕の後丁寧なナデで条痕を消していることが１～７との大きな違いである。また条痕自体が１～７のものより細かく、方向が内外面とも同じであることも差のひとつとなろう。

第９・10層出土遺物（Fig. 21）

縄文土器と植物遺体が出土した。

１は胎土に滑石を含む疑いがある。内面条痕後粗いナデ、外面はナデしか観察できない。２は第７層出土の１～７と色調・外面の調整がよく似ているが、内面は丁寧なナデである。１の胎土からみれば、縄文時代前期・中期のものである可能性があり、やや不安が残るが、一応、第７層と大差ない時期のものとして捉えておきたい。

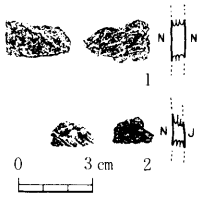


Fig. 21　第５トレンチ第９・10層出土遺物実測図

なお植物遺体は、第４・５層が樹木の樹皮及び木質片の細片、第９層は樹木の樹皮片、木質片、葉の基部片及び種子の果皮の細片及び微

片であった。種類と個体数について、以下農学部講師の宇都宮宏氏の鑑定結果を報告する。

これらの植物遺体を丁寧に水洗して、ろ紙上に置き、樹皮、葉及び果皮はそのまま自然乾燥させて、解剖顕微鏡で表面構造を観察した。また木質については、木口、征目、板目の試料切片を作製して、生物顕微鏡で鏡検し、植物の種類を同定した。

第9層からはアラカシ（Quercus glauca Thunb）173片（樹皮・木質172片、葉片1)、コナラ（Quercus serrate Thunb）11片（樹皮・木質)、クヌギ（Quercus acutissima Carr）15片（樹皮・木質13片、堅果の果皮2)、イヌブナ（Fagus japonica Maxim）17片（樹皮・木質)、スギ（Cryptomeria japonica D. Don）3片（木質)、また第4・5層からはイヌブナ7片（木質）であった。ブナ科の樹木が優先しており、アラカシは樹皮の観察からみて、比較的大きい木と考えられた。また気候的変動による樹種の変化はないものと考えられる。

Tab. 3 出土遺物観察表

法量（ ）は現存値

No.	器種	口径 ＊底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土		焼成	備考
第3トレンチ（Fig.16）								
1	土師器 坏	—	(2.5)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/2)	精緻	砂粒はほとんど含まない	良好	
2	土師器 坏か皿	＊5.0	(1.1)	外面 内面 } 灰白色(2.5Y8/2)	良好	1mm程度の砂粒を若干含む	やや甘い	
3	土師器 坏か皿	＊5.5	(1.0)	外面 内面 } 淡黄色(2.5Y8/3)	精良	1mm以下の砂粒を若干含む	きわめて良好	内外面丹塗
4	須恵器 坏	—	(2.6)	外面 内面 } 明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	良好	1mm以下の石英・長石を含む	普通	
5	須恵器長頸壺	—	(4.0)	外面－灰黄色(2.5Y7/2) 内面－灰白色(2.5Y7/1)	やや粗い	1mm程度の石英・長石を多く含む	良好	
6	瓦質土器 鍋か	—	(2.3)	外面－灰色(5Y5/1) 内面－淡黄色(2.5Y8/3)	良好	1mm以下の砂粒を若干含む	普通	
7	磁器 椀	—	(2.4)	素地－灰白色(5GY8/1) 釉－やや青味を帯びた透明	精良		良好	
第4トレンチ（Fig.17）								
1	甕	—	(1.4)	外面－にぶい橙色(2.5YR6/4) 内面－コゲの付着のため不明	良好	1mm程度の石英、1mm以下の長石を各々多く含む	きわめて良好	二次加熱により赤変著しい。内面コゲ付着
2	甕	—	(5.0)	外面－灰黄褐色(10YR6/2) 内面－灰黄色(2.5Y6/2)	良好	2mm以下の石英、1mm以下の長石、金雲母等多く含む	きわめて良好	
第5トレンチ第4・5・6層(Fig.18・19, PL.11)								
1	甕	16.0	(5.8)	外面－浅黄橙色(7.5YR8/3) 内面－浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	1mm程度の石英・長石含む	やや甘い	外面煤付着
1	甕	22.0	(7.3)	外面－灰黄色(2.5Y7/2) 内面－灰黄色(2.5Y6/2)	精良		きわめて良好	
3	甕	21.9	(5.2)	外面－橙色(7.5YR7/6) 内面－にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	1mm程度の石英・長石含む	普通	
4	甕	20.7 ＊4.0	28.2	外面－にぶい黄褐色(10YR5/3) 内面－灰黄褐色(10YR5/2)	普通	2mm以下の石英、1mm以下の長石を含む	きわめて良好	外面煤付着
5	甕	—	(3.1)	外面－灰褐色(5YR5/2) 内面－灰色(5Y4/1)	普通	1～3mmの石英・長石を含む	良好	外面煤付着
6	甕	—	(3.0)	外面 内面 } 灰黄褐色(10YR6/2)	良好	石英を若干含む	甘い	外面煤付着
7	甕	13.2	(7.5)	外面－橙色(7.5YR7/6) 内面－にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	1mm程度の石英・長石若干含む	甘い	
8	甕	—	(6.0)	外面－にぶい黄橙色(10YR6/3) 内面－にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	2mm以下の石英を若干含む	きわめて良好	外面煤付着
9	甕	—	(5.4)	外面－灰黄褐色(10YR6/2) 内面－灰黄色(2.5Y7/2)	良好	2mm以下の石英、1mm程度の長石を若干含む	きわめて良好	

10	甕	—	(3.4)	外面 内面 } 灰白色(10YR7/1)	良好	2㎜程度の石英、1㎜程度の長石若干含む	きわめて良好	外面煤付着
11	甕	—	(1.5)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや粗い	2㎜以下の石英・長石かなり含む	良好	外面煤付着
12	甕	—	(4.3)	外面－にぶい黄褐色(10YR5/3) 内面－灰黄褐色(10YR6/2)	やや粗い	2㎜以下の石英・長石かなり含む	良好	外面煤付着
13	甕	—	(2.6)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	1㎜以下の石英・長石含む	きわめて良好・堅固	
14	甕	—	(1.1)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	1㎜以下の石英・長石含む	きわめて堅固	外面煤付着
15	弥生土器　甕	＊4.4	(3.5)	外面－黄灰色(2.5Y6/1) 内面－黄灰色(2.5Y5/1)	やや粗い	1～3㎜の石英・長石・黒雲母多く含む	良好	
16	鉢	—	(3.3)	外面－灰白色(2.5Y8/2) 内面－灰　色(7.5Y5/1)	精良	1㎜程度の石英・長石を含む	良好	
17	鉢	—	(3.3)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/2)	精良	1㎜程度の石英を若干含む	きわめて良好	
18	壺	—	(3.0)	外面－灰白色(10YR7/1) 内面－にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	2㎜程度の石英、1㎜程度の長石を若干含む	きわめて良好	
19	壺	—	(8.5)	外面－にぶい黄橙色(10YR7/2) 内面－灰褐色(7.5YR4/2)	精良	1㎜程度の石英・長石含む	良好	
20	壺	27.8	(7.1)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/4)	良好	1㎜程度の石英・長石含む	やや甘い	
21	壺	—	(3.3)	外面－にぶい黄橙色(10YR7/3) 内面－にぶい黄橙色(10YR7/2)	精良	砂粒(石英・長石)微量含む	きわめて良好	
22	壺	—	(2.3)	外面－浅黄橙色(10YR8/3) 内面－灰白色(10YR8/2)	良好	1㎜程度の石英・長石若干含む	やや甘い	
23	高　坏	—	(3.5)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR7/2)	粗い	4㎜以下の石英・長石・片岩等かなり含む	良好	
24	高　坏	—	(2.0)	外面 内面 } にぶい黄橙色(10YR6/3)	精良	1㎜程度の石英、1㎜以下の長石を若干含む	きわめて良好	
25	高　坏	—	(3.6)	外面－黒色(7.5Y2/1) 内面－灰黄色(2.5Y7/2)	良好	2㎜以下の石英・長石を含む	良好	
26	高　坏	—	(2.8)	外面－灰黄色(2.5Y7/2) 内面－灰白色(2.5Y8/2)	やや粗い	1～2㎜の石英、1㎜程度の長石を多量に含む	良好	
27	高　坏	—	(1.8)	外面 内面 } にぶい黄橙色(7.5YR7/3)	粗い	1～3㎜程度の石英,1㎜程度の長石を含む。特に石英が多い	甘い	
28	有翼支脚	—	—	灰黄色(2.5Y6/2)	普通	2㎜以下の石英、1㎜以下の長石を含む	良好	
第5トレンチ　第7層(Fig.20)								
1	縄文土器	—	(3.1)	外面－灰黄色(2.5Y6/2) 内面－黒色(5Y2/1)	精良	1㎜以下の石英を含む	良好	
2	縄文土器	—	(2.6)	外面－黒褐色(10YR3/1) 内面－黒色(10YR2/1)	精良	1㎜以下の石英・長石を含む	良好	
3	縄文土器	—	(2.2)	外面－灰黄褐色(10YR6/2) 内面－褐灰色(10YR4/1)	精良	1㎜以下の石英・長石を含む	良好	
4	縄文土器	—	(2.2)	外面－灰黄褐色(10YR5/2) 内面－褐灰色(10YR4/1)	精良	1㎜以下の石英・長石を含む	良好	
5	縄文土器	—	(4.9)	外面－灰黄褐色(10YR4/2) 内面－褐灰色(10YR4/1)	精良	1㎜以下の石英を含む	良好	
6	縄文土器	—	(3.5)	外面－灰黄褐色(10YR5/2) 内面－黒色(10YR2/1)	精良	1㎜以下の石英を含む	良好	
7	縄文土器	—	(4.5)	外面－灰黄褐色(10YR5/2) 内面－黒褐色(10YR3/1)	精良	1㎜以下の石英・長石を含む	良好	
8	縄文土器	—	(3.7)	外面－灰黄色(2.5Y6/2) 内面－灰黄褐色(10YR5/2)	良好	2㎜以下の石英を含む	きわめて良好	
第5トレンチ　第9・10層(Fig.21)								
1	縄文土器	—	(1.6)	外面－黒色(N 2/0) 内面－暗灰色(N 3/0)	良好	2㎜以下の砂粒含み滑石混入か	きわめて良好	
2	縄文土器	—	(1.2)	外面－にぶい褐色(7.5YR6/3) 内面－暗青灰色(5PB3/1)	良好	3㎜以下の砂粒含む	良好	

No.	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第3トレンチ(Fig.16)							
8	石　鏃	1.5	1.4	0.3	0.4	黒曜石	
9	石　鏃	(1.9)	1.3	0.5	(0.9)	黒曜石(姫島産)	
第4トレンチ(Fig.17)							
3	剝　片	2.2	2.0	0.7	2.3	黒曜石	

3　小　結

(1)　出土遺物について

第3・4・5トレンチで遺物が出土し、特に第5トレンチでは、器形の全体を示すものがなく器種構成などもわからないが、興味深い資料が多く出土した。

第3トレンチでは、ほぼ中世主体の遺物が検出された。そのなかに、これまで大内氏館跡と瑠璃光寺跡遺跡でしか確認されていなかった、大内氏館跡B式土師器が確認された。このB式土師器は大内氏内部で自給自足的に製作・消費された土器と推定されるが、館跡でのおびただしい出土量にもかかわらず、その生産跡と覚しきものはまだ発見されない。[6] 当附属中学校敷地は、大内氏館跡の南西わずか1kmの場所にあり、この周辺に大内氏関連遺跡またはB式土師器の生産にかかわる施設が存在していた可能性がうかんだ。

第5トレンチでは、2時期の遺物包含層を確認した。

第4～6層からは、周防部に特徴的な複合口縁壺や佐波川・椹野川流域に特徴的な有翼支脚など在地性の強い土器のほかに、山陰系の複合口縁甕、畿内庄内式土器の影響を窺わせるタタキ技法のみられる破片など、外来要素の強い土器が出土し、注目される。

これらの土器群の時期については、タタキのある破片（タタキの上から刷毛目を施すものも含む）があること、庄内式に後続する布留式土器と認定できるものが見当たらないこと、また在地の土器がその形態をまだ保持していることなどから、庄内式併行期すなわち防長10式の範疇におさまるであろう[7]が、小範囲の調査で、器種構成や器形全体を検討しうるだけの資料のない現段階では、時期を限定することは控えたい。

今回出土の山陰系土器は、58年度調査で小学校から出土したものとは焼成・色調にかなりの違いがあり、形態的にもやや差があるが、やはり庄内式併行期の所産としておきたい。また従来、山口県内での山陰系土器出土の中心は、やはり「山陰」の長門部にあるとされていたが、近年、佐波川・椹野川流域での発見例が増え、この流域独自の直接流入経路が考えられるに至った。[8] この考えを補強する出土例が、今回またひとつ増えたことになる。

周防部は、外来の勢力を遠ざけて在地の弥生時代の特色を遅くまで固守した地域であるが、周防の端部、いわば辺境の地では、在地の特色を残しながらも周防中心部よりかなり早く他地域の土器を受け入れたことを裏付ける結果となった。[9]

第7・9・10層では縄文土器を検出した。周辺では、亀山をはさんで北東方向約500mにある現県立図書館の地に、縄文時代晩期の土器を多量に出土した後河原（松柄）遺跡があるが、[10] これに次いで2遺跡目という希少な例で、周辺への拡がりの確認が待たれる。

(2) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

グラウンド東側の第７・８トレンチで、比較的安定した地山とみられるシルト層を確認した。しかし、東の亀山が元来もっと裾野をのばしていたものと考えられ、第４トレンチの所見からみても、おそらくこの層の上面は削平され、往時の状況をとどめてはいまい。

また北側は、附属小学校からなだらかに下る地形で、鴻峰山から南へのびる丘陵の縁辺部か、またはそれにはさまれる谷であったと考えていたが、第６トレンチでは、薄い置土の下に厚い礫層が堆積して湧水し、谷または河川状の遺構の存在を感じさせた。第１トレンチの土層の落ち込みがはたして河川であり、これと関係するものかどうかが注目される。

附属山口中学校敷地内での遺物出土・遺物包含層の堆積は、ほぼ西半部の白石小学校寄りに限られている。部分的な小規模トレンチの調査では、地下の状況の全容をつかむことが難しいのはいうまでもないが、今回調査の各トレンチ間では土層の堆積状況があまりにも違い、各遺物包含層の拡がりが全く捉えられなかった。例えば、第５－３トレンチ間、第５－４トレンチ間はそれぞれ約30ｍ、第５－２トレンチ間はわずか18ｍの距離しかないが、層位・遺物包含層の土質・含まれる遺物の時期などが、全く違う様相を呈している。この原因や、各包含層の拡がりを把握することは、今後の大きな課題といえる。

また、第５トレンチ第４～６層は、小学校部分の遺物包含層と土質が酷似することから、当初一連のものかと考えていた。しかし小学校の遺物包含層では、布留式末期の遺物を主としており、庄内式におさまるこの中学校部分とは時間的に大きな差を認めたため（前節参照)、中学校部分でも、今後調査を進めてゆく上で、布留式の確認とともに、遺物包含層が、実は分層できるのではないかとの視点が必要となってきた。弥生時代中期土器の混在については、亀山西麓に所在する亀山遺跡が該期の遺跡であり、[11]今後注意が必要となるかもしれない。

２枚の縄文土器包含層は砂層であり、礫層にはさまっている状態であった。湧水もあり、あまり安定した出土状況とはいえない。先述の後河原遺跡の包含層も、一ノ坂川が、山口盆地最大といわれる規模の扇状地を形成する過程での二次堆積層とされる。しかしこの中学校部分は、亀山の陰に隠れ一ノ坂川の堆積作用を受けにくい地理的条件にあるため、周辺の今後の調査で遺構などが検出される可能性を、十分に考慮するべきであろう。

以上のことから、配管が予定される路線について、特に注意が必要と思われる白石小学校に面する地域を事前調査とし、他の地域は工事施工時に立会調査を行なうことが妥当と考える。ただ、今回の試掘調査では土層の平面的な拡がりを捉えるに至らなかったため、

立会調査とした部分に何らかの埋蔵文化財が存在する可能性はある。　　（杉　原）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口中学校球技コート整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

2）山口市教育委員会『大内氏館跡Ⅶ－大内氏遺跡調査概報Ⅷ・概要－』（山口市埋蔵文化財調査報告第23集、1987年）。

3）大内氏館跡のほかには、山口市仁保の瑠璃光寺跡遺跡で中世墓の副葬品として出土した例があるとされる(a)。この遺跡は、報告書発刊に先だって概要が報告され、仁保氏の墓地であるとの考えが提示されている(b)。仁保（平子）氏は鎌倉時代初めに仁保荘の地頭として派遣され、在地の守護大内氏とは当初敵対関係にあったが、南北朝の争乱のころから大内氏につき、室町時代になると次第に重く任用されたという(c)。大内氏がB式土師器をしていたとされる館の後半期と思われる時期には大内氏の重臣として活躍していたことが窺え、個人墓の供献土器として使用を許されたとしても不思議はあるまい。

a　柴崎文男「昭和61年度調査」（『大内氏館跡Ⅶ－大内氏遺跡調査概報Ⅷ・概要－』（山口市埋蔵文化財調査報告第23集、山口市教育委員会、1987年）

b　小田村宏「瑠璃光寺跡遺跡の発掘調査」（『仁保の郷土史』、仁保の郷土史刊行会、1987年）

c　田中倫子「中世」（『仁保の郷土史』、仁保の郷土史刊行会、1987年）

4）山陰系土器の編年は、壺・甕の複合口縁部の基本的な分類序列においてはほぼ固まっている。口縁の立ち上がり外面に櫛描き凹線文がなく、口縁端部が尖り気味であるというこの甕の特徴のみを取り上げれば、久しく鍵尾Ⅱ式とされていたものに相当しよう(a)。しかし、他の器種や他地域との併行関係に目を向けたとき、その捉え方は未だ定まっていない。ここでは一応、庄内式古段階に併行する型式とする花谷氏に従っておく(b)。

a　前島己基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器－土器型式にみるその編年的位置について－」（『考古学雑誌』第62巻第3号、1976年）

b　花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究－島根県内の資料を中心にして－」（『島根考古学会誌』第4集、1987年）

5）a　山本一朗「防長の弥生式土器」（『山口県の弥生式土器－集成と編年－』、周陽考古学研究所報2、1979年）。

b　山本一朗「防長の土師器」（『山口県の土師器・須恵器－集成と編年－』、周陽考古学研究所報3、1981年）。

氏は、文献aで設定した防長10式末に対する考えを、文献bで修正し、山口盆地にある湯田楠木町遺跡出土の土器群を防長10式の最終末に置いて庄内式併行期とした。なお湯田楠木町遺跡は附属中学校の南西約1.5kmにある。

6）前掲注3）a文献に同じ。

7）附属山口中学校の南西約3kmの地点にある下東遺跡KD－4出土の資料が庄内式新段階に併行し、この時期には周防系の複合口縁壺は消滅しているとする考えがある。これに従えば、下東遺跡の山陰系土器が、今回出土のものより若干降る形態と思われることもあわせ、今回調査の土器群が庄内式新段階を遡る可能性も考えられよう。吉田寛「庄内式併行期前後の西部瀬戸内(Ⅰ)－吹越A式に関するノート－」（『Relics』創刊号、山口大学考古学研究室、1985年）。

8）前掲注5）b文献では、周防と長門との緩衝地帯であるため独自性に乏しかった佐波川・椹野川の流域に、防長10式期になって突然、佐波型の複合口縁壺と有翼支脚という強い地域性が現れ、続いて畿内との共通性の高い土器を多く出土する遺跡が集中するという事実は、初期の畿内系古墳の出現のしかたに通じており、在地の大勢力を避け、独自の文化をもたない地域からまず組み込んでいくという視点によるものだと見解を提示している。

9）防長10式期前後の佐波川・椹野川流域が、周防と長門との単なる緩衝地帯でなく、すでにある程度の独自性をもった一地域であったということの傍証となる考えである(a)。なおこの論考で、山口県出土の山陰系土器が集成されているが、その後新たに報告されたものとして、山口市仁保の丸山遺跡の表採資料を追加しておく(b)。

a　高下洋一「山口県出土のいわゆる山陰系土器について」（『Relics』第3号、山口大学考古学研究室、1986年）

b　小田村宏「先史・原史」（『仁保の郷土史』、仁保の郷土史刊行会、1987年）

10）浜田清吉『山口市後河原の遺物発見地』（山口大学教育学部、1953年）。

11）小野忠熙「本州の西端地方における古代の墨・壕遺跡」（『古代学』第5巻第2号、古代学協会、1956年）。

第３章　吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査

１　調査の経過

昭和61年７月15日、施設部より国際交流会館等６件の新営工事が、追加事業計画として埋蔵文化財資料館運営委員会に諮られた。昭和61年度の事業計画は、年度当初すでに同委員会で了承されていることから、工事計画の追加は資料館の事業の途中変更を余儀なくし、その年間事業量を大幅に圧迫するものであった。したがって、同委員会は協議の結果、調査日数および資料館の事業計画、関連部局の意向を勘案して、緊急度の高い工事計画について発掘調査を実施することとした。前章で述べた山口附属学校の試掘調査もこうした経緯のもとで実施されたものである。

同年11月にいたり、国際交流会館新営計画の具体化をうけた事務局よりの調査依頼に基づき、同委員会は協議の結果、資料館業務との調和をとりつつ発掘調査を実施することとした。工事は吉田キャンパスの南端中央部、現人文学部校舎南側の独身宿舎とハンドボールコートにはさまれた地域約680㎡が予定される。

当該地域は、東に隣接する女子寮（椹野寮）および附属農場飼料園のある台地にくらべて階段状に約５ｍ低くなっていること、また、昭和53年度に実施した人文学部校舎新営に伴う発掘調査で顕著な遺構・遺物が認められなかったことなどから、当該地域周辺は大学統合移転時の造成等により学内の他の地域以上に削平を受けていることが予想された。したがって、まず新営予定地内の埋蔵文化財の有無を把握するためにトレンチによる試掘調査を実施し、遺構・遺物包含層が確認された場合には、調査結果をふまえ再度運営委員会においてその取り扱いについて協議することとした。

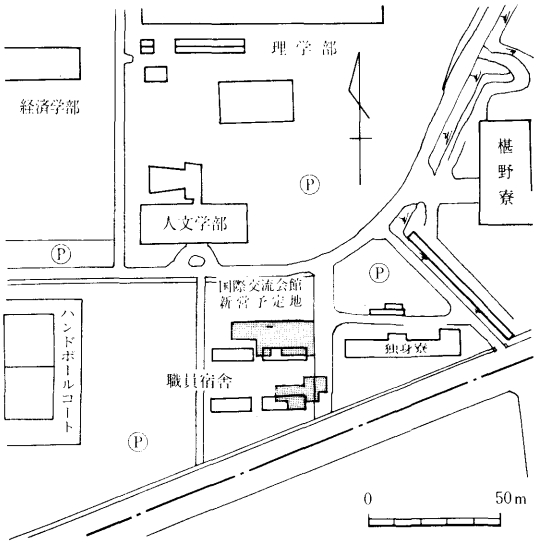


Fig. 22　調査区位置図

新営建物は２棟で、既設の職員宿舎４棟を解体、撤去後の跡地に建設が計画さ

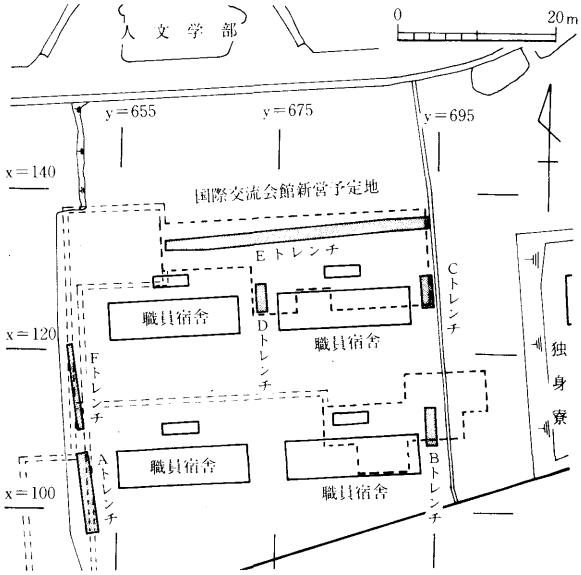


Fig. 23 トレンチ設定図

れたが、試掘調査の時点ではまだこの職員宿舎およびそれに伴う電気・水道等の地下埋設物、庭園等が機能していることから、できるだけこれらに影響しない地域に5本のトレンチを設定して試掘調査を開始した。なお、付随工事として配管の埋設が予定された地域に設定したトレンチで河川跡が検出されたため、規模確認のためさらに1本のトレンチを追加した。

調査は昭和61年12月4日から25日にかけて行なった。試掘調査面積は約70㎡で、工事総面積の約10.3%にあたる。

2 層位・遺構

Aトレンチ

新営予定地の南西端に南北方向に設定した幅1.5m×長さ10mのトレンチである。国際交流会館新営に伴う付随工事として、将来的に排水管の埋設が予定されている地域にあたるため、あらかじめ調査を行なうこととなった。

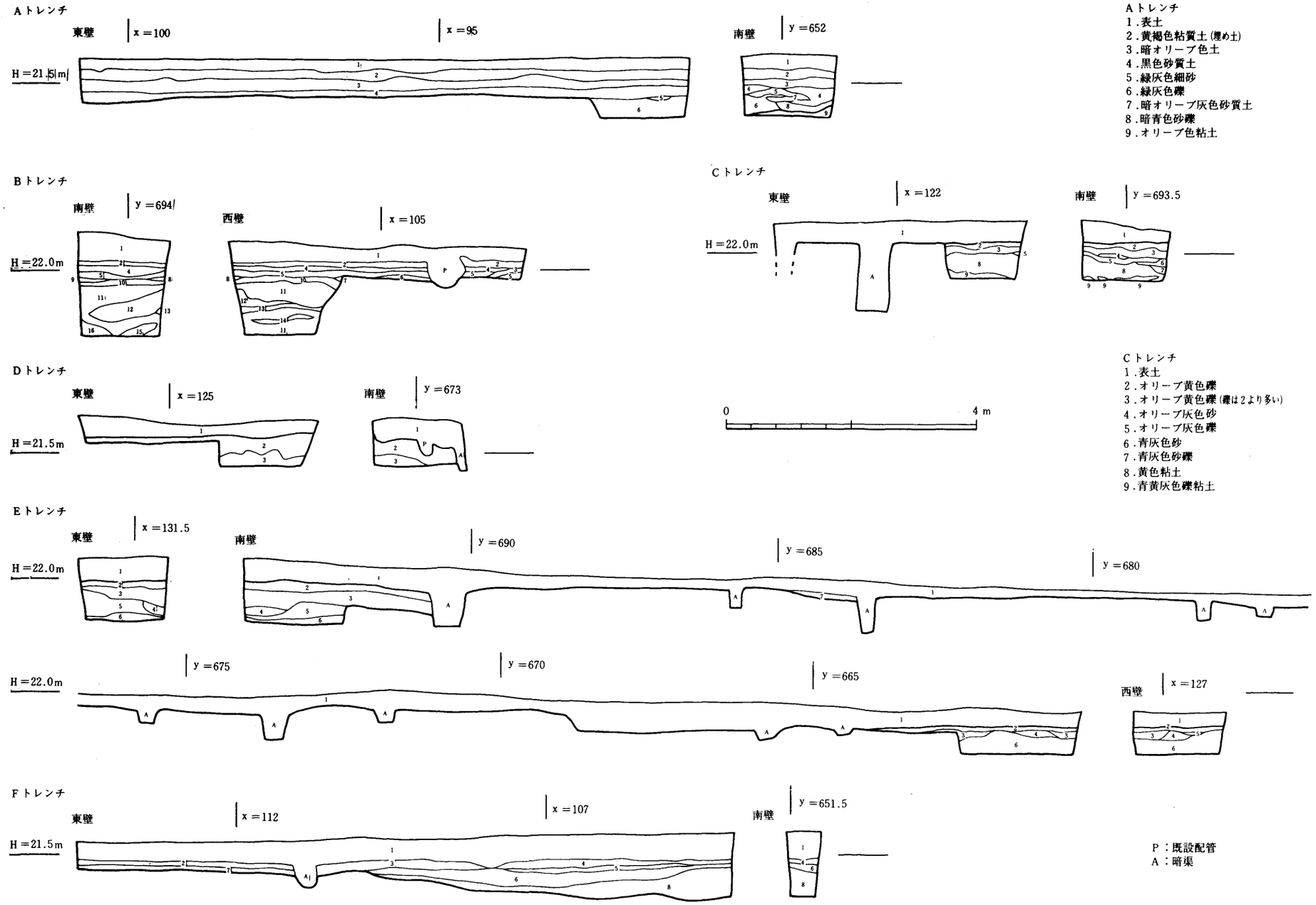
現地表面の標高は21.90m前後で、約20cmの層厚をもつ表土の下位に統合移転時の造成に伴う削平によって客土された黄褐色粘質土の地山の堆積が厚さ10～15cmにわたってみられる。後世の客土はこの1・2層までで、10～20cmの層厚をもつ第3層：暗オリーブ色土以下が非人為的な堆積層である。第3層の上面標高は約21.60mである。

第4層、オリーブ黒色土以下が河川の埋積土と考えられ、下位には砂層および礫層が厚さ40～50cmにわたって互層となって堆積している。湧水が激しく、地山はトレンチ南端部でのみ確認したにとどまった。地山上面の標高は約21.10mである。

出土遺物には第3層から歴史時代土師器皿、第4層から弥生土器壺、瓦質土器鍋などがある。

Bトレンチ

新営予定地の南東端に南北方向に設定した幅1.5m×長さ5mのトレンチである。現地表面の標高は約22.40～50m。表土の層厚は約20～40cmで、南に向かうにつれて厚くなる。



Aトレンチ
1.表土
2.黄褐色粘質土(埋め土)
3.暗オリーブ色土
4.黒色砂質土
5.緑灰色細砂
6.緑灰色礫
7.暗オリーブ灰色砂質土
8.暗青色砂礫
9.オリーブ色粘土

Bトレンチ
1.表土
2.オリーブ色土
3.灰オリーブ砂質土
4.灰オリーブ色土
5.灰色土
6.灰オリーブ色土(小粒の砂と小石を含む)
7.灰オリーブ色土
8.暗オリーブ灰色土
(9層と類似)
9.暗オリーブ灰色土
10.緑灰色砂質土
11.オリーブ灰色土
12.灰色粘土
13.オリーブ灰色粘土
14.灰色粘土
15.灰色粘質土
16.灰色礫

Cトレンチ
1.表土
2.オリーブ黄色礫
3.オリーブ黄色礫(礫は2より多い)
4.オリーブ灰色砂
5.オリーブ灰色礫
6.青灰色砂
7.青灰色砂礫
8.黄色粘土
9.青黄灰色礫粘土

Dトレンチ
1.表土
2.黄色粘土
3.灰色土(礫を含む)

Eトレンチ
1.表土
2.黄褐色砂質粘土
3.暗黄褐色砂礫
4.褐灰色粘土
5.黄橙色砂質粘土
6.オリーブ色粘土
7.オリーブ褐色土

Fトレンチ
1.表土
2.黄褐色土
3.灰オリーブ砂質土
4.オリーブ粘質土
5.灰色砂質土
6.黒色砂質土
7.灰オリーブ砂質土
8.灰色砂礫
(大粒の石英多量に含む)

Fig. 24 土層断面図

表土下位には各々約10cmの層厚をもつ第2層：オリーブ色土、第3層：灰オリーブ色土、第4層：灰色土の堆積がみられ、若干の弥生土器を包含する。

第5層：暗オリーブ灰色土以下が河川の埋積土で、灰色もしくはオリーブ色の粘土層、砂礫層がブロック状に堆積しており、現地表面から約1.6m掘り下げた段階でも地山は検出されなかった。

Cトレンチ

Bトレンチの北約12mに南北方向に設定した幅1.5m×長さ4mのトレンチである。現地表面の標高は22.50m。トレンチ内では後世の削平が著しく、厚さ約30cmの表土の直下がオリーブ黄色礫混じり粘土の地山で、旧耕作土、床土および遺物包含層は認められない。また、顕著な遺構・遺物も認められず、わずかに幅約50cm、検出面からの深さ約1.1mの現代の暗渠1条を検出したにすぎない。地山の検出面の標高は約22.20m。

Dトレンチ

Cトレンチの西方約20mに位置する既設の宿舎間に設定した幅1.5m×長さ4mのトレンチである。現地表面の標高は約22.10m。Cトレンチ同様厚さ約20～40cmの表土直下が黄色粘土の地山であるが、埋設物等の掘削による後世の削平が著しい。地山の検出面の標高は約21.60～80m。トレンチ内での顕著な遺構・出土遺物は皆無であった。

Eトレンチ

新営予定地の最も北側に東西方向に設定した幅1.5m×長さ34mのトレンチである。現地表面の標高は東端部で約22.50m、西端部で約21.70mで、東から西へ緩やかに下降している。表土は、薄いところで約10cm、厚いところで約45cmの層厚をもち、表土直下が黄褐色砂質粘土の地山である。地山は東から西へわずかに下降しており、地山面の標高は約21.70～22.00mである。

この地山を掘り込んで、幅約20～40cmの現代の暗渠が8条にもおよび検出されたほか、y＝745.5付近以西の地山がさらに階段状に約35cm低くなっていることから、大学移転前の近年の水田耕作や移転に伴う造成工事等により大規模な削平が行なわれたものと考えられる。

y＝759付近で、幅約1m以上のオリーブ褐色土の充填した溝状遺構が検出されたが、残存状態は悪く、深さは検出面から約10cmを残すにすぎない。

溝状遺構からの出土遺物には、須恵器坏身、瓦質土器、歴史時代土師器若干のほか、鉄砲玉1個がある。また、表土および攪乱壙からは須恵器甕、歴史時代土師器、瓦質土器、

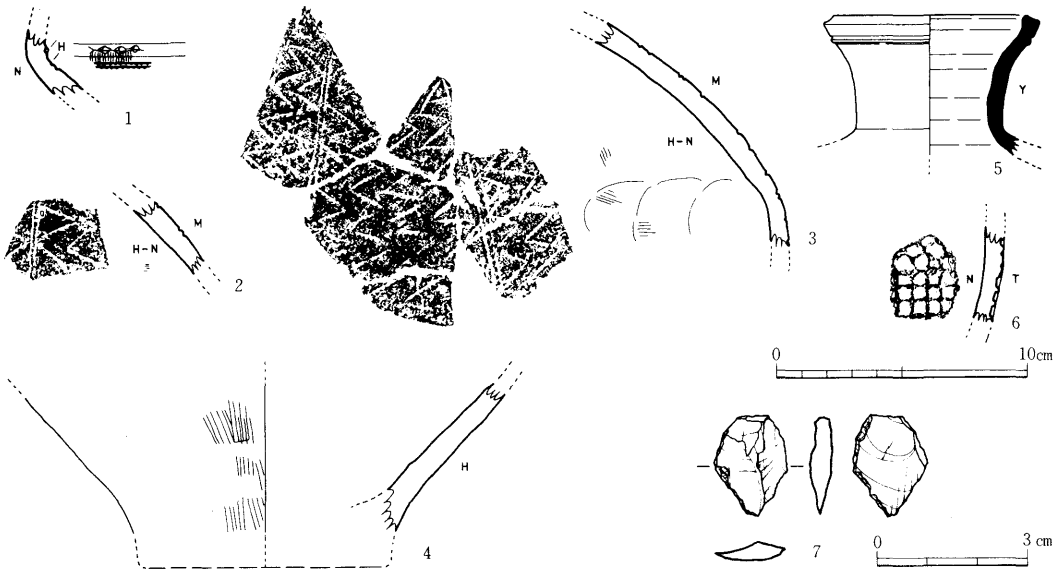


Fig. 25　河川跡出土遺物実測図

須恵質土器、および陶器甕が出土している。

Fトレンチ

Aトレンチで検出した河川跡の規模を把握するためにAトレンチの北方約3mに南北方向に設定した、幅0.6m×長さ11mのトレンチである。

掘削の結果、トレンチのほぼ中央、x＝110付近で、地山が南へ下降しており、この落ち込みに、灰色砂質土およびAトレンチで認められた河川の埋積土である黒色砂質土、そしてその下位に礫層が堆積していることが確認された。河川の検出面の標高は約21.30mで、トレンチ南端部付近で検出面から最深63cmの深さをもつ。また、Aトレンチでの調査所見を合わせ考えた結果、この河川は幅19m以上におよぶ大規模なものであることが明らかとなった。

この河川の流れていた時期は、河川からの出土遺物が少ないため決め手を欠くが、Aトレンチでの出土遺物も合わせ、弥生土器、須恵器が比較的多いこと、また河川より上層からの出土遺物も同様のものが多いため、現段階では弥生時代前期～古墳時代後期の年代を与えておきたい。

0　1cm

Fig. 26
溝状遺構出土遺物実測図

Fトレンチでの出土遺物には、河川跡から須恵器壺、加工痕ある剝片がある。また、表土中からは須恵器、歴史時代土師器、瓦質土器、国産陶磁器がある。

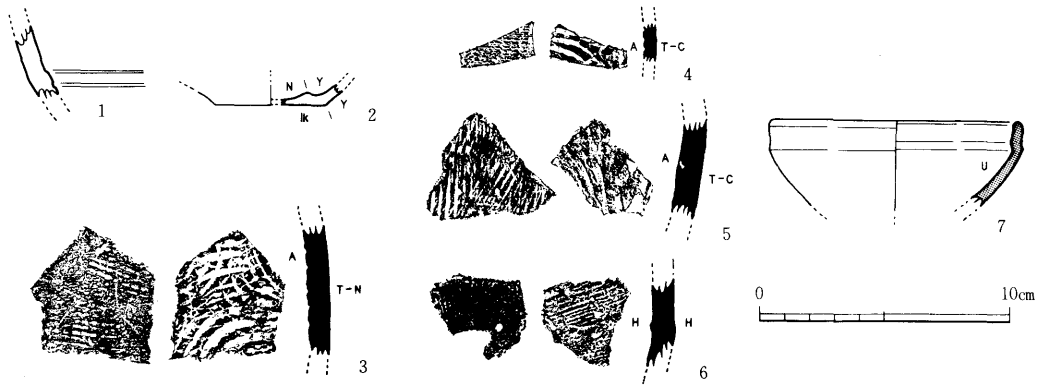


Fig. 27　包含層その他の出土遺物実測図

3　遺　物

河川跡出土の遺物（Fig. 25, PL. 15(3)）

1～4は弥生土器で、同一個体の可能性がある。1は頸部で、肩平な低い突帯を貼付し、刷毛原体小口によると思われる刻み目を施す。また、突帯の下位にはタマキ貝による2条の沈線が巡る。外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。2・3は肩部で、横1本、縦2本の沈線によって分割された区画内にやや乱雑な無軸羽状文を施文する。工具はいずれもタマキ貝を用いている。外面ヘラミガキ、内面刷毛目のち丁寧なナデ仕上げを行なうが、下半部は整形時の指圧痕が明瞭に残る。4は底部付近で、外面縦刷毛目、内面風化のため不明。

5は須恵器壺。緩やかに外反する口縁部をもち、口縁端部は内側へツマミ出されたように内彎気味に肥厚する。外面には口縁端部よりわずかに下位に1条の沈線が巡る。口縁端部外面を除いて内外ほぼ全面に自然釉が付着する。内外面とも横ナデ仕上げ。6は外面に格子目タタキを施す瓦質土器の鍋と思われるもので、内面はナデ仕上げ。

7は左右両側縁に丁寧な二次加工を有する剝片で、小振りの縦長剝片を素材とする。正面上部左半の剝落のため、打点の除去作業が行なわれたかどうかは不明。姫島産黒曜石製。

1～4・6はAトレンチ第4層、5はFトレンチ第7層、7はFトレンチ第6層出土。

溝状遺構出土の遺物（Fig. 26, PL. 15(3)）

径1.0cmのほぼ球形に近い鉛製の鉄砲玉。整形時に転がしたと思われる、帯状の平坦面をもつ。Eトレンチ出土。

包含層その他の出土遺物（Fig. 27, PL. 15(3)）

1は弥生土器壺の肩部。外面には削り出しによる段をもち、その下位にヘラによる1条

の沈線が巡る。内外面とも風化著しく、調整は不明。Bトレンチ第3層出土。2は糸切り底の土師器小皿で内外面とも横ナデ仕上げ。Aトレンチ第3層出土。

3～5は須恵器の壺ないしは甕の胴部で、外面平行タタキを施すが、3はナデ消している。6は須恵質土器の甕ないし壺で、内外面とも刷毛目仕上げ。7は天目の埦で、口縁部は体部から屈曲して垂直に近く立ち上げる。口縁端部は丸く終わる。

3・6はEトレンチ表土、4・5はEトレンチ攪乱壙、7はFトレンチ表土中よりの出土。

Tab. 4 出土遺物観察表

法量（ ）は現存値

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
河川跡(Fig.25)							
1	弥生土器 壺	—	(2.6)	器表－浅黄色(2.5Y7/3) 器肉－黒色	良好 3㎜以下の石英・長石を含む	良好	Aトレンチ第4層出土
2	弥生土器 壺	—	(2.8)	器表－浅黄色(2.5Y7/3) 器肉－黒色	良好 3㎜以下の石英・長石を含む	良好	Aトレンチ第4層出土
3	弥生土器 壺	—	(8.8)	器表－浅黄色(2.5Y7/3) 器肉－黒色	良好 3㎜以下の石英・長石等含む。金雲母含む	良好	Aトレンチ第4層出土
4	弥生土器 壺	—	(5.8)	器表－浅黄色(2.5Y7/3) 器肉－黒色	良好 3㎜以下の石英・長石等かなり含む	良好	Aトレンチ第4層出土
5	須恵器 壺	7.8	(5.6)	器表－灰白色(N 7/0) 自然釉－灰オリーブ色(7.5Y4/2)	普通 1㎜以下の長石等含む	良好	Fトレンチ第7層出土
6	瓦質土器 鍋	—	(3.7)	器表－にぶい黄橙色(10Y7/4) 器肉－暗灰色(N 3/0)	良好 1㎜以下の砂粒若干含む	良好	Aトレンチ第4層出土
包含層その他(Fig.27)							
1	弥生土器 壺	—	(2.9)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良 3㎜以下の石英・長石かなり、他金雲母含む	不良	Bトレンチ第3層出土
2	土師器 皿	*4.2	(0.8)	淡黄色(2.5Y8/3)	良好 1㎜以下の砂粒少量含む	普通	Aトレンチ第3層出土
3	須恵器 甕か壺	—	(5.2)	器表－青灰色(5B6/1) 器肉－暗赤褐色(10R3/2)	良好 2㎜以下の長石等若干含む	良好	Eトレンチ表土中
4	須恵器 甕か壺	—	(1.5)	明青灰色(5B7/1)	良好 2㎜以下の長石含む	良好	Eトレンチ攪乱壙埋土中
5	須恵器 甕か壺	—	(4.0)	緑灰色(10GY6/1)	やや粗 1㎜以下の砂粒若干含む	良好	Eトレンチ攪乱壙埋土中
6	須恵質土器 甕か壺	—	(3.2)	灰白色(N 7/0)	やや粗 3㎜以下の石英・長石等若干含む	良好	Eトレンチ表土中
7	陶器 埦	9.8	(3.4)	素地－淡黄色(5Y8/3) 釉－極暗赤褐色(2.5YR2/2)	良好	良好	Fトレンチ表土中

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
河川跡(Fig.25)							
7	加工痕のある石器剥片	2.0	1.4	0.4	0.9	黒曜石(姫島産)	Fトレンチ第6層出土
溝状遺構(Fig.26)							
—	鉄砲玉	1.0	1.0	1.0	6.5	鉛	Eトレンチ

4　小　結

(1)　検出遺構と出土遺物について

A・B・F各トレンチで、弥生時代前期～古墳時代後期を主体とする遺物が出土した幅19m以上の河川跡を検出した。この河川は、Fトレンチ中央部でその川岸の落ち込みが確認されたこと、そしてBトレンチの北約12mに設定したCトレンチでは河川跡が検出されないことなどから、既設の支障埋設物等によって調査ができなかったB～Cトレンチ間に川岸の落ち込みのあることが予想され、他のトレンチで検出した溝底の高低差および周辺の地形から推して、ほぼ東から西に流れていたものと考えられる。

また周辺では、今回の調査地の北西約100mのところで昭和55年度に実施した経済学部大講義棟新営に伴う試掘調査の際にも、遺物はほとんど出土しなかったが、幅22m以上の河川跡が検出されており、同一河川の可能性がある。

その他の遺構には、Eトレンチで検出した中世～近世の溝状遺構1条があるが、残存状態は極めて悪い。これは、独身寮の東に位置する附属農場飼料園から西に伸びる丘陵が、C～Eトレンチ付近で統合移転時の造成等により大規模に削平されているためで、C～Eトレンチ付近に遺構や遺物包含層が存在していたとしても、すでに消失しているものと考えられる。表土および攪乱壙から出土した各時期の遺物も、こうした後世の削平によって、遺構・遺物包含層から遊離した可能性が高い。

出土遺物には、弥生時代から江戸時代にかけてのものがある。量的には多くはないが、なかでも河川跡から出土した弥生土器壺は、いずれも同一個体と考えられるもので、特徴的な文様構成をもっている。すなわち、肩平な低い貼付突帯の下位を、縦2本および少なくとも横1本のタマキ貝による沈線で分割した区画内に、羽状文を施文するもので、下東遺跡YP－28、西遺跡13号土壙に良好な一括資料がみられ、前期末の綾羅木Ⅲ式併行期[1]と考えられる。学内ではこの期の遺構が少なく、昭和60年度に行なった大学会館前庭部の環境整備に伴う試掘調査で、袋状竪穴が検出されているにすぎない[2]。

なお、キャンパスの南端部を巡る排水溝掘削時に、今回の調査地の南西約110mの地点で、弥生時代前期の竪穴住居跡が検出されたとされている[3]こと、第四章で述べる大学敷地の南縁部を弧状に巡る送水管の埋設工事に伴う立会調査で、野球場南東端部から南門にかけての地域に前期末から中期初頭の遺物包含層が検出され、その北側では遺構と思われる落ち込みが確認されていることなどから、当該地域周辺にこの時期の遺構が埋存している可能性が高く、今後の調査が待たれる。

(2) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

資料館は、調査終了後、上述した国際交流会館新営予定地内での試掘調査結果を同運営委員会に報告事項として諮り、埋蔵文化財に関するその後の取扱について協議を行なった。

同委員会は、新営予定地の北半部に設定したC～Eトレンチでは、わずかにEトレンチで中～近世の溝状遺構一条が検出されたにすぎず、残存状態も極めて悪いこと、また、附属農場飼料園から西へ延びる丘陵が、C～Eトレンチ付近で大規模に削平されていることから、新営予定地北半部では過去に遺構、遺物包含層が存在していたとしてもすでに消失している可能性が高いものと判断した。

しかし、新営予定地南半部のA・B・F各トレンチで、弥生時代前期～古墳時代後期を主体とする遺物が出土した幅19m以上の河川跡が検出されたことから、埋蔵文化財に関する適切な善後策を講ずる必要性があると指摘し、試掘調査によって十分把握されていない河川跡の規模、機能していた時期、流路などを明確にするための調査方法を検討した。

その結果、トレンチの規模と比較して河川跡からの遺物の出土量が少なく、新営予定地内を走行する河川跡から多くの遺物が出土する期待があまりもてないことから、河川跡の埋存が予想される地域について工事施工事に立会調査を実施することとし、埋蔵文化財に関する資料の蓄積を図ることが至当であると結論づけた。　　(河　村)

〔注〕

1) a　建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」(『国道9号・山口バイパス　下東遺跡・荻峠遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第30集、1975年)。

b　山口市教育委員会『西遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。

2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)。

3) a　山口大学吉田遺跡調査団『山口大学吉田遺跡発掘調査概報』(1976年)。

b　小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡の性格」(『学園だより』、山口大学、1970年)。

第４章　昭和61年度山口大学構内の立会調査

第１節　吉田構内の立会調査

１　山口銀行現金自動支払機設営に伴う立会調査

調査地区　　本部構内　Ｉ・Ｊ－19・20区

調査期間　　昭和61年４月17日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約11㎡

調査結果　　工事は第一学生食堂南入り口付近への現金自動支払機設置に伴い、教育学部研究実験棟と食堂との間を幅50㎝、長さ約23ｍにわたって掘判し、電線路を敷設するものである。この周辺は、学内でも特に遺構の分布密度が高く、縄文時代晩期から奈良時代にかけての各時期の遺構が検出されている地域である。

今回の調査地区の南西には弥生時代中期後半から古墳時代前期の竪穴住居跡21棟が現地保存されている「遺跡保存地区」が所在し、[1]住居の型式・構造さらには集落の形態・範囲の変遷を知るうえで学術・研究上良好な遺構分布地域として把握されている。

また、昭和56年度には、教育学部研究実験棟西端の増築、および食堂の北東における同美術科・技術科実験実習棟新営に伴って、事前調査を実施している。[2]前者では調査区北半部は後世の削平により遺構が稀薄であったが、南半部において弥生時代中期後半から後期にかけての竪穴住居跡４棟が検出され、「遺跡保存地区」の住居群が北へ拡がっていることが確認された。また後者では南北方向に流れる弥生時代後期から古墳時代の河川跡が検出されたが、住居跡は認められなかった。昭和42年の学生食堂南半部の調査でも、同様に住居跡は見つからなかったとされており、「遺跡保存地区」を中心とする住居群の分布の東限は、食堂南半部および美術科・技術科実験実習棟付近にあたるものと考えられる。

今回の調査地域は上述した各調査地にはさまれた部分にあたり、昭和60年度の立会調査でも遺構の埋存が予想されていた。[3]

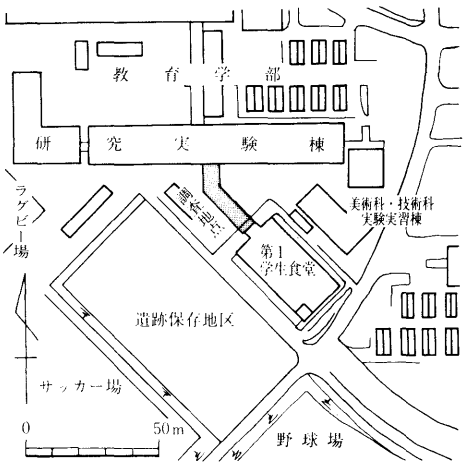


Fig. 28　調査区位置図

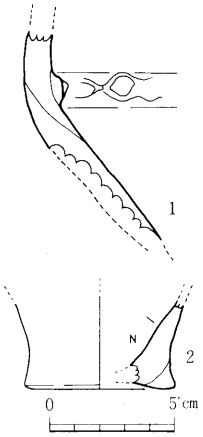


Fig. 29 出土遺物実測図

調査の結果、電線敷設路線内の南北両端部付近は既設の建物新営の際の工事や配管等で攪乱されていたが、中央部付近では削平が少なく、構内造成時の埋め土の下位には旧耕作土・床土が認められた。その直下、現地表から75cm下位に、弥生時代中期の土器を包含する黒褐色粘質土の堆積が認められる。この黒褐色粘質土は、攪乱によって部分的にのみ堆積が観察されたもので、工事路線内では少なくとも幅5m以上の分布範囲をもつ。

工事による掘削は現地表下80cmまでであったが、工事に支障のない深さまでこの層を掘り下げた結果、少なくとも35cmの層厚をもっており、その下位には砂礫の堆積が見られた。また、この深さでも地山が検出できないこと、出土遺物の磨滅が著しいことなどから、この黒褐色粘質土は遺構、特に河川跡や溝などの埋土である可能性が高い。そして、同じ時期のものと思われる河川跡ないし溝が、今回の調査地区の東約70mで検出されている。昭和58年度のラグビー場防球ネット設置に伴う調査で確認したもので、[4]集落を区画する溝と考えられ、中期後半～後期初頭の時期を与えている。幅5.5m、深さ1.1mの規模をもち、研究実験棟に沿うように東－西に走行しており、同一のものかもしれない。

出土遺物（Fig. 29, PL. 16）

1は壺で頸部に指頭による刻み目を施した1条の三角突帯が巡る。内外面とも風化により調整不明。2は窪み底の甕の底部。外面は風化のため調整不明、内面ナデ仕上げ。底径6.0cm。1は胎土良好、焼成やや不良、色調浅黄色（Hue 2.5Y 7/4）。2は胎土・焼成良好で、色調にぶい黄橙色（Hue 10YR 7/4）。（河　村）

〔注〕

1）河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年）。

2）a　山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H－19区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

b　山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

3）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

4）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

2　農学部附属農場農道整備に伴う立会調査

調査地区　　農学部構内　S－20区（B地点），U－19区（A地点）

調査期間　　昭和61年4月21日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　A地点約100㎡，B地点約65㎡

調査結果　　工事内容は、果樹園・飼料園への農作業用大型機械の搬入に伴い、崖面を削平してその勾配を緩やかにするものである。またA地点ではそれとともに、農道新設に伴う切り土部分の西側約80㎡の地域に仮設の器材庫の設置も計画された。

両調査地点にはさまれた家畜病院敷地部分では昭和41年度に発掘調査が行なわれており、いつの時期のものかは明らかでないが溝・柱穴が検出され、弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器等が出土したとされる。また、昭和60年度には果樹園の西端部で幅2.4m以上の規模をもつ平安時代から鎌倉時代にかけての河川跡が検出されており[1)]、この付近一帯には、キャンパス内の他の地域に比べて比較的良好な状態で、古代から中世にかけての集落が埋存していることを示している。

A地点での農道新設のための切り土は、南端部で最も深く、現地表から1mを要するものであった。掘削の結果、現耕作土・客土の直下、現地表から20cm掘り下げた段階で、明褐色（Hue 10YR 6/8）粘土の地山が検出された。南東端部から東西8m、南北8.5mの範囲は後世の削平により攪乱されていたが、他の範囲では浅黄色（Hue 2.5Y 7/4）の埋土をもつ柱穴群が確認され、遺構上面から土師器坏、瓦質土器が出土した。土師器は室町時代のもので、今回の調査地域周辺では、過去に室町時代の遺構は検出されていないことから、平安時代から室町時代にかけての長期にわたる集落が埋存している可能性が強い。

なお、柱穴は攪乱部分を除いて散発的にほぼ全面に分布していることから、整

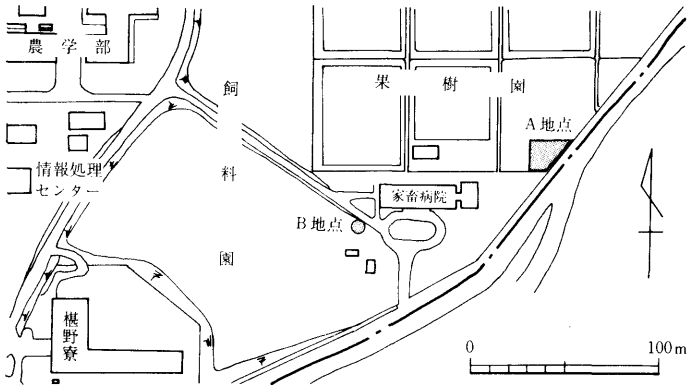


Fig. 30　調査区位置図

Fig. 31 出土遺物実測図

備に伴う切り土は、農道としても機能可能なこの攪乱部分に限定して実施することとなった。

また仮設の器材庫設置地域では、先に農道新設地域で遺構が検出されたことを考慮して、まず、南北に約９ｍの長さを幅約50cmの範囲で掘削して遺構の有無を調査することとした。その結果、設置予定地域の北端中央部で北東－南西に走る幅20cmの溝が検出された。この溝は、埋土が前述した柱穴群と同一色であることから、中世のものと考えられる。

この器材庫の設置は、現地表下約60cmまでの掘削を伴う工事となる予定であったが、遺構が検出されたため、地下の現状を変更しない工法で行なわれることとなった。

一方、Ａ地点の西南西約90ｍに位置するＢ地点では、北端部で現地表から50cm下位で地山が検出されたが、南端部では約１ｍ掘り下げても遺物包含層・地山は検出されなかった。現地表面がほぼ平坦であることから、地山が北から南へ急激に下降しているものと推察される。

出土遺物（Fig. 31, PL. 16）

Ａ地点で出土した土師器坏は、体部が直線的に立ち上がるもので、復原器高1.8cm。胎土・焼成良好で、色調灰白色（Hue 10YR 8/2）。（河　村）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

3　農学部附属農場農道交通規制に伴う立会調査

調査地区　　農学部構内　L－10区，Q－15・16区

調査期間　　昭和61年5月12日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　計約12m²

調査結果　　工事は、農繁期における農作業用車両の搬入に伴い、農道の通行を規制するため農道入口に施錠用ポールを設置するもので、現地表から40cm掘削して計9本を埋設した。各地点とも掘削深度内は構内造成時の埋め土で、遺構・遺物は認められなかった。

しかし、農業観測実験施設と第2学生食堂間の畑地で須恵器・土師器が採集されており（本節第12項参照）、この畑地に遺構あるいは遺物包含層が埋存している可能性が高い。また、食堂のすぐ東側では現地表下わずか15cmで黄橙色粘土の地山が検出されていることから、遺物包含層や遺構面は現地表からきわめて浅いところにあるものと思われ、採集遺物は耕作によって原位置から遊離したものと考えられる。

なお調査期間中、農業観測実験施設の東側の農道で須恵器坏蓋・甕、土師器を採集した。実験水田側溝を再掘削した際の土を、盛り土として農道へ散布した中に含まれていた。

採集遺物（Fig. 33, PL. 16）

短いかえりをもつ小型の須恵器蓋坏の坏蓋で、胎土・焼成良好、色調は暗青灰色（Hue 5 P B 4/1）。復原口径10.8cm。7世紀後半。　　（河　村）

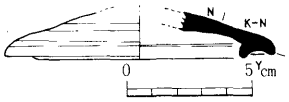


Fig. 33　採集遺物実測図

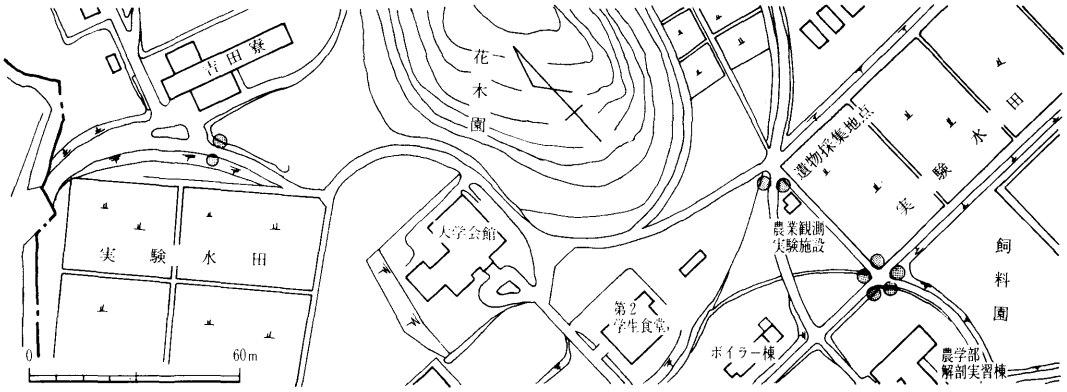


Fig. 32　調査区位置図

4　正門横（水田内）境界杭設置に伴う立会調査

調査地区　　農学部構内　Ⅰ－10区

調査期間　　昭和61年５月16日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約0.25㎡

調査結果　　工事は、キャンパス北縁を東から西へ流れる九田川の改修に伴い、本学の管理地域および改修工事の範囲を明示するためにコンクリート製の境界杭を設置するもので、調査地点は実験水田の北端中央部付近にあたる。工事自体は50㎝四方の狭い範囲にすぎないが、実験水田内の地下の状況が全く不明であるため、立会調査を実施することとした。

工事による掘削は、現在の水田面から約80㎝までであった。現在の耕作土・床土は計約20㎝の層厚をもち、その下位には第３層：灰茶褐色粘質土、第４層：礫を含む暗灰茶褐色粘質土、第５層：黒茶褐色粘質土の堆積がみられた。第３・４層とも層厚約30㎝で、第５層はその上面の確認のみにとどめたが、各層とも遺物は包含していなかった。

なお昭和58年度に、今回調査地点の南東約100ｍの大学会館敷地部分で調査を行なっており、敷地のほぼ中央を南から北ないしは北西に、周囲の丘陵縁辺部を侵食しながら開析する谷が検出されている。[1] この谷は最深部で検出面から約1.5ｍの深さをもつもので、実験水田方向への拡がりが予想されていた。

今回調査の各堆積層は、この谷の埋積土に類似するが、大学会館部分とは距離的な隔たりが大きすぎること、また吉田寮付近から延びる丘陵を侵食する別個の谷の存在も考えられることなどから、現段階で同一の谷の埋積土として理解するのは早計で、当地域での今後の調査が待たれる。　　（河　村）

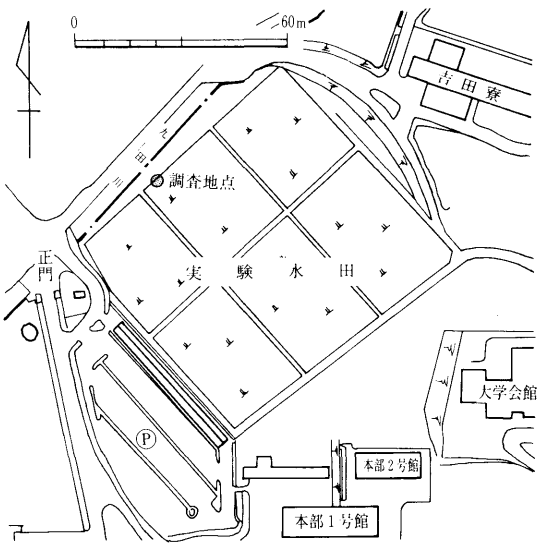


Fig. 34　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

5　経済学部環境整備に伴う立会調査

調査地区　　経済学部構内　M－20区

調査期間　　昭和61年6月19日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約3㎡

調査結果　　工事は植樹および記念碑の建立で、経済学部構内の東端中央部に計画された。

同学部構内の南半部は、近年の立会調査により断片的にではあるが比較的地下の状況を知ることができる資料を得ている。すなわち、大講義棟（E棟）の以北では現地表下約80㎝で黒褐色粘質土の堆積が確認され、遺構ないしは遺物包含層の存在が予想されている。また、D棟のすぐ東側では現地表下約70㎝で黄褐色粘質土の地山が検出され、双方の検出面の深さおよび両地点の位置関係から、構内造成時の大規模な削平がこの付近にまでは及んでいないことが知られている。しかし、経済学部構内はその西に位置する人文・理学部構内に比べて階段状にかなり低くなっており、両構内での地山検出面の標高差もかなりあることから、同構内東端部付近では地山の削平が著しいものと考えられる。

今回は、同学部構内での地山の削平状況・範囲を知る一助として、立会調査を実施した。

その結果、現地表から約85㎝下位で青灰色礫混じり粘質土の地山が検出された。同構内ではこの層の地山は未確認であったが、今回の調査地点の南西約50ｍに位置する人文学部校舎敷地部分では、弥生時代以降の遺構面である黄褐色粘質土の下位に青灰色粘土層が堆積していることが確かめられている。したがって、今回の調査地点付近では、構内造成により遺構面が削平され、その下位の堆積層が埋め土直下に検出されたものと考えることができ、過去に遺構が存在していたとしても、すでに消失している可能性が極めて高い。

（河　村）

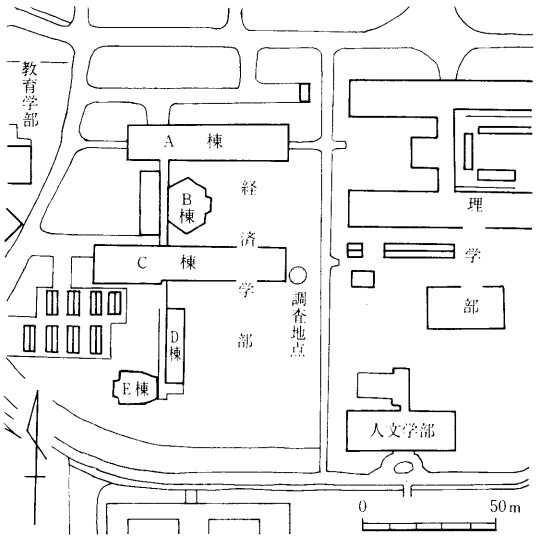


Fig. 35　調査区位置図

6　交通標識設置に伴う立会調査

調査地区　　本部構内 H－23区，J－9区，P－22区，農学部構内 S－20区，W－16区

調査期間　　昭和61年6月27日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約3㎡

調査結果　　工事は、吉田構内の各入り口に交通規制用の標識を設けるため、その支柱の基礎となる部分について、各々1m×0.5mの範囲で現地表から約30cm掘り下げるというものである。5地域6地点を調査した。なお工事で掘削した実際の深さは、H－23・J－9・P－22区で現地表から40cm、S－20・W－16区ではそれぞれ30cm、35cmであった。

掘削の結果は、各地点とも構内造成時の埋め土の堆積が認められたにとどまり、遺構・遺物包含層および地山は検出できなかった。なお、J－9区・S－20区・W－16区の3地点では埋め土の中に地山の土である明黄褐色（Hue 10YR 6/8）粘土が混在しており、各地区周辺で地山の削平が行なわれていることが予想される。

S－20区の調査地点周辺では、昭和41年度に西側の飼料園で実施した試掘調査で遺構が検出され、その後、大きな現状変更はされていない。したがって、埋め土内の地山土は、家畜病院の敷地を造成によって一段低く下げた際の削平に起因するものと思われる。

また、P－22区の調査地点では埋め土中から須恵器片が出土した。独身寮の西隣で行なった国際交流会館新営に伴う調査（第3章参照）の際、古墳時代後期まで流れていた河川跡が検出されており、その河川がこの付近にまで伸びていたことが予想されるが、大学統合移転時の造成により他の遺構とともに削平され、遺物が遊離した可能性が考えられる。

（河　村）

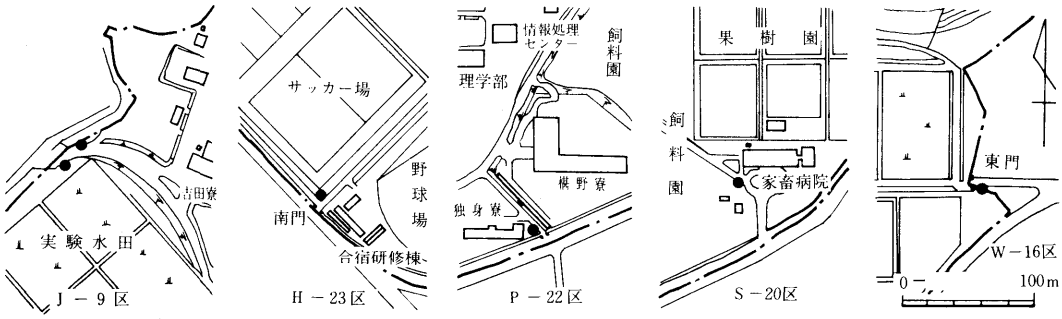


Fig. 36　調査区位置図

7　教養部自動販売機増設に伴う立会調査

調査地区　　教養部構内　K・L－18区

調査期間　　昭和61年8月19日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約3.5m²

調査結果　　工事は、自動販売機を被覆する簡易屋根設置のため、その支柱の基礎となる部分を東西各2ヵ所、計4ヵ所掘削し、周囲にタイル状のロッキングブロックを敷設するものであった。また、この工事の際、支障となるベンチを西へ約3m移動させるため、このベンチの基礎部分についても合わせて立会調査を実施した。

簡易屋根基礎部分の掘削は現地表から30～40cmを要するものであったが、4ヵ所いずれも構内造成時の埋め土の堆積がみられ、顕著な遺構・遺物は皆無であった。しかし、南東隅の基礎部分で、この埋め土の中に、昭和58年度に今回の工事地域の北約40mにある教養部屋外掲示板部分の調査[1)]で確認した、茶褐色粘質土（遺物包含層）が混入していた。

この遺物包含層の拡がりは現段階ではまだ確認できないが、教養部講義棟西端部でも弥生土器を含む層が検出されている[2)]こと、旧地形が東から西へ下降していたと推定されることなどから、合併講義棟以西にもその堆積範囲が及ぶものと考えられる。ただし、前述の調査で旧耕作土・床土が全く検出されていないことから、大学統合移転時の造成によって遺物包含層が広範囲にわたりかなり削平されていることが予想される。

またベンチ移動に伴う4ヵ所の基礎部分の調査では、工事に必要な現地表下30cmまでの掘削を行なったが、各ヵ所とも構内造成時の埋め土の範囲内であった。

（河　村）

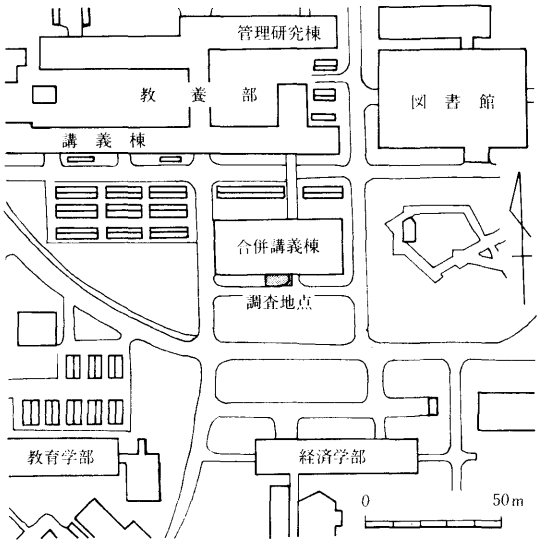


Fig. 37　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教養部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

2）前掲注1）に同じ。

8　教養部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区　　教養部構内　L－15・16区

調査期間　　昭和61年9月2日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約3㎡

調査結果　　工事は、教養部管理研究棟の東出入口に身障者用の昇降スロープを新設するもので、東西幅約3m、南北長約8mが工事対象範囲であった。しかし、工事地域の南側については掘削を行なわず、主に盛り土によってスロープを新設するため、工事に伴う実際の掘削は、管理研究棟と並行して東西に走る循環道路からの入口付近の東西約3m、南北約2.5mの地域であった。立会調査は、この範囲のうち掘削の最も深い、工事地域の東西両端部に沿って南北に設けられるスロープ基礎部分について実施した。

現地表から70cmまでを掘削し土層の堆積状況を観察したが、構内造成時の埋め土以外に顕著な堆積層は検出できなかった。しかし、循環道路を隔てて一段高い大学会館前庭部では、南端中央部付近で最大の厚さが約80cmにもおよぶ遺物包含層が検出されている。[1] この遺物包含層は少なくとも3層に分層できるが、縄文～江戸の各時代におよぶ遺物を包含し、北から南への地山の下降とともに漸次その層厚を増している。ただし、前庭南西端部ではほとんど検出されないこと、また前庭部の南に位置する図書館増築部分でも同一の遺物包含層を検出していることなどから、[2] その分布範囲は南および西へ拡がるものと考えられる。今回の調査地域付近でも、今後、掘削深度が深い工事の際に遺物包含層が検出される可能性は十分考えられ、注意が必要である。（河　村）

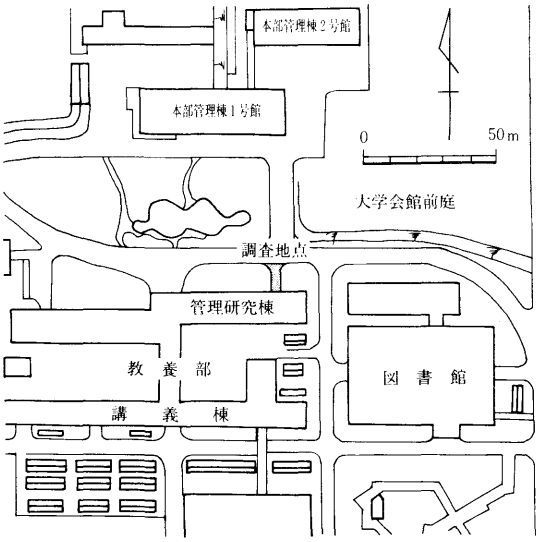


Fig. 38　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地M－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。

9　経済学部散水栓取設に伴う立会調査

調査地区　　経済学部構内　L・M－20区

調査期間　　昭和61年12月1日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　計約4㎡

調査結果　　工事は、経済学部C・D棟間および大講義棟（E棟）の周囲に、現地表から30㎝掘削して給水管を埋設し、その管路内に前者では3ヵ所、後者では2ヵ所の散水栓を取設するものである。昭和55年度に実施した同学部大講義棟新営に伴う調査[1)]結果から、大講義棟周囲の工事地点は、掘削深度が構内造成時の埋め土の範囲内であることが明らかなため調査対象から除外し、C・D棟間の掘削工事について立会調査を実施した。

その結果、給水管管路、散水栓取設地点とも工事による掘削深度内はいずれも構内造成時の埋め土の堆積が認められ、顕著な遺構・遺物は皆無であった。したがって、C・D棟間では少なくとも現地表から30㎝までの掘削では地山が検出されず、先に経済学部環境整備に伴う立会調査（本節第5項参照）で触れたように、同学部構内南東域での地山の検出面は現地表から約70㎝～80㎝下位付近にあるものと考えられる。

また、経済学部の西に隣接する遺跡保存地区周辺での遺構の分布状況・遺存度から推して、同学部構内では東から西への地山の自然傾斜に伴い、西に向かうにつれて埋蔵文化財が良好な状態で遺存している可能性が強いが、遺構面の削平状況・範囲および遺構の有無を判断するには、現状では未だ資料不十分で、今後の資料の増加が望まれる。

（河　村）

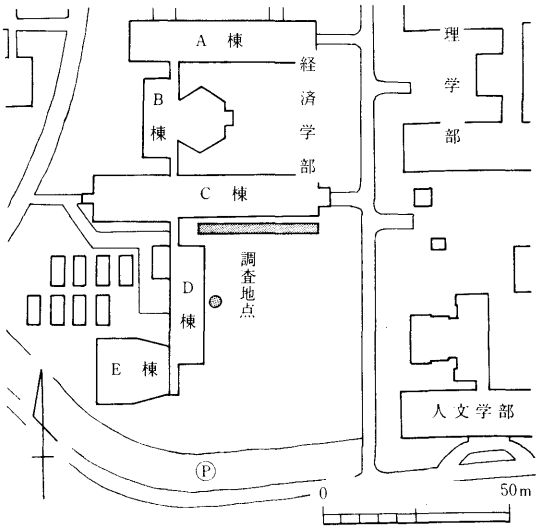


Fig. 39　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「昭和55年度調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

10　水泳プール改修等に伴う立会調査

調査地区　　本部構内　E・F－16区，H－15区

調査期間　　昭和61年12月8日（A～C地点），同12月10日（D地点）

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　A地点 約4.5㎡，B地点 約4㎡，C地点 約7㎡，D地点 約11㎡

調査結果　　工事は、プール改修に伴う3地点（A～C地点）と、体育館の変電施設新営に伴う1地点（D地点）について実施した。

プール改修工事では、深い掘削を要する循環装置の改修部分のうち、新規に埋設される配管路について調査を行なった。工事に伴い現地表から50cmまで掘削したが、3地点ともすべて構内造成時の埋め土の範囲内であった。しかし、B地点では旧耕作土・床土の直下、現地表から65cm下位で、遺物は含まないものの、茶褐色粘質土の堆積が認められた。西に隣接するテニスコートのフェンス改修に伴う調査時に、弥生時代～古墳時代の遺物を包含する同一層が検出されている。[1)] この包含層の北への拡がりを調べるために、管路北端部のC地点で工事に支障のない現地表下1.5mまで深掘りを行なったが、旧耕作土の下面が検出されたにすぎず、同層はその下位に堆積しているものと思われる。B・C両地点とも現地表面の標高差はほとんどなく、地山がC地点付近で南から北へ急激に自然傾斜しているものと考えられるが、テニスコート地域ではこの地山の傾斜が認められないことから、プール本体の存在する地域に小規模な谷が埋存している可能性が高い。

なおD地点では、工事掘削深度である現地表下約70cmまで掘り下げたが、すべての構内造成時の埋め土の範囲内で、遺構・遺物包含層の確認はできなかった。

（河　村）

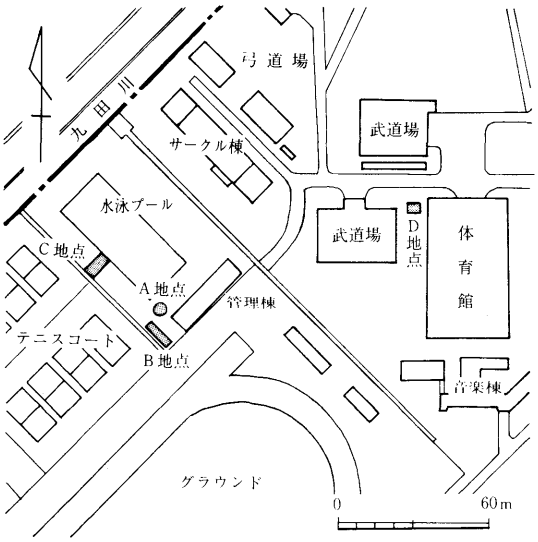


Fig. 40　調査区位置図

〔注〕

1）a　山口大学埋蔵文化財資料館「学生部テニスコートフェンス改修に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

b　山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内学生部テニスコートフェンス改修に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年）。

11　農学部附属農場水道管埋設に伴う立会調査

調査地区　　農学部構内　S－12区

調査期間　　昭和61年12月9日

調査方法　　工事施工時における立会調査

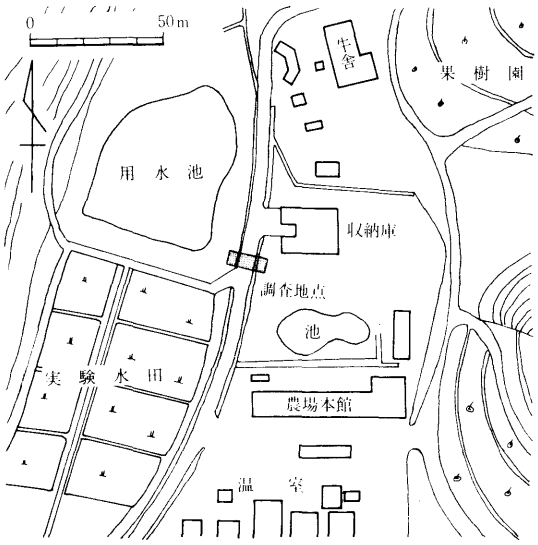
調査面積　　約3㎡

調査結果　　工事は、農場本館と牛舎との間にすでに埋設されている水道管を、途中で分岐させるために農道を掘削するものである。なお、農道中央部は既設の配管埋設工事の際に削平されているため、農道の東西両端部について立会調査を実施した。

工事による掘削は現地表から50cmまでであったが、両端部とも工事範囲内は構内造成時の埋め土で、埋蔵文化財への影響はなかった。しかし、当地域周辺は、今までわずかに牛舎敷地部分で調査がなされているにすぎず、埋蔵文化財の分布状況については不明な点が多いことから、今後の諸開発に先立ち地下の状況を把握するため、深掘りを行なった。

その結果、東端部では現地表から70cm下位で黄灰褐色礫混じり粘土の地山が検出され、また西端部では現地表から80cm下位で谷の埋積土を思わせる黒灰色粘土の堆積がみられた。

附属農場の各施設が所在するキャンパスの北東域は、北から南へ舌状に張り出した二つの丘陵にはさまれた、狭い谷あいに立地する。西半部の奥部には用水池が存在し、その前面に開かれる実験水田は、周囲に比べ一段低くなっている。今回調査地点の北東約70mに位置する牛舎の敷地部分の調査では、弥生時代の溝・土壙、古墳時代の竪穴住居跡を検出したとされていることから、本来の谷は、用水池奥部に湧水点をもつもので、当該地域を東西に二分してのびる農道よりも西側の地域に存在するものと思われる。したがって生活関連遺構は、谷を避けたこの農道以東の、丘陵縁辺部であった地域に存在する可能性が高い。



（河　村）

Fig. 41　調査区位置図

12　汚水排水管等総改修に伴う立会調査

調査地区　　吉田構内　M－18区，O－15・16区

調査期間　　昭和61年12月23日(M－18区)，同62年1月12日(O－16区)，同1月19日(O－15区)

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　M－18区 約5.5m²，O－16区 約7m²，O－15区 約3m²

調査結果　　工事内容は、吉田構内に分散する汚水・実験各排水管および雨水桝の老朽化に伴う改修工事で、これまでの調査により周辺に顕著な埋蔵文化財が認められている地域と、調査資料の不足している地域を選定して、立会調査を実施したものである。

M－18区では東西1m、南北5.5mの範囲について、工事に必要とされる掘削深度である現地表下50cmまで掘り下げたが、構内造成時の埋め土の堆積がみられたにとどまった。

O－16区では東西1m、南北7mの範囲を調査した。南半部は、後世の攪乱が著しく、現地表下65cmまで構内造成時の埋め土がみられた。北半部では、この埋め土の直下、現地表下40cmで灰黄褐色（Hue 10YR 2/6）土の堆積を確認したが、遺物は包含していなかった。なお、工事による掘削はこの灰黄褐色上面まででであるため、地山は確認していない。

O－15区での工事は、一段高い東側からの土砂流入防止を目的として、東西0.4m、南北8mの範囲を掘削し土留め用の擁壁を新設するものである。掘削深度は現地表からわずか20cmほどであるが、工事地域の西に隣接する第2学生食堂敷地部分で、昭和46年の調査時に弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡6棟をはじめとして同時期の土壙・溝多数が検出されており、今回の工事地域を含めた周辺地域一帯がこの時期の居住域であったと考えられていることから、立会調査を実施することとした。

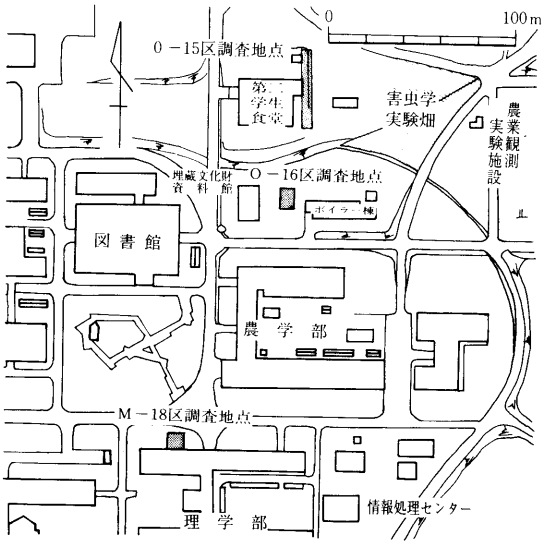


Fig. 42　調査区位置図

その結果、15cmの層厚をもつ表土直下に黄橙色（Hue 10YR 7/8）粘土の地山が検出されたが、顕著な遺構は認められなかった。なお、表土中から土師質土器

鼎の脚部が出土している。

出土遺物（Fig. 43－1）

土師質土器鼎（かなえ）の脚部で、脚裾部を欠損する。指圧による整形痕を明瞭に残し、粗雑なナデを施す。二次加熱による赤変が随所にみられ、煤の付着も著しい。

O－15区調査地点の表土中より出土。

採集遺物（Fig. 43-2～6）

O－15区調査地点の東に隣接する農学部害虫学実験畑で採集した須恵器である。2～4は甕。2は大形の甕の胴部で、外面に平行タタキがわずかに残る。3・4は短く外反する口縁部をもち、端部は屈曲して上方へ立ち上がる。内外面とも横ナデ仕上げ。同一個体の可能性がある。5は壺の底部で、内外面とも横ナデ仕上げであるが、外底面はヘラ切り放しのまま放置する。6は坏の底部。底部と体部の境より内側にわずかに外方へ開く高台を貼付する。内外面とも横ナデ仕上げ。実験畑採集資料には他に土師器甑（こしき）の把手などがあるが、大半は8世紀代の須恵器で、第2学生食堂敷地部分とは時期の異なる遺構ないしは遺物包含層が、付近に存在する可能性がある。

（河　村）

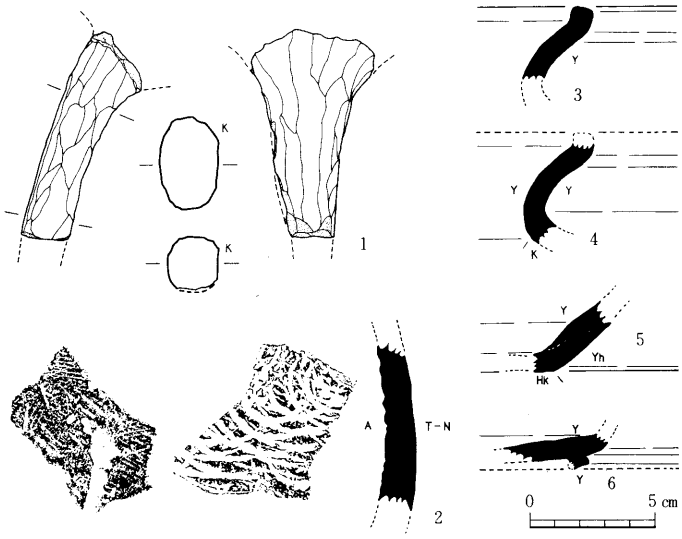


Fig. 43　出土遺物および採集遺物実測図

Tab. 5　出土遺物および採集遺物観察表

No.	器　種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色　調	胎　土	焼成	備　考
O－15区調査地点　表土中							
1	土師質土器　鍋	－	(8.2)	橙色（5 YR7/6）	良好　径2mm以下の長石・石英含む	良好	二次加熱による赤変著しい。煤付着
農学部害虫学実験畑　採集							
2	須恵器　甕	－	(6.5)	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	やや粗い　1mm以下の砂粒若干含む	良好	
3	須恵器　甕	－	(3.0)	外面－灰白色(10Y7/1) 内面－青灰色（5 B6/1）	精良　1mm以下の砂粒若干含む	良好	4と同一個体か
4	須恵器　甕	－	(3.9)	外面－灰白色(10Y7/1) 内面－青灰色（5 B　6/1）	精良　1mm以下の砂粒若干含む	良好	3と同一個体か
5	須恵器　壺	－	(2.8)	青灰色(10BG5/1)	良好　2mm以下の砂粒若干含む	良好	
6	須恵器　坏	－	(1.3)	明青灰色（5 PB7/1）	良好　1mm以下の砂粒わずかに含む	良好	

13　本部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区　　本部構内　L－14区

調査期間　　昭和62年２月25日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約12㎡

調査結果　　工事は、本部管理棟１号館の東側の出入口に身障者用の昇降スロープを新設するものである。当地域周辺は、「遺跡保存地区」周辺同様、埋蔵文化財の分布状況が次第に明らかになってきている。大学会館前庭部では竪穴住居跡・袋状竪穴・土壙・溝・埋甕など弥生時代前期～江戸時代の各時期の遺構が検出されており、しかも西に向かうにつれて分布密度が高く、広範囲に遺存していた。[1] また、本部２号館の敷地でも弥生時代後期後半の土壙や、溝で囲んだ区画内に井戸等を備えた室町時代の屋敷跡が検出されており、[2] この付近一帯が弥生時代以降、生活の場として機能していたことを示唆している。

工事による掘削は現地表下43㎝までと比較的浅い。しかし、上述の前庭部の本部寄りでは現地表下約90㎝で遺構面に達し、当工事地域が前庭部に比べやや低くなっていることから、遺構に影響を及ぼすことが十分に考えられたため、立会調査を実施した。

その結果、工事による掘削は構内造成時の埋め土の範囲内であったが、南端部を深掘りしたところ、現地表下80㎝で黄橙色粘質土の地山が検出され、前庭部分の地山面との標高差はほとんどないものと考えられた。したがって、本部管理棟１号館の前庭部寄りの地域では構内造成による大規模な削平は行なわれておらず、遺構が埋存している可能性が高い。　（河　村）

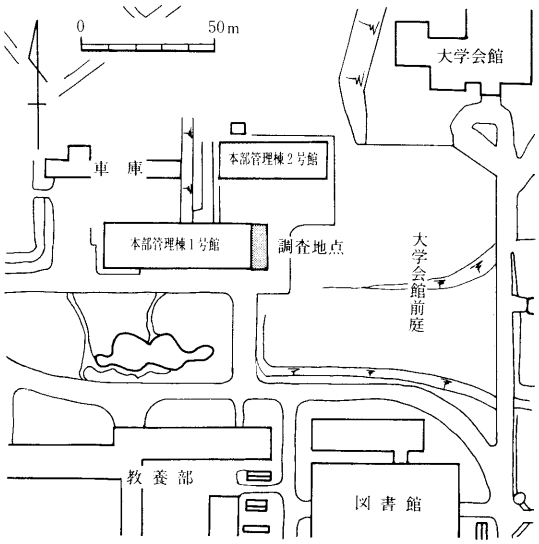


Fig. 44　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「昭和54年度調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

14　経済学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区　　経済学部構内　K－20区，L－18～20区

調査期間　　昭和62年3月13日（C地点），同3月17日（A・B地点），同3月23日（D地点）

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　A地点 約30㎡，B地点 約20㎡，C地点 約16㎡，D地点 約12㎡

調査結果　　工事に伴う掘削は現地表からA地点30㎝、B・C地点40㎝、D地点20㎝であったが、今後の諸開発に先立ち、深掘りを行なって地下の状況を観察することとした。

A地点では現地表下50㎝で植物遺体を含む黒色粘土の堆積がみられた。層厚は20㎝で、調査区内では遺物は出土しなかった。また、その下位に淡青灰色砂礫層の地山が検出され、わずかに湧水が認められたことから、この付近は谷状の低湿地を形成していたものと考えられる。なお、A地点の北東に位置する中央広場は、大学統合移転時の調査で谷状の低湿地であったことが確かめられており、このA地点部分と一連のものと考えられるが、出土遺物がないため、時期比定については今後の調査に期待したい。

B地点は現地表から1.4m掘り下げたが攪乱が著しく、良好な資料は得られていない。

C地点は現地表から1.15mまで構内造成時の埋め土で、その直下に黄褐色粘土の地山が認められたが遺構は検出されず、この地点も攪乱が著しいものと思われる。

D地点ではスロープ取設に併行し、その下位に排水管を南北に埋設する工事が予定された。スロープ取設工事に伴う掘削では顕著な遺構・遺物は確認されなかったが、現地表から40㎝掘り下げたところで黒褐色粘質土の埋土をもつ柱穴が検出された。排水管埋設に伴う掘削は現地表から60㎝を必要とするものであったが、各関係部局と協議した結果、工事による掘削を、遺構を破壊しない現地表下35㎝までにとどめることで了承が得られ、遺構は現地保存されることとなった。

（河　村）

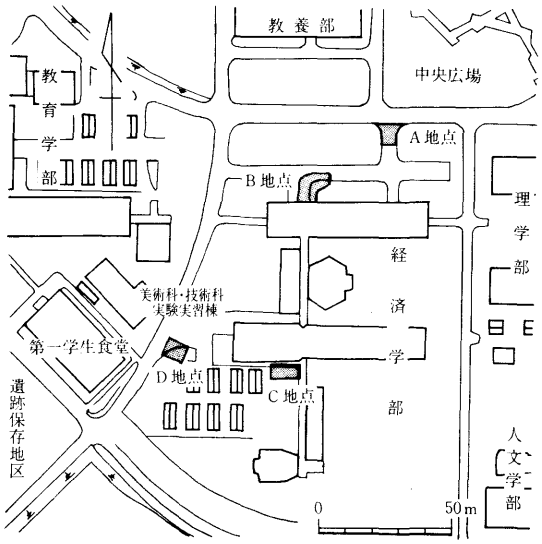


Fig. 45　調査区位置図

15　附属図書館荷物運搬用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区　　L－16区

調査期間　　昭和62年３月16日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約８㎡

調査結果　　工事は、附属図書館西入口付近を幅約1.5m、長さ約６mにわたって弧状に掘削し、荷物運搬用の昇降スロープを取設するもので、掘削は現地表から40cmまでである。

今回の調査地点の北東に隣接する図書館増築部分では、弥生時代後期から平安時代にかけての溝７条、古墳時代前期を上限とする河川跡のほか、土壙・柱穴が検出されている。また、灰褐色粘質土・黒褐色粘質土・明褐色砂質土の３層に分層される遺物包含層がほぼ全面に分布しており、弥生時代前期から鎌倉時代前半にかけての多量の遺物が出土している。[1] 増築部分の地表面はほぼ平坦で、遺物包含層の最上面は地表面から約１m、遺構面は約1.3～1.4m下位で検出される。しかし地表は、増築部分の南端部から、南へ向かって急激に下降しており、今回の調査地点は増築部分より約1.1～1.2mも低くなっていることから、工事により遺物包含層に影響を及ぼすことが十分に考えられたため、立会調査を実施した。

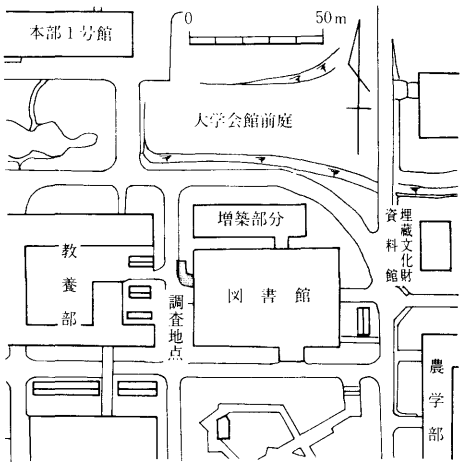


Fig. 46　調査区位置図

その結果、工事範囲の大部分が既設の埋設管によって大きく削平されていたため、遺物包含層の堆積、遺構は認められなかった。しかし、増築部分で検出した黒褐色粘質土が埋め土中に混在しており、内部から弥生土器が出土した。

出土遺物（Fig. 47, PL. 16）

壺の頸部から肩部にかけての破片で、外面に扁平な１条の突帯を貼り付ける。風化著しく内外面とも調整不明。胎土には砂粒をやや多く含み、やや不良。焼成は良好で色調は橙色（Hue 5 Y R 6/6）。　　（河　村）

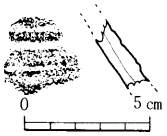


Fig. 47　出土遺物実測図

〔注〕
1）山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地Ｍ－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。

16　教養部37番教室改修に伴う立会調査

調査地区　　教養部構内　K－16区

調査期間　　昭和62年３月24日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約１㎡

調査結果　　工事は、教養部講義棟の改修に付随して汚水管および汚水桝を埋設するものである。今回の調査地点の南側約20ｍの地点では、屋外掲示板設置に伴う立会調査を実施しており、地表面から60～65㎝下位で茶褐色粘質土の遺物包含層が検出されている。[1)] この層の平面的な拡がりは確認していないが、現段階では、大学会館前庭部や図書館増築部分で検出した遺物包含層と同一のものと考えており、今回の調査地点付近にも埋存する可能性が十分に考えられた。なお、汚水管の埋設による掘削は現地表から35㎝までで、直接埋蔵文化財に影響のない深度であることが確かめられているため、調査対象から除外した。

汚水桝の埋設に伴い現地表から60㎝まで掘削したが、構内造成時の埋め土の範囲内であり、顕著な遺構・遺物は認められなかった。また、工事に支障のない現地表下75㎝の深さまで掘り下げたが、堆積層に変化はなかった。しかし、埋め土内に遺物包含層である茶褐色粘質土がブロック状に混在しており、この周辺に堆積する遺物包含層が、造成等により多少なりとも削平を受けていることが考えられる。

教養部構内ではこれまで点的な立会調査によって断片的な資料が得られているにすぎない。したがって、学内でも比較的調査の進んでいる本部・教育学部各構内に比べ、同構内での埋蔵文化財の分存状況は未だ十分には把握しきれておらず、今後の調査が必要であろう。（河　村）

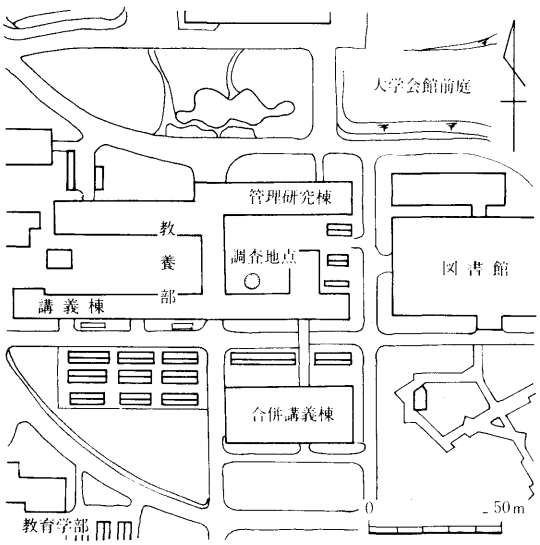


Fig. 48　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教養部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

17　市道神郷１号線および問田神郷線の送水管埋設に伴う立会調査

調査地区　　市道神郷１号線および問田神号線の南縁部

調査期間　　昭和61年８月11～29日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約2100m²

調査結果　　大学敷地の南縁部を弧状に巡る市道で、幅約1.6m、総延長距離約1270mに及ぶ送水管埋設工事が計画された。この市道を隔てた附属養護学校敷地内でも、今までの調査で遺構が検出されており、大学構内吉田遺跡の市道以南への拡がりが推察されていることから、工事によって未周知の遺物包含層・遺構に影響する可能性が十分に考えられた。よって関係機関と協議の結果、工事内容・規模等を勘案し、山口市教育委員会が立会調査を実施することとなった。当資料館も、構内遺跡南縁部付近での土層の堆積状況、遺物包含層・遺構の有無に関する資料が不十分であることから、調査協力を行なうこととした。

なお掲載した資料は、山口市教育委員会の篤志により提供を受けたものであるが、当該機関から報文の発行が予定されているため、本稿では調査結果の概要を記すにとどめる。

主な遺構には家畜病院付近で検出された幅約５mの奈良～平安時代の河川跡がある。墨書のある須恵器坏蓋（PL.17－⑦）・土師器・六連式製塩土器（PL.17－⑥）などが出土し、出土遺物の時期や推定される流路方向から考えて、昭和60年度に果樹園西端部で検出した河川跡と同一のものであろう[1)]。他に、ハンドボール場前で古墳時代後期の溝、また南門前

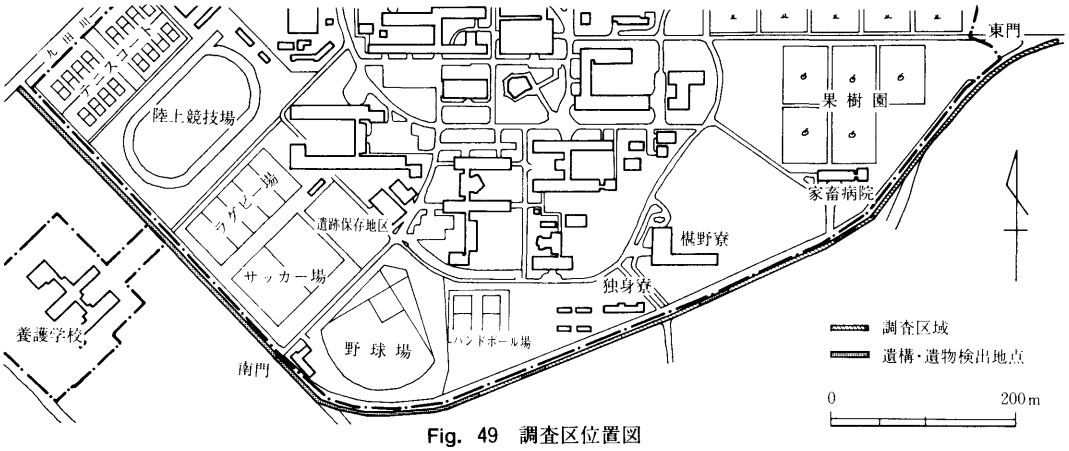


Fig. 49　調査区位置図

でも溝状遺構が検出されており、後者からはヘラ切り底の土師器埦が出土している。

遺物包含層は、野球場南東端部から南門にかけての少なくとも幅約160mの範囲に集中分布し、上層から淡茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土の二層に分層される。前者は10～20cmの層厚をもち、須恵器等を含むが遺物の出土量は極めて少ない、後者は最大約30cmの層厚をもち、主に弥生時代前期末から後期末の遺物を包含する。中でも壺・甕を主体とした前期末から中期初頭の遺物は出土量が比較的多く、良好な資料も少なくない。

他にハンドボール場や椹野寮付近でも、遺物包含層が認められている。また、先に述べた南門前の溝状遺構が淡茶褐色粘質土を掘り込んでいることから、古墳時代後期から下っても平安時代前半頃の遺物を包含する堆積層もまた、この周辺にあるものと思われる。

遺物は南門以北でも出土している。南門からラグビー場付近までは、弥生時代前期末～中期初頭の土器を包含する堆積層が、大学側の断面にのみ部分的に検出され、さらに地山がこの部分で不規則に落ち込んでいることから、当該期の遺構の存在を予想させる。ラグビー場以北では、遺物は砂礫層からの出土で、周辺からの流れ込みである公算が強い。

野球場周りの遺物包含層から出土した遺物（ＰＬ．17－①～⑤）について、簡単に触れておく。

壺は、口縁部が大きく開き肥厚帯を有するもの、短く緩やかに外反するものなどがある。前者には、頸部外面に多条の沈線が巡り、内面に断面三角形の突帯を１条貼付するものや、肥厚帯に貝殻による鋸歯文を施文するものなどがある。肩部から胴部にかけては、無軸羽状文・木葉文が施文されるが、いずれも施文具は貝殻で、ヘラ描きの文様はない。

甕は、短く緩やかに外反する口縁下にヘラによる沈線が４～６条巡るもの、口縁部が内面に稜をもって水平に近く屈曲するものなどがあり、後者では沈線・突帯をもつものはみられない。また、直立する口縁部の下位に１条の突帯を貼付し、ヘラによる刻目を施すものもある。後期の土器は前期末～中期初めのものに次いで多く、複合口縁をもつ壺、「く」の字に外反する口縁部をもつ甕、上位で屈曲し外反する高坏、支脚などがある。

今回の調査は工事施工時における立会調査であることから、調査内容には限界があるが、本学構内南西縁部で連続的に土層の堆積状況、遺構・遺物包含層の分布範囲、旧地形の概略を把握することができた。今後、本構内および周辺地域における比較・検討、または諸開発の策定に寄与する良好な資料として意義深い。　（河　村）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

第2節　小串構内の立会調査

1　医学部附属病院外来診療棟新営に伴う立会調査

調査地区　　医学部附属病院構内

調査期間　　昭和61年5月20・26日、6月20・27日、7月24日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約5㎡

調査結果　　昭和60年度、この外来診療棟新営に先立った試掘調査を実施しており[1]、遺構は検出されなかったが、土師質土器・瓦質土器・国産陶磁器が出土し、小串構内東半部に遺物を包含する青黄橙色粘質土が堆積することを確かめた。しかし小串構内では、調査時の安全管理上から同層の下面付近までしか掘削しておらず、それ以下の土層の堆積状況は不明であった。幸い今回、当該建物の新営工事が、現地表から約10mにも及ぶ掘削を伴うため、連続的に堆積層を観察する機会が得られ、5地点を選定して立会調査を実施した。

各地点の基本層序はほぼ同一である。現地表から1.9～2.5mまでは構内造成時の埋め土で、その下に旧耕作土が残存する。旧耕作土の下には、遺物を包含する青黄橙色粘質土が厚さ20～30cmにわたって堆積しているが、今回の調査では遺物は出土していない。

それ以下は、青灰色粘土（厚さ約30cm）、粒子径の異なる砂層（厚さ2.1～2.5m）と続く。砂層は、基幹整備に伴う試掘調査で、幼貝を混じえた貝殻を含み、少なくとも1mの厚さをもつことがわかっていたが[2]、今回の調査でその堆積厚が確かめられた。また、その下には当地が一時期海であった際の基盤であると思われる、厚さ約4mにも及ぶ硬くしまった暗灰色砂質粘土（砂岩風化土）、石炭を含む頁岩の岩盤が認められた。　　（河　村）

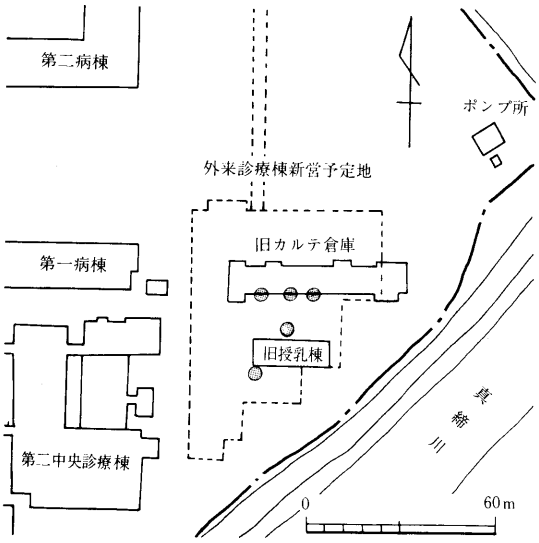


Fig. 50　調査区位置図

〔注〕
1）山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部外来診療棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。
2）山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部基幹整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年）。

2　医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等に伴う立会調査

調査地区　　医学部附属病院構内

調査期間　　昭和62年３月24日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　計約18㎡

調査結果　　工事は、外来診療棟周辺の植栽と、雨水管および雨水桝の埋設である。

植栽工事は、外来診療棟竣工後にロータリーとして活用される、短期大学部講義棟と外来診療棟との間で主に実施されるもので、掘削深度は樹種により異なるが、最深部で現地表から１ｍまでである。しかし、外来診療棟予定地部分の調査で、遺物を包含する堆積層は現地表から1.2ｍ下位で検出されていることから、[1]植栽工事は調査対象から除外した。

雨水管の埋設工事は、外来診療棟の南端部から旧カルテ倉庫東端部を経てＡ地点への管路が予定され、その間に９ヵ所の雨水桝を取設するものである。旧カルテ倉庫以南は外来診療棟新営に伴う立会調査（本節前項参照）で地下の状況を十分に把握したため、工事に伴う調査は行なわず、未調査地域として残っている管路北端部の、雨水桝を取設する２地点について立会調査を実施した。工事による掘削は現地表から約2.2ｍまでである。

Ａ地点では厚さ90㎝の構内造成時の埋め土の下位に旧耕作土・床土が残存する。その下に遺物は出土しなかったものの層厚20㎝の青黄橙色粘質土が堆積し、以下青灰色粘土、青灰色砂混じり粘土と続く。工事基底面まで掘り下げたが、砂層は検出されなかった。Ｂ地点は埋め土の厚さ80㎝で、その直下に青黄橙色粘質土が堆積しているが、湧水が激しく掘削を断念した。Ａ・Ｂ両地点とも基本層序は外来診療棟予定地部分と大差ないものであった。

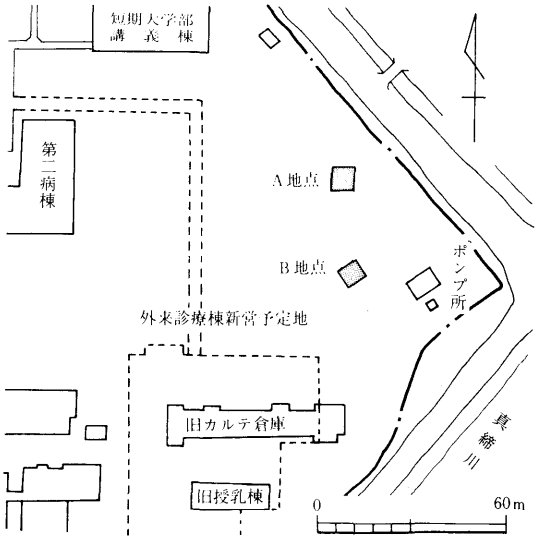


Fig. 51　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部外来診療棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

第3節　常盤構内の立会調査

1　工学部尾山宿舎排水管改修に伴う立会調査

調査地区　　工学部尾山宿舎構内

調査期間　　昭和61年7月8日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約6 m^2

調査結果　　工事は、既設の職員宿舎2棟の東・北の各両辺に沿って、主として汚水桝とそれらを連結する排水管を新設するものであった。新設管路のうち職員宿舎に沿った部分の大半は、宿舎建設の際すでに掘削・削平されていることから、両宿舎間を南北に連結する幅約1.3m、長さ約5.5mの路線について、立会調査を実施した。

その結果、現地表下約16～25cmで明黄褐色（Hue 10YR 6/8）粘土の地山が検出されたが、遺構・遺物は全く認められなかった。地山面がほぼ平坦であり、地山より上位の堆積層も同地域を造成し整備した際の砕石に限られていることなどから、従来の調査結果と合わせ、当構内の東半部では過去に遺構が存在したとしてもすでに消失した可能性が高い。

なお、75～85cmの層厚をもつ黄褐色粘土の下位には青灰色（Hue 10BG 5/1）礫混じり粘土の堆積が認められたが、工事内容等からその存在を確認したにとどまり、堆積厚は明らかでない。　　（河　村）

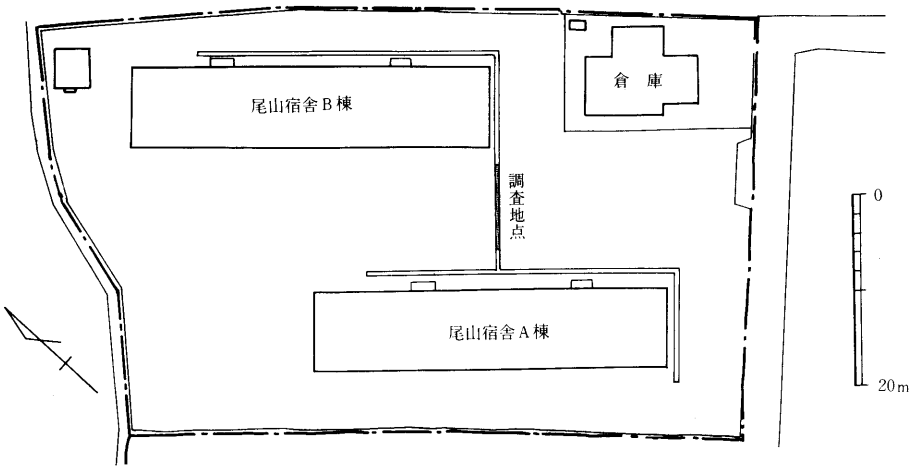


Fig. 52　調査区位置図

2　工学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区　　工学部構内

調査期間　　昭和61年８月21日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　Ａ地点 約15㎡，Ｂ地点 約10㎡，Ｃ地点 約４㎡

調査結果　　工事は、キャンパスの中央部を中心とした５地点に身障者用の昇降スロープを設けるもので、現地表からＡ地点50㎝、他の４地点は40㎝を掘削するものであった。この５地点のうち、既設の建物新営の際の掘削および過去の調査結果から、明らかに削平が行なわれている２地点を除き、残り３地点について立会調査を行なった。

Ａ地点はキャンパスの北端近く、学生食堂の東辺部にあたり、近代以降の土器若干が出土した受水槽改修に伴う立会調査[1)]地点の東約70ｍに位置する。40㎝掘り下げた段階で黄褐色小礫混じり粘質土の地山が検出され、地山より上位は構内造成時の埋め土であった。

Ｂ地点はＡ地点の南東約140ｍ、東講義棟１号館と化学工学科棟との間に位置する。構内造成時の埋め土直下が黄褐色粘土の地山であるが、埋め土の層厚は14～15㎝と薄い。

Ｃ地点はＢ地点の西約60ｍに位置する。工事範囲内は構内造成時の埋め土が堆積しており、わずかに北端部で工事基底面に赤褐色粘土の地山上面が検出された。

３地点とも造成時の削平が著しいためか、遺構は全く認められない。Ａ地点周辺は調査資料が少なく、未だ埋蔵文化財の有無を即断できないが、体育館以南のＢ・Ｃ地点周辺は造成によって周囲に比べ一段低くなっており、２地点とも埋め土直下が地山であることから、過去に遺構が存在していたとしても、削平され消滅している可能性が高いと考えられる。

（河　村）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「工学部受水槽総改修に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

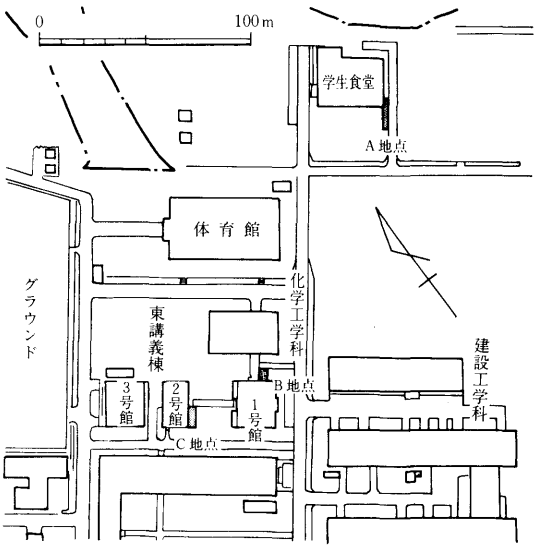


Fig. 53　調査区位置図

3　情報処理センター（常盤センター）空調設備取設に伴う立会調査

調査地区　　工学部構内

調査期間　　昭和61年８月21日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約30㎡

調査結果　　工事は、情報処理センターに付属する電算機用のパッケージを取設し、あわせてその格納庫を新設するもので、工事による掘削は現地表から110cmまでである。その結果、現地表から80cmまでは構内造成時の埋め土で、その下に蛇紋岩からなる岩盤が検出された。顕著な遺構・遺物は皆無であった。

常盤構内では、昭和58年度から構内施設整備工事等に際する調査を実施しているが、これまでに行なった調査地点・面積とも、本学の他の構内に比べて極めて少ない。そのため同構内での埋蔵文化財の分布状況はほとんどわかっておらず、遺構・遺物の有無を確認することが今後の課題となっている。しかし今回の調査地点周辺は、校舎新営、また図書館増築に伴う調査がそれぞれ行なわれており[1)]、常盤構内のなかでは比較的地下の状況が明らかになっている地域である。両調査とも、土層観察の結果、例外なく構内造成時の埋め土直下が黄橙色粘質土の地山で、その下位には蛇紋岩からなる岩盤が検出されている。したがって、今回の調査地点では後世の大規模な削平によって黄橙色粘質土が消失し、地山より下位の岩盤が、埋め土直下に検出されたものと考えられる。（河　村）

Fig. 54　調査区位置図

〔注〕

1）a　山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（常盤構内）工学部校舎新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

b　山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（常盤構内）工学部図書館増築に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

第4節　亀山構内の立会調査

教育学部附属山口小学校電柱移設に伴う立会調査

調査地区　　教育学部附属山口小学校構内

調査期間　　昭和61年7月9日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約0.5m²

調査結果　　工事は、小学校の南端ぞいを東西に走る市道に存在する電柱を撤去し、同構内へ新規に埋設するもので、埋設箇所は2地点である。

グラウンドの南ぞいの敷地境界線付近は、帯状に一段高くなっており、グラウンド面との比高差は1m近くになる。A地点はその一段高い部分に位置し、現地表から約1.3mまでは構内造成時の埋め土で、その下位には厚さ約20cmの旧耕作土が残存していた。その下には黄褐色粘質土の地山が厚さ約1.5mにわたって堆積しており、青灰色粘土へと続く。

A地点の東約25mに位置するグラウンドの南端中央部では、旧耕作土直下に黄褐色粘質土の遺構面が存在し、竈(かまど)を付設した5世紀前半頃の竪穴住居跡が検出されている[1]が、床面までの深さは約20cmと浅く、後世の削平が考えられた。また、検出面はグラウンド上面から約70cm下位であり、A地点の現地表から換算すれば約1.7m下位になる。しかし、A地点では、上述のとおり地表面から約1.5mで地山が検出されたことから、グラウンド南端の一段高い部分では削平がより少ないものと思われ、より良好な状態で遺構が検出される可能性がある。

なお、グラウンドに比べ約2m高くなっているB地点では、現地表から2.3mまで構内造成時の埋め土であったが、湧水が激しく、それ以下の堆積層は観察できなかった。　　（河　村）

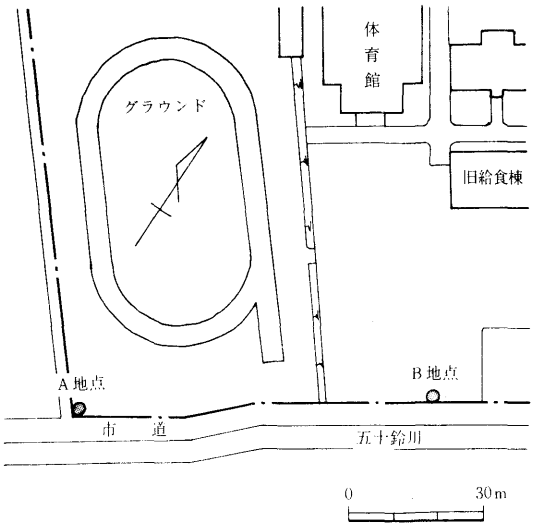


Fig. 55　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

第5節　光構内の立会調査

教育学部附属光小学校創立記念事業に伴う立会調査

調査地区　教育学部附属光小学校構内

調査期間　昭和61年10月20日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約2.5㎡

調査結果　工事は、ブロンズ像建立に伴う台座設置のため、現地表から50cmまで掘削するものである。その掘削深度内は構内造成時の埋め土で、埋蔵文化財に直接の影響はなかったが、掘削基底面で須恵器・歴史時代土師器を含む黄褐色の海成砂層が検出された。出土遺物は小片のため図化しえないが、従来、本構内で検出された遺物包含層は黒褐色砂礫層であるとされており[1)]、少なくとも2層の遺物包含層が存在することが明らかとなった。

なお調査期間中に、本構内の北に面する海岸で多量の遺物を採集したので、紹介する。

採集遺物（Fig. 56, PL. 16・17）

土師器・土師質土器・須恵器・瓦質土器・磁器・陶器・土錘および瓦がある。

1～4は土師器。1・2は甕で、1の口縁部は緩やかに外反し、胴部内面はヘラケズリの可能性。2の口縁部は短く「く」の字に外反し、頸部外面を強く横ナデする。3は糸切り底と思われる高台付きの椀。4は鉢で頸部外面に扁平な1条の突帯を貼付。

5・6は土師質土器。5は盤か。6は小皿で体部下半を強く横ナデする。

7～9は須恵器甕。7は口縁部が外彎気味に「く」の字に屈曲し、端部は肥厚する。外面のタタキは8が平行、9格子。

10は瓦質土器擂鉢で、口縁端部が上下両方に肥厚し、断面三角形を呈する。

11・12は磁器。11は小壺で口縁端部は口禿。12は椀で、見込みを除いて釉を掻き取る。13～17は陶器。13・14は擂鉢。13は片口。14の内面の掻き上げは右から

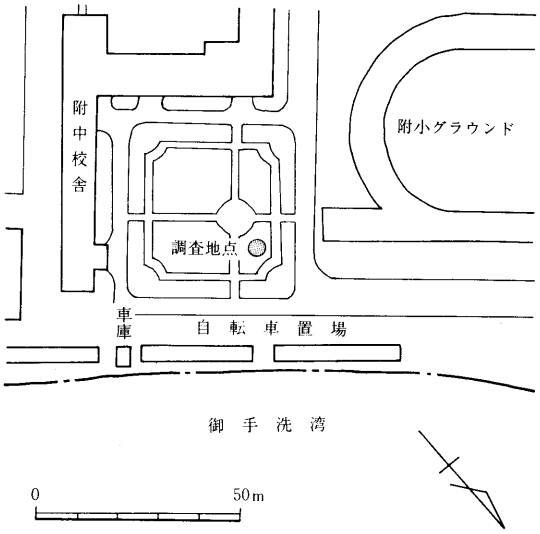


Fig. 56　調査区位置図

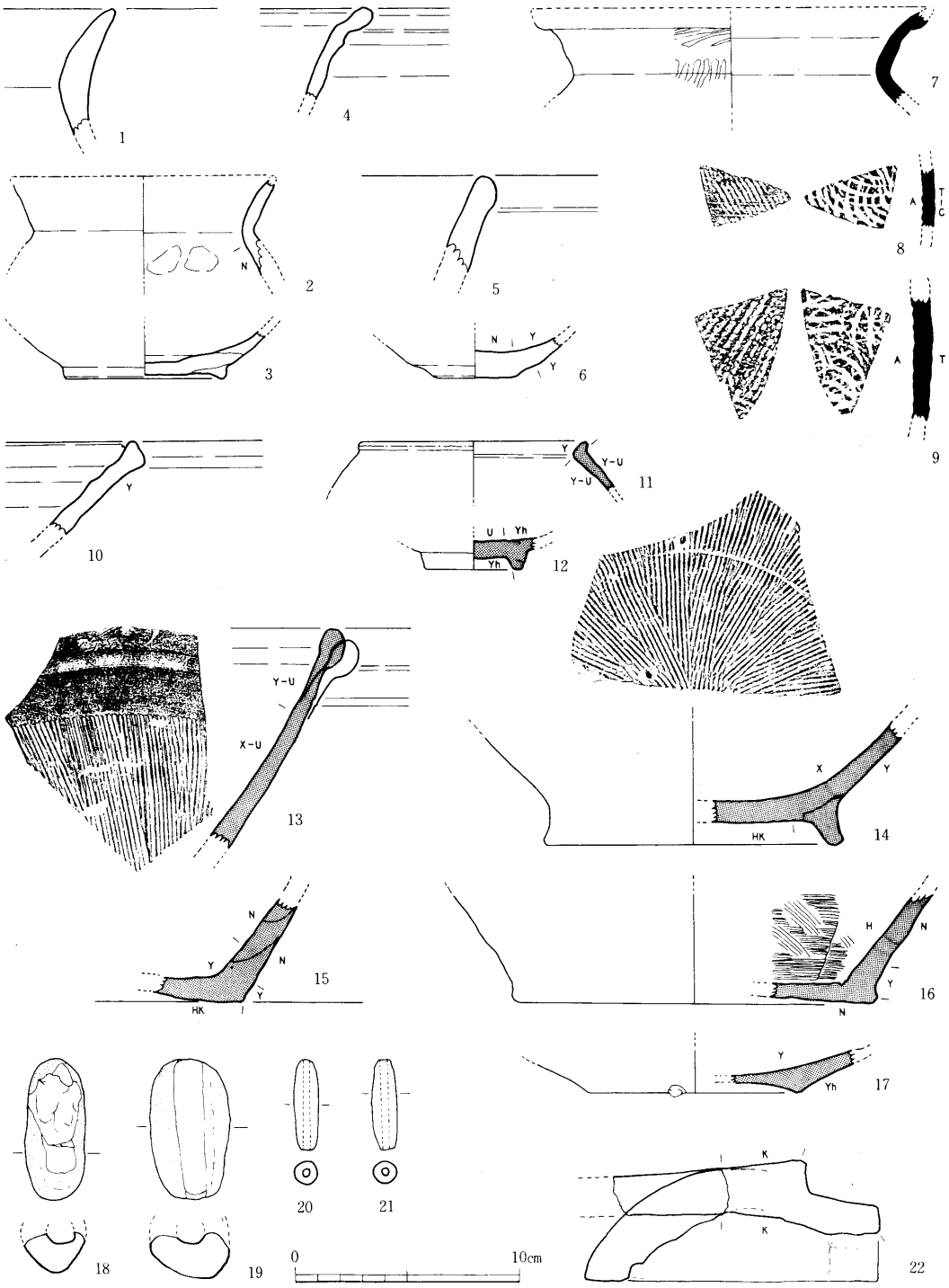


Fig. 57　御手洗湾採集遺物実測図

左へ順次行う。15・16は甕の底部。17は鉢で、体部外面下半には円錐とちが付着。

18～21は土錘。有溝の大型品（18・19）と管状のもの（20・21）とがある。前者は指圧による整形痕が明瞭に残る。22は丸瓦で凸凹面ともヘラケズリを行なう。

上述した遺物は、古墳時代終末～江戸時代のものが混在するが、江戸時代に属するものが主体で、昭和58年度に検出した石垣状遺構の時期に近い[2]。また時期の遡る遺物は、この石垣状遺構構築の際に、遺物包含層から遊離した可能性が高い。（河　村）

〔注〕

1）福本幸夫「御手洗遺跡」（『先原史時代の光市』、1966年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

Tab. 6　御手洗湾採集遺物観察表

法量（　）は現存値

No	器種	口径 ＊底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土		焼成	備考
1	土師器甕	－	(5.6)	外－にぶい赤褐色(5YR5/4) 内－にぶい黄橙色(10YR6/4)	粗い	1.5mm以下の長石、石英、赤紫色砂、金雲母含む	良好	
2	土師器甕	11.8	(4.2)	器表－橙色(7.5YR6/6) 器肉－黒色	良好	2mm以下の赤紫色砂、長石、石英若干含む	良好	
3	土師器埦	＊6.8	(2.1)	器表－外-にぶい橙色(10YR7/3) 内-にぶい黄褐色(10YR5/4) 器肉－暗灰色(N 3/0)	良好	2mm以下の長石、石英他かなり含む	良好	
4	土師器鉢	－	(4.0)	器表－にぶい褐色(7.5YR5/3) 器肉－黒色	粗い	4mm以下の長石、石英かなり含む	良好	
5	土師質土器盤	－	(4.3)	にぶい橙色(5YR7/4)	粗い	3mm以下の長石、石英かなり含む	やや軟	
6	土師質土器小皿	＊3.0	(1.8)	赤橙色(10R6/8)	良好	1mm以下の長石、若干含む	良好	
7	須恵器甕	17.6	(4.1)	灰白色(7.5Y7/1)	良好	3mm以下の長石やや含む	良好	
8	須恵器甕	－	(2.6)	外面－明オリーブ灰色(5GY7/1) 内面－灰白色(5Y7/1) 器肉－にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	1.5cm以下の長石を含む	やや軟	
9	須恵器甕	－	(5.5)	器表－灰色(N 4/0) 器肉－灰黄色(2.5Y7/2)	良好	2mm以下の長石、石英含む	良好	
10	瓦質土器擂鉢	－	(4.1)	口縁端部－暗青灰色(5PB3/1) 他　－灰白色(2.5GY8/1)	良好	2mm以下の砂粒やや含む	良好	
11	磁器小壺	10.0	(2.1)	素地－淡黄色(2.5Y8/4) 釉－浅黄橙色(10YR8/4)	細砂かなり含む		軟質	口禿
12	磁器埦	＊4.3	(1.4)	素地－淡黄色(2.5Y8/3) 釉－オリーブ黄色(7.5Y6/3)	良好	黒色微砂多く含む	良好	
13	陶器擂鉢	－	(9.8)	素地－橙色(2.5YR6/8) 釉－暗赤褐色(10R3/2)	良好	微細砂粒若干含む	良好	注口部分
14	陶器擂鉢	＊13.0	(5.5)	器表－にぶい赤褐色(2.5YR4/3) 器肉－橙色(2.5YR6/6)	良好	3mm以下の石英、長石若干含む	良好	
15	陶器甕	－	(4.7)	赤褐色(17R5/4)	良好	3mm以下の赤色砂他若干含む	良好	
16	陶器甕	＊15.6	(4.8)	素地－にぶい赤褐色(2.5YR4/3) 釉－オリーブ黒色(5Y3/1)	粗い	3mm以下の長石他かなり含む	良好	
17	陶器鉢	＊9.2	(1.9)	器表－浅黄色(25Y7/3) 器肉－灰白色(5Y7/2) 釉－灰オリーブ色(7.5Y5/3)	精良	細砂やや含む	良好	

No	器種	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色調	胎土		焼成	備考
18	土錘	(2.6)	6.3	(26.9)	にぶい赤褐色(2.5YR4/3)	粗い	2mm以下の石英、1mm程度の黒雲母・金雲母を多量に含む	良好	カキ付着
19	土錘	(3.5)	6.3	(41.2)	にぶい赤褐色(5YR5/4)	粗い	3mm以下の石英、1mm程度の黒雲母・金雲母を多量に含む	良好	
20	土錘	1.1	4.0	3.9	にぶい橙色(5YR6/4)	良好	1mm程度の石英若干、1mm以下の黒雲母・金雲母を多量含む	良好	
21	土錘	1.1	4.0	4.7	灰褐色(5YR5/2)	良好	1mm以下の黒雲母・金雲母を多量に含む	良好	
22	丸瓦	－	(11.9)	－	灰白色(7.5Y7/1)	良好	2mm以下の石英・長石等若干含む	良好	

第6節　その他構内の立会調査

1　湯田宿舎給水管改修に伴う立会調査

調査地区　　山口市湯田温泉六丁目8－29　湯田職員宿舎構内

調査期間　　11月11・15・19・21日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約35㎡

調査結果　　工事は、宿舎東半部における給水管の布設替えに伴い、A～C棟間を幅50㎝、深さ95～180㎝にわたって掘削するものである。なお、各宿舎棟建築時に明らかに削平を受けている地域は調査対象から除外し、管路長にして約70mを実際に立会調査した。

各管路内とも現地表から65～95㎝下位に旧耕作土が残存し、その下には厚さ20～30㎝の灰黄色粘土が堆積する。掘削深度の深いC棟付近でそれ以下の堆積層を観察したところ、現地表から約2mまでの掘削で、上位から黒灰色粘土、青(緑)灰色粘土が堆積していた。黒灰色粘土は厚さ20～30㎝で、灰黄色粘土同様、遺物は包含していない。青(緑)灰色粘土は地山で、現地表から1.2～1.5mで上面が検出される。また、径約4.5㎝、現存長約20㎝の木杭2本が黒灰色粘土から打ち込まれていたが、出土遺物がないため時期は不明である。

なお、吉敷・湯田付近の小字名には「坪」の名が残り、古代の条理制が施行された地域と考えられている。湯田宿舎の敷地付近にも条里地割が存在したことが考えられるが、今回の調査では畦畔・水路等の条里遺構は検出されていない。　　(河　村)

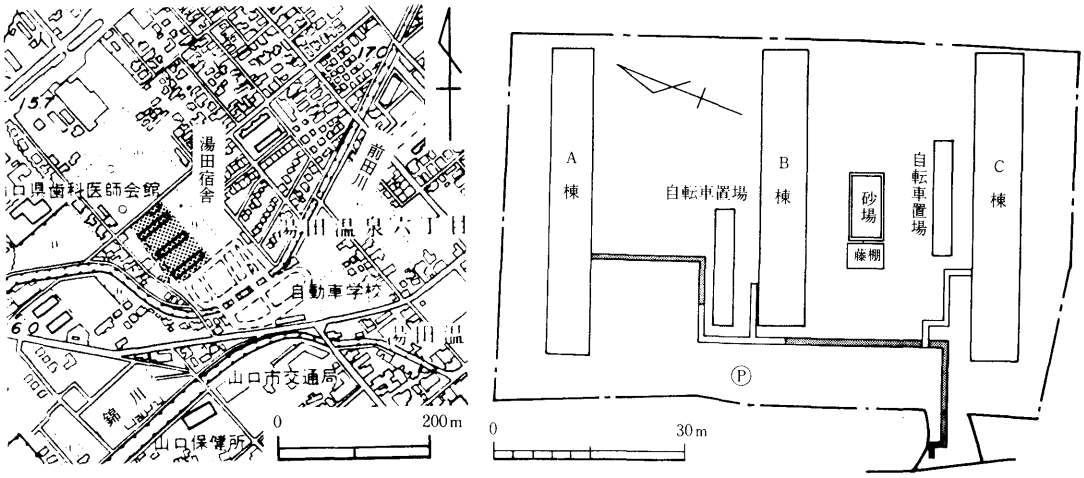


Fig. 58　調査区位置図

2　経済学部職員宿舎下水管改修に伴う立会調査

調査地区　　山口市水の上町６－９　　経済学部２号宿舎構内，

　　同　旭通り二丁目３－32　　同　　６号宿舎構内

調査期間　　昭和62年３月14日（６号宿舎）、同３月19日（２号宿舎）

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　２号宿舎 約７㎡、６号宿舎 約１㎡

調査結果　　本学の職員宿舎は山口市内各所に分散している。今回は、そのうちの一つである経済学部２号・６号各宿舎において、下水管改修に伴い立会調査を行なった。以下、宿舎ごとに分けて記述する。

〈２号宿舎〉

２号宿舎は、山口盆地の北西部、独立丘陵状の香山（こうざん）（標高約95ｍ）の西縁部付近に立地する。行政上山口市水の上町に所在し、西には一ノ坂川が盆地に流れ込んできている。

工事による掘削は、第１地点で現地表から80㎝、第２～４地点で50㎝までであったが、各地点とも工事掘削深度内は黄褐色の山土を主体とした埋め土であった。しかし、第４地点では埋め土中から丸瓦を検出した。

出土遺物（Fig. 60, PL. 16）

丸瓦の破片。側面の一部が残存するが、凸凹両面とも風化が著しい。凸面には、側面に平行および直行する刷毛目が施され、胎土は須恵質で砂粒を多く含み軟質である。室町時代を遡る可能性がある。

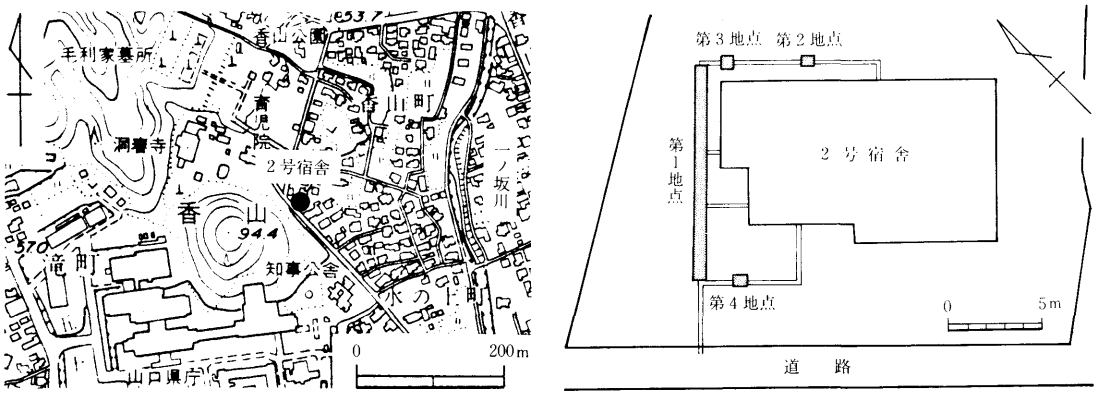


Fig. 59　調査区位置図（２号宿舎）

2号宿舎のすぐ北側にある洞春寺（とうしゅんじ）の山門は、室町時代の応永11年（1404年）、大内盛見（おおうちもりはる）によってこの地に創建された国清寺（こくしょうじ）に関連する遺構かと考えられている。[1] なお、現在のところ国清寺に関する考古学的資料は全くなく、今回出土した丸瓦が同寺に関係するものかどうか明らかでない。

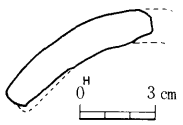


Fig. 60　2号宿舎出土遺物実測図

〈6号宿舎〉

6号宿舎は、行政上、山口市旭通りに所在する。一ノ坂川が椹野川へ合流する付近の一ノ坂川下流の右岸に位置し、一ノ坂川が形成した扇状地の扇端部付近に立地する。

山口盆地の遺跡立地は、その大半が河川流域の丘陵上で、盆地最大の扇状地である一ノ坂川扇状地に立地する遺跡はこれまでほとんど知られていない。わずかに扇央部に、弥生

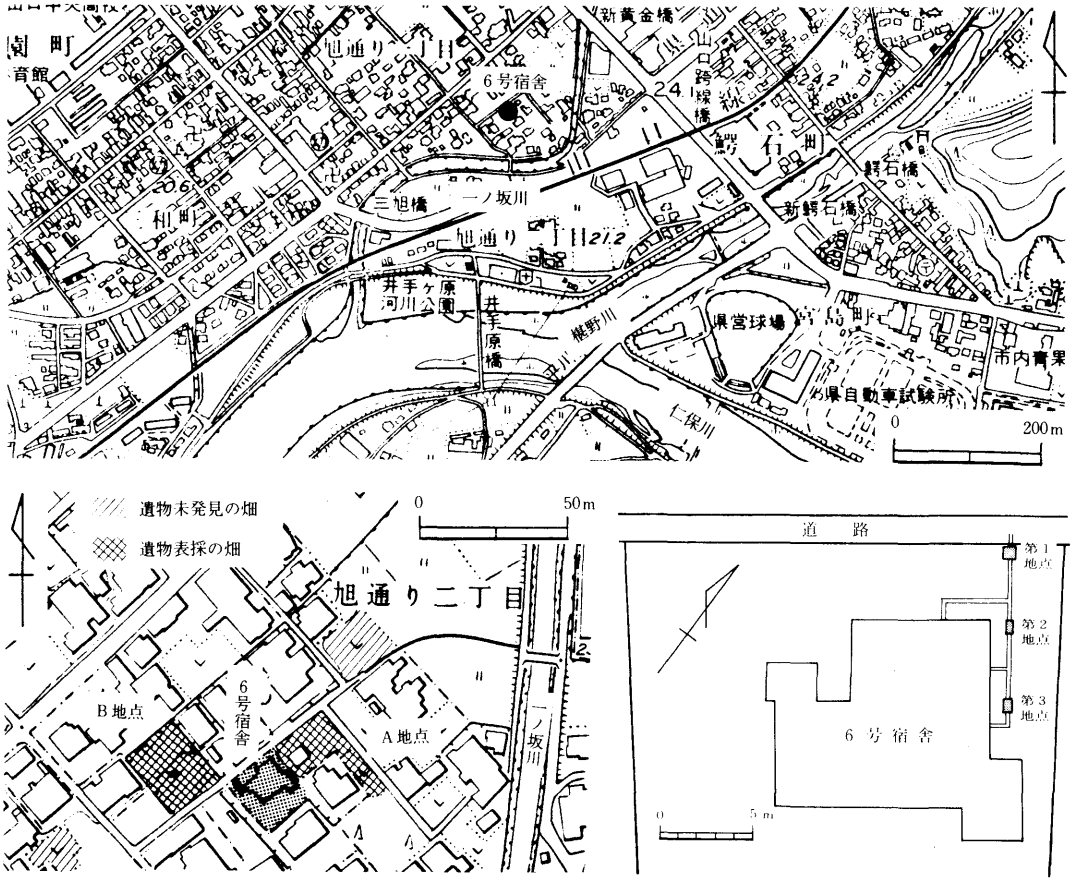


Fig. 61　調査区位置図（6号宿舎）

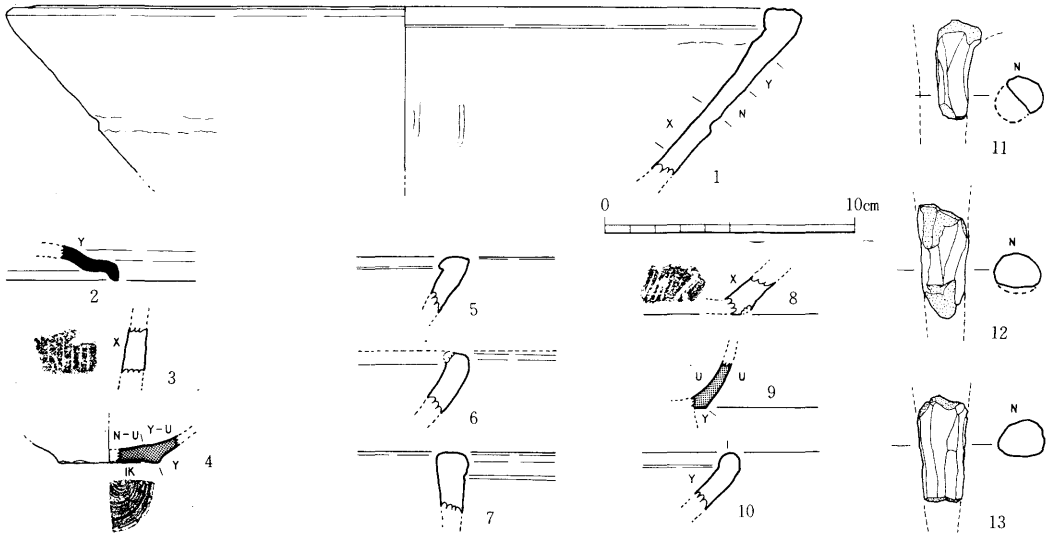


Fig. 62　6号宿舎出土遺物および周辺畑地採集遺物実測図（土器）

土器とともに縄文時代晩期の土器を出土した松柄（まつがら）遺跡が所在するにすぎない。遺物は地表下1mに堆積する砂礫層からの出土であり、二次堆積の可能性が高いとされている。[2)]

今回の調査は、布設管路内で3地点を選定し、土層の堆積状況を観察したものである。各地点とも、工事による掘削深度である現地表から50cmまでは埋め土（攪乱土）であったが、工事地域の北端部にあたる第1地点では、埋め土中から土師質土器が出土した。

なお調査期間中、周辺に存在する5枚の畑地で表面採集を試みた。その結果、今回の調査地域の東および北西に隣接する2枚の畑地で、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器および剥片の散布が認められた。以下、工事の際出土した遺物とあわせ紹介する。

出土遺物（Fig. 62－1，PL. 17）

土師質土器の擂鉢。口縁端部の内側に断面三角形の突帯を貼り付け、内側へ突出させる。剥落が著しいが、体部内面にわずかに櫛歯状工具による条線が認められる。

採集遺物（Fig. 62－2～13，Fig. 63，PL. 16・17）

A地点の畑地採集遺物（Fig. 62－2～4）

2は須恵器蓋坏の坏蓋で、体部はあまり屈曲することなく鳥嘴状の口縁部にいたり、端部は丸くおさめる。内外面とも横ナデ仕上げ。3は瓦質土器擂鉢で、内面に少なくとも6条の条線が施される。4は陶器小皿で、底部は回転糸切り放し。なお、小片のため図示しなかった残りの採集資料は、すべての土師質土器と瓦質土器に限定される。

B地点の畑地採集遺物

(Fig. 62－5～13、Fig. 63)

Fig. 62は土器。5～8は瓦質土器で、5・6は鍋ないしは擂鉢と思われ、5は口縁端部を内側へ丸く折り曲げる。7は甕で、外面にヘラによる削り出しを行ない、口縁端部はわずかに肥厚する。8は擂鉢の底部付近で、内面に少なくとも6条の条線を施す。5～8とも風化著しく調整不明。9は磁器埦で、高台付近は露胎である。10～13は土師質土器。10は鍋で、口縁端部をわずかに内側に巻き込む。内面横ナデ仕上げ。11～13は鼎の脚部で、体部付近のもの（11）と脚裾部に近いもの（12・13）とがある。いずれも指圧による整形後、ナデて仕上げを施す。他に、図示しなかったが土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・陶器がある。

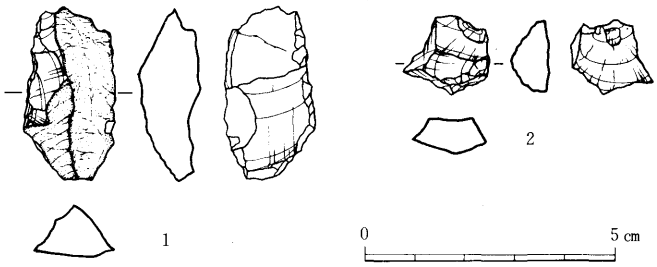


Fig. 63　6号宿舎周辺畑地採集遺物実測図（石器）

Fig. 63は石器。1は姫島産黒曜石製の縦長剥片。背面は左側縁上半部付近を除いたほぼ全面に自然面を残す。腹面は剥落が著しく、上端部の剥落によって打点・打瘤とも消失している。2は水晶製の剥片。背面は不定方向からの加撃による剥離面によって形成されており、打面の一定しない石核から剥離されたものと考えられる。腹面は主要剥離面で打瘤を残すが、背面上端部の剥落によって打点が消失している。

以下、小片のため詳細な時期比定は困難であるが、今回の調査で出土・採集した遺物の時期について考えてみる。A地点では、奈良時代の須恵器坏蓋、室町時代の擂鉢などが採集された。主体は中世以降のものであるが、B地点に比べ量的には少ない。B地点では、縄文時代に遡る可能性のある剥片などやや古い様相をもつものもあるが、大半は室町時代後半頃に位置づけられるもので、宿舎敷地内で出土した遺物と時期的に大差ない。

また、A・B両地点以外の畑地では遺物が全く認められないことから、遺物の散布は、A・B両地点間の東西約50m、南北約100mの範囲内に集中しているものと考えられる。

今回出土・採集した遺物は、室町時代後半頃を中心とした、時期的にまとまりのあるものであった。また、擂鉢・鍋・鼎を主体としており、中世村落通有の器種組成を示している。さらに、調査地点の埋め土には黄褐色粘土が多量に混入し、砂礫層が認められなかったことに留意したい。椹野川と仁保川との合流点付近から下流では、現在の椹野川の河道の両岸一帯約600mの範囲内に旧河道がおさまるところが多いとされ[3)]、今回調査地区周辺

でも、椹野川の氾濫原は現在のところ確認されていない。

以上のことから、直接遺構・遺物包含層から遺物を検出してはいないものの、当該調査地域周辺に安定した遺構面が存在し、未周知の中世の遺構・遺物包含層が埋存している可能性が指摘できるにいたった。　（河　村）

〔注〕

1）山口市教育委員会『山口の文化財』（1982年）。国清寺は、常栄寺と名を改め、のち山口市宮野の地へ移って現在は雪舟庭として有名。この移転後の跡地に明治２年（1869年）、洞春寺が萩から移建されて、現在にいたる。山門は国清寺当時のものとされ、同じく室町時代の建築とされる観音堂とともに、国指定の重要文化財。

2）前田耕次「原始・古代」（『山口市史』、山口市史編集委員会編、1982年）。

3）三浦肇「自然」（『山口市史』、山口市史編集委員会編、1982年）。

Tab.　7　出土遺物および採集遺物観察表

法量（　）は現存値

No.	器　種	口径 ＊底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色　調	胎　土	焼成	備　考
2号宿舎　第4地点埋土(Fig.60)							
－	丸　瓦	－	(3.9)	器表－暗青灰色(5PB4/1) 器肉－灰白色(7.5Y8/2)	やや粗　4mm大の長石かなり含む。角閃石含む	不良	
6号宿舎　第1地点埋土(Fig.62)							
1	土師質土器擂鉢	31.8	(6.7)	外面－にぶい橙色(5YR7/3) 内面－灰白色(10YR8/2)	やや不良　3mm以下の石英・長石かなり含む	きわめて良好	
A地点の畑地採集(Fig.62)							
2	須恵器　坏蓋	－	(1.4)	外面－灰白色(N　7/0) 内面－青灰色(5B6/1)	良好　細砂ごく少量含む	良好	
3	瓦質土器　擂鉢	－	(1.8)	器表－暗青灰色(5B4/1) 器肉－灰白色(2.5GY8/1)	良好　1.5mm以下の長石含む	良好	
4	陶器　小皿	＊3.8	(1.1)	素地－赤褐色(10R4/3) 釉－極暗赤褐色(10R2/2)	精良　砂粒ほとんど含まない	良好	回転糸切り
B地点の畑地採集(Fig.62)							
5	瓦質土器 擂鉢か鍋	－	(2.2)	器表－暗灰色(N　3/0) 器肉－にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好　2mm以下の長石かなり含む	良好	
6	瓦質土器 擂鉢か鍋	－	(2.4)	器表－暗青灰色(5B3/1) 器肉－灰白色(10Y8/1)	良好　3mm以下の石英・長石含む	良好	
7	瓦質土器　甕	－	(2.5)	器表－青灰色(10BG6/1) 器肉－灰白色(5Y8/2)	良好　2mm以下の砂粒若干含む	きわめて良好	
8	瓦質土器　擂鉢	－	(1.5)	器表－灰色(N　4/0) 器肉－灰白色(10Y8/1)	精良　1mm以下の砂粒わずかに含む	きわめて良好	
9	磁器　埦	－	(2.0)	素地－灰白色(7.5Y8/2) 釉－明オリーブ灰色(5GY7/1)	精良　砂粒含まない	良好	細かい貫入あり
10	瓦質土器　鍋	－	(2.3)	外面－淡橙色(5YR8/3) 内面－灰白色(10YR8/2)	やや不良　1mm以下の長石等含む	良好	
11	土師質土器　鼎	－	(4.0)	橙色(2.5YR7/6)	良好　1mm以下の石英・長石若干含む	良好	二次加熱による赤変著しい
12	土師質土器　鼎	－	(4.6)	灰白色(10YR8/2)	やや粗　1.5mm以下の石英・長石若干含む	良好	部分的に二次加熱による赤変
13	土師質土器　鼎	－	(4.3)	淡橙色(5YR8/4)	良好　1mm以下の砂粒若干含む	良好	部分的に二次加熱による赤変

No.	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　質	備　考
B地点の畑地採集(Fig.63)							
1	石器剥片	3.4	1.8	1.2	6.1	黒曜石(姫島産)	
2	石器剥片	1.5	1.7	0.7	1.5	石英(水晶)	

付篇Ⅰ

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)

河　村　吉　行

1　調査の経過

遺跡保存地区は吉田構内の南西部、サッカー場と第一学生食堂間に位置し、約2000m²の指定地内に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡21棟が現地保存されている。発掘調査の経緯は先の年報で詳述しており[1)]、本稿ではその概要を記すにとどめる。

大学統合移転に伴う諸工事の進行する昭和41年、遺跡保存地区の東に隣接する第一学生食堂敷地内で弥生時代中期の土器が出土した。これを受けて、昭和42年に組織された吉田遺跡調査団は、サッカー場・ラグビー場予定地で遺構・遺物包含層の範囲確認調査を実施した。その結果、当該地域から弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡が多数検出され、住居および集落の変遷が把握できる、良好な分布状態を示していることから、「遺跡保存地区」として現地保存された。しかしその後、吉田遺跡調査団は統合移転諸工事への対応に忙殺され、遺跡保存地区全域の発掘調査は容易に実施できない状態であった。

昭和56年度以降、遺跡保存地区と一連の集落であったと考えられる同時期の竪穴住居跡が周辺でも検出され、遺跡保存地区の重要性が再確認された。しかし遺跡保存地区内の各竪穴住居跡の個別具体的な資料がほとんどなく、吉田構内はもとより周辺の諸遺跡との比較・検討作業を進める上で大きな障害となっていた。また遺跡保存地区で検出されている竪穴住居群は、吉田構内での弥生時代以降の集落像を明らかにするための不可欠なモデルであり、環境整備を進める上からも発掘調査による具体的な資料収集が必要であるとの判断から、昭和57年度以降、3ヵ年にわたって発掘調査を実施することとなった。

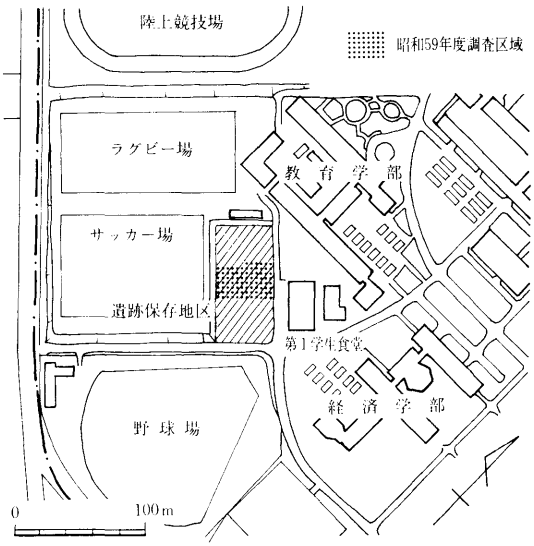


Fig. 64　調査区位置図

2　調査の概要

昭和57年度は北端部約900㎡を調査し、竪穴住居跡７棟、土壙33基、溝３条を検出した。

竪穴住居跡は調査区の南・西部を中心に分布しており、弥生時代中期前半～中頃１棟、中期後半２棟、後期後半～古墳時代初頭３棟および弥生時代中期と思われるもの１棟があるが、切り合い関係から少なくとも四時期に細分可能である。平面形態は、中期のものはすべて円形で、宇部市北迫遺跡[2]・防府市大崎遺跡[3]等の中期後半の竪穴住居に見られるような隅丸方形のプランをもつものはなく、円形から方形への平面形態の変化は遺跡保存地区では時期的にやや遅れる傾向にある。中期前半～中頃には規模の大形化した竪穴住居が出現している。大形化のピークに達する中期後半では力学的配慮から主柱数が増加するとともに、主柱が竪穴住居の周壁により近接して配置されるようになり、竪穴住居内の空間分化にひとつの画期が認められる。土壙は弥生時代中期前半～古墳時代前期のもので、中期に属するものが多い。規則的な分布状況ではなく、住居との対応関係は必ずしも明らかではないが、単純計算すると１棟の竪穴住居に３～４基の土壙が伴うものかと推察された。

昭和58年度は前年度調査地域の南隣、つまり遺跡保存地区中央部での調査を予定していたが、施設整備に伴う緊急調査のため先送りとなり、昭和59年度に実施することとなった。

昭和59年度の調査は、昭和59年７月27日から10月16日まで約790㎡について実施した。検出した遺構には竪穴住居跡10棟、土壙19基、溝10条、河川跡、柱穴等がある。

竪穴住居跡は、弥生時代中期後半～古墳時代中期のもので、調査区南半部に集中し、切り合いが著しい。平面形態は円形・方形・長方形の３種があり、円形のものは中期が主体で、後期には方形のものと混在する。壁溝は第10・12号竪穴住居跡を除いた大多数の住居跡に存在し、壁溝の有無による時期差は認められない。最大規模である５世紀後半の第13号竪穴住居跡はベッド状遺構・炉等の屋内施設をもつ火災住居で、床面上には桁および梁と思われる炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で出土した。また桁・梁の周囲に、床面中央に向かって棰木と思われる約20本の炭化材も確認され、竪穴住居の構造形式を知る上で興味深い。土壙は弥生時代中期中葉～終末のもので、平面形態は不整形のものが多い。溝は弥生時代中期後半～古墳時代初頭のもので、残存状態は悪く、遺物の出土量も極めて少ない。河川跡は古墳時代後期～奈良時代に機能していたもので、幅約2.6～4.5ｍ、検出面からの深さ約55～80㎝の規模をもち、南東から北西へ走行する。

なお９月14日には現地説明会を開催し、調査の成果を公表した。調査後は、遺構面を厚さ10～15㎝の真砂土で被覆した後、埋め戻しを行ない、旧状に復帰させている。

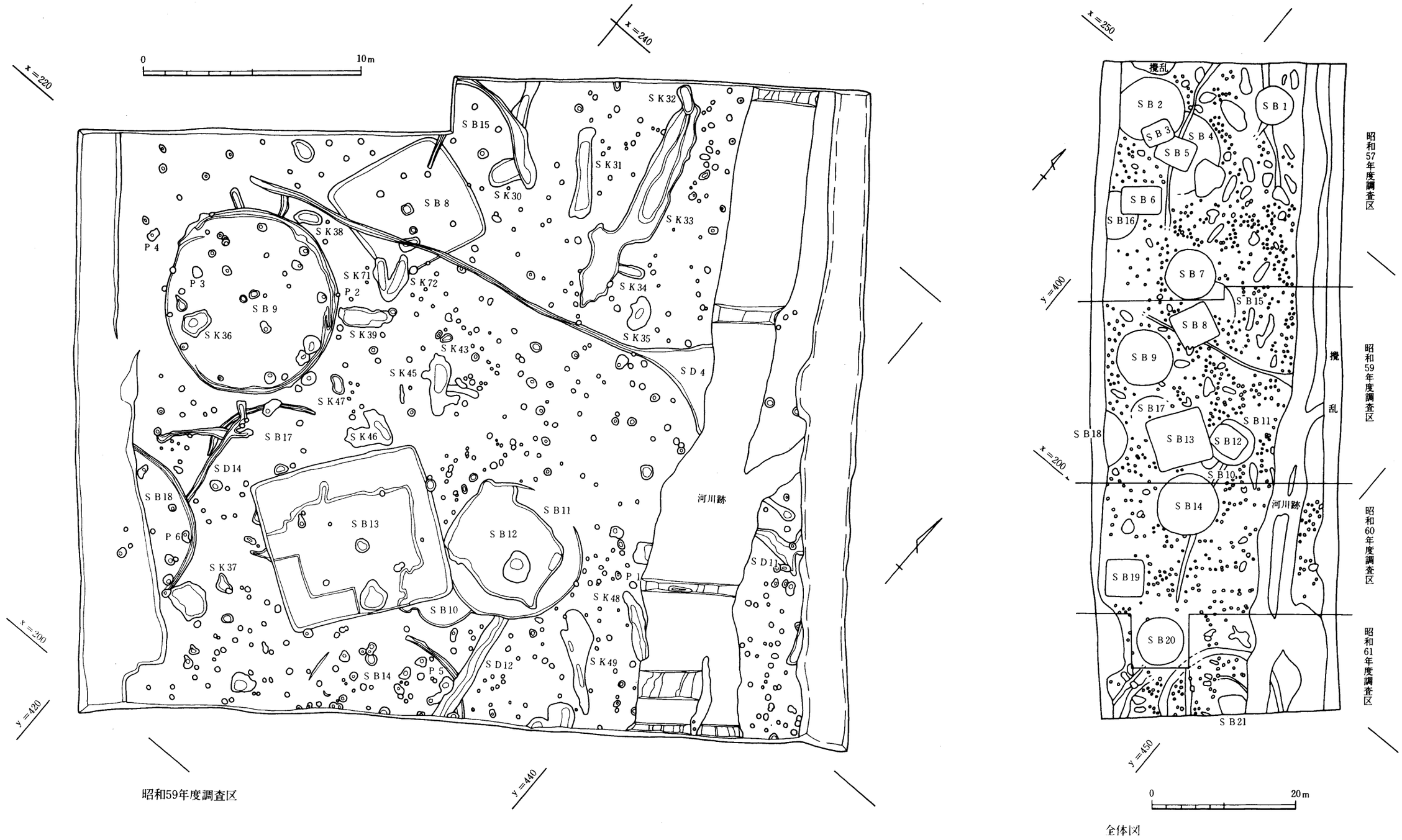


Fig. 65 遺跡保存地区　遺構配置図

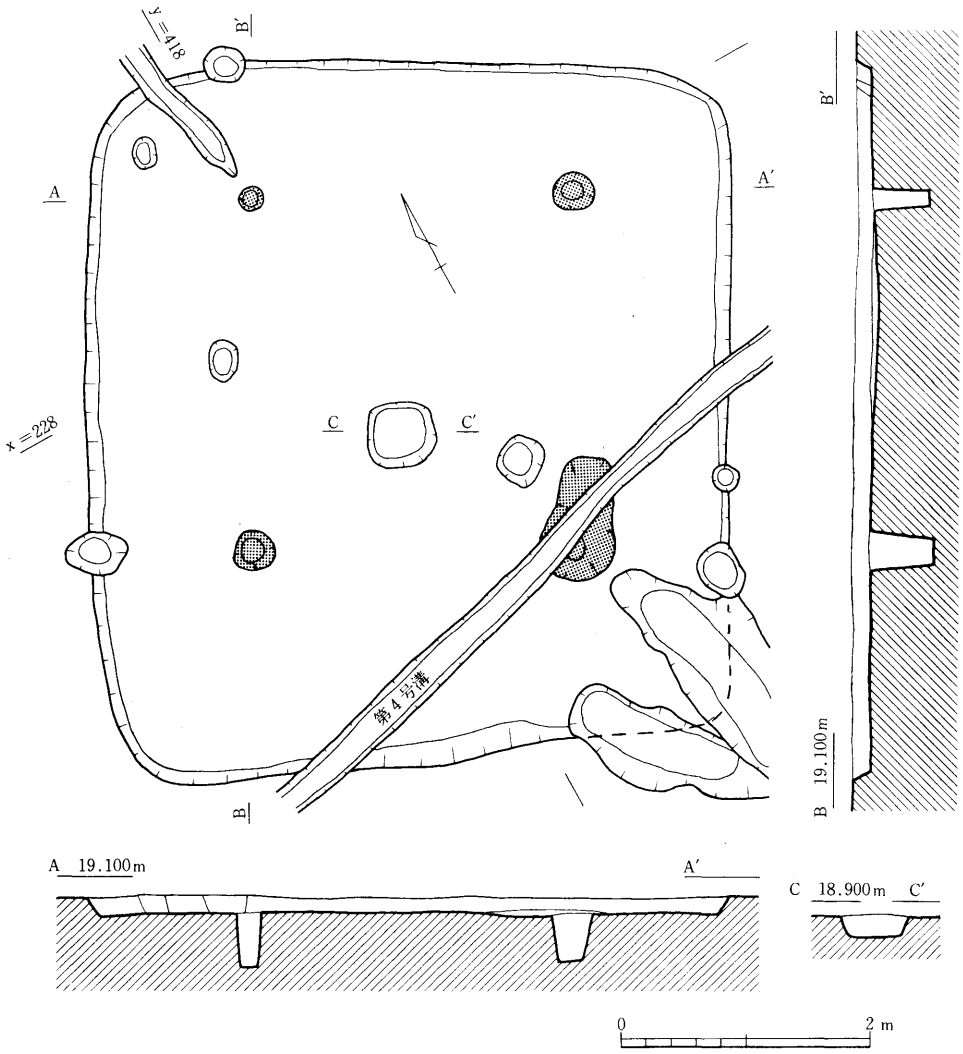


Fig. 66 第8号竪穴住居跡実測図

3 遺構・遺物

竪穴住居跡

第8号竪穴住居跡（Fig. 66）

調査区の西端中央部で検出した住居跡で、吉田遺跡調査団によってすでに部分的に調査がなされている。第71・72号土壙と重複している住居跡南端部のコーナーは検出できなかった。南端部は第4号溝によって切られているが、土壙との先後関係は明らかでない。平面形態は南辺がやや偏在する隅丸方形で、南北軸574cm、東西軸516cm、床面積25.55m²

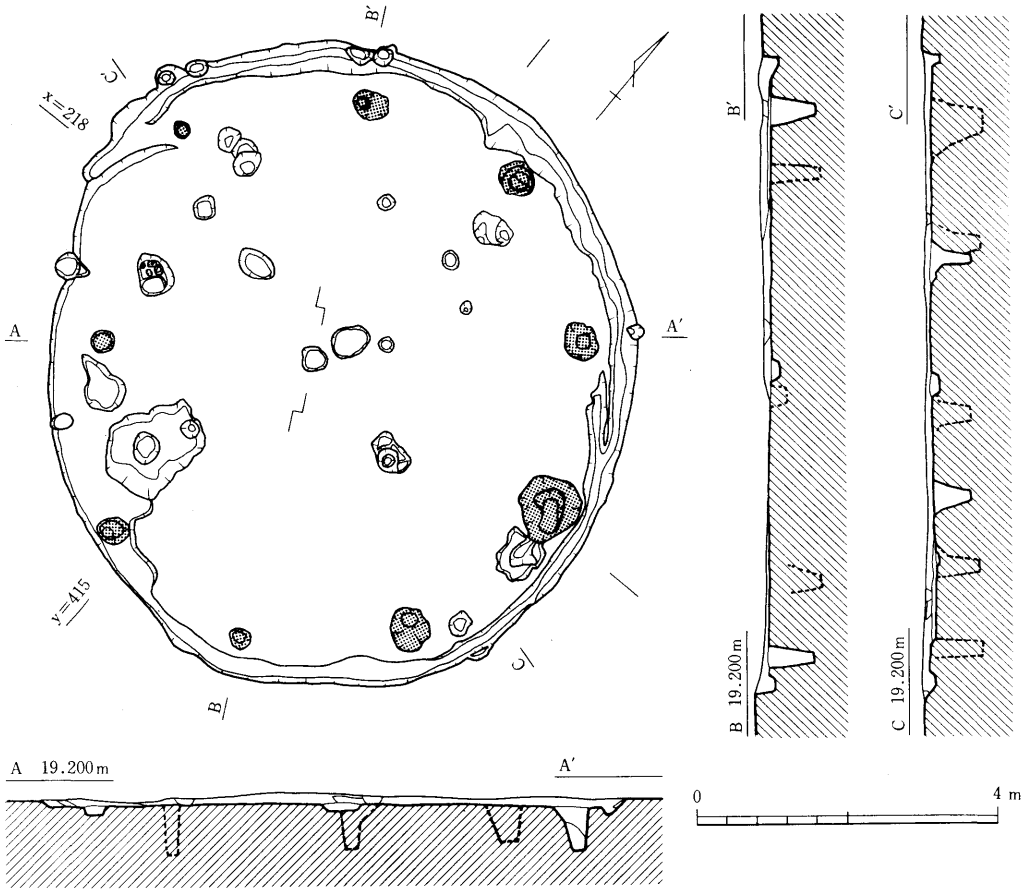


Fig. 67　第９号竪穴住居跡実測図

の規模をもつ。壁高は検出面から10～16cm残存する。主柱は北壁寄りに４本が方形に配置される。炉は中央よりやや南に造出され、平面形態は円形に近く径54～60cm、床面からの深さは18cmである。床面標高は約18.80ｍ。

出土遺物は少なく小片ばかりで図化できないが、丸底に近い甕の底部片があること、第４号溝との切り合い関係、住居の平面形態から、弥生時代後期後半頃に位置づけられよう。

第９号竪穴住居跡（Fig. 67, PL. 19(1)）

調査区の南西端部、第８号竪穴住居跡の南に隣接する弥生時代中期後半の住居跡で、第６号溝を切っている。平面形態はやや楕円形状を呈する円形で、上面径7.8～8.6ｍ、床面積48.39㎡の規模をもつ。残存状態が悪く、床面からの深さは最深部でも10cmを残すにすぎない。主柱は９本で、約2.3～3.0ｍ間隔に周壁に極めて近接して配置されている。また、

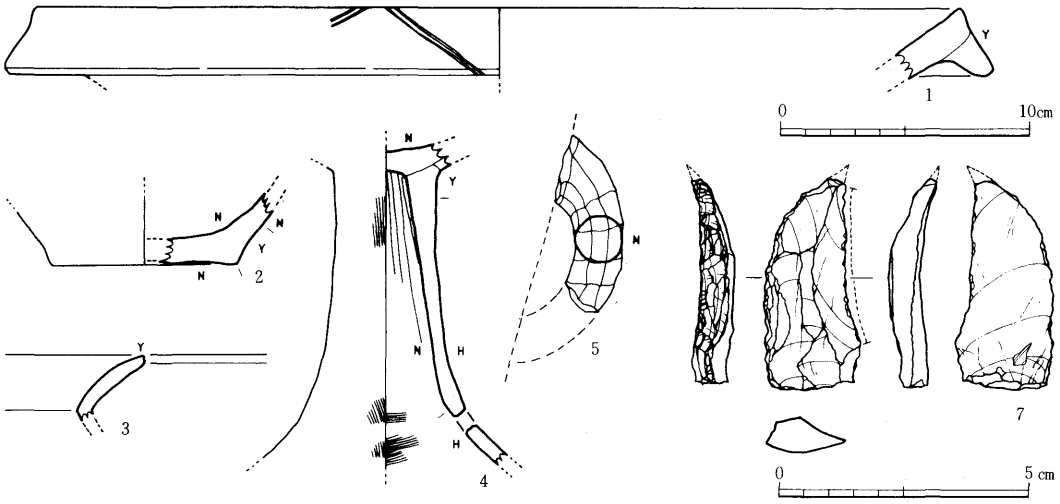


Fig. 68　第９号竪穴住居跡出土遺物実測図

中央穴を挟んで２ヵ所に支柱穴が認められる。なお、壁溝は上面幅20～30cm、床面からの深さ７～16cmで、南西部を除いて全周に巡るが、一部二重となる部分も存在する。西部には住居外への張り出しが認められ、床面へ向かって階段状に低くなっている。玄関的施設かもしれない。床面は北半部がやや高く、床面標高は18.80～18.90ｍである。

出土遺物は比較的多く、弥生土器壺・甕・高坏・把手・有翼支脚等がある。

出土遺物（Fig. 68, PL. 24－１～６・PL. 27－５・PL. 巻頭カラー）

１・２は壺。１は口縁部が斜め下方に短く下垂し、拡張部外面にはヘラによる２条単位の鋸歯文を施文する。３は甕で外彎ぎみに「く」の字に外反する口縁部をもつ。１・３は内外面横ナデ仕上げ。３は底部側面横ナデ、他はナデ仕上げ。４は坏部に中空の脚部を接合する長脚の高坏で、器壁は薄い。外面は縦刷毛目仕上げで接合部付近は横ナデ。脚部内面は穿孔部より上位はナデ、下位は横刷毛目仕上げ。坏部内面ナデ仕上げ。

５は把手で、指圧による粗雑な整形を施す。なお、図示していないが、有翼支脚の翼部（PL. 24－６）、鋤先状口縁をもつ壺等も出土している。

７は竪穴住居埋土中から出土したナイフ形石器（PL. 巻頭カラー）。先端部を欠損するが極めて優品である。遺構検出面である黄褐色粘質土が旧石器時代の遺物包含層で、竪穴住居掘削時に同層から遊離した可能性も考えられる。

対向する打面をもつ石核から剝離された縦長剝片を素材とする一側縁加工のナイフ形石器で、背面左側縁には下縁部を除いてほぼ全縁に腹面側からのブランティングが行なわれ

ている。基部は未調整で打点が残存する。やや彎曲する刃部には使用痕と思われる微細な剝落痕が認められる。メノウ製。

第10号竪穴住居跡（Fig. 69, PL. 19(2)）

調査区の東端中央部に位置し、吉田遺跡調査団によってすでに検出されている小形の住居跡である。第11・13号竪穴住居跡に切られており、周壁の一部が残存しているにすぎない。平面形態は円形と思われ、推定上面径約3.0m、推定床面積約6.7m²の規模をもつものと思われる。遺存状態は悪く、壁高は検出面から7cmである。残存する床面には柱穴、炉跡、壁溝等は認められない。

出土遺物は今回はほとんどないが、吉田遺跡調査団の調査では短く緩やかに「く」の字に外反する口縁部をもつ弥生土器甕が出土し、[4]弥生時代中期前半の住居と考えられる。

第11号竪穴住居跡（Fig. 69, PL. 20(1)）

第10号竪穴住居跡の北東部を切って営まれた弥生時代中期後半の住居跡で、第12・13号竪穴住居跡によって切られている。平面形態は円形で、北部は後世の削平によって消失しているが、上面径684cm、床面積約31m²の規模をもつ。北東部には住居外へ張り出した弧状の造り出しが認められる。なお、南・北2ヵ所に設定したトレンチの所見では、重複する第12号竪穴住居跡の床面が本住居跡の埋土中に位置しており、本住居跡は完掘されていない。そのため柱穴・炉跡等は検出されていない。また壁高は検出面から約16cm残存しており、北部では壁溝が確認された。遺物は主にトレンチ内から出土したが、小片が多い。

出土遺物（Fig. 74－8～11, PL. 24－8～11）

8～11は甕。8は口縁部の破片で、端部は強い横ナデにより窪む。9は頸部下位に断面方形の突帯を貼付し、ヘラによる刻目を施す。内外面とも風化が著しい。なお、図化していないが、跳ね上げ口縁をもつ甕や、短く緩やかに外反する口縁部をもつ壺などがある。

第12号竪穴住居跡（Fig. 69, PL. 20(1)）

第11号竪穴住居跡の内部で検出した5世紀後半の住居跡である。平面形態はいびつな隅丸長方形で、東西軸515cm、南北軸410cm、床面積18.22m²の規模をもつ。南東隅のコーナーには住居外へ張り出す造り出しの部分がある。また北東隅のコーナー付近の床面には、東辺に接して床面より一段高い長さ約80cm、幅約40cmのテラス状の平坦面が存在する。柱穴は検出されなかったが、中央よりやや東寄りには長軸140cm、短軸116cm、床面からの深さ13cmの規模をもつ不整楕円形の炉跡が認められる。床面標高は約19.90m。

出土遺物には土師器甕・高坏がある。

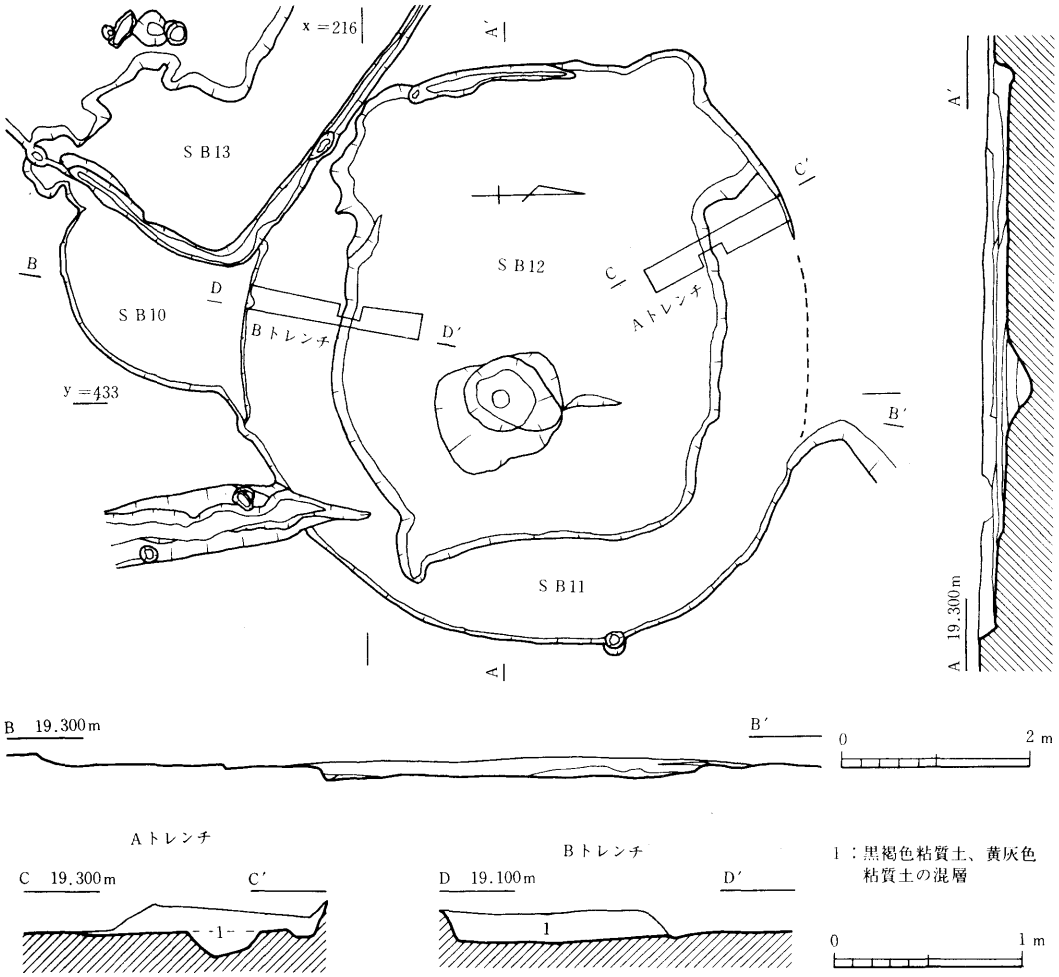


Fig. 69 第10～第12号竪穴住居跡実測図

出土遺物（Fig. 74－12～14, PL. 24－12～14）

12・13は甕。12は底部付近で、長胴の胴部になるものと思われ裾広がりの底部をもつ。胴部外面縦刷毛目、底部側面横ナデ、外底部・内面はナデ仕上げ。13は複合口縁をもつもので、口縁部は斜上方に立ち上がる。内外面とも横ナデ仕上げ。14は高坏で、わずかに屈曲して外彎ぎみに開く坏部をもつ。口縁部内外面横ナデ、坏部内面ナデ仕上げ。

他に住居跡内部からは、直立あるいは外上方へ立ち上がる複合口縁をもつ壺、外彎しながら短く「く」の字に開く甕、中位で反転して外彎しながら開くかなり大きな坏部をもつ高坏が出土したとされる。

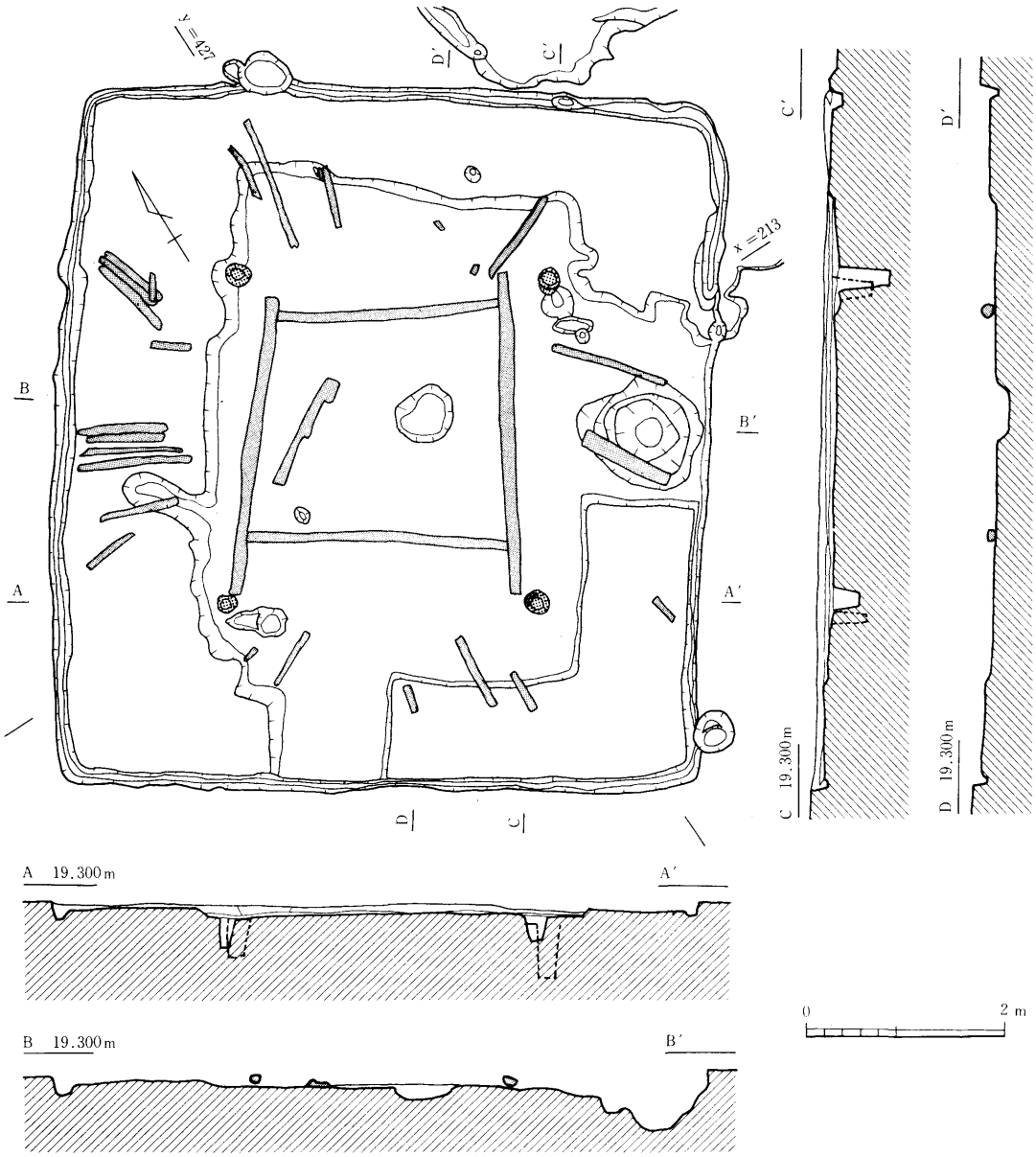


Fig. 70　第13号竪穴住居跡実測図

第13号竪穴住居跡（Fig. 70, PL. 20(2)・21・22(1)(2)）

調査区の南東部に位置する大形の竪穴住居跡で、第10・11号竪穴住居跡を切っている。平面形態は方形で、東辺760cm、西辺764cm、北辺720cm、南辺708cm、床面積53.63m²の規模をもつ。主柱は4本で、竪穴住居の平面形態と相似形をなして方形に配置される。

屋内施設として、周壁に沿って幅0.8～1.5m、床面からの高さ4～7cmのベッド状遺構が巡るが、南・東両辺の中央付近で途切れている。南辺部の空間は幅約120cmで、出入口と想定される。壁溝は上面幅10～20cm、ベッド状遺構上面からの深さ4～10cmであるが、東辺部では壁溝が確認できず、幅約170～210cmの空間があり、床面に炭化物の充填した長軸137cm、短軸120cmのほぼ円形の掘り込みが認められた。深さは床面から47cmで、底面・壁面は焼けている。前調査者である小野忠凞氏はこれを炊事用の炉と考え、この部分の空間が炊事場として使用されたものと推定している。設置場所、性格および竪穴住居の時期から、カマドが出現する前段階の施設と思われ興味深い。またこれとは別に、床面中央よりやや東には径65cm、深さ16cmの円形の炉跡が存在する。

さらにこの住居は火災に遭って廃絶したと思われ、床面上には桁・梁と思われる径12～15cmの4本の炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で検出されている。南・北の炭化材は桁と考えられ、その上位に東・西の炭化材が認められる。また、桁・梁の周囲には棰木と推定される約20本の炭化材が床面中央に向かって放射状に確認されているが、前回の調査ですでに大半が取り上げられたのか、今回の調査では数本しか検出できなかった。なお方形に組まれた桁・梁の内部の床面上には棰木に比べひとまわり大きな炭化材が認められ、規模・検出位置・桁との重複関係から、床面南西部に立てられた主柱の一部と推察される。棟木に対応する炭化材が認められないこと、桁・梁・棰木等の炭化材の検出状況、竪穴住居の平面形態、主柱の配置状況などから、寄棟造屋根が想定される。床面標高は約18.90m。

出土遺物には土師器壺・甕がある。

出土遺物（Fig. 74－15～18, PL. 24－15～18）

今回の出土遺物は小片が多く図化しうるものが少ない。18は、東壁中央部の炊事用の炉跡と思われる掘り込みから出土した複合口縁の甕。小さく屈曲する頸部から反転して、外彎しながら斜上方へ立ち上がる口縁部をもつ。内外面とも横ナデ仕上げ。

また、住居内からは土師器甕・壺・鉢・高坏等が出土したとされる。壺は口縁部外面に突帯を貼り付け複合口縁状になるもの、ほぼ直立する短い口縁部をもつものなどがある。鉢は丸底で、内彎して開く体部をもつ小形品3個体が図化されている。高坏はやや反り気味に大きく開く脚部に、内彎して立ち上がる坏部をもつものである。

切り合い関係からみると第12号竪穴住居跡より新しいが、総じて5世紀後半頃のものと考えられる。

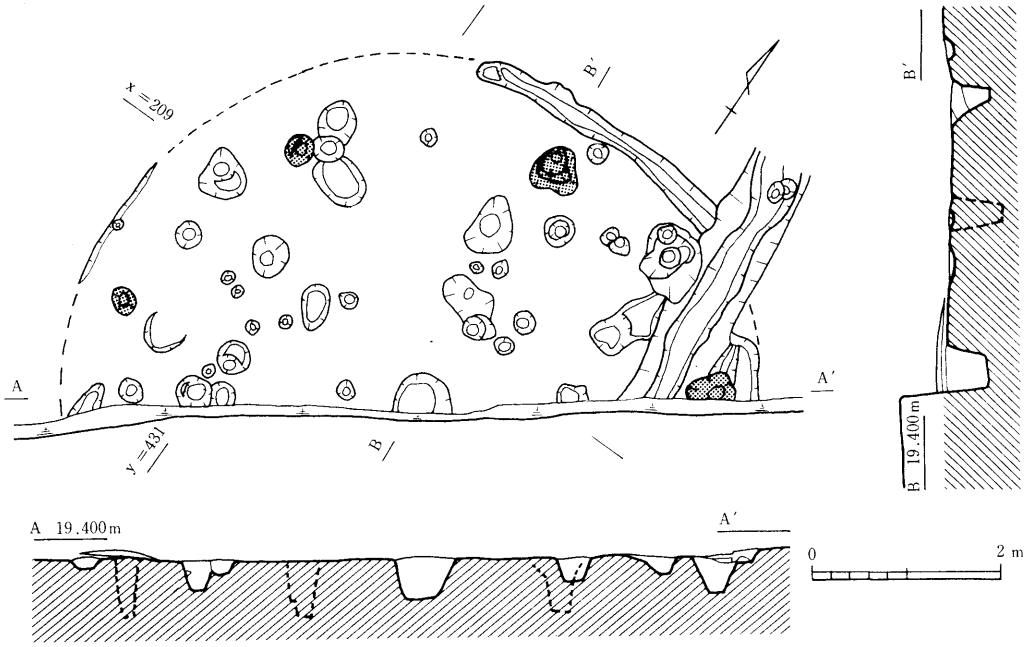


Fig. 71　第14号竪穴住居跡実測図

第14号竪穴住居跡（Fig. 71）

調査区の南東部、第13号竪穴住居跡の東に隣接する大形の住居跡で、吉田遺跡調査団によってすでに部分的に検出されている。昭和59年度の調査では住居の南半部が調査区外にあたるため完掘しなかったが、翌60年度の調査で延長部分を調査していることから、詳細は昭和60年度の調査報告に譲り、本稿ではその概要を記すにとどめる。

平面形態は円形と思われるが、削平が著しく周壁はほとんど消失している。径約7.4m、床面積約40m²前後の規模をもつものと推定され、一部に壁溝が巡っている。主柱は８本で中央穴が認められる。

遺物は全く出土しておらず、第12号溝との切り合い関係も判然としないため時期は明らかでないが、椹野川・佐波川各流域での竪穴住居の平面形態・規模・主柱数等から推して、弥生時代中期のものと考えられる。

第15号竪穴住居跡

調査区の西端中央部に位置する平面形態が円形と思われる住居跡である。後世の削平によって周壁が消失しているが、弧状に巡る壁溝の存在によって住居跡として取り扱った。上面径約870cm、床面積約50m²前後の規模をもつものと推定されるが、主柱数、屋内施設

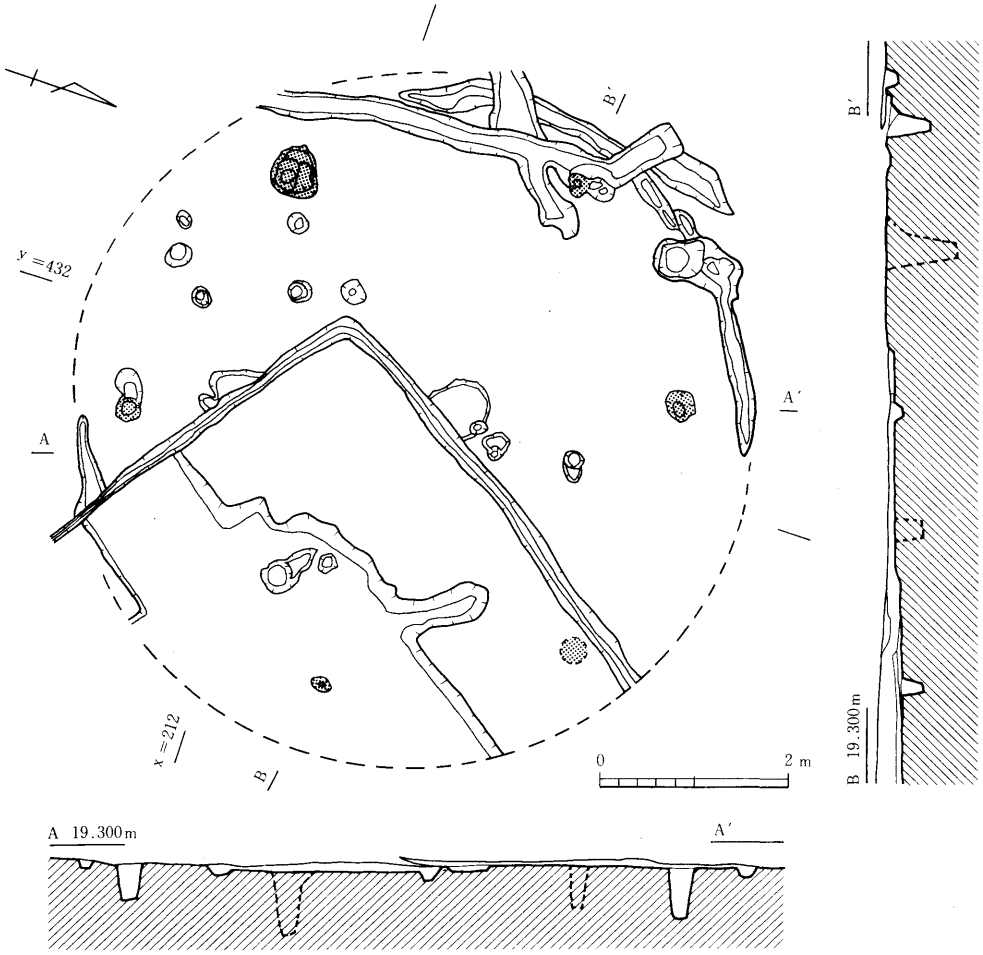


Fig. 72　第17号竪穴住居跡実測図

等は明らかではない。

出土遺物はないが、弥生時代中期と考えられる第７号竪穴住居跡に切られており、遺跡保存地区での円形の平面形態をもつ竪穴住居跡の時期、分布状況などから弥生時代中期のものと思われる。

第17号竪穴住居跡（Fig. 72, PL. 22(3)）

調査区の南部で検出した住居跡であるが、後世の削平によって周壁が消失しており、壁溝のみが残存する。第13号竪穴住居跡によって東半部が半分近く切られている。壁溝の検出状況から、平面形態は円形と思われ、径約3.6m、床面積約35m²前後の規模をもつものと推察される。主柱は１本未検出であるが６本が配置されたものと考えられ、床面中央に

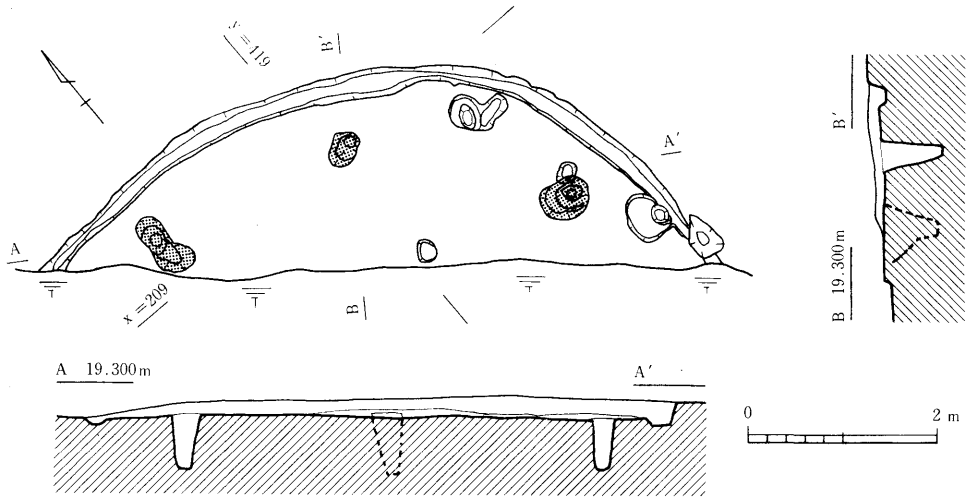


Fig. 73 第18号竪穴住居跡実測図

は中央穴が存在する。

壁溝・柱穴からの出土遺物はなく時期は明らかでないが、第14号竪穴住居跡同様、平面形態・規模・主柱数から推して弥生時代中期のものと思われる。

第18号竪穴住居跡（Fig. 73, PL. 22(4)）

調査区の南端部、第17号竪穴住居跡の南に隣接する弥生時代後期終末の住居跡である。昭和59年度の調査で新たに検出したもので、西半部はサッカー場の造成時に削平され消失しているが、残存部分では検出面から最大18cmの壁高を測る。平面形態は円形と思われ、上面径約９ｍ、床面積約55m²前後の規模をもつものと推定される。床面には、周壁に沿って上面幅15～25cm、床面からの深さ３～５cmの壁溝が巡る。住居に伴う柱穴は周壁寄りに３個認められ、住居の平面規模、柱穴間隔から７本の主柱が想定される。床面は東から西にわずかに下降しており、床面標高は18.95～19.00ｍ。

出土遺物は第９号竪穴住居跡に次いで多く弥生土器甕・壺・鉢などがあるが、図化しうるものは少ない。

出土遺物（Fig. 74－19～22, PL. 24－19～21・PL. 27－22）

19～21は甕。19はやや古い要素をもつもので、口縁端部内面に貼土帯を貼付して肥厚させ、端部外面には２条の凹線が巡る。風化が著しく調整不明。22はほぼ丸底に近い底部をもつ鉢で、体部は内彎しながら開き、口縁部は短く外反する。口縁部内外面横ナデ、底部内外面ナデ仕上げで、体部は風化のため調整不明。

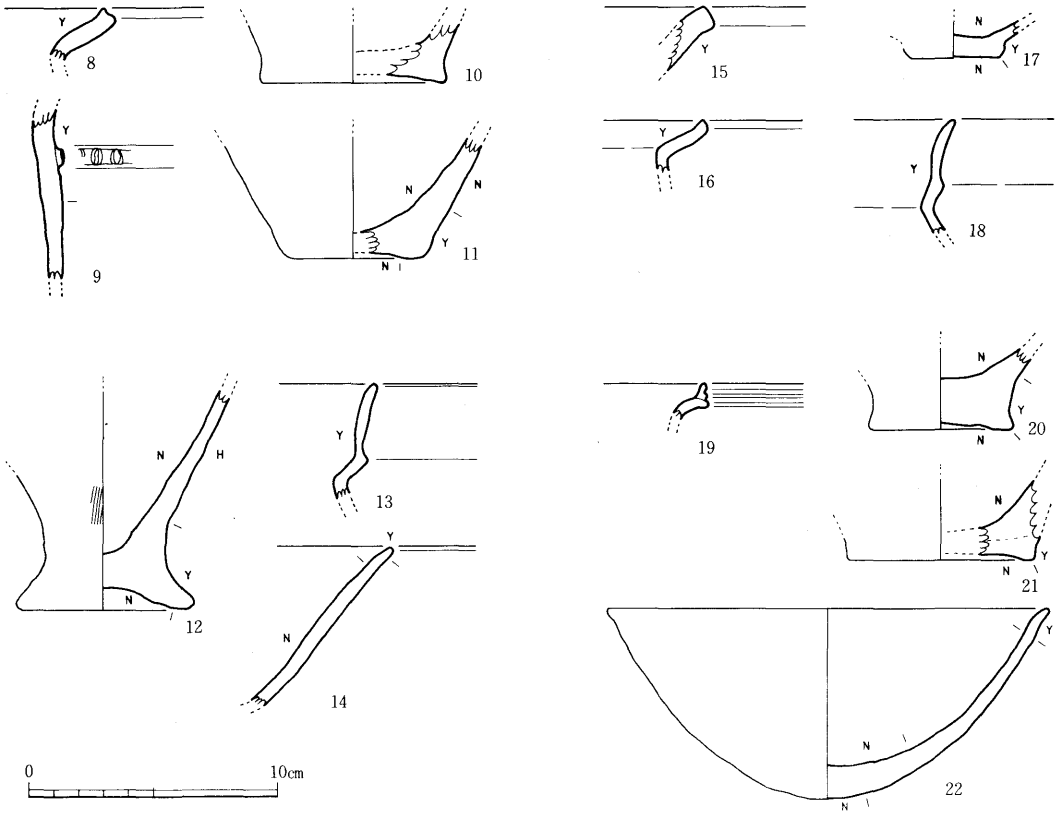


Fig. 74　第11～13・18号竪穴住居跡出土遺物実測図

土壙

弥生時代中期中葉から終末にかけてのもの19基を検出した。集中範囲は認められず、調査区全域に分布する。平面形態は不整形であるが、長楕円形状を呈するものが多い。

以下、主なものを述べる。

第30号土壙（Fig. 75）

調査区の西端中央部に位置し、北部が第15号竪穴住居跡と切り合っているが、先後関係は明らかでない。平面形態は長方形に近いものと思われ、長軸144cm以上、短軸100cmの規模をもつ。南辺部の壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、深さは検出面から24cmである。長軸方向は北東－南西で、底面標高は約18.70m。

出土遺物は弥生土器甕・高坏等であるが、小破片が多く出土量も少ない。弥生時代後期。

出土遺物（Fig. 77－23～25, PL. 24－23・25）

23はやや裾広がりになる窪み底の甕の底部と思われるもの。外面は接地面より上位が横

ナデ、外底面および内面ナデで、内面のナデは粗雑。24・25は坏部に脚部を挿入する高坏の脚部。24は坏部と脚部の接合部から斜下方へそのまま開く。内面ナデ仕上げ。外面風化のため調整不明。25は短い脚柱部を有するもので、内外面とも風化著しく調整不明であるが、脚部内面にわずかにシボリ痕が認められる。

第31号土壙（Fig. 75）

調査区の西端中央部付近、第30号土壙の西に隣接する土壙である。他の遺構との切り合い関係はない。平面形態は不整長方形をなし、長軸416cm、短軸66cmの規模をもつ。北・南両壁面の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは15～20cmである。長軸方向は北西－南東で、底面標高は約18.75m。出土遺物には弥生土器甕・壺等がある。弥生時代後期。

出土遺物（Fig. 77－26～28, PL. 24－26～28）

26・28は甕。26は直線的に開く長めの口縁部をもち、端部は強い横ナデによりやや窪む。内外面とも横ナデ仕上げ。28は窪み底の底部で接地面から側面付近にかけて横ナデ、他はナデ仕上げ。27は壺の底部で、側面付近は粗雑な横ナデ、他はナデ仕上げ。

第32号土壙（Fig. 75）

調査区の北端部付近に位置し、第33号土壙を切っている。平面形態は長楕円形で、長軸122cm、短軸55cm、検出面からの深さ42cmの規模をもつ。長軸方向は北西－南東で、底面標高は約18.50m。出土遺物はなく、時期は明らかでないが、第33号土壙との切り合い関係から弥生時代後期のものと考えられる。

第33号土壙（Fig. 76）

調査区の北西部に位置する大形の土壙で、第32号土壙によって切られている。南北に長い特異な平面形態で、南北長10.70m、短軸145cmの規模をもつが、南半部で不規則に屈曲しており、2基の土壙ないしは溝と土壙とが重複している可能性がある。北半部は2段にわたって掘り込まれており、検出面からの深さは約40cm、南半部では約15cmである。底面標高は北半部で約18.55m、南半部では約18.80mで、長軸方向は北－南。出土遺物は弥生土器壺・甕等比較的多いが小片で、図化しうるものは極めて少ない。弥生時代後期。

出土遺物（Fig. 77－29・30, PL. 24－29・30）

29は壺の肩部で、ヘラによる沈線の区画内に有軸羽状文を施文する。内外面とも風化著しく調整不明。30は底径の小さな上げ底の甕の底部。外底面・内面ナデ、他は不明。

第35号土壙（Fig. 75）

調査区の北半中央部、第33号土壙の東に隣接する土壙である。平面形態は不整形な楕円

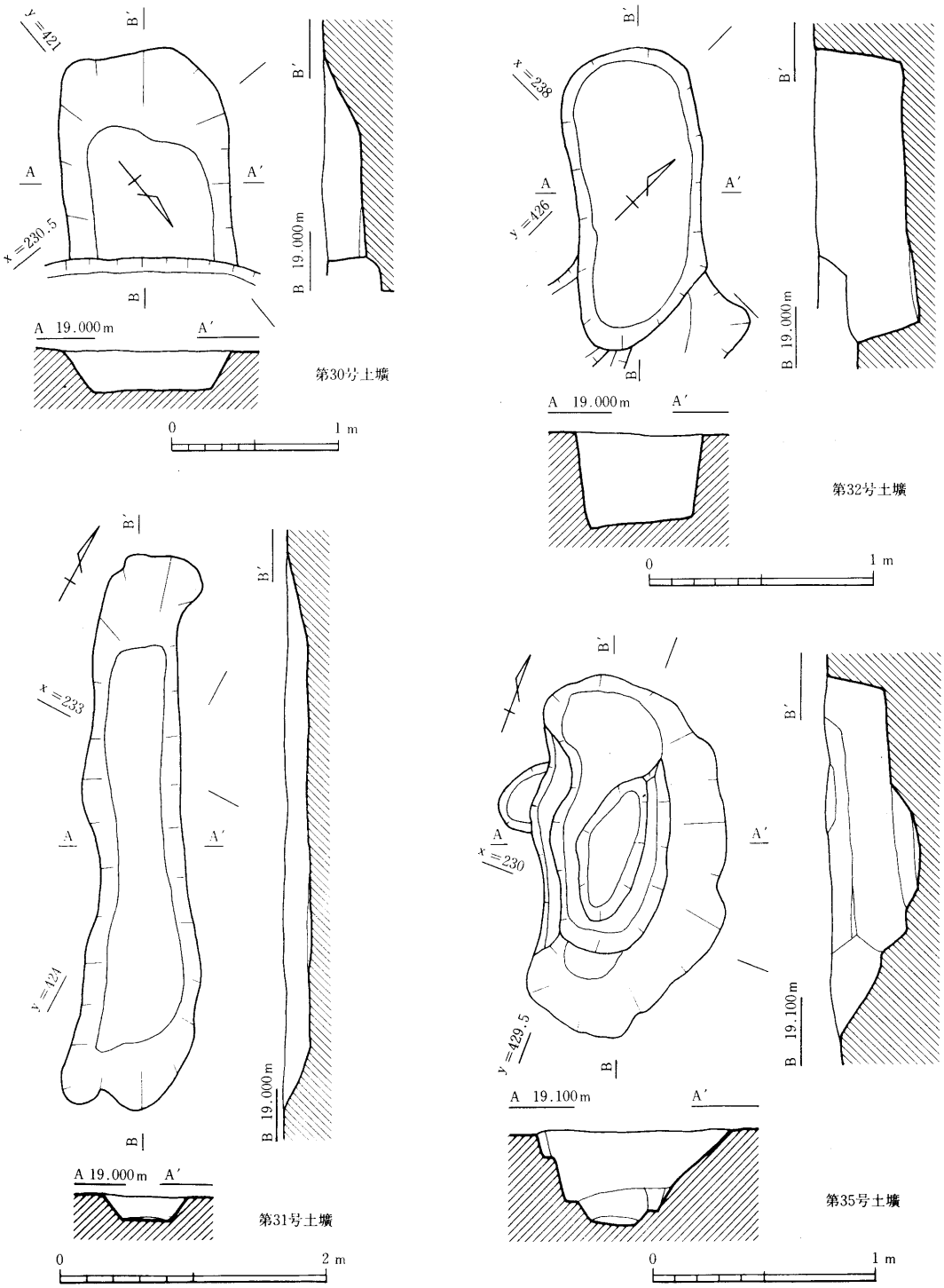


Fig. 75　第30～32・35号土壙実測図

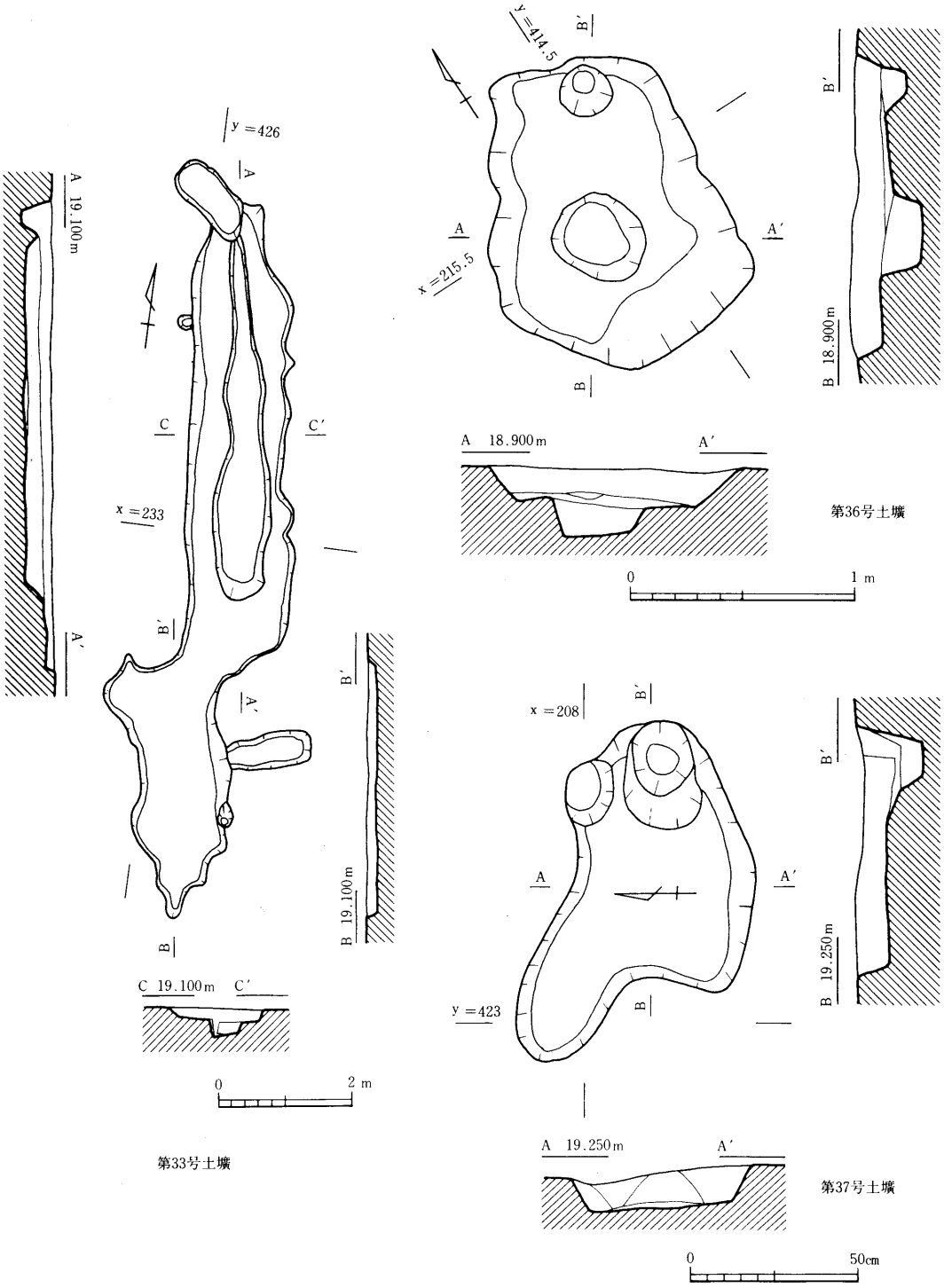


Fig. 76 第33・36・37号土壙実測図

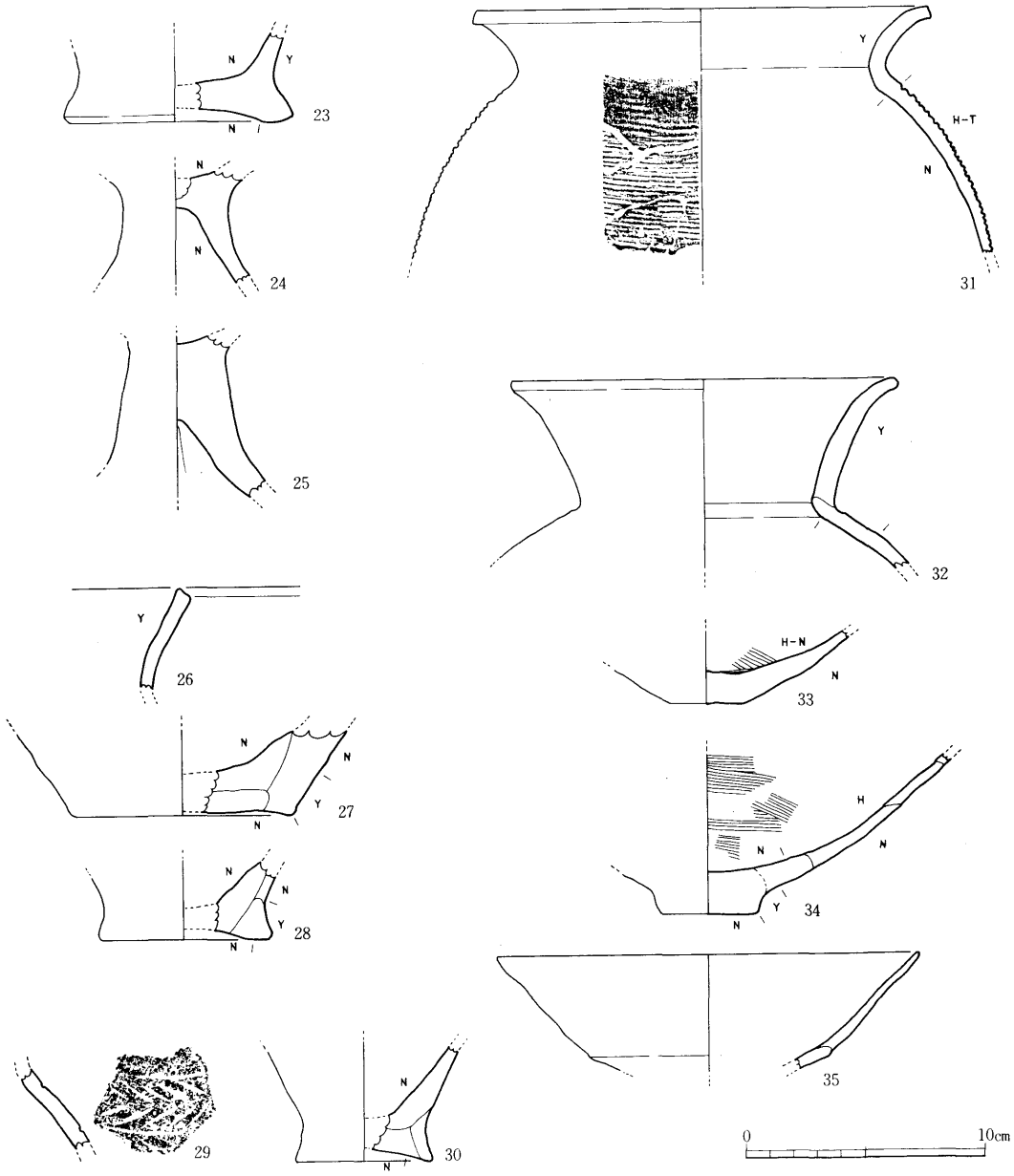


Fig. 77　第30・31・33・36・39号土壙出土遺物実測図

形状を呈し、長軸161cm、短軸87cmの規模をもつ。2～3段にわたって掘り込まれており、北半部の平坦面は南に向かって下降している。底面は狭く、長軸約60cm、短軸約20cmで、検出面からの深さは42cmである。底面標高は約19.55mで、長軸方向は北－南。

出土遺物は皆無で、他の遺構との切り合いもなく時期不明。

第36号土壙（Fig. 76）

調査区の南西部、第９号竪穴住居跡の内部で検出した小形の土壙である。出土遺物から、住居跡より時期的に新しく、弥生時代終末に比定されるが、調査時には切り合い関係はつかめなかった。平面形態は不整長方形状を呈し、長軸135㎝、短軸110㎝、検出面からの深さ15㎝の規模をもつ。底面の中央部よりやや南には径35～40㎝、底面からの深さ12～18㎝の円形の掘り込みが存在するが、本土壙に伴うものかどうか明らかでない。底面標高は約18.60ｍで、長軸方向は北東－南西。出土遺物には庄内式併行期の甕がある。

出土遺物（Fig. 77－31, PL. 27－31）

31は甕。口縁部は内面に稜をもたず、「く」の字に外彎しながら開き、端部はさらに外反する。口縁端部外面は面をもつ。胴部外面タタキ、内面ヘラケズリ、頸部～口縁部内外面横ナデ仕上げ。外面ほぼ全面に煤の付着が認められる。

第37号土壙（Fig. 76）

調査区の南西部、第13・18号竪穴住居跡間に位置する小形の土壙である。西半部がくびれており、長軸75㎝、短軸55㎝、検出面からの深さ10～14㎝の規模をもつ。底面標高は約19.10ｍ。遺物は弥生土器小片若干が出土し、断面「Ｍ」字状の貼付突帯を有する壺の胴部片が含まれていることから、弥生時代中期に位置づけられよう。

第38号土壙（Fig. 78）

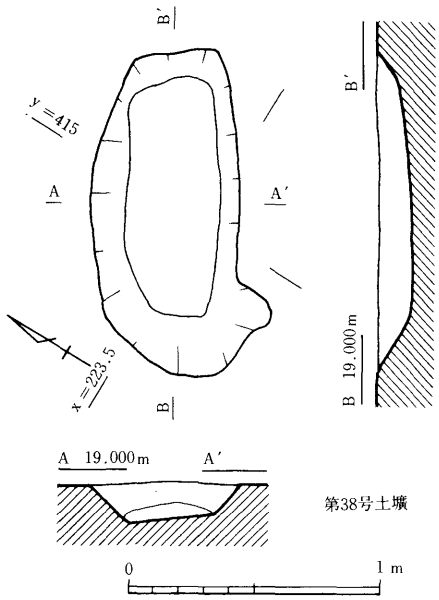
調査区の南西部、第９号竪穴住居跡の北に隣接する小形の土壙。平面形態は長楕円形で、長軸126㎝、短軸62㎝、検出面からの深さ14㎝の規模をもつ。底面標高は約18.80ｍ、長軸方向は北東－南西。出土遺物は皆無で、他の遺構との切り合いもなく、時期は不明。

第39号土壙（Fig. 78）

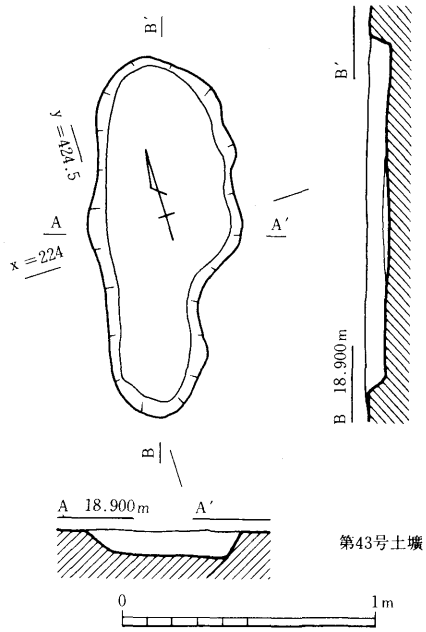
調査区中央部よりやや西、第９・18号竪穴住居跡間に位置する。第９号竪穴住居跡と極めて近接するが、切り合い関係にはない。平面形態は不整形な長方形状で、長軸251㎝、短軸88㎝の規模をもつ。西辺部には壇状の狭い平坦面がある。底面は北東から南西へ緩やかに下降しており、最深部で検出面からの深さが32㎝、底面標高が約18.70ｍとなる。長軸方向は北東－南西。出土遺物には庄内式併行期の壺・甕・高坏等がある。弥生時代終末。

出土遺物（Fig. 77－32～35, PL. 24－33～35・27－32）

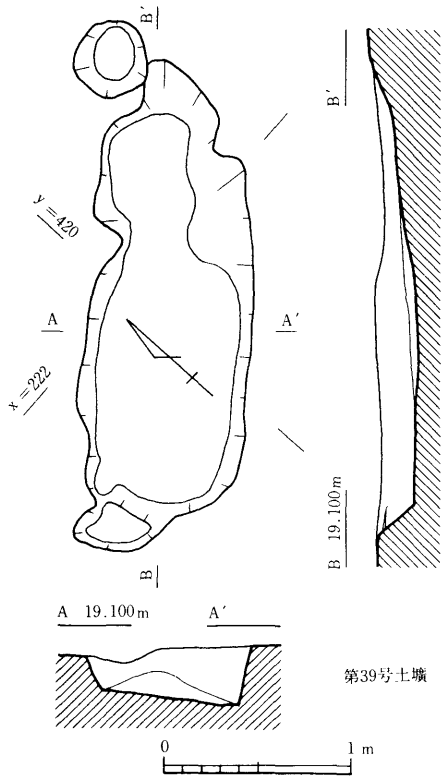
32は壺で、35と同一個体の可能性がある。口縁部は直線的に「く」の字の外反し、口縁端部はさらに外方へ内彎気味に開く。端部は丸くおさめる。精選された粘土を用い、頸部



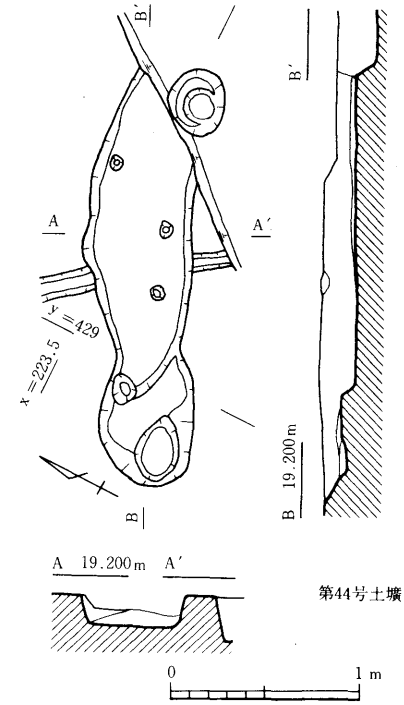
第38号土壙



第43号土壙



第39号土壙



第44号土壙

Fig. 78 第38・39・43・44号土壙実測図

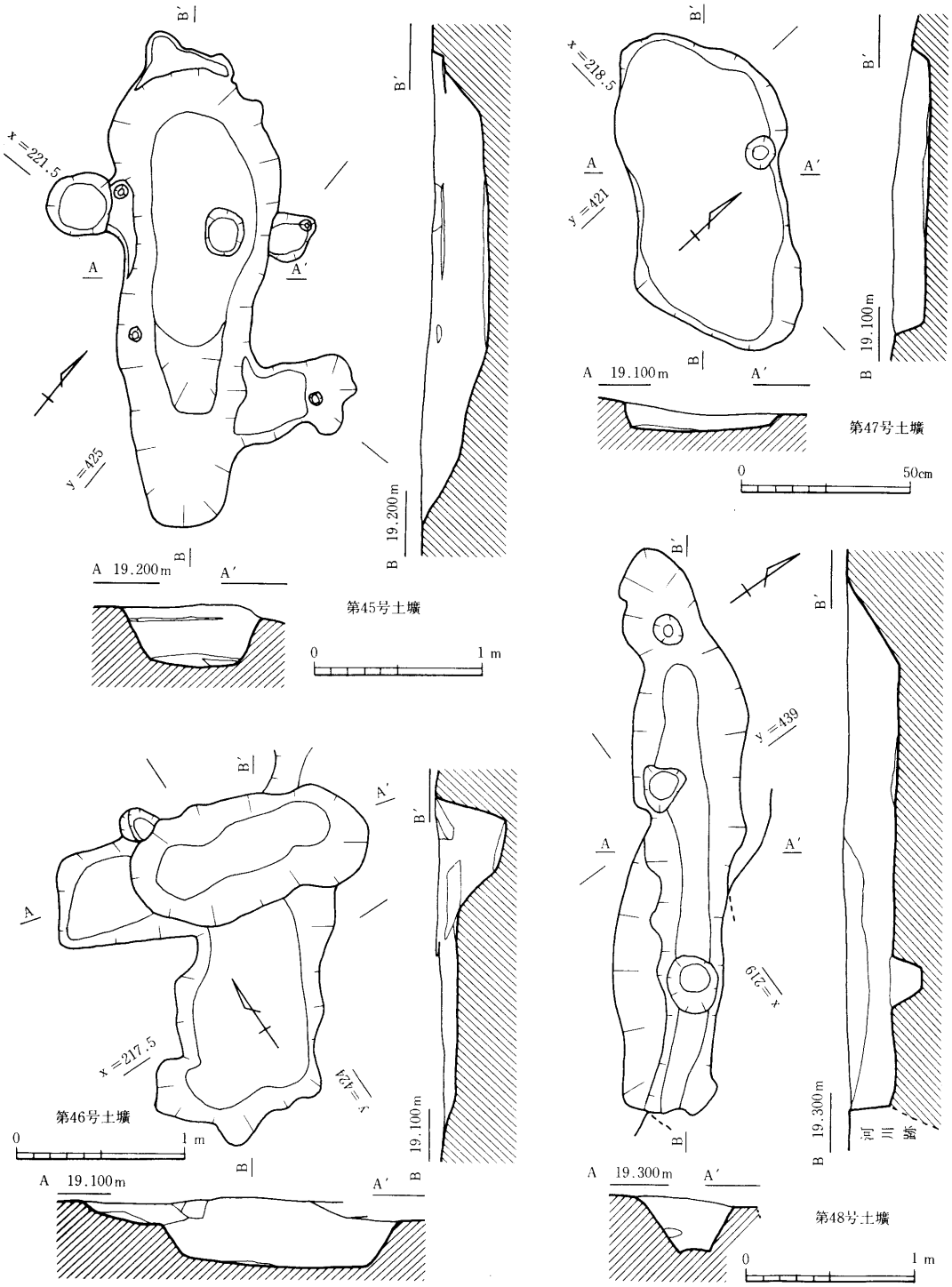


Fig. 79　第45～48号土壙実測図

外面・口縁部内外面横ナデ仕上げ。胴部外面風化のため調整不明。33は甕ないしは壺の底部で丸底に近い。内面刷毛目仕上げ、外面風化のため調整不明。34は円盤状の突出した特異な底部をもつ壺。精選された粘土を用いているが、整形は粗雑で粘土帯接合痕が明瞭に残る。内面に左上がりの刷毛目が残るが、外面は風化のため調整不明。

35は高坏で、坏部上半は下半部に比べ長く伸びて直線的に開き、口縁部付近でわずかに外方へ屈曲する。口縁端部は尖る。内外面とも風化のため調整不明。

第43号土壙（Fig. 78）

調査区の中央よりやや北西に位置する小形の土壙である。平面形態は不整形な楕円形状を呈し、長軸133cm、短軸60cmの規模をもつ。後世の削平のため残存状態は悪く、検出面からの深さは10cmを残すにすぎない。底面標高は約18.75m、長軸方向は北－南。

土壙内から出土遺物がなく、他の遺構との切り合いもないため、時期は明らかでない。

第44号土壙（Fig. 78）

調査区の中央部、第43号土壙と第11号竪穴住居跡間に位置する。平面形態長楕円形状で、東端部は後世の削平により消失している。長軸225cm以上、短軸57cm、検出面からの深さ20cmの規模をもつ。南西端部には底面から約7cm上位に壇状の平坦面を有する。底面標高約18.90m、長軸方向は北東－南西。弥生土器甕・高坏等が出土した。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 81－36～38, PL. 24・25－36～38）

36・37は甕。36は直線的に「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は強い横ナデにより肥厚ぎみになる。口縁部内外面粗雑な横ナデ、胴部内外面はナデ仕上げ。37は底部で接地面～底部側面付近は横ナデ、外底面ナデ仕上げ、他は風化のため不明。

38は高坏の脚部で端部外面には面をもつ。端部内外面横ナデ、他はナデ仕上げ。

第45号土壙（Fig. 79）

調査区のほぼ中央、第44号土壙の西に隣接する土壙である。平面形態は不整形な長楕円形状を呈し、東辺の南半部には幅約40cm、長さ約65cmの突出部をもつ。また計3ヵ所に壇状の狭い平坦面が存在し、長軸283cm、短軸64cm、検出面からの深さ38cmの規模をもつ。南東辺部の底面からの立ち上がりは緩やかである。底面標高は約18.70m、長軸方向は北西－南東。出土遺物には弥生土器壺、砥石等がある。弥生時代中期。

出土遺物（Fig. 81－39～41, PL. 25－39・40・PL. 27－41）

39は断面「M」字の扁平な貼付突帯をもつ壺の胴部。外面は突帯付近横ナデ、以下縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。40は口縁端部内面を内上方へ突出させるいわゆる跳ね上げ口縁の

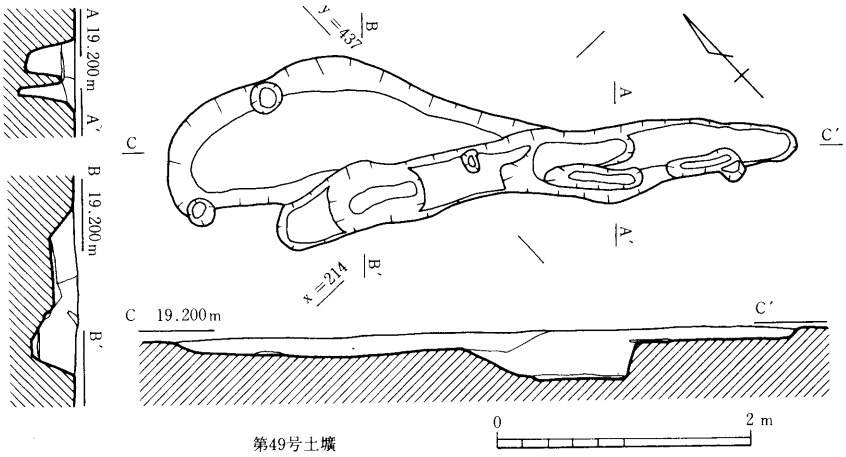


Fig. 80　第49号土壙実測図

甕で、端部外面はほぼ平坦。口縁部内外面横ナデ。

41は6面全面を研砥面とする小形の砥石。各面とも基本的には長軸方向に平行する研砥が行なわれているが、正面中央部には直交する幅約2～3㎜、深さ約1㎜の樋状の研砥痕が2条認められる。凝灰岩製。

第46号土壙（Fig. 79）

調査区の中央よりやや南、第13号竪穴住居跡に隣接する。2ないし3基の土壙が重複している可能性があるが、調査時には切り合いが認められなかったため一括して取り扱った。平面形態は「L」字形で、南北軸203㎝、東西軸188㎝の規模をもつ。検出面からの深さは西・南西半部で10～14㎝であるが、北東部分は擂鉢状にさらに約30㎝落ち込んでいる。最深部での底面標高は約18.70m。弥生土器の甕等が出土した。弥生時代中期中葉。

出土遺物（Fig. 81－42, PL. 25－42）

ほとんど張りのない胴部に直線的に「く」の字に外反する口縁部をもつ。端部は面をもたない。外面頸部付近に煤が付着する。胴部外面縦刷毛目、内面横刷毛目仕上げ。口縁部外面横ナデ、内面横刷毛目の後横ナデ仕上げ。

第47号土壙（Fig. 79）

調査区の中央よりやや南西、第9・13号竪穴住居跡間に存在する小形の土壙である。平面形態は不整長方形状をなし、長軸84㎝、短軸46㎝の規模をもつが、後世の削平により検出面からの深さは10㎝を残すにすぎない。底面標高は約19.00m、長軸方向は北西－南東。

土壙内からの出土遺物はなく、他の遺構との切り合いもないことから、時期は不明。

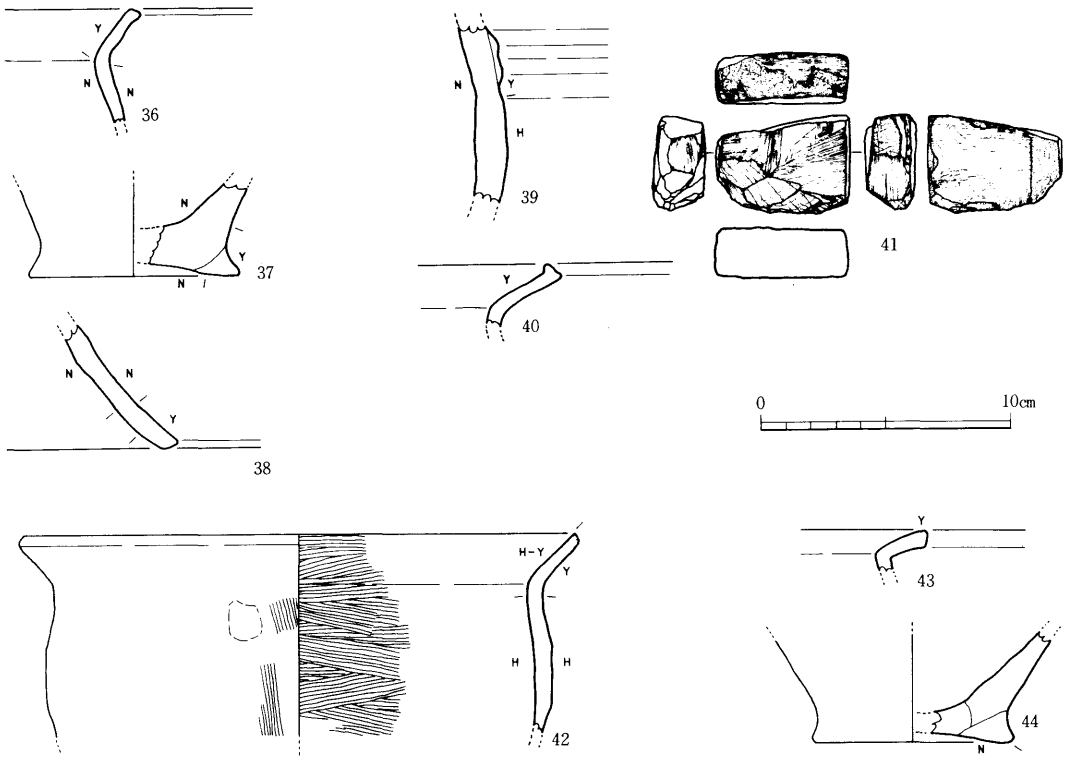


Fig. 81　第44～46・49号土壙出土遺物実測図

第48号土壙（Fig. 79）

調査区の東端部、第11号竪穴住居跡に隣接する土壙である。平面形態は長楕円形状で、溝かもしれない。東端部付近を河川跡によって切られており、長軸237cm以上、短軸60cm、検出面からの深さ30cmの規模をもつ。底面標高約18.90m、長軸方向は北西－南東。

土壙内からの出土遺物はなく、時期は明らかでないが、第49号土壙と形態・長軸方向が類似していること、また第45号土壙とも長軸方向が近似していることから、各土壙は同時期に近いものと考えられ、弥生時代中期に比定されよう。

第49号土壙（Fig. 79）

調査区の東端部、第48号土壙の南に隣接する。平面形態は三角形で、2基の土壙が重複している可能性が強いが、調査時には切り合いがつかめなかった。長軸500cm、短軸は南半部58cm、北半部134cmの規模をもち、検出面からの深さは中央部が最も深く38cmで、南・北両端部でそれぞれ14cm、10cmである。底面の標高は中央部で約18.80m、長軸方向は北西－南東。弥生土器甕等が出土した。弥生時代中期後半。

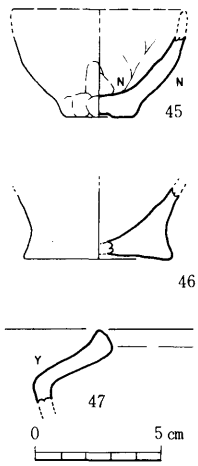


Fig. 82　第4・11・14号溝出土遺物実測図

出土遺物（Fig. 81－43・44, PL. 25－43・44）

43は「く」の字に強く屈曲する短い口縁部をもつ甕。端部は面をもつ。頸部外面には煤が付着する。内外面とも横ナデ仕上げ。44は底部で器形は37と大差ない。外底面ナデ、他は風化のため調整不明。

溝

10条を検出した。北東－南西に走るものが半数を占め、規模は小さい。残存状態は悪く、出土遺物も極めて少ない。

以下、主なものについて述べる。

第４号溝

調査区中央付近を北東－南西に走行する溝で、第８号竪穴住居跡を切っている。溝幅は平均約23cmで、河川跡に切られる部分付近で溝幅を増し、最大幅約4.2mとなる。断面形態は逆台形状を呈し、検出面からの深さは平均約15cm、溝幅を増す河川跡付近で最も深く25cmとなる。

出土遺物には土師器若干がある。弥生時代終末～古墳時代初頭。

出土遺物（Fig. 82－45, PL. 25－45）

口縁部を欠損する手捏ねの土師器鉢。窪み底の底部から内彎しながら開く胴部に至る。内外面ナデ仕上げで、底部側面および内面には指圧による明瞭な整形痕が残る。

第11号溝

調査区の東端部を東－西に走行する溝で、東への延長部分は削平により消失している。溝幅は約75cmで、河川跡に切られる部分で溝幅を減じ、約40cmとなる。溝底の起伏が激しく、検出面からの深さは約10～30cmである。

出土遺物には弥生土器数点がある。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 82－46, PL. 25－46）

甕の底部でわずかに上げ底。内外面とも風化のため調整不明。なお図示しなかったが、他に下垂する口縁部外面にヘラによる鋸歯文を施す壺の口縁部の破片がある。

第12号溝

調査区の南東部を南－北に走行する溝で、第11号竪穴住居跡によって切られている。溝幅は約75cm、検出面からの深さは約25cmである。２段にわたって掘削されているが、断面形は「U」字形に近い。

遺物は全く出土しておらず、時期は明らかでないが、第11号竪穴住居跡との切り合い関

係から、弥生時代中期後半を遡るものではない。

第14号溝

調査区の南端部をほぼ南－北に走行する溝で、第17号竪穴住居跡を切り、第18号竪穴住居跡に切られている。溝幅は約25cm、検出面からの深さは約４～12cmで、断面は「U」字形を呈する。

出土遺物は少なく、弥生土器若干がある。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 82－47, PL. 25－47）

いわゆる跳ね上げ口縁をもつ甕で、内外面とも横ナデ仕上げ。

柱穴

調査のほぼ全面で多数検出された。出土遺物から、弥生時代前期～古墳時代のもので、竪穴住居跡の主柱穴となるものも含まれていると思われるが、柱穴配置による遺構の復原はできなかった。

遺物は32個の柱穴から出土したが、図化できたのは以下の12点である。

出土遺物（Fig. 83－48～59, PL. 25－48～58・PL. 27－59）

48は甕の底部で、側面は裾広がりとなる。内底面ナデ仕上げ、他は風化のため調整不明。Ｐ１出土。

49は円盤状に突出する壺の底部で、精選された粘土を用いている。側面横ナデ、他はナデ仕上げ。Ｐ２出土。

50は直線的に外反し端部がやや肥厚する甕の口縁部。粗雑な横ナデ仕上げで端部外面は窪む。頸部外面には煤が付着する。Ｐ３出土。

51は断面台形の扁平な突帯を３条貼付する壺の胴部。調整不明。52は短く緩やかに外反する甕の口縁部で、端部にはヘラで刻目を施す。横ナデ仕上げ。ともにＰ４出土。

53は小形の甕。胴部は張らず頸部内面に稜をもたない。口縁部は外彎ぎみに開き端部に面をもつ。口縁部内外面は粗雑な横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面横刷毛目仕上げ。54は鉢。胴部は内彎しながら開き、頸部内面は稜をもたない。口縁部はやや長めで直線的に外反し端部は丸くおさめる。調整は丁寧で、外面は縦刷毛目仕上げの後口縁部～頸部はさらに横ナデを施す。内面は口縁部～頸部が横刷毛目の後横ナデ、胴部が刷毛目後ナデ仕上げ。ともにＰ５出土。

55は壺の底部と思われるが、風化著しく調整不明。Ｐ６出土。

57～59はどの柱穴出土か不明のもの。57は器壁の薄い平底の壺の底部。外面は側面横ナ

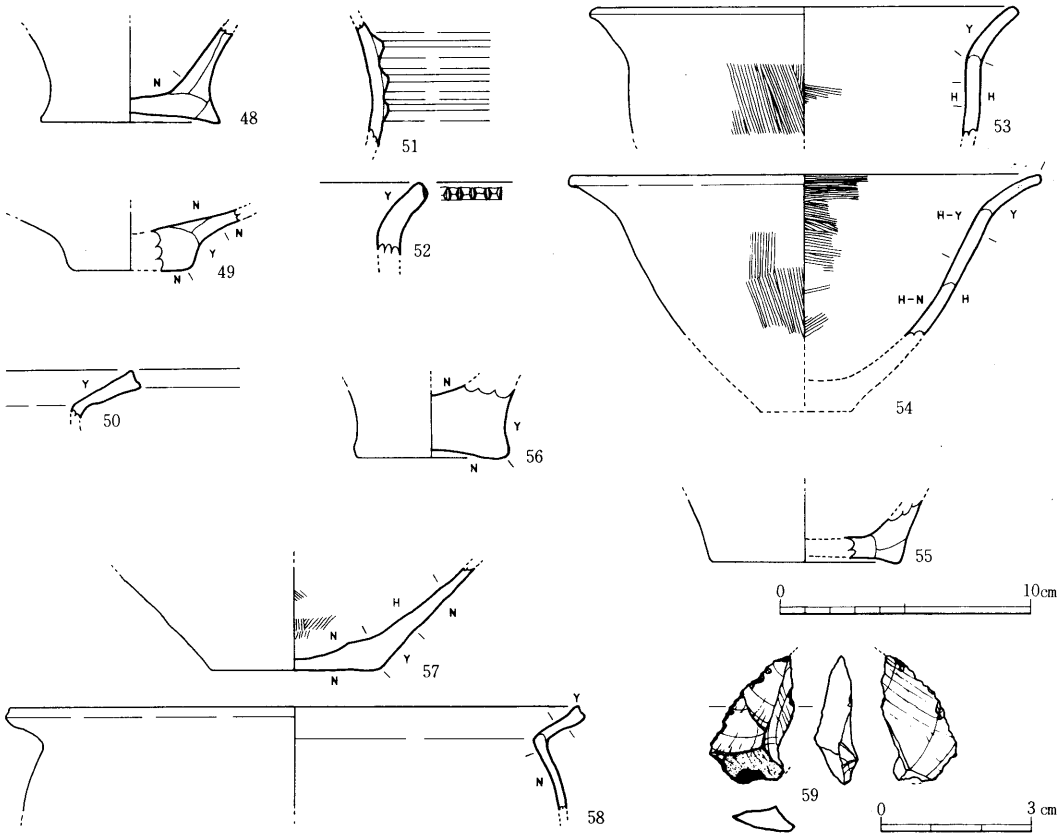
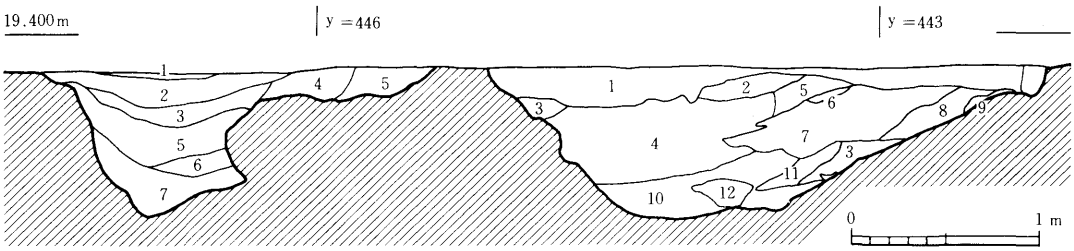


Fig. 83 柱穴出土遺物実測図

デ、他はナデ仕上げ。内面は底面ナデ、他は縦刷毛目仕上げ。58は甕で、「く」の字に屈曲する口縁部をもち、跳ね上げ口縁風に端部が肥厚して外面は窪む。口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ仕上げ。59は正面右半部を欠損する剝片で、正面下端部には自然面を残す。正面左側縁には連続する細かな剝落痕が認められ、使用痕の可能性がある。黒曜石製。

河川跡（Fig. 84, PL. 23）

調査区の東側に位置し、南東から北西に走行する河川跡で、完掘はしていないが、トレンチによって規模・土層の堆積・遺物の出土状況等を確かめた。幅約2.6～4.5m、検出面からの深さ約55～80cmの規模をもち、北端部に比べて南端部での底面の起伏が激しい。2条に重複する部分を調査当初は第1・2号河川跡としたが、検出時の平面観察、また中央よりやや南に設定したトレンチでの土層堆積状況の所見でも切り合いが認められなかったことから、同一河川の本流・支流と考える。支流は幅約1.4～2.0m、検出面からの深さ約



第1号河川跡
1 淡灰茶色土
2 暗灰橙色粘質土
3 暗灰色粘質土
4 濁茶灰色粘質土
5 暗茶褐色粘質土
6 黒灰色粘質土
7 淡黄灰色小礫混じり粗砂土

第2号河川跡
1 淡灰橙色土
2 灰色細砂土
3 淡青灰色細砂土
4 灰色小礫混じり砂土
(黒色粘土をブロック状に含む)
5 淡灰色砂質土
6 灰白色砂土
7 淡青灰色砂質土
8 暗灰橙色粘質土
9 黒褐色粘土
10 灰茶色小礫混じり粗砂土
11 灰色砂土
12 黒色粘土

Fig. 84 第1・2号河川跡土層断面図

35～80cmの規模をもつ。埋土は砂質土・砂礫が主体で、洪水等による埋没を窺わせる。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・円盤状石製品等があるが、量的には須恵器の占める割合が圧倒的に多い。また最下部から須恵器甕（Fig. 86－77・78)、昭和61年度の調査で最上層から全形を知りうる須恵器坏身が出土しており、この河川跡が機能していたのは古墳時代後期～奈良時代と推察される。

出土遺物（Fig. 85・86－60～80, PL. 25・26－60～79・PL. 27－69・80)

弥生土器（60～67)

60～62は壺。60はいわゆる鋤先状口縁をもつもので、拡張部は下垂する。口縁端部の内側への張り出しは弱い。内面横ナデ、外面風化のため調整不明。61は肩部で、削り出しによる段をもつ。外面横ナデ、内面調整不明。62は頸部で、ヘラによる2条の浅い沈線が巡る。内面ナデ仕上げ、外面調整不明。

63～65は甕。63・64は短く緩やかに外反する口縁部をもつもの。64は口縁部の開きが小さく、端部にはヘラによる刻目を施す。いずれも内外面横ナデ仕上げ。65は上げ底の底部で、内面には指圧による整形痕が残る。側面横ナデ、他はナデ仕上げ。

66・67は高坏の脚部で裾部を欠損する。67は坏部に脚部を挿入する。67の外面を除いていずれもナデ仕上げ。

土師器（68・69)

68は器壁が厚く、中位付近に屈曲部をもつと思われる小形の高坏の脚部。内面はシボリ痕を残し、ナデ仕上げ。外面調整不明。69はほぼ完形に近い高坏。内彎して立ち上がる埦

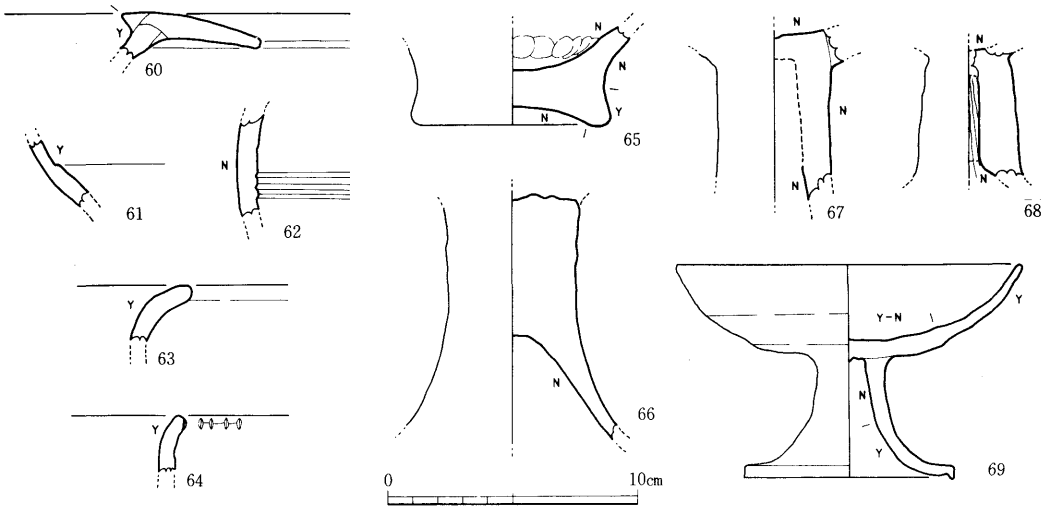


Fig. 85　第１・２号河川跡出土遺物実測図(1)

状の浅い坏部をもつ。脚部は短く、坏部との接合部付近から屈曲することなく緩やかに開く。脚端部は須恵器坏蓋の口縁部同様、鳥嘴状に屈曲する。脚部内面上半は静止ナデ、他は回転ナデを施すが、坏部内面下半はさらに静止ナデを施す。

須恵器（70～79）

70～72は坏蓋。70は丸い体部をもち、口縁部は上方へ反り上がる。口縁端部は尖り気味で、内面には面をもたない。71は直線的にのびる体部をもつ。口縁端部は垂直に屈曲し、断面形は鳥嘴状となる。いずれも内外面回転ナデ調整。72は天井部にボタン状の撮みをもつ。内外面とも回転ナデで、その後、撮み部内外面は静止ナデを施す。

73～76は坏身。73は口縁部で体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。内外面回転ナデ調整。74～76は底部で、底部と体部の境より内側に高台を貼付する。74・75はほぼ直立する高台をもつが、75は扁平で端部が窪む。76は盤状で、高台は外下方へ「ハ」の字に開く。75・76は高台内側端が接地する。74～76とも体部～高台付近の外面と体部内面は回転ナデ、外底面中央部および内底面は静止ナデ。

77・78は甕。77は外彎気味に開く口縁部をもち、端部は水平に近い。胴部と口縁部との接合部は、外面に粘土帯を貼付して補強する。口縁部内外面は回転ナデ調整。胴部は内面に同心円文が残り、外面にタタキが施されたと思われるが、カキ目により消失している。78は胴長の胴部から底部にかけてのもので、外面には上半部と下半部で方向の異なる平行タタキを行なった後、粗いカキ目を施す。内面には同心円文が残る。外面には自然釉が付

Fig. 86　第１・２号河川跡出土遺物実測図(2)

着する。

79は高坏の坏部。口縁部は外彎しながら開き、端部は尖りぎみにおさめる。口縁部と体部との境に三角突帯を貼付し、その直下に7条単位の波状文が巡る。内外面とも回転ナデ調整。

石製品（80）

正面上端部を欠損する、いわゆる円盤状石製品である。正面右側縁の一部を除いてほぼ全周縁に正裏両面からの剝離痕が認められる。裏面上半部には左右方向の擦痕が残存する。四熊ヶ岳産の角閃石安山岩製。

遺構に伴わない遺物（Fig. 84・89－81～125, PL. 26－81～124）

1）攪乱壙出土遺物（Fig. 87－81～91, PL. 26－81・85・88・PL. 27－90・91）

弥生土器（81～88）

81～84は壺。81は直立ぎみに外彎しながら開く口縁部をもつ。口縁部外面ナデ、内面横刷毛目の後ナデ、胴部外面ナデ仕上げ。82～84は底部で、安定した平底（82・83）と底径の小さい不安定な平底（84）とがある。82・83は内外底面ナデ、側面は風化のため調整不明であるが、82は側面までナデて仕上げる。84は外面縦刷毛目仕上げで外底面はさらにナデる。内面は刷毛目仕上げ。

85～87は甕。85は頸部内面に稜をもって直線的に短く「く」の字に外反する口縁部をもつ。胴部最大径は口径を上回る。口縁部外面と胴部外面下半には煤が付着する。口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げ。86・87は底部で、胴部からそのまま底部に移行するもの（86）と底部側面が斜下方へ反るやや上げ底のもの（87）とがある。86は外底面・側面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。87は風化のため調整不明。

88は高坏。脚柱部は中空で、直線的に下方へ開く。坏部との接合部よりやや下位の外面には赤色顔料の痕跡が認められる。脚部外面縦刷毛目、他はナデ仕上げ。

土師器（89）

小形の高坏の脚上半部と思われ、坏部との接合部付近から緩やかに開く。3ヵ所に穿孔をもつものであろう。風化著しく調整不明。

石製品（90・91）

河原石等の転礫を素材とした棒状の敲石で、上端部（頭部）に敲打痕、下端部に潰痕が認められる。91は敲打・潰痕とも著しく、火熱による焼痕が右側面・裏面を中心としたほぼ全面にみられる。また正面・上面にはタール状の付着物がある。

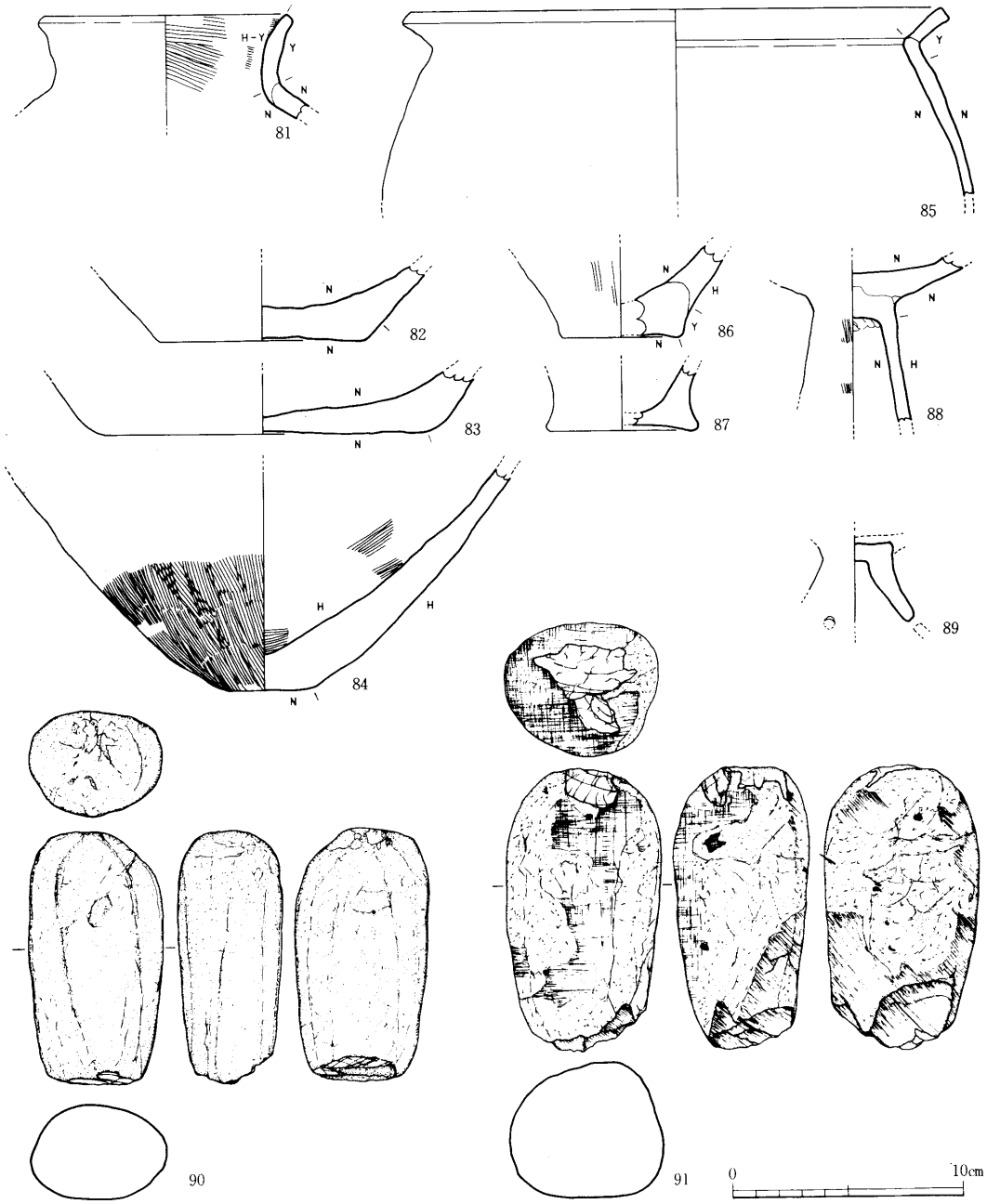


Fig. 87　攪乱壙出土遺物実測図

2）トレンチ出土の遺物（Fig. 88－92～110, PL. 26－93～96・107・PL. 27－108～110）

昭和42年、吉田遺跡調査団による範囲確認調査の際に設定したトレンチからの出土遺物であるが、包含層出土のものか遺構出土のものか判然としないため、一括して取り扱う。

弥生土器（92～106）

92～97は壺。92は口縁部が下垂し、拡張部外面にヘラによる2条単位の鋸歯文を施す。93はいわゆる鋤先状口縁をもつもの。92・93とも内外面横ナデ仕上げ。94は台付壺の脚台部で、直線的に裾部へ開く。端部付近横ナデ、他はナデ仕上げ。

95・96は甕で、「く」の字に外反する口縁部をもち、頸部内面は強い横ナデあるいはナデのため面をなす。95は胴部最大径が口径に近く、胴部と頸部の境付近は外面の強い横ナデによって内側へ屈曲する。口縁部・頸部内外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面粗雑なナデ仕上げ。96は口縁端部が肥厚し、外面が窪む。口縁部内外面・頸部外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、頸部・胴部内面ナデ仕上げ。

97～106は底部。97は壺で平底に近い。側面横ナデ、外底面・内面ナデ仕上げ。98～105は甕。上げ底で底部側面が斜方へ反るものが大半であるが、垂直に近いもの（98・101）もある。103は小形の甕で台状の底部に内彎して立ち上がる胴部をもつ。調整は側面横ナデ、外底面・胴部外面・内面をナデるものが多い。106は手捏ねの鉢で、胴部外面・内面には指圧による粗雑な整形痕が認められる。外底面ナデ、側面横ナデ仕上げ。

土師器（107）

張りの強い胴部から外彎しながら「く」の字に屈曲する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面粗雑なナデ仕上げ。

石製品（108・109）

108は円礫素材の敲石で、約3/4を欠損する。側面中央部よりやや上位に敲打痕が認められる。デイサイト製。

109は大形の石庖丁の再加工品で、上端部に第一次製品時の穿孔が残存する。正面右側縁は欠損時の折れ面がそのまま放置されているが、他の周縁には正裏両面からの加工が施されている。特に裏面左側縁・下縁には連続する細かな剥離作業が行なわれ、刃部が造出されている。なお上縁の加工は粗雑であるが、剥離面の傾斜角度からみて、刃部としての機能は充分果たしうるものと考えられる。讃岐岩質安山岩製。

その他（110）

横長剥片で、加工痕は認められない。正面は不定方向からの加撃による剥離面によって

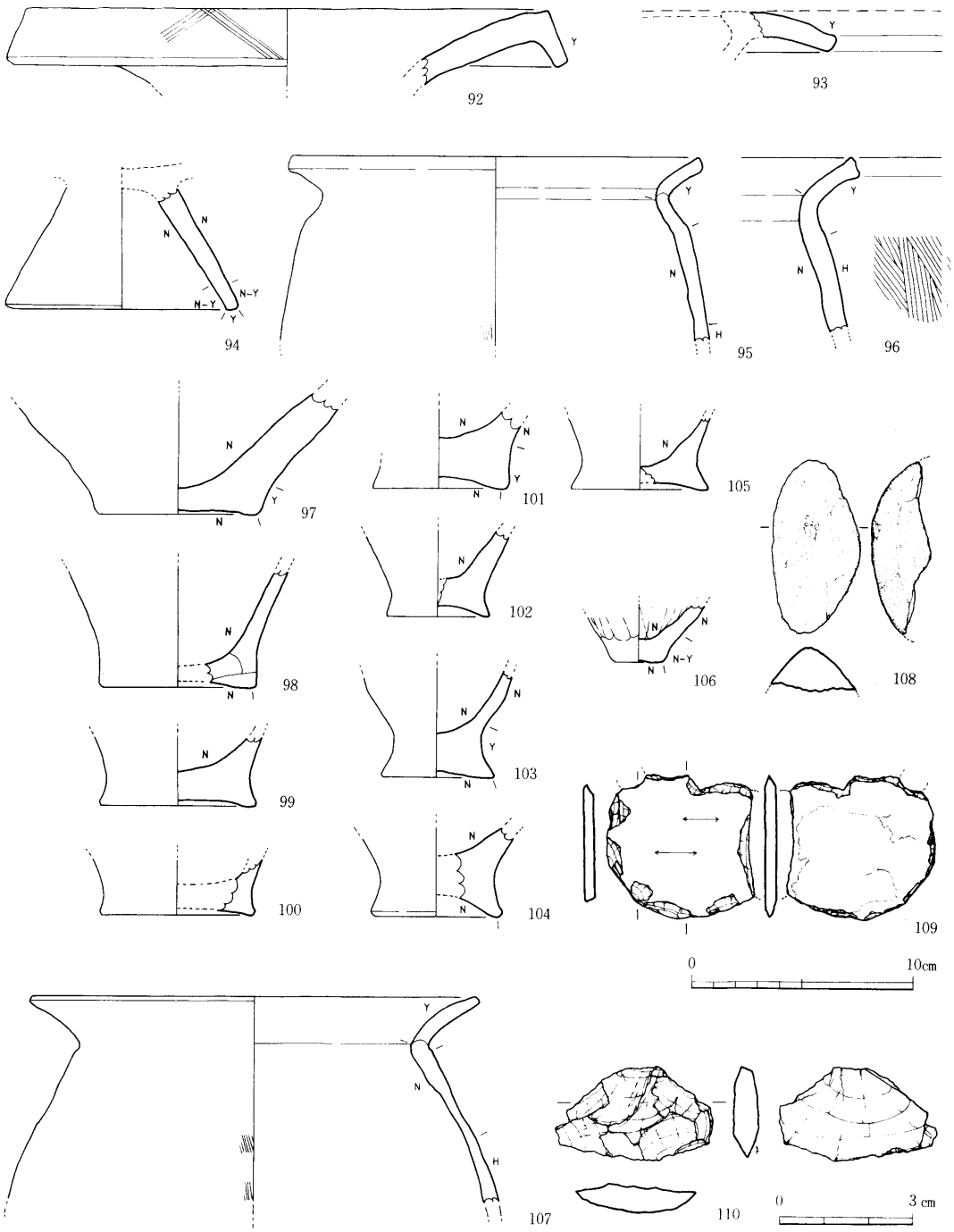


Fig. 88　トレンチ出土遺物実測図

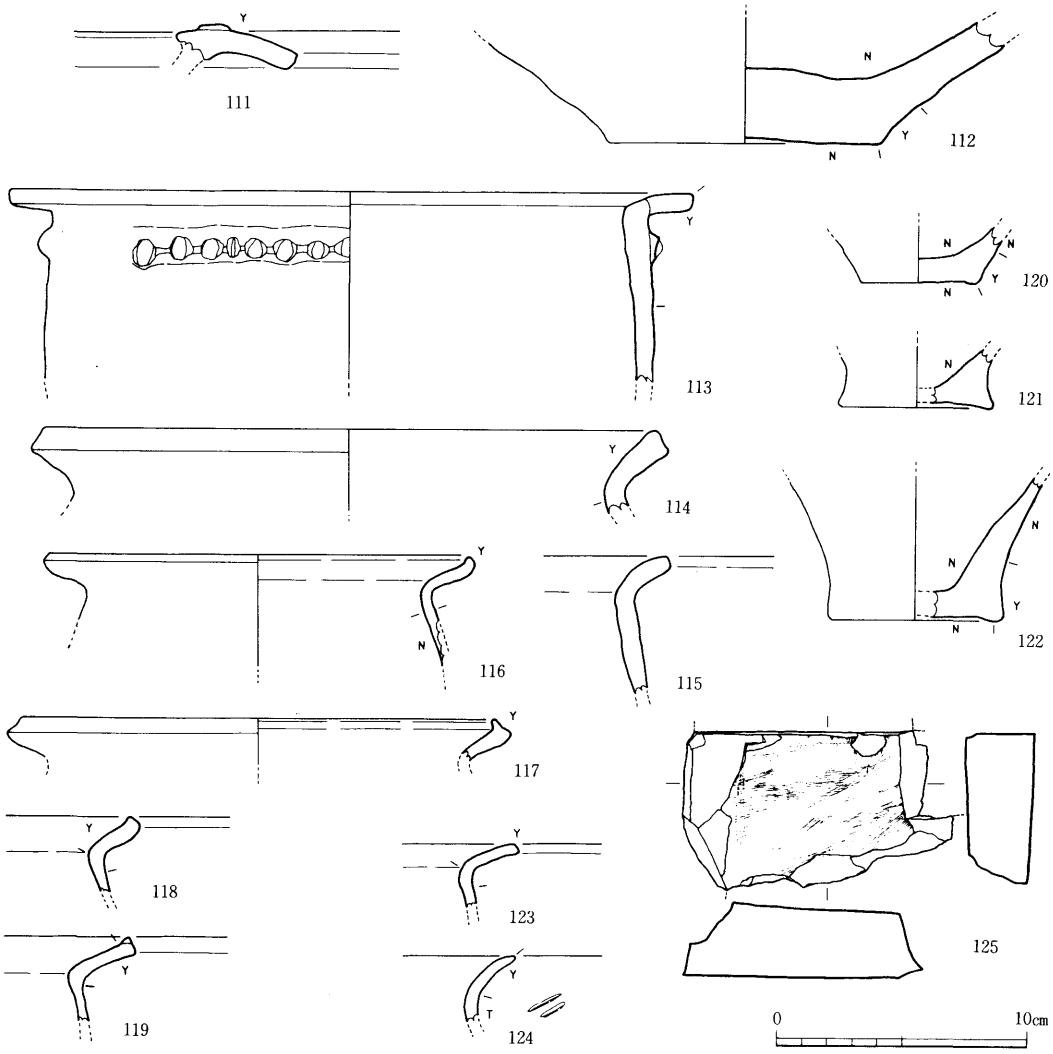


Fig. 89　出土状況不明の遺物実測図

構成され、裏面は主要剝離面である。打点は認められない。硝子質安山岩製。

3）出土状況不明の遺物（Fig. 89－111～125, PL. 26－111・113・124・PL. 27－125）

弥生土器（111～122）

111・112は壺。111はいわゆる鋤先状口縁をもつもので、口縁部は彎曲しながら下垂し、内側寄りに円形浮文を貼付する。内外面横ナデ仕上げ。112は器壁の厚い大形の壺の底部で、安定した平底。側面横ナデ、外底面・内面ナデ仕上げ。

Tab. 8　出土土器観察表

法量（　）は復原値

番号	器種	法　量（cm） （①口径 ②底径 ③器高）	色　調 （①外面 ②内面）	胎　土	焼　成	備　考
	SB 9					
1	壺	①(36.8)	にぶい橙色(2.5YR6/3)	やや不良	良　好	口縁外面鋸歯文
2	壺	②(7.4)	黒褐色(10YR3/1)	やや不良	良　好	底部1/2破片
3	甕		灰褐色(5YR6/2)	不　良	やや不良	口縁片
4	高坏		橙色(2.5YR6/6)	精　良	良　好	脚部
5	甕		にぶい橙色(5YR7/4)	不　良	良　好	把手
6	有翼支脚		にぶい橙色(2.5YR6/3)	不　良	良　好	翼部
	SB11					
8	甕		にぶい橙色(5YR7/3)	良　好	良　好	口縁部外面に煤付着
9	甕		①橙色(2.5YR6/6)　②褐灰色(7.5YR5/1)	良　好	良　好	頭部～胴上半片
10	甕	②(7.2)	①にぶい橙色(7.5YR6/4)　②褐灰色(5YR5/1)	不　良	不　良	底部1/5破片
11	甕	②(4.2)	①にぶい橙色(5YR6/3)　②褐灰色(7.5YR5/1)	やや不良	良　好	底部1/4破片
	SB12					
12	甕	②6.6	①橙色(2.5YR7/8)　②黒褐色(7.5YR3/1)	不　良	良　好	底部
13	甕		にぶい橙色(5YR6/4)	良　好	やや不良	口縁片
14	土師器高坏		①淡赤橙色(2.5YR7/4)　②暗赤褐色(5YR3/2)	不　良	良　好	坏部片
	SB13					
15	甕 or 壺		にぶい橙色(5YR7/4)	良　好	良　好	口縁片
16	甕		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良　好	良　好	口縁片
17	甕	②3.4	黒褐色(10YR3/1)	良　好	良　好	底部
18	土師器甕		橙色(5YR7/8)	不　良	不　良	口縁片
	SB18					
19	甕		①にぶい赤褐色(5YR5/3)　②にぶい褐色(7.5YR6/3)	良　好	良　好	口縁端部2条の凹線
20	甕	②5.6	①淡赤橙色(2.5YR7/4)　②にぶい黄橙色(10YR7/2)	不　良	良　好	底部
21	甕	②(7.4)	①橙色(2.5YR7/6)　②浅黄橙色(10YR8/3)	不　良	良　好	底部1/5破片
22	土師器鉢	①(17.6)③7.5	にぶい橙色(5YR6/4)	不　良	良　好	1/2破片
	SK30					
23	甕	②8.2	橙色(5YR7/6)	良　好	良　好	底部
24	高坏		①赤橙色(10R6/6)　②褐灰色(7.5YR5/1)	精　良	良　好	脚部片
25	高坏		①浅黄橙色(10YR8/3)　②灰色(N 4/0)	不　良	不　良	脚部
	SK31					
26	壺		①灰白色(10YR8/2)　②橙色(2.5YR7/6)	良　好	不　良	口縁片
27	壺	②(9.0)	①にぶい橙色(5YR7/3)　②灰色(N 6/0)	良　好	良　好	底部1/3破片
28	甕	②(7.0)	①赤橙色(10R6/8)　②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良　好	やや不良	底部1/5破片

法量（　）は復原値

番号	器種	法量（cm）（①口径 ②底径 ③器高）	色調（①外面 ②内面）	胎土	焼成	備考
	SK33					
29	壺		灰白色(7.5YR8/2)	やや不良	良好	肩部外面に有軸羽状文
30	甕	②(5.6)	①灰白色(5YR8/2) ②淡橙色(5YR8/3)	良好	良好	底部1/3破片
	SK36					
31	甕	①(18.8)	①黒褐色(5YR3/1) ②にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	不良	良好	胴部外面叩き
	SK39					
32	土師器壺	①16.0	赤橙色(10R6/8)	精良	やや不良	口縁部
33	土師器壺 or 甕	②3.2	①にぶい橙色(5YR7/3) ②褐灰色(5YR5/1)	良好	良好	底部
34	土師器壺	②4.0	灰色(5Y5/1)	良好	やや不良	突出する底部
35	土師器高坏	①(17.6)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	精良	やや不良	坏部1/5破片
	SK44					
36	甕		灰白色(5YR8/2)	やや不良	良好	口縁片
37	甕	②(8.2)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	不良	やや不良	底部1/5破片
38	高坏		淡赤橙色(2.5YR7/4)	良好	良好	脚裾部片
	SK45					
39	壺		①淡黄色(2.5Y8/4) ②灰色(N 5/0)	良好	不良	胴部片
40	甕		①にぶい橙色(2.5YR6/4) ②明褐灰色(5YR7/1)	精良	良好	口縁片
	SK46					
42	甕	①(22.0)	赤灰色(2.5YR5/1)	良好	良好	胴上半部外面に媒付着
	SK49					
43	甕		赤灰色(10R5/1)	不良	良好	頸部外面媒付着
44	甕	②(7.8)	①にぶい橙色(5YR6/4) ②明褐灰色(5YR7/2)	精良	良好	底部1/4破片
	SD 4					
45	土師器手捏ね土器鉢	②(2.6)	橙色(2.5YR7/6)	良好	やや不良	底部
	SD11					
46	甕	②(5.8)	①にぶい橙色(5YR7/3) ②褐灰色(10YR4/1)	やや不良	やや不良	底部
	SD14					
47	甕		①にぶい橙色(5YR7/3) ②赤橙色(10R6/8)	不良	やや不良	口縁片
	P 1					
48	甕	②(7.0)	①暗灰色(N 3/0)②灰白色(2.5Y8/1)（側）明褐灰色(5YR7/2)	不良	良好	底部1/2破片
	P 2					
49	甕	②(4.4)	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②明褐灰色(7.5YR7/1)	精良	良好	突出する底部
	P 3					
50	甕		①褐灰色(5YR4/1) ②灰白色(5YR8/1)	良好	良好	口縁片
	P 4					
51	壺		淡橙色(5YR8/4)	やや不良	やや不良	胴部片
52	甕		赤色(10R5/8)	良好	やや不良	口唇部外面刻目

法量（　）は復原値

番号	器種	法量（cm）(①口径 ②底径 ③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
	P5					
53	甕	①(16.6)	①灰白色(7.5YR8/2) ②灰白色(10YR8/1)	精良	良好	口縁1/6破片
54	鉢	①(18.6)	褐灰色(10YR6/1)	良好	良好	口縁1/4破片
	P6					
55	壺か	②(7.4)	①灰褐色(5YR6/2) ②褐灰色(7.5YR6/1)	やや不良	良好	底部1/6破片
	P7					
56	甕	②(5.8)	①赤橙色(10R6/8) ②灰白色(2.5Y7/1)	良好	良好	底部
	P不明					
57	壺	②6.6	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	やや不足	底部
58	甕	①(22.6)	浅黄色(2.5Y7/3)	良好	やや不良	口縁1/4破片
	河川跡					
60	壺		にぶい橙色(5YR7/3)	やや不足	良好	口縁片
61	壺		①暗赤褐色(5YR3/3) ②にぶい赤褐色(2.5YR4/3)	良好	良好	肩部片
62	壺		灰白色(10YR8/2)	不良	不良	胴部片
63	甕		①褐色(7.5YR4/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	やや不良	口縁片
64	甕		黒褐色(7.5YR3/2)	良好	良好	口唇部に刻目
65	甕	②7.2	①赤橙色(10R6/8) ②暗灰色(N3/0)	不良	良好	底部
66	高坏		①明褐灰色(7.5YR7/1) ②灰色(5Y6/1)	不良	良好	脚部1/2破片
67	高坏		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	脚部
68	土師器高坏		にぶい橙色(5YR7/3)	良好	不良	脚部1/2破片
69	土師器高坏	①13.8 ②8.5 ③8.4	灰白色(N 8/0)	精良	良好	ほぼ完形
70	須恵器坏蓋		明緑灰色(10GY7/1)	良好	良好	口縁片
71	須恵器坏蓋		灰白色(N 8/0)	良好	やや不良	口縁片
72	須恵器坏蓋		①暗青灰色(10BG4/1) ②青灰色(10BG6/1)	やや不良	良好	撮み部
73	須恵器坏身		①青灰色(5B5/1) ②青灰色(10BG6/1)	良好	良好	口縁片
74	須恵器坏身	②(7.4)	淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	底部
75	須恵器坏身	②(6.8)	青灰色(10BG6/1)	良好	良好	底部1/6破片
76	須恵器坏身	②(11.6)	青灰色(5PB6/1)	やや不良	良好	底部1/5破片
77	須恵器 甕	①(18.0)	明青灰色(5PB7/1)	良好	良好	口縁～胴部1/5破片
78	須恵器 甕		灰白色(7.5Y7/1)	良好	不良	胴下半部1/5破片
79	須恵器高坏		暗青灰色(5B3/1)	精良	やや不良	口縁部下外面7条の波状文
	攪乱壙					
81	壺	①(10.4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	良好	口縁1/4破片
82	壺	②(8.8)	①灰白色(10YR8/2) ②灰褐色(5YR4/2)	良好	良好	底部1/3破片
83	壺	②(13.8)	灰白色(10YR8/2)	良好	良好	底部1/3破片
84	壺 or 甕	②(2.8)	①灰黄褐色(10YR5/2) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	底部1/3破片
85	甕	①(22.7)	明赤褐色(2.5YR5/6)	やや不良	堅緻	口縁1/6破片

法量（　）は復原値

番号	器種	法量（cm）(①口径 ②底径 ③器高)	色調（①外面 ②内面）	胎土	焼成	備考
86	壺 or 甕	②(5.0)	黄橙色(10YR8/6)	不良	良好	底部1/4破片
87	甕	②(6.2)	にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	底部1/5破片
88	高坏		褐灰色(7.5YR6/1)	良好	良好	坏底～脚部片、外面丹塗
89	高坏		にぶい橙色(2.5YR6/4)	良好	やや不良	脚部
	トレンチ					
92	壺	①(23.3)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	口縁部外面2条単位の鋸歯文
93	壺		にぶい橙色(5YR7/3)	良好	良好	口縁片
94	台付壺	②(9.4)	灰黄色(2.5Y7/2)	良好	良好	脚部1/5破片
95	甕	①(18.2)	灰褐色(7.5YR5/2)	良好	良好	口縁1/6破片
96	甕		灰褐色(5YR5/2)	不良	良好	口縁片、端部肥厚
97	壺	②(7.0)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②黄灰色(2.5Y5/1)	良好	精良	底部1/5破片
98	壺(?)	②(6.6)	灰褐色(7.5YR6/2)	良好	良好	底部1/5破片
99	甕 or 壺	②(6.9)	にぶい橙色(5YR7/3)	精良	やや不良	底部1/4破片
100	甕	②(6.8)	にぶい橙色(5YR7/4)	良好	不良	底部1/6破片
101	甕	②6.0	①橙色(2.5YR6/8) ②灰褐色(5YR5/2)	不良	良好	底部
102	甕	②(4.6)	①にぶい橙色(5YR6/3) ②明緑灰色(10GY7/1)	良好	不良	底部1/4破片
103	甕	②(4.8)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	良好	良好	底部
104	甕	②(5.6)	①橙色(2.5YR6/8) ②灰褐色(7.5YR6/2)	良好	良好	底部1/7破片
105	甕	②(6.2)	①橙色(2.5YR7/6) ②褐灰色(10YR5/1)	良好	良好	底部1/3破片
106	手捏ね土器	②2.1	橙色(2.5YR7/6)	精良	やや不良	底部
107	土師器　甕	①(19.8)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	不良	不良	口縁1/5破片
	出土状況不明					
111	壺		にぶい橙色(5YR7/4)	良好	不良	鋤先状口縁片
112	壺	②(10.6)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②黄色(5Y8/6)	不良	良好	底部1/3破片
113	甕	①(27.4)	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)	不良	不良	口縁1/6～1/7破片
114	甕	①(24.4)	灰白色(2.5Y8/2)	やや不良	良好	口縁1/6破片
115	甕		①にぶい橙色(5YR6/3) ②灰黄褐色(10YR4/2)	不良	良好	口縁片
116	甕	①(16.9)	灰褐色(7.5YR4/2)	やや不良	やや不良	口縁1/6～1/7破井
117	甕	①(18.8)	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黒色(10YR1.7/1)	良好	良好	底部1/7破片
118	甕		黒褐色(2.5Y3/1)	精良	良好	口縁片
119	甕		浅黄色(2.5Y7/3)	良好	良好	口縁片
120	甕	②(4.6)	①赤色(10R5/6) ②黒褐色(2.5Y3/1)	不良	不良	底部1/3破片
121	甕	②(6.0)	にぶい橙色(5YR7/4)	やや不良	良好	底部1/4破片
122	甕	②(6.6)	①灰白色(10YR8/2) ②暗灰色(N 3/0)	良好	良好	底部1/5破片
123	土師器　甕		にぶい橙色(5YR7/4)	良好	良好	口縁片
124	土師器　甕		褐灰色(7.5YR6/1)	やや不良	良好	口縁片

Tab. 9 出土石器観察表

( ) は現存値

No.	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　質	備　考
SB 9							
7	ナイフ形石器	(4.2)	1.9	0.7	(6.2)	メノウ	
SK45							
41	砥石	(3.9)	5.2	2.0	(66.3)	凝灰岩	
P不明							
59	剥片	(2.5)	(1.7)	0.5	(1.6)	黒曜石	
河川跡							
80	円盤状石製品	(5.3)	6.0	1.1	(41.8)	角閃石安山岩(四熊ケ岳産)	
攪乱壙							
90	敲石	(10.9)	5.8	4.0	(519.4)	緑色片岩	
91	敲石	(12.1)	6.7	5.7	(672.0)	花崗閃緑岩	火熱を受ける。付着物あり
トレンチ							
108	敲石	(7.7)	(2.6)	(2.0)	(65.9)	デイサイト	
109	石庖丁	(6.4)	(6.6)	0.5	(36.5)	讃岐岩質安山岩	大形石庖丁の再加工品
110	剥片	2.1	3.4	0.6	3.9	硝子質安山岩	
出土状況不明							
125	砥石	(6.3)	(10.8)	3.0	(317.5)	流紋岩質溶結凝灰岩	

113～122は甕。113は胴部の張りが極めて弱く、逆「L」字状に強く屈曲する口縁部をもち、端部は面を有する。頸部直下の外面には指圧による粗雑な刻目を施した貼付突帯が巡る。口縁部から突帯のやや下位までの外面は横ナデ、他は風化のため調整不明。114は口縁端部が肥厚し、面をもつ。内外面横ナデ仕上げ。116～119は跳ね上げ口縁をもつもので、口縁端部が内彎するもの（116)、直線的にのびるもの（119）などがあるが、端部外面はいずれも面を有する。117は跳ね上げが顕著で、口縁端部は肥厚する。116～119とも口縁部・頸部内外面は横ナデで、116は胴部内面ナデ仕上げ。120～122は底部。底部側面が胴部からそのまま移行するもの（120)、斜下方へ反るもの（121)、垂直に下降するもの（122）がある。側面横ナデ、外底面・内面はナデるものが多い。

土師器（123・124)

2点とも甕で、123は直線的に「く」の字に屈曲する口縁部をもち、端部はさらに外反する。124は口縁部が外彎しながら開き端部は尖る。いずれも口縁部内外面横ナデで、124は頸部下外面に右上がりのタタキを施す。

石製品（125)

正面の一部を研砥面とする砥石で、上端部・裏面は節理面である。研砥は不定方向から行なわれるが、正面左上方から右上方への擦過は認められない。流紋岩質溶結凝灰岩製。

4　小結

昭和59年度の調査で検出した遺構は、上述したように竪穴住居跡10棟、土壙19基、溝10条、河川跡のほか柱穴多数である。

竪穴住居は弥生時代中期前半（第10号竪穴住居跡）、中期後半（第９・11号竪穴住居跡）、後期後半（第８号竪穴住居跡）、後期終末（第18号竪穴住居跡）、古墳時代中期（第12･13号竪穴住居跡）の５時期のものが検出された。

平面形態は、中期のものはすべて円形（第９～11・14・15・17号竪穴住居跡）である。弥生時代の竪穴住居が、方形から円形へと移行する前期後半～末頃を平面形態変化の第一の画期とするならば、第二の画期として捉えられる、宇部市北迫遺跡・防府市大崎遺跡等のような、円形から再び方形へと変化する中期後半段階の方形住居は検出されていない。

後期後半～終末は、円形・方形の両形態が混在（第８・18号竪穴住居跡）し、椹野川以東の趨勢と一致する。５世紀後半の住居は、方形（第13号竪穴住居跡）・隅丸長方形（第12号竪穴住居跡）の方形系統２種がみられる。

床面積は、中期後半の住居が31～48㎡の規模をもち、特に中期後半の第９号竪穴住居跡は、48㎡と同時期の住居としては県内でも有数の規模をもつ。椹野川・佐波川・阿武川流域では、中期前半以降住居規模が大形化し、床面積が20㎡前後の一群に加えて、約45㎡前後のものが出現する。この大形化は中期後半にピークに達する[5]ことから、第９号住居跡も大形化した住居例と捉えることができよう。

後期後半の第８号竪穴住居跡は床面積約25.5㎡で、椹野川流域の同時期の方形住居の中でも最大の規模である。朝田墳墓群第Ⅱ地区[6]の各住居を含めると、椹野川流域は床面積約12～25㎡のもので占められ、右田・一丁田遺跡[7]、井上山遺跡[8]等、佐波川流域の方形住居群とほぼ同一規模をもつ住居群で構成されていることになり、興味深い。

また、５世紀後半の第13号竪穴住居跡は、東辺7.6ｍ、北辺7.2ｍで、約54㎡の床面積をもち、県内の同時期の住居の中では傑出した規模である。平面形態は方形で、４本の主柱が平面形態と相似形をなして方形に配置される。ベッド状遺構はほぼ四周を巡るが、東辺中央部では途切れ、壁面に接して炭化物の充填した円形の掘り込みが認められた。この掘り込みの底面・側壁は熱変しており、設置場所・性格・竪穴住居の時期などから、カマ

ドが出現する前段階の施設として興味深い。

またこの住居は火災住居で、床面上には桁および梁と考えられる4本の炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で出土した。その周囲には棰木と推定される約20本の炭化材が床面中央に向かって放射状に検出されている。さらに、方形に組まれた桁・梁の内部の床面には、棰木に比べひとまわり太い炭化材が認められ、規模・検出位置・桁との重複関係から、主柱の一部と考えられた。桁・棰木の検出状況、住居の平面形態、主柱配置などから寄棟造屋根が想定され、竪穴住居の上屋構造を知る貴重な発見例となった。

土壙は、弥生時代中期中葉～終末のもので、平面形態は不整形のものが多い。竪穴住居に付設して営まれたものと考えられるが、相関関係は明らかでない。溝は、弥生時代中期後半～古墳時代初頭のもので、残存状態は悪く、遺物の出土量は極めて少ない。

河川跡は、調査区東端部で検出され、幅約2.6～4.5m、検出面からの深さ約55～80cmの規模をもち、南東から北西へ走行する。須恵器甕・坏身・土師器高坏などが出土しており、古墳時代後期～奈良時代にかけて機能していたものと考えられる。

出土遺物は、量的に多くはないが、注意しておきたい資料が数点出土した。

第9号竪穴住居跡から出土した一側縁加工のナイフ形石器は、対向する打面をもつ石核から作出された縦長剥片を素材とする優品である。メノウ製で、やや内彎する刃部には使用痕と考えられる剥落痕が認められる。竪穴住居の検出面が旧石器時代の遺物包含層であり、住居掘削時に同層から遊離した可能性も考えられる。近年、毛割遺跡[9]、堂道遺跡[10]や瑠璃光寺跡遺跡[11]からの報告例があるが、山口盆地内では旧石器自身の出土量が極めて少なく、当資料が大形の部類に入るナイフ形石器であることから、時期的にやや遡る可能性が考えられ、周辺での今後の資料の増加が期待される。

また同住居内からはジョッキ形土器の把手と思われるものも出土したが、県内では周東町河池遺跡[12]に出土例がみられるにすぎず、極めて貴重である。

第39号土壙は庄内新段階に位置づけられる。出土遺物には口縁部が「く」の字に大きく外反する壺、坏部の中位に稜をもって開く高坏に加え、搬入品かどうか明らかでないが底部が円盤状に突出した外来要素の強い土師器の甕または壺があり、注目しておきたい。

以上のように、遺跡保存地区の2年次目の調査では、多数の竪穴住居跡をはじめとして、土壙・溝・河川跡等を検出した。出土遺物にも注目すべき資料が少なくない。しかし住居の構造・集落の分布範囲等は必ずしも明らかになったわけではなく、住居の同時併存・土壙との相関関係を含めて、今後に残された大きな課題といえる。

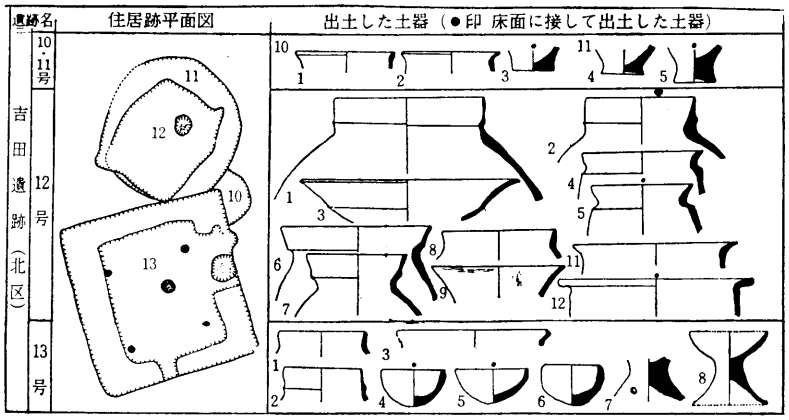
〔注〕

1）河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年）。

2）小野忠熙「北迫遺跡」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。

3）山口県教育委員会・山陽都市開発株式会社「大崎遺跡」（『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第82集、1985年）。

4）第10～13号竪穴住居跡の出土遺物は、当埋蔵文化財資料館に該当資料が保管されておらず、遺物の記載は下記の文献に拠った。
小野忠熙・中野一人「山口」（『三世紀の考古学』下巻・三世紀の日本列島、学生社、1983年）。



5）河村吉行「考察―弥生時代竪穴住居跡の各属性について―」（前掲注1）文献所収）。

6）建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「朝田墳墓群Ⅱ」（『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳』、山口県埋蔵文化財調査報告第33集、1977年）。

7）山口県教育委員会「右田・一丁田遺跡」（『右田・一丁田遺跡、的場・宮の馬場遺跡、久米市遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第19集、1973年）。

8）井上山遺跡発掘調査団『井上山』（1979年）。

9）山口市教育委員会・道川重機株式会社『毛割遺跡』（山口市埋蔵文化財調査報告第18集、1983年）。

10）山口市教育委員会・医療法人和同会『堂道遺跡』（山口市埋蔵文化財調査報告第24集、1987年）。

11）小田村宏「先史・原史」（『仁保の郷土史』、仁保の郷土史刊行会、1987年）。

12）山陽自動車道建設に伴い、1987年に山口県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施されている。竪穴住居からの出土品で，報告書は1988年3月に刊行予定。

付篇Ⅱ

古墳時代における竪穴住居の各属性について

河　村　吉　行

1　はじめに

筆者は先に弥生時代社会の構成要素を抽出するにあたり、その一つの手段として県内における弥生時代の竪穴住居を大きく九つの水系単位に集約し、集落内において生産、消費の拠点となる個々の竪穴住居について平面形態、床面積、主柱数および主柱間床面積等の構造的属性から分析を行ない、各水系単位における住居構造の諸特徴の時期的変遷・画期について問題提起を行なった。[1] また、火災住居の検出例も少なく、建築学的立場からの構造力学的な分析は留保したが、平面的な視点から水系単位の竪穴住居の各属性の時期的変遷を概観した。本稿では古墳時代の竪穴住居の分析を試みるが、その前に、県内の弥生時代の竪穴住居について各属性の変化の過程・画期について簡単に触れておくことにする。

弥生時代の竪穴住居の平面形態の変化には時期的に二つの画期が認められた。第一の画期は前期末で、資料数は少ないが長門部の西部、木屋川流域に位置する坂ノ上遺跡、[2] 上原遺跡[3] および周防部西端、椹野川流域に位置する西遺跡[4] で方形から円形への形態変化が窺われる。第二の画期は固定的に採用された円形の平面形態に加え、方形のものが出現する中期後半の段階である。椹野川流域の山口大学構内遺跡（吉田遺跡）[5]、佐波川流域の大崎遺跡[6] および厚東川流域の北迫遺跡[7] では隅丸方形のものが出現するが、この時期は佐波川流域の各遺跡で見られるように円形15棟に対し方形は３棟で、棟数的にはまだ円形のものが圧倒的優勢を占める傾向がある。しかし、次第に方形住居の出現頻度が増加し、後期後半の段階では両形態の住居棟数は桔抗状態となり、長門部最西端の綾羅木川流域に位置する石原[8]・伊倉[9] 両遺跡ではすべて方形へと変化している。これに対して阿武川流域の突抜遺跡[10] はこの段階でも円形住居が優位を占め、保守的色彩が強い。また、この段階では周防部北部阿武川流域の突抜遺跡 DW－15に見られるような方形住居の一辺が胴張りとなり、円形住居の痕跡を残すものや同遺跡 DW－11、周防部北部にあたる末武川流域の宮原遺跡第１号住居跡[11] のような上面は円形に近いが床面が方形のものなどが存在し、円形から方形への過渡的な形態をもつものが出現する。

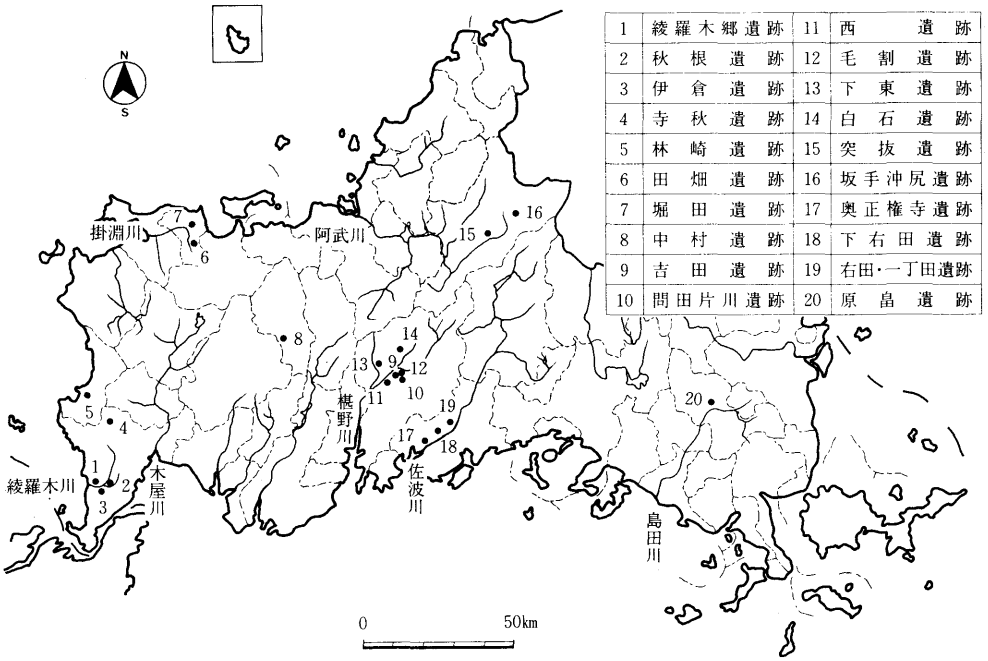
床面積は、前期末～中期初頭の段階では約30㎡を超えるものはないが、中期前半以降は

椹野川、佐波川、阿武川流域の各遺跡で顕著に見られるように、前代の規模を踏襲した約10～25㎡のものに加え、約40～65㎡と大形化した規模をもつものが出現する。住居規模の大形化のピークは円形住居に特徴的で、各流域とも方形住居が出現する時期に相当し、椹野川、佐波川流域では中期後半頃、阿武川流域では後期前半頃、掛淵川流域では後期後半頃である。各流域とも「倭国大乱」の緊張時にあたっており、戦闘に備えて集住を余儀なくされた結果、一棟ごとの収容面積の拡大を伴い、円形住居の盛行を導いたものと考えられている。[12] 規模の大形化の収束後は、方形住居は約10～30㎡、円形住居は約10～25㎡のものと約30～45㎡前後のやや大形の二群に分化する。方形住居は椹野川、佐波川流域でみられるように約10～20㎡前後に規格化するものが多い。他の流域に比較していちはやく後期後半の段階で綾羅木川流域では方形住居は約10～30㎡、約35㎡、約55～60㎡の三群に分化するが、30㎡前後に規格化するものが多く、同時期の阿武川流域での円形住居の規模の画一化と同一現象を示す。

主柱数は住居規模の大形化と呼応して増加し、大形化のピーク時が最多となる。各流域とも円形住居は最多時で７～９本のものがみられ２～６本のものも存在する。また、方形住居が優位を占める後期後半の段階で２～４本となる。方形住居は住居規模と無関係に２ないし４本の二種類の主柱配置がみられる。

主柱間床面積は円形の場合、約30㎡以下の床面積をもつものは各時期とも床面積の45％ないしはそれ以下が大半で、４～５本の主柱をもつ中期後半の佐波川流域の住居にとくに顕著にみられる。また、約35㎡以上の床面積をもつもののうち、床面積の50％を超えるものは炉あるいは中央穴の周囲に２ないし４本の支柱（棟持柱）を床面に配置する傾向が窺える。方形住居は主柱間床面積の床面積に占める割合は45％以下が大半で、約30㎡以下の床面積をもつ円形住居の割合と同じ傾向を示している。したがって、方形住居の主柱は約30㎡以下の床面積をもつ円形住居の空間分割を意識して配置されたものと考えられる。

こうした、竪穴住居の諸属性は集落の構成員はもとより、集落を形成する集団の生活・社会様式の主体的力量の反映であることから、以下では、弥生時代の竪穴住居で認められる諸属性が政治的・経済的・社会的な変動の画期となる古墳時代でどのように変化し、推移していったのかを検討してみたい。なお、畿内庄内式土器の時期区分については研究者相互によって編年観が異なるが、本稿で３世紀後半の年代を与えている。また、４世紀代の竪穴住居は現在のところ、綾羅木川流域の秋根遺跡 LS 004、[13] 椹野川流域の下東遺跡 KPD－１の２棟に限られており、[14] 竪穴住居跡の諸属性を分析するには資料数が少なく、資



1	綾羅木郷遺跡	11	西遺跡
2	秋根遺跡	12	毛割遺跡
3	伊倉遺跡	13	下東遺跡
4	寺秋遺跡	14	白石遺跡
5	林崎遺跡	15	突抜遺跡
6	田畑遺跡	16	坂手沖尻遺跡
7	堀田遺跡	17	奥正権寺遺跡
8	中村遺跡	18	下右田遺跡
9	吉田遺跡	19	右田・一丁田遺跡
10	問田片川遺跡	20	原畠遺跡

Fig. 90 県内における主な古墳時代の竪穴住居跡検出遺跡の分布

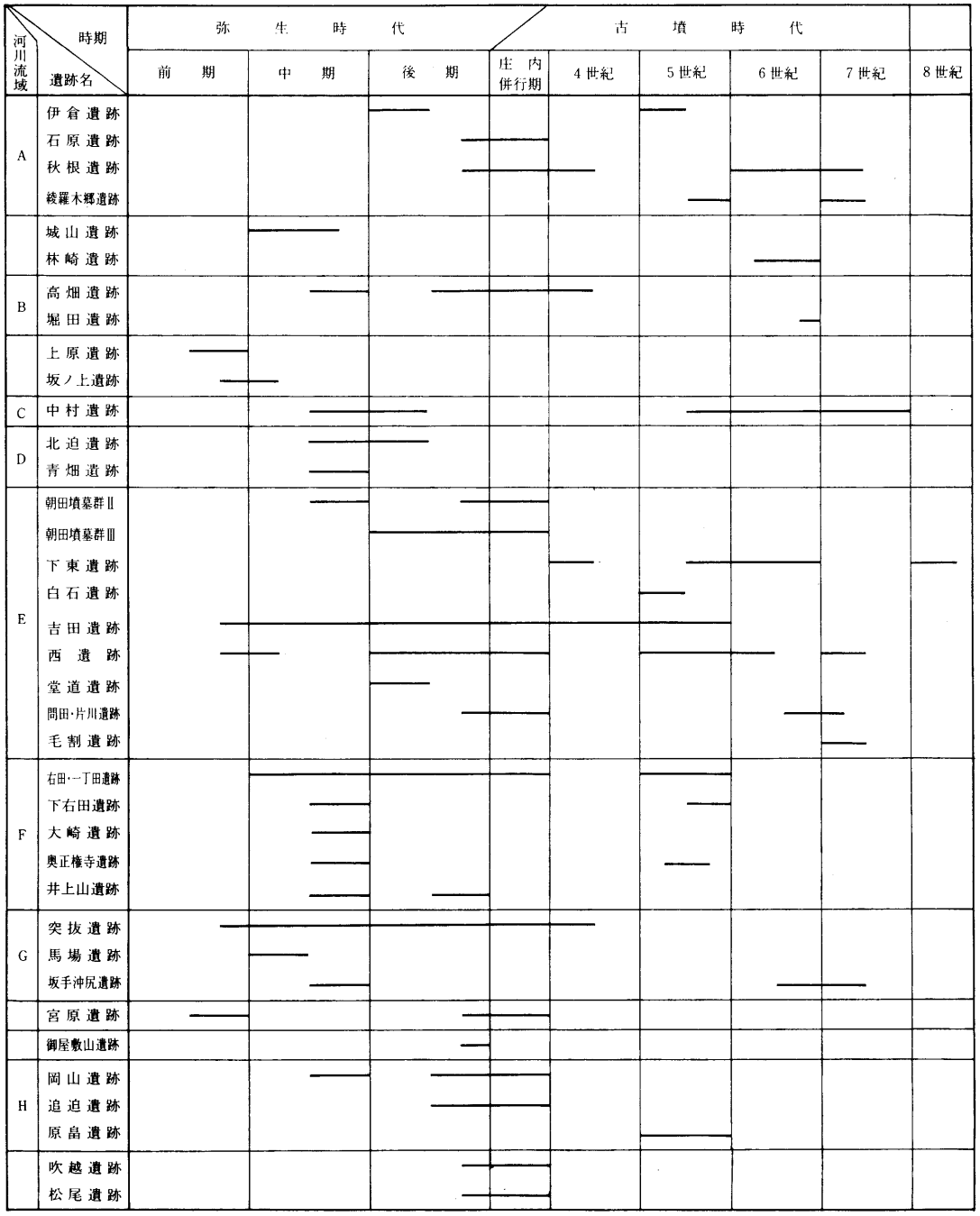
料数の増加を待って改めて言及したい。

2 竪穴住居の各属性

1）平面形態

弥生時代終末～3世紀代においては秋根、伊倉、石原遺跡等でみられるように綾羅木川流域では円形住居は消失し、いちはやく方形住居のみで構成されている。しかし、綾羅木川流域以外の六つの河川流域では、いずれも円・方両形態が混在しており、特に、阿武川流域の突抜・馬場遺跡、島田川流域の高地性集落と呼ばれる吹越[15]・松尾遺跡[16]等で顕著である。なお、円形から方形への過渡的な形態をもつものが先にも述べた突抜遺跡DW－11・15、佐波川流域の右田・一丁田遺跡第3・20号住居跡[17]や宮原遺跡第1号住居跡で認められることから、平面形態の変化は長門部に比べ周防部がやや遅れる傾向にあると言える。

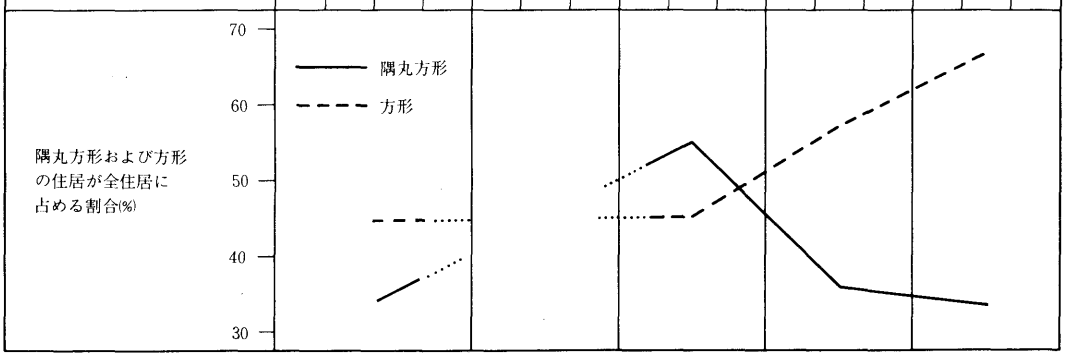
4世紀代の資料は、秋根遺跡LS 004の方形住居があげられるが、5世紀以降は各河川流域ともすべて方形、隅丸方形、長方形、隅丸長方形の方形系統の住居で占められ、4世紀代、遅くとも5世紀には円形から方形の画一的な平面形態変化の画期が認められる。そこで弥生時代終末から7世紀にかけて時期別に、方形系統の各4種それぞれが全住居に占



（A：綾羅木川、B：掛淵川、C：厚東川、D：木屋川、 E：椹野川、F：佐波川、G：阿武川、H：島田川）

Fig. 91 県内における主な弥生～古墳時代の竪穴住居の時期

時期		弥生時代終末～3世紀				4世紀			5世紀			6世紀			7世紀		
平面形態		A	B	C	D	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
河川流域	綾羅木川流域	4	14	2	5		1		2			5	1	1	3		
	掛淵川流域		1										3				
	厚東川流域												1		5	5	
	椹野川流域			2		1			4	6	1		3			11	
	佐波川流域	2	2						4	4							
	阿武川流域	2	1														
	末武川流域	2							1								
	島田川流域	4															
計		14	18	4	5	1	1	0	11	10	1	5	8	1	8	16	0



(A：隅丸方形　B：方形　C：隅丸長方形　D：長方形　　数値は棟数)

Fig. 92　竪穴住居の平面形態変化

める割合を算出してみた。試料数は101の竪穴住居であるが、各河川流域単位での検出事例に多寡があるため、あえて時期別に一括した。また、弥生時代終末～3世紀代に一辺あるいは二辺が胴張りとなり、円形から方形への過渡形態となるものは除外した。方形住居は弥生時代終末～3世紀代では全住居の43.9%、5世紀代で45.4%で5割に満たず出現比率はほぼ同じである。しかし、6世紀以降は次第に出現頻度を増し、6世紀代で全住居の57.1%、7世紀代で66.6%と全住居の7割弱を占めるようになる。また、隅丸方形のものは弥生時代終末～3世紀代で全住居の34.1%であるが、5世紀代には出現頻度が急増し、55.0%を占めるようになる。その後、6世紀代では全住居の35.7%、7世紀代で33.3%と

安定した出現率を示すようになる。すなわち、弥生時代終末～3世紀代には方形住居が優位を占めていたが、5世紀代には両者の出現頻度が逆転する。それとともに、長方形、隅丸長方形の検出例は少なくなる。しかし、6世紀以降は隅丸方形が逆に減少し、安定した出現率を示すのとは対照的に方形住居が次第に集落内で棟数を増し、7世紀代では全住居の7割弱を示すようになる。したがって、古墳時代の方形系統の住居の平面形態の画期は弥生時代ほどの大きな変化はないが、5～6世紀代に求めることができ、6世紀以降は住居の平面形態が方形という画一化した形態をとる傾向が指摘できる。

2）床面積

次に、各時期の床面積の推移をみてみることにする。

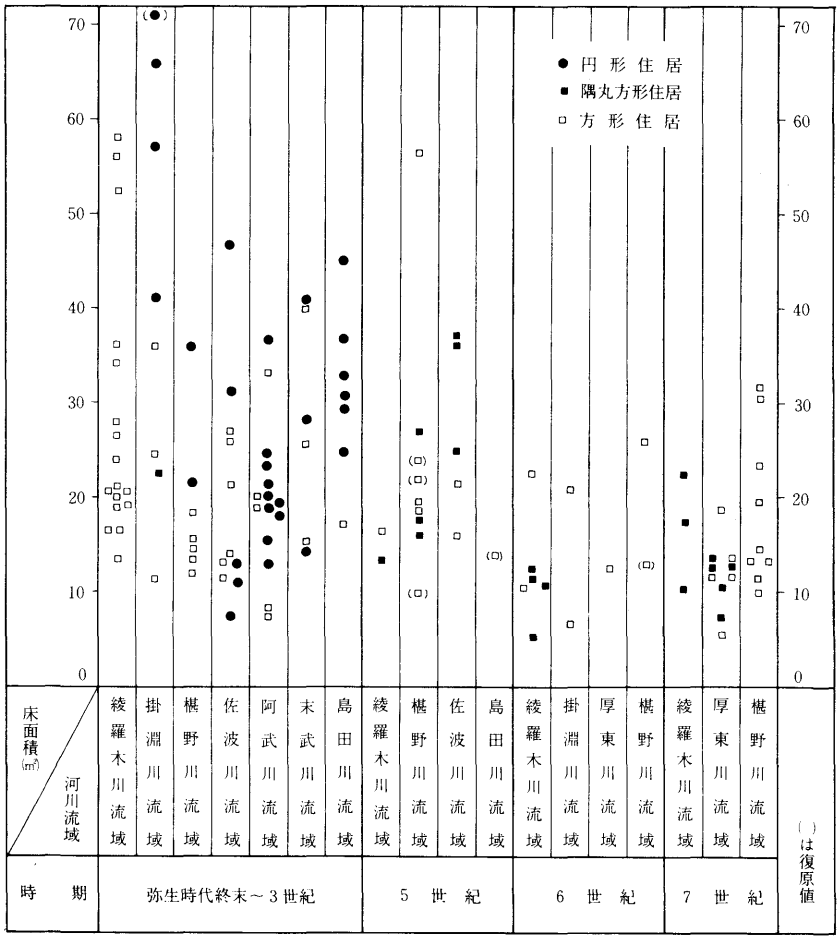


Fig. 93 竪穴住居の床面積

弥生時代終末～3世紀代における方形住居の床面積は大きく約10～30㎡、約30㎡、約50～60㎡の三群に区分されると考えられる。綾羅木川流域の秋根、伊倉、石原遺跡等ではとくに顕著に認められるが、各流域とも約10～30㎡前後に集中している。この傾向は5世紀代まで存続するが、6世紀代ではいっそう顕著となり、5世紀代でみられた右田・一丁田遺跡第2・19号住居跡や山口大学構内遺跡（吉田遺跡）の遺跡保存地区第13号竪穴住居跡[18]等の35㎡以上の床面積をもつ住居は姿を消し、床面積はすべて約10～30㎡前後に縮小化してしまう。この縮小化した住居はさらに約10～15㎡前後のもの、約20～30㎡前後のものの二群に分化している。とくに、7世紀代では厚東川流域の中村遺跡[19]、椹野川流域の毛割遺跡[20]にみられるように約10～15㎡前後の極めて画一化した床面積をもつ一群が出現している。

Tab. 10　竪穴住居の主柱数

時期＼主柱数	0	1	2	3	4
弥生時代終末～4世紀	1	0	9	0	10
	5.0		45.0		50.0
5世紀	3	0	7	0	8
	16.7		38.9		44.4
6世紀	3	0	1	0	8
	25.0		8.3		66.7
7世紀	4	2	2	2	13
	17.4	8.7	8.7	8.7	56.5

上段数値は住居数、下段数値は同時期の全住居に占める割合(%)

古墳時代における床面積変化の画期は以上のように住居規模の小形化・画一化として捉えられ、先に述べた平面形態が隅丸方形から方形に変化し、画一化する時期と同じく6世紀代に認められる。すなわち、平面形態の方形への規格化と床面積規模の小形化・画一化が連動しており、注意しておきたい。

3）主柱数

床面積が約10～25㎡前後のもので比較すると、円形住居は弥生時代中期後半では、佐波川流域の奥正権寺[21]、下右田[22]、右田・一丁田、井上山[23]各遺跡で2～6本とバラエティーに富むが、各流域で方形住居が定着した後期後半～3世紀代では0、2、4本の三種に限定される。この傾向は6世紀代まで引き継がれる。しかし、5世紀代までは4本柱と他の主柱数をもつ住居はほぼ同数に近いが6世紀代では2本柱が激減し、4本柱をもつものが他の主柱数をもつものに比べて約2倍近い出現率を示している。主柱数の変化においても、6世紀代がひとつの画期であることが推察される。また、7世紀代では1、3本の主柱をもつものが出現し、0～4本の五種の主柱をもつ住居が営まれている。

4）主柱間床面積

方形住居で主柱間床面積が床面積に占める割合は、変化の画期が5、7世紀代に認められる。弥生時代終末～4世紀代ではほぼ17～41％の範囲内に分散していたが、5世紀代では山口大学構内遺跡（吉田遺跡）の遺跡保存地区第13号竪穴住居跡、西遺跡第4・12号住居跡、下右田遺跡DW－2、右田・一丁田遺跡10号住居跡で22～26％、6世紀代では秋根遺跡3～6号住居跡、中村遺跡DW－20、下東遺跡KPD－7で21～31％である。5世紀代では前代にみられた分散傾向が収束し、ほぼ一定の占有率をもつようになり、住居内の空

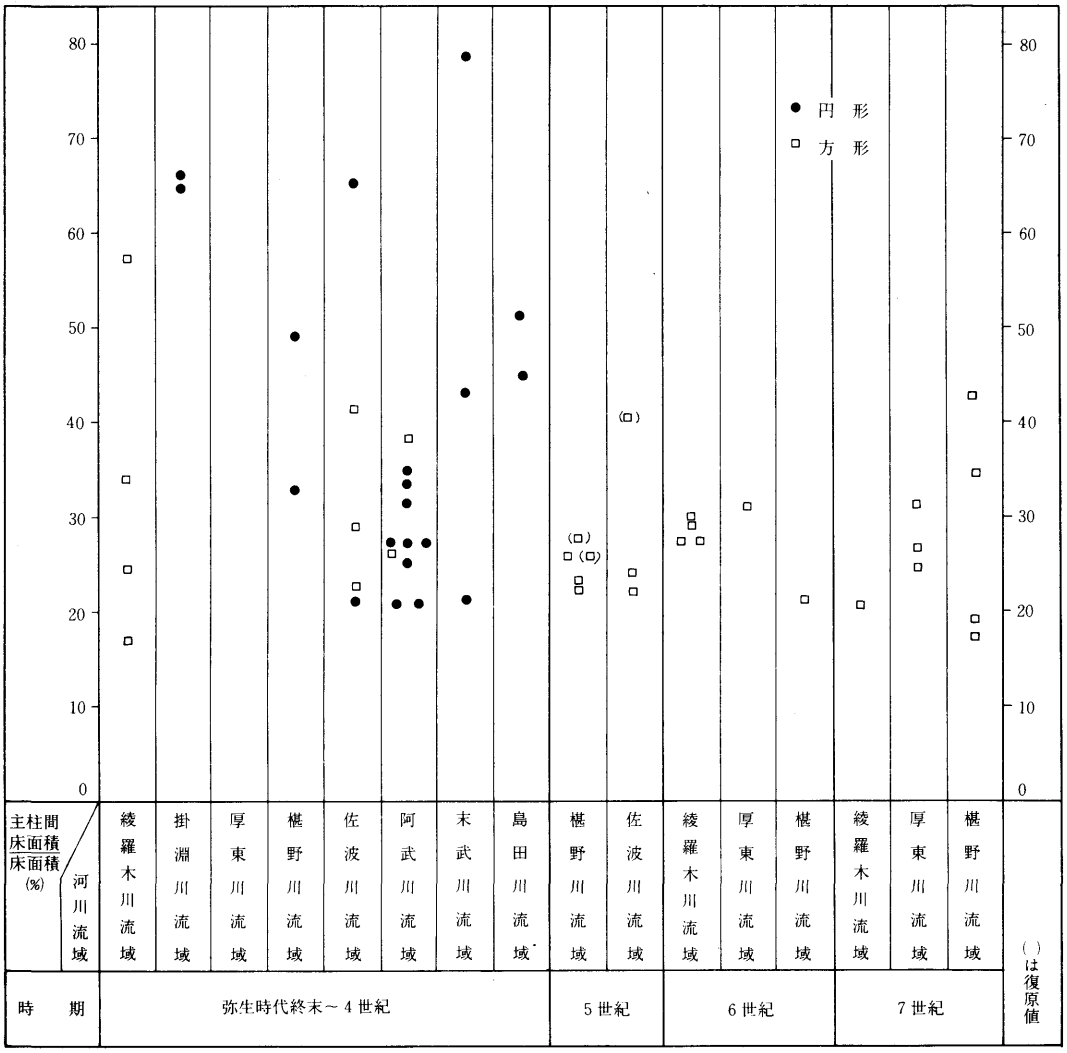


Fig. 94 床面積に占める主柱間床面積(1)

間分割意識が固定化したものと考えられ、6世紀代へも継続して営まれるようになる。しかし7世紀代では、秋根遺跡LS014、中村遺跡DW－17・23・30、毛割遺跡第8～10号住居跡で、17～42％の占有率をもつようになる。住居規模の拡大と主柱間床面積の拡大は必ずしも比例しておらず、各住居単位すなわち集落の構成単位で、独自に床面積に占める主柱間床面積の選択が行なわれたものと理解できる。

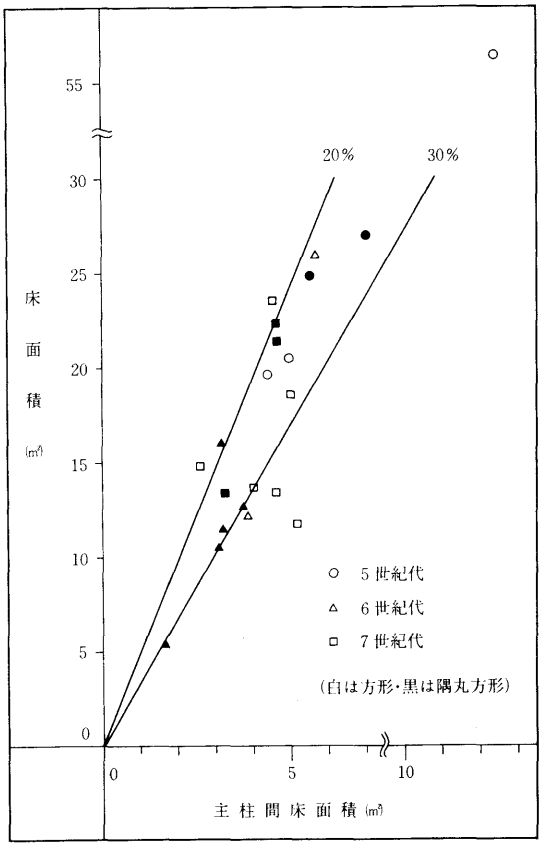


Fig. 95 床面積に占める主柱間床面積(2)

3 各属性の画期について

これまで述べてきたように、古墳時代における平面形態、床面積、主体数、主柱間床面積の各変化の画期は以下のように要約することができる。

平面形態は方形、隅丸方形、長方形、隅丸長方形の四種に大別されるが、時期別にみると方形系統の全住居中に占める各形態の出現比率が異なっている。方形の平面形態をもつものは、弥生時代終末～5世紀代までは全住居棟数の5割に満たず、しかも安定した出現率を示している。逆に、隅丸方形のものは5世紀代に全住居棟数に占める割合がピークに達し、方形住居の棟数をしのぐようになる。しかし、隅丸方形の住居は6世紀以降7世紀まで全住居数の約3割強までに激減し、安定した出現率を示すようになる。この傾向と反比例するかのように6世紀以降は方形住居が次第に棟数を増し、隅丸方形の住居を棟数的にしのぐようになるとともに、7世紀には全住居数の7割を占めるようになり、各集落内で6世紀以降、住居の平面形態が方形に規格化される。

床面積は5世紀代までは約35㎡以上のやや大形の住居が存在するが、6世紀代にはすべて約10～30㎡前後の規模に縮小し、画一化する。とくに、7世紀代では数遺跡で約10～15㎡前後の極めて規格化した住居規模をもつ一群が出現し、住居規模の小形化、画一化が

進んでいる。

主柱数の変化もまた6世紀代にひとつの画期が想定される。5世紀代までは4本柱と他の主柱数をもつものはほぼ同数に近いが、6世紀代では4本柱のものが圧倒的に優勢で約2倍近い採用率を示す。

すなわち、古墳時代における住居の平面形態、床面積、主柱数の変化は画一化・規格化現象として把握することができ、その画期は6世紀代に認められることが明らかとなった。この画期をもたらす社会的要因のひとつに、時期を同じくして県内各地で造営された群集墳盛行の背後にある被葬者の質的変化があげられよう。弥生時代中期における平面形態の円形から方形への変化が、いわゆる「倭国乱」に代表される政治的緊張が契機となって、床面積の確保とそれに伴う収容人員の拡大となって具現したものと考えられており、政治的・社会的要請に規制された結果、引き起こされた現象であることもその傍証となろう。群集墳は「いくつかの家族が、家長の死を契機としてそれぞれ一世代一墳ずつ何世代かにわたって古墳を築造した結果累積したもの」[24]と考えられ、家族墓的色彩が強いものとされている。いくつかの家族とは住居数棟で一つのまとまりをもつ集団で「世帯共同体」と理解することができよう。規模、構造は多様であり、横穴墓もその範疇で捉えることができる。被葬対象は「地域あるいは集団によっては、家族体の中枢部分のすべて、あるいは家族体の成員のほとんどすべてが、横穴式石室または横穴に葬られることがあった」[25]と想定されている。また、福岡県行橋市竹並遺跡では埋葬された人骨数、年齢、性別などから、横穴墓の被葬者の性格が5世紀段階では特定の人々に限定されていたが、6世紀段階になると「一横穴墓への埋葬は傍系を含む夫婦単位を基調とした小家族で、それがいくつか集まった単位が家父長制的な世帯共同体をつくっている」とされ、それ以降は「一横穴墓への埋葬は直系の小家族のみとなり、細分されてくる」[26]と指摘している。6世紀代に認められる竪穴住居の各属性の画一化・規格化現象は、このような細分化した小家族に対応するもので、自立化しつつある家長を紐帯とした、小家族単位の新しい世帯共同体原理の反映と考えられよう。

なお、小論は昭和61年度文部省科学研究補助金（一般研究C）「防長における律令国家成立以前の集落構造の変遷と推移に関する研究」の研究成果の一部を含んでいる。

〔注〕

1）河村吉行「考察―弥生時代竪穴住居跡の各属性について―」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年)。
2）山口県教育委員会『坂ノ上遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第29集、1974年)。
3）冨士埜勇『上原遺跡』(菊川町教育委員会、1976年)。
4）山口市教育委員会『西遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。
5）河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年)。
6）山口県教育委員会・山陽都市開発株式会社「大崎遺跡」(『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第82集、1985年)。
7）小野忠熙「北迫遺跡」(『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年)。
8）山口県教育委員会「石原遺跡」(『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第17集、1973年)。
9）山口県教育委員会『伊倉遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第16集、1973年)。
10）山口県教育委員会『突抜・馬場遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第87集、1985年)。
11）山口県教育委員会「宮原遺跡」(『宮原遺跡・上広石遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第20集、1973年)。
12）都出比呂志「弥生時代の東と西」(『日本語・日本文化研究論集』、大阪大学文学部、1984年)。
13）下関市教育委員会『秋根遺跡』(1977年)。
14）建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」(『下東遺跡・荻峠遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第30集、1975年)。
15）a　小野忠熙他『吹越遺跡予備調査概報』(平生町教育委員会、1970年)。
　　b　小野忠熙他『吹越遺跡第二次調査概報』(平生町教育委員会・山口県教育委員会、1972年)。
16）山口大学人文学部考古学研究室「平生町松尾遺跡の発掘調査」(『西部瀬戸内における弥生文化の研究』、山口大学人文学部考古学研究室研究報告第３集、1984年)。
17）山口県教育委員会「右田・一丁田遺跡」(『右田・一丁田遺跡、的場・宮の馬場遺跡、久米市遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第19集、1973年)。
18）河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1987年)。
19）財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会『中村遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第100集、1987年)。
20）山口市教育委員会・道川重機株式会社『毛割遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第18集、1983年)。
21）山口県教育委員会・山陽工業株式会社『奥正権寺遺跡Ⅰ』(山口県埋蔵文化財調査報告第77集、1984年)。
22）a　山口県教育委員会編『下右田遺跡第１・２次調査概報』(山口県埋蔵文化財調査報告第43集、1978年)。
　　b　山口県教育委員会編『下右田遺跡第３次調査概報』(山口県埋蔵文化財調査報告第46集、1979年)。
23）井上山遺跡発掘調査団『井上山遺跡』(1979年)。
24）白石太一郎「日本古墳文化論」(『講座日本歴史１』、東京大学出版会、1984年)。
25）近藤義郎「弥生文化論」『前方後円墳の時代』、岩波書店、1983年)。
26）竹並遺跡調査会編『竹並遺跡』(寧楽社、1979年)。

〔文献〕

Tab. 11　県内の主な古墳時代の竪穴住居一覧表は以下の文献によって作成した。

1）下関市教育委員会『綾羅木郷遺跡発掘調査報告第1集』(1981年)。
2）山口県教育委員会「秋根遺跡」(『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第17集、1973年)。
3）下関市教育委員会『秋根遺跡』(1977年)。
4）山口県教育委員会『伊倉遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第16集、1973年)。
5）山口県教育委員会「寺秋遺跡」(『寺秋遺跡・湯免遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第47集、1979年)。
6）豊浦町教育委員会・山本昌美『林崎遺跡』(1987年)。
7）㈶山口県教育財団・山口県教育委員会『たかはた』(山口県埋蔵文化財調査報告第94集、1986年)。
8）前田勲「原史・古代の日置」(『日置町史』、日置町史編纂委員会、日置町、1983年)。
9）財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会『中村遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第100集、1987年)。
10）山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内第Ⅰ地区発掘調査概報』(山口大学、1971年)。
11）本書付篇Ⅰ参照。
12）山口市教育委員会・株式会社林兼商会『問田片川遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第20集、1985年)。
13）山口市教育委員会『西遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。
14）山口市教育委員会・道川重機株式会社『毛割遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第18集、1983年)。
15）建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」(『下東遺跡・荻峠遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第30集、1975年)。
16）森田孝一「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」(山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。
17）山口県教育委員会『突抜・馬場遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第87集、1985年)。
18）山口県教育委員会「坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第42集、1978年)。
19）山口県教育委員会・山陽工業株式会社『奥正権寺遺跡Ⅰ』(山口県埋蔵文化財調査報告第77集、1984年)。
20）山口県教育委員会編『下右田遺跡第3次調査概報』(山口県埋蔵文化財調査報告第46集、1979年)。
21）山口県教育委員会「右田・一丁田遺跡、的場・宮の馬場遺跡、久米市遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第19集、1973年)。
22）山口県教育委員会「原畠遺跡」(『臼田・原畠・新畑遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第21集、1973年)。

Tab. 11 県内の主な古墳時代の竪穴住居一覧表

(1988年3月現在まで)

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	規模(cm) 深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
綾羅木郷遺跡	住居跡1号	5世紀後半	隅丸方	410	380	25	13.2			0	○	×	北壁中央	×	東壁、北壁東半部には壁溝なし。滑石製模造品、鉄鏃出土。	1
	住居跡2号	古墳時代	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
	住居跡3号	7世紀前半	隅丸方	460	410	15	17.8			0	×	×	北壁中央	×		
	住居跡4号	7世紀前半	隅丸方	360	320	30	10.5			0	×	×	北壁中央	×		
秋根遺跡	1号住居跡	6世紀後半	方	340	310	5	10.2			?	×	×	北壁中央	×	南壁胴張り。	2
	2号住居跡	6世紀後半	隅丸方	250	290	10	7.4+α			3(4)	○	×	北壁中央	土製	竈材は粘土。	
	3号住居跡	6世紀後半	隅丸方	375	345	8	10.5	3.2	30.48	4	○	×	北壁中央	×	北・西二辺に壁溝。	
	4号住居跡	6世紀後半	隅丸方	406	389	28	11.5	3.2	27.83	4	○	×	北壁中央	土製	竈材は粘土。南東のコーナーには壁溝なし。	
	5号住居跡	6世紀後半	隅丸方	335	295	15	5.6	1.5	26.79	4	○	×	?	?	幅広の壁溝	
	6号住居跡	6世紀後半	隅丸方	415	400+α	20	12.7	3.7	29.13	4	○	×	北壁中央	×		
	7号住居跡	6世紀後半	?	?	?	?	?	?	?	?	×	×	北壁	×		
	LS001	6世紀	(方)	320	290+α	24	7.5+α	4.1		4	○	×	?	?	北壁中央に住居外への張り出し。	3
	LS002	6世紀	(方)	420	190+α	11				?	○	×	?	?		
	LS004	4世紀末~5世紀前半	方	450	430	18	16.1			2	○	×	南壁中央	×		
	LS011	6世紀	隅丸長方	420	340	15	13.2			2	○	中央	×	×	壁溝は西壁のみ。北東隅に土壙。炉は中央穴の可能性あり。	
	LS014	7世紀前半	隅丸方	580	540	20	22.4	4.7	20.98	4	○	中央	×	×	炉は中央穴の可能性あり。	
伊倉遺跡	D区 1号住居跡	5世紀前半	隅丸方	610	590+α	30	(35)			2(4)	○	×	×	×		4

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
寺秋遺跡	1号住居跡	古墳時代	隅丸長方	230	180	10				1	×	×	?	?	床面中央部から東壁に焼土。住居外の各コーナーに柱穴。	5
林崎遺跡	S B 1	6世紀中葉～後半	隅丸方	483	395	10				3(4)	○	×	?	?	手捏ね土器。	6
	S B 2	6世紀中葉～後半	隅丸方	380	344	16	10.3	3.0	29.13	4	○	×	?	?	粘り床。北壁中央部床面に焼土、炭層あり。竈の可能性。	
高畑遺跡	2号住居	3～4世紀	楕円形	(1060)	(930)	15	(71)			6(7)	○	×	×	×	床面中央に焼土。中央穴挟んで2柱穴。ガラス小玉、勾玉。	7
堀田遺跡	1号住居跡	(6世紀末)	(方)	360						?	○	?	?	?		8
	2号住居跡	6世紀末	方	322	262	(10)	6.9			0	○	?	?	×	住居外へ延びる溝。	
	3号住居跡	(6世紀末)	方	310	310	20	21.5			0	○	?	?	×	壁溝は南壁、東・西壁南端部を欠く。	
中村遺跡	DW － 16	7世紀後半	方	390	354	19	11.9			4	×	×	西壁中央	×	貼り床。銅鉱石出土。	9
	DW － 17	7世紀後半	方	464	446	14	18.7	5.0	26.74	4	×	×	北壁東寄	×	貼り床。	
	DW － 18	7世紀後半	隅丸方	312	274	21	7.6			1	×	×	北壁東寄	×	貼り床。	
	DW － 19	6～7世紀	隅丸方	486	440	19	19.6			?	×	×	西壁南寄	×		
	DW － 20	6世紀	方	397	356	12	12.5	3.9	31.20	4	×	×	北壁中央	石製		
	DW － 21	7世紀	隅丸方	394	332	22	10.6			2	×	×	西壁北寄	×	貼り床。	
	DW － 22	7世紀後半	隅丸方	392	376	22	12.6			3(4)	×	×	西壁中央	×	壁面に沿って各辺二柱穴。北壁の竈を移設。銅鉱石、模造鏡。	
	DW － 23	7世紀後半	隅丸方	392	386	25	13.4	3.2	23.88	4	×	×	西壁中央	×	竈脇に土壙。貼り床。銅鉱石、土製模造鏡出土。	
	DW － 24	7世紀後半	方	390	332	11	11.9			4	×	×	西壁中央	石製	手捏ね土器、鉄刀子出土。	
	DW － 25	7世紀後半	方	260	246	16	5.7			?	×	×	北壁西寄	×	貼り床。土製紡錘車出土。	
	DW － 26	6～7世紀後半	方	408	348	20	12.6	5.7	45.24	4	×	×	西壁北寄	×	銅鉱石、銅塊出土。	
	DW － 27	7世紀	隅丸方	396	382	15	12.7			?	×	×	北壁中央	×		

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	規模(cm) 深さ	床面積(m²)	主柱間床面積(m²)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
中村遺跡	DW − 28	6～7世紀	隅丸方	316	312	20	7.7			?	×	×	北壁東寄	×	竈脇に粘土塊。	9
	DW − 29	5世紀後半～6世紀代	方	364	336	13	10.5			?	×	×	西壁中央	石製	竈撤去に伴う祭祀。手捏ね土器出土。	
	DW − 30	7世紀後半	方	384	336	18	13.8	4.0	28.99	4	×	×	西壁中央	×		
	DW − 31	6～7世紀	隅丸方	316	308	12	10.7			?	×	×	西壁中央	×		
山口大学構内遺跡	第1号住居跡	古墳時代前期	方	344	324	4	(14)			3	○	?	?	?	壁溝は西壁、北壁西端部のみ。北壁中央部西寄り床面に焼土。	
N.O-15区	第2号住居跡	古墳時代前期	方	418	388	30	14.5			3(4)	○	×	東壁中央	×	東壁中央床面に焼土。鉄塊、手捏ね土器出土。	10
	第3住居跡	古墳時代前期	隅丸方	560	512	25	(30)			3(4)	○	?	×	×	壁溝は西壁欠。北端部床面に焼土。北壁中央部、竈の可能性。	
	第4住居跡	古墳時代前期	長方	564	372	25	(20)			2	○	×	?	?	火災住居。鉄鎌出土。	
	第5住居跡	古墳時代前期	(方)	436+α	136+α	12				?	?	?	?	?		
	第6住居跡	古墳時代前期	(長方)	660	250+α	10				?	×	×	北壁中央	×	竈脇に土壙。	
遺跡保存地区	第12号住居跡	5世紀後半	隅丸長方	515	410	15	18.2			0	×	中央	×	×	住居外への張り出し。床面に壇状の平坦面。	11
	第13号住居跡	5世紀後半	方	764	720	4	56.6	12.4	21.93	4	○	中央東壁	×	×	火災住居。ベッド状遺構。	
問田片川遺跡	第10号住居跡	6世紀末～7世紀前半	(長方)	520+α	380+α	12				3(4)	×	×	北壁	×		12
	第11号住居跡	(6世紀末～7世紀前半)	方	300	140+α	10				?	×	×	?	?		
西遺跡	第1号住居跡	不明	(隅丸方)								×	?	?	?		13
	第2号住居跡	不明	隅丸方	378		10				1(2)	○	?	?	?		
	第3号住居跡	5世紀末～6世紀初頭	方	300	290	12	8.5			1	○	×	?	?	壁溝は北部コーナーのみ。北壁中央部付近に竈の可能性。	
	第4号住居跡	5世紀末	隅丸方	580	524	16	27.0	7.0	25.93	4	○	×	×	×	北壁に壁溝なし。南・西側の床面に壇状のテラス。	
	第5号住居跡	5世紀前半	隅丸方	484	426	5	(20)			2	×	?	?	?	北壁寄りの床面に焼土。	

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
西遺跡	第6号住居跡	7世紀前半	方	380	310	8	10.0			?	×	×	?	?	東壁中央部付近に竈の可能性。	13
	第7号住居跡	不明	隅丸方	562		10				2(4)	○	?	?	?	壁溝は東部コーナーのみ。	
	第8号住居跡	不明	方	238	234	6	(5)			0	×	×	×	×		
	第9号住居跡	5世紀前半	隅丸方	400	336	7	16.0			0	×	×	×	×	北壁は胴張り。手捏ね鉢形土器。	
	第10号住居跡	5世紀前半	方	493	400+α	4	(24)	6.2	(25.8)	4	×	×	?	?	滑石製模造品。	
	第11号住居跡	6世紀前半	方	374	340	6	(13)			0	×	×	×	×		
	第12号住居跡	5世紀中葉~後半	方	516	460	24	19.7	4.4	22.34	4	○	×	×	×	多量の滑石製模造品。	
	第13号住居跡	5世紀中葉以前	方	350	275+α	25	(10)			2	○	中央	×	×		
	第15号住居跡	不明	隅丸方	496	454	8	(22)			4	×	×	×	×		
	第18号住居跡	不明	隅丸方	480	386	8	(18)			2	○	×	×	×		
	第19号住居跡	5世紀後半以前	方	586	500+α	4	(35)	9.7	(27.7)	4	○	×	×	×	壁溝は西側の一部を欠く。	
	第20号住居跡	5世紀後半	隅丸方	464	436	14	18.0			2	×	×	×	×	南側コーナーに帯状の高まり。	
	第21号住居跡	不明	隅丸方	304	284	5	(8)			4	×	×	×	×	床面中央に焼土。	
毛割遺跡	第1号住居跡	7世紀前半	(方)	409	115+α	16				2	×	×	西壁北端	石製	竈は焚口両側に板石樹立、他の袖部は土。	14
	第2号住居跡	7世紀前半	(方)	375	180+α	20				0	×	×	西壁中央	×	張り床。竈は焚口両側に板石樹立、他の袖部は土。	
	第3号住居跡	7世紀前半	方	400	391	10	13.5			3	○	×	北壁中央	×	壁溝は西壁のみ。	
	第4号住居跡	7世紀前半	(方)	376	170+α	16				1	○	×	北壁中央	×	張り床。	
	第5号住居跡	7世紀前半	(方)	550	450+α	38				4	○	×	西壁中央	石製	鉄鎌出土。	
	第6号住居跡	7世紀前半	(方)	526	270+α	39				2(4)	×	×	北壁西寄	×		

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(㎡)	主柱間床面積(㎡)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
毛割遺跡	第7号住居跡	7世紀前半	(方)	518	290+α	24				(4)	×	×	北壁中央	石製	滑石製模造品出土。	14
	第8号住居跡	7世紀前半	方	403	380	7	13.4	4.6	34.33	4	×	×	北壁中央	×	平面形態は台形に近い。張り床。周壁の切りこみのない竈。	
	第9号住居跡	7世紀前半	方	443	334	20	14.8	2.6	17.57	4	○	×	北壁中央	石製	壁溝は北壁西半部。竈は両袖に板石樹立後、山土で被覆。	
	第10号住居跡	7世紀前半	方	520	438	18	23.5	4.5	19.15	4	×	×	北壁中央	石製	第9号住居跡と二辺を共有。耳環出土。	
	第11号住居跡	7世紀前半	方	618	516	16	31.7			2～3	×	×	北壁中央	石製	竈は両袖に板石樹立後、山土で被覆。鉄刀子出土。	
	第12号住居跡	7世紀前半	方	646	494	16	30.8			0	○	×	西壁南寄	×	平面形態は台形状。壁溝は北壁・東壁北半部。耳環出土。	
	第13号住居跡	7世紀前半	(方)	504	260+α	17		5.3		4	×	×	北壁中央	石製	ベッド状遺構。製塩土器出土。	
	第14号住居跡	7世紀前半	方	400	340+α	28				3	○	×	北壁東寄	×	壁溝は西壁、南・北壁西半部のみ。製塩土器、勾玉出土。	
	第15号住居跡	7世紀前半	(方)	388	250+α	20				?	×	×	北壁中央	×	耳環出土。	
	第16号住居跡	7世紀前半	(方)	340+α	230+α	14		4.3		4	×	×	北壁中央	×		
	第17号住居跡	(7世紀前半)	(方)	460	100+α	24				0	×	×	?	?		
	第18号住居跡	(7世紀前半)	方	448	170+α	28		6.1		4	×	×	?	?	西壁中央部に竈の可能性。	
	第19号住居跡	(7世紀前半)	方	490	406	4	19.7			?	×	×	×	×	平面形態は台形に近い。	
	第20号住居跡	7世紀前半	方	394	340	10	11.9	5.1	42.86	4	×	×	×	×	床面に不整形な掘り込み。	
下東遺跡	KPD − 1	4世紀前半	隅丸方	375	315+α	0	10.1+α			?	○	×	×	×	北西コーナーに土壙。	15
	KPD − 2	5世紀後半以降	方	510	440	?	(22)			2	○	×	×	×		
	KPD − 3	6世紀後半	方	520+α	480	15	25+α			0	×	?	?	?		
	KPD − 4	5世紀末	(方)	(480)	440+α	8	16+α			?	○	?	?	?	張り床。	
	KPD − 5	?	方	435	374	5	(15.3)			2	○	×	×	×	出土遺物なし。	

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	床面積(m²)	主柱間床面積(m²)	主柱間床面積/床面積(%)	柱穴数	壁溝	炉 位置	竈 位置	竈 支脚	備考	文献
下東遺跡	KPD − 6	?	(方)	324+α	228+α	14				?	○	?	?	?	出土遺物なし。	15
	KPD − 7	6世紀前半	方	575	555	15	26.0	5.5	21.15	4	○	×	×	×	張り床。	
	KPD − 8	8世紀前半	(隅丸方)	360	284+α	20	8.3+α			?	×	×	?	?	未完掘。	
白石遺跡	竪穴住居跡	4世紀末〜5世紀前半	方	(400)		20				?	×	?	北壁	×	未完掘。	16
突抜遺跡	DW − 25	古墳時代初頭	方	300	290	30	7.0	1.9	27.14	4	×	×	×	×		17
坂手沖尻遺跡	3号住居跡	6世紀後半〜7世紀前半	方	350	310	10	11.0			2	×	×	北壁中央	×	南壁中央部に接して床面に土壙。	18
	4号住居跡	6世紀後半〜7世紀前半	方	365	310	12	12.0			2	×	×	北壁中央	×	南壁中央部に接して床面に土壙。	
奥正権寺遺跡	第4号竪穴住居跡	5世紀中葉	隅丸方	510	480	31	(21)	8.5	(40.5)	4	×	×	×	×	屋内土壙。	19
	第5号竪穴住居跡	5世紀中葉	(方)			25				?	×	×	×	×		
	第6号竪穴住居跡	5世紀中葉	方	620	610	38	(35)			?	×	×	×	×		
	第7号竪穴住居跡	古墳時代	隅丸方	320	270	16	8.5			0	×	×	×	×		
	第8号竪穴住居跡	古墳時代	隅丸方	460	430	13	19			?	×	×	×	×		
下右田遺跡	DW − 2	5世紀後半	方	530	480	20	20.6	5.0	24.27	4	×	×	北壁中央	×		20
	DW − 3	5世紀後半	方	430	390	10	16			2	×	×	東壁東南壁	×	火災住居。	
右田・一丁田遺跡〈一丁田地区〉	2号住居跡	5世紀後半	隅丸方	600		12	36.0			?	×	西壁寄	×	×	勾玉出土。	21
	3号住居跡	5世紀前半	方	520		10	(27.0)			2	○	×	×	×	壁溝は北壁のみ。	
	10号住居跡	5世紀後半	隅丸方	500	490	10	25.0	5.5	22.00	4	×	×	×	×		
	19号住居跡	5世紀中葉	隅丸方	690		22	37.0			2	×	×	×	×		
原畠遺跡	竪穴住居跡	5世紀	隅丸方	(390)	(340)	40	(14)			(4)	×	?	?	?	住居の周囲を巡る9柱穴。	22

付篇Ⅲ

先土器時代の山口地方

—遺跡の分布と立地—

木　村　元　浩

1　はじめに

遺跡とは過去の人間・人間集団の生活空間（遺物・遺構を含む）を指すと言える。現在我々が住んでいるこの場所もいつしか遺跡として認定されるものであろう。そしてこの時、遺跡の分布状態がいつの時代においても微・巨視的両立場で過・疎あるいは無という偏りがあることに気付くはずである。

今なぜここに我々が住んでいるのかを考える時、見晴らしあるいは日当たりが良いとか、また通勤に便利であるとかの、自然的・社会的諸条件が重なりあっていることを見出す。生活を営む上で最良のこの土地を選んでいるのであって、狩猟・採集生活下と考えられる先土器時代においても、この土地というものが限られた条件の中にあっても選びぬかれた

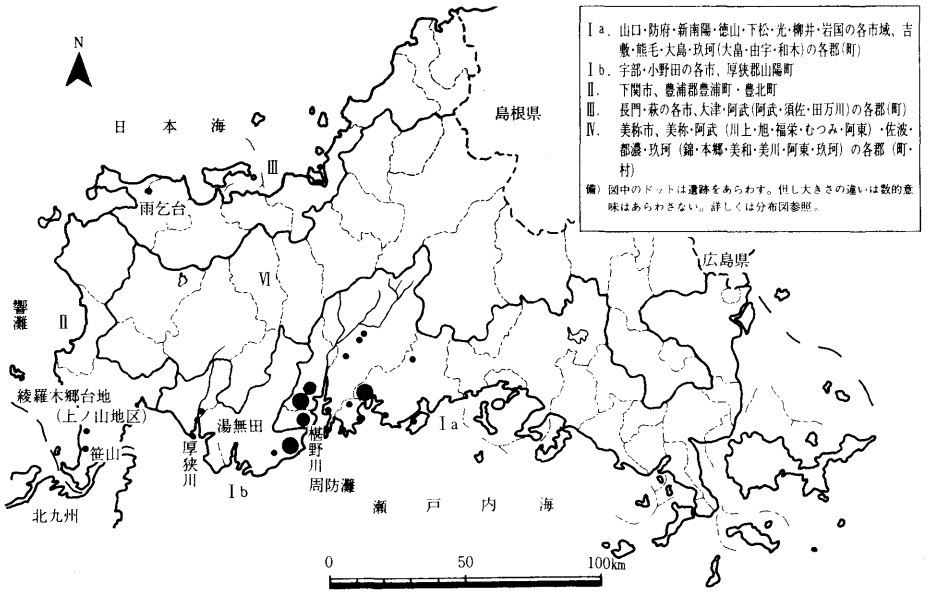


Fig. 96　山口地方地域別遺跡分布

ものであることを、強く再認識しておきたい。

2　研究史とこの稿での視角

ここでいう山口地方とは本州西端部を指し、行政区画では山口県域を示す。

山口地方の先土器時代研究は、1982年の山口県旧石器文化研究会の設立に伴い、精力的・総括的な調査・研究が、現在研究会を中心に行なわれている。

もともと山口地方における当期の遺跡は、良好な厚い火山灰層に遺物を含むということが少なく、時期を違えた石器が混在している状況である。このような中、何とか手掛かりを得たいとする当期の研究活動の中で、特に石器形態学の視角により、遺物の資料化に主眼を置いた活動がなされている。これは必然的とも捉え得るものではあるが、現在までこの基礎データの公表が積極的になされ、集成されつつある。また、層位との連関での石器群の検出を目的とした発掘調査も行なわれており、当期研究を大きく推進している。[1),2)]

研究会設立以前には長沢考古学研究グループ、また防府考古学会が、宇部台地を中心として広く表採活動、そしてその資料をもとにした分析・考察を行なっており、現在知られる遺跡のほとんどが彼らの手になるものであると言っても過言ではない。

そして現在山口県旧石器文化研究会は、在野のグループを含む形で構成されているが、一般市民の自由な参加等、とかく狭く堅苦しくなりがちな考古学・歴史学の中において、地域住民への幅広い環元を実践している側面から、大いに評価されるべきものであろう。

発掘例が少なく、多くの表採遺物を見るこの地方において、それに基づく遺跡の立地・規模・時期あるいは個々の遺物の形態学的研究は、先学に多くの功績を見ることができる。この稿もそれらと同一の手順を踏むものではあるが、加えて分析データの提示を行ないたい。そして最終の目的は、現時点における山口地方先土器時代遺跡の分布を集成・把握しておくことにある。

3　遺跡内容とその分布

山口地方においては、現在公表されているもので61ヵ所以上の先土器時代の遺跡が確認されており、[注1)]細石核・細石刃を出土する細石器文化期のもの23ヵ所、ナイフ形石器を出土するナイフ形石器文化期のもの53ヵ所、そしてそれ以前と考えられる文化期の、大きく3時期に分けられそうである。ここで今から約3万年前からの遺跡をまとめるにあたり、仮に山口地方をⅠ・瀬戸内海沿岸、Ⅱ・響灘沿岸、Ⅲ・日本海沿岸、Ⅳ・Ⅰ～Ⅲに含まれな

Tab. 12 地域別石器内容一覧表

地区(遺跡数) ＼ 器種		細石核	細石刃	ナイフ形石器	スクレイパー	剥片尖頭器	舟底形石器	尖頭器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	彫器	台形石器	楔形石器	石核	打面調整剥片	剥片	石斧	両面加工石器	周辺加工石器	打器	石錐	計
Ⅰ	a (38)	5	11	33	8	0	1	2	1	2	0	1	0	2	2	19	0	0	0	0	0	87
	b (20)	7	8	18	9	3	9	4	0	0	1	5	3	4	3	8	1	1	3	1	1	89
	計 (58)	12	19	51	17	3	10	6	1	2	1	6	3	6	5	27	1	1	3	1	1	(176)
Ⅱ(2)		1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
Ⅲ(1)		0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
計(61)		13	20	53	17	3	10	7	1	2	1	6	3	6	5	28	1	1	3	1	1	182

い内陸部という四区分に分けて見ると、遺跡の分布はⅠ地区を除き他は皆無な状況となる。そしてⅠ地区は防府・山口市域を中心とするもの（Ia 地区）、宇部市周辺のもの(Ib 地区)に分けられそうである。これから先、若干の分析を行なうが、あくまで現時点のものであり、やはり踏査の精度が問題にされることを断っておきたい。

山口地方各遺跡で普遍的に出土する石器にはナイフ形石器があり、他には剥片を除けば細石核・細石刃・スクレイパーが挙げられる。ナイフ形石器については、61遺跡中約９割の53遺跡で見られ、他の３器種については、Ⅰ地区において約1/3の遺跡で見られる。Ia･Ib 区分という観点からは、ナイフ形石器は各々９割、そして３器種については Ib 地区の方がより高い割合を示す。また Ib 地区では舟底形石器が多く見られることに注目しておきたい。他の少量の器種も考えあわせると、Ib 地区、中でも宇部台地西岐波区地区においては器種が豊富であると言えよう。なお、Ia 地区の遺跡では２器種、Ib 地区の遺跡では４器種､計算上平均３器種をもつという勘定になろうか。

山口市嘉川・江崎地区は１点のみ石器（ナイフ形石器）が見られるところであり、防府市大道・右田地区でも同様である。吉敷郡秋穂町においてもこの傾向はあるが、若干他の器種が入る。このように Ia 地区では、ナイフ形石器の在り方が極めて特徴的である。またナイフ形石器と細石核・細石刃の両者を見る遺跡が10遺跡（約1/4）あり、これらの分布も、数地区にまとまる傾向にある（山口市鋳銭司、防府市台道、吉敷郡阿知須町付近)。なおナイフ形石器と細石核・細石刃の数は、遺跡によってかなりの偏りがある。

Ib地区については、まず器種が豊富であることを先に述べたが、具体的には台形石器・剝片尖頭器・楔形石器そして舟底形石器等である。これらはIb地区全遺跡に共通するものではなく、各遺跡によって大きな差をもつ。10器種近くをもつ5遺跡によって、Ib地区の「器種が豊富」ということが目立つのであり、他の遺跡に関しては3器種程度で、1器種のところも少なくない。ナイフ形石器と細石核・細石刃の両者が見られる遺跡は全体として豊富な器種をもっており、3器種程度の遺跡においてはほとんどみられない。それは常盤池周辺、西岐波区地区に限定される。また個々の遺跡を例にとると、ナイフ形石器と細石核・細石刃の出土数は数量的に比例関係にあり、またその逆も言えることがわかる。

使用石材に関してはどうであろうか。Ⅰ地区では、黒曜石・安山岩の占める割合が高い。各々約半数の遺跡で選択的に用いていることがわかる。次いで水晶の割合が高いが、これは約1/4になる。他にチャート・メノウ・玻璃質安山岩等がある。

黒曜石を用いる遺跡は、山口市鋳銭司（Ia)、吉敷郡秋穂町（Ia)、宇部市西岐波区地区（Ib）に集中して分布する傾向にある。安山岩は山口市嘉川・江崎・陶（Ia)、吉敷郡秋穂町（Ia)、宇部市西岐波区地区（Ib）に集中することがわかる。これらから、黒曜石と安山岩はほぼ同じ分布域（但し、安山岩においては山口市嘉川・江崎・陶地区に1つの集中部を形成しているようである）を示すと言えよう。なお、チャート・メノウは宇部市西岐波区地区に、玻璃質安山岩は吉敷郡秋穂町を中心として見られる。

このように、黒曜石と安山岩を主体として、他の石材が若干混じるという石材利用の在り方から、黒曜石と安山岩との共伴石材を見ると、黒曜石（あるいは安山岩）が出土する遺跡では、安山岩（あるいは黒曜石）が共伴する場合と、単独に近い形で見られる場合とに分かれる。宇部市西岐波区地区では黒曜石・安山岩を核として他に多くの石材が混じり、吉敷郡秋穂町を中心とする地区では安山岩に玻璃質安山岩が多く共伴することがわかる。また、単独に近い形で見られるものとして、安山岩が前述の山口市嘉川・江崎・陶地区、そして黒曜石では吉敷郡秋穂町・阿知須町付近が挙げられよう。

黒曜石・安山岩を主体とする石材利用の在り方は大きく捉えたものであり、やはり個々の遺跡ごとに大きな偏りがある。前述の器種を考え合わせて見ていきたい。[注2)]

ここで個別の遺跡を若干見ていくことにしたい。

Ia地区の幸崎遺跡では安山岩製のナイフ形石器が顕著であり、細石核・細石刃では黒曜石製のものが多く見られる。遺跡自体は安山岩の使用率が絶対的優位を占めるという。藤尾遺跡では玻璃質安山岩・黒曜石が多く用いられ、ナイフ形石器においては玻璃質安山岩、

Tab. 13 地域別使用石材一覧表

地区(遺跡数) ＼ 石材		姫島産黒曜石	黒曜石	玻璃質安山岩	安山岩（サヌカイトを含む）	チャート	珪質頁岩	頁岩	水晶	流紋岩	メノウ	結晶片岩	玉ずい	シルト岩	計
I	a (38)	1	20	8	20	2	1	3	8	1	1	1	1	0	67
	b (20)	0	12	3	12	7	0	4	7	1	6	1	3	4	60
	計 (58)	1	30	9	31	9	1	7	15	2	7	2	4	4	(123)
I (2)		0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
II (1)		0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計 (61)		1	34	11	33	9	1	7	15	2	7	2	4	4	130

Tab. 14 各遺跡における器種別使用石材

藤尾 (Ia) ＼ 器種 ＼ 石材	黒曜石	玻璃質安山岩	器種合計
ナイフ形石器	13%	40%	30以上
細石刃核		95%	3以上
細石刃	50%	30%	20以上
石材合計	40以上	30以上	100以上

長桝 (Ia) ＼ 器種 ＼ 石材	安山岩	黒曜石	玻璃質安山岩	器種合計
ナイフ形石器	33%	23%	23%	30以上
細石刃核		90%	5%	10以上
細石刃	2%	95%	1%	155以上
石材合計	25以上	160以上	15以上	230以上

宮ノ前 (Ia) ＼ 器種 ＼ 石材	水晶	器種合計
ナイフ形石器	100%	4以上
石材合計	45以上	60以上

上ノ原 (Ia) ＼ 器種 ＼ 石材	頁岩	玻璃質安山岩	黒曜石	器種合計
ナイフ形石器		25%	25%	4以上
細石刃			95%	10以上
石材合計	2以上	3以上	10以上	24以上

幸崎 (Ia) ＼ 器種 ＼ 石材	黒曜石	安山岩	器種合計
ナイフ形石器	20%	40%	50以上
細石刃	70%	5%	35以上
石材合計	70以上	60以上	200以上

細石核・細石刃では黒曜石製のものの割合が大きくなるとされる。他に特徴的なものとして宮ノ前遺跡があり、これは実見した限り、ナイフ形石器はすべて水晶製である。そして細石核・細石刃の出土は確認されていない。

Ib 地区ではまず、長桝遺跡において黒曜石製の石器が目立つ。しかし重量の面からは、

実質多く用いられたのは安山岩とされ、ナイフ形石器にはその安山岩が、細石核・細石刃には黒曜石が、それぞれ多用されるという。黒曜石製の細石刃の多さはこれを如実に物語っている。そして南方遺跡では、安山岩・黒曜石・玻璃質安山岩・水晶等多様の石材が見られる。重量の面からは、これらの使用頻度はほぼ同じであると言われる。ナイフ形石器には黒曜石・玻璃質安山岩が多く、細石核・細石刃になると黒曜石製のものが顕著となる。そしてその占める割合は、他の石材に比較してぐっと高くなるとされる。また上ノ原遺跡における細石刃は、全て黒曜石製のものである。なおナイフ形石器には、玻璃質安山岩・黒曜石製のものが見られる。白土遺跡においても細石核・細石刃は黒曜石製であり、現在のところナイフ形石器の検出はない。

以上のことから、Ia地区では時期が新しくなるにつれ、黒曜石の使用頻度が高くなることが窺えよう。またIb地区においても、長桝遺跡に代表されるように、黒曜石の使用度が次第に高くなることを推測できる。個々の遺跡によって、例えば水晶の使用度が時期により違ってくるといった傾向はあるが、使用石材とナイフ形石器文化あるいは細石器文化といった文化期との関連において、Ⅰ地区では安山岩製に代表されるナイフ形石器文化から、黒曜石を多用する細石器文化への変遷が読み取れよう。しかしながらこのことは、全く石材が入れ替わるという性格のものではない。またナイフ形石器のみを出土する遺跡の集中地区について、山口市嘉川・江崎地区（Ia）では安山岩製を主とするが、防府市大道・右田地区（Ia）ではそれが黒曜石製であることに注目しておきたい。最後に石材産地に関して、山口市仁保でも水晶が採れることを最近知った。付け加えておきたい。

4　先土器時代の環境

先土器時代の気候は一般に現在よりも寒冷であったといわれる。気候の変化自体が直接人々の生活に影響することは稀であっても、それに伴う植生・動物相・地形等の変化が人類の生活手段に大きく関わったことは間違いない。ここで、先土器時代の山口地方はいかなる環境であったのか、一度戻る形になるが、自然環境を中心に見ていきたい。

当期の山口地方は第四紀研究の分野において、最終氷期後半と呼ばれる時期に当たる。この中で最寒冷の時期（極寒期）を約1.8万～２万年前、あるいは約３万～3.5万年前とする説があり、気温は現在よりも年平均にして約６℃ほど低かったといわれる。このように、人類はあらゆる自然環境の変化に順応しつつ、対応を繰り返した。以下、約1.8万～２万年前の最寒冷期を中心に見ていきたいが、いわゆる氷河期というものをこれで代表し

ておきたいということと、比較的研究が進んでいること、またナイフ形石器文化の盛隆時に当たるという理由による。

まず寒冷な気候は海水準の低下をもたらした。山口地方においては瀬戸内海が陸続きになることで現高知県沖まで海岸線が下り、日本海側も大きく張り出していた。西部の響灘沿岸においては朝鮮半島との陸続きも考えられている。[注3)] 海水準の低下は土地の拡張をもたらし、行動範囲の拡大を促した。現在の九州や四国とも陸続きであるということに、容易な行動（交易）が想定できる。領地の拡大つまり他集団・他文化との積極的な接触という図式が考えられよう。

人々が生活を行なう上での必要不可欠な条件とは、食料の確保にある。狩猟・採集経済下と考えられる先土器時代にあって、大きな割合を示すものは採集ではなかったか。それは確実性ということからも類推できることである。つまり、植生・植物相というものが実際には彼らの生活空間を強く規制していたのではないか。動物相を全く無視していたとは考えられないが、しかしそれは付随的なものではなかったか。採集のみで生活し得るほどの土地基盤が必要であった。という前提に立てば、同一場所に長く居ることはできない。食べ尽くす前に、つまり自然の破壊の前に移動する必要がある。[3)] これは、先土器時代の頻繁な移動の一面を表す大きな要因になり得る。

この時期の山口地方は、カエデ・クリ・ブナ等を含む冷温帯落葉樹林（冷温帯針広混淆林）に属しており、瀬戸内海沿岸・響灘沿岸ではブナを伴わず、日本海沿岸では若干のブナを伴うという植生に分かれる。この植生を提示するに重要なことは、ここに可食植物を見出せることであろう。ここではクリ・ブナをはじめハシバミ・クルミ・トチノキ等が見られる。当寒冷期にはこのような可食植物が多く見られることに注目する必要がある。

この寒冷期を過ぎると気候は次第に温暖化に向かう訳だが、これに伴い温暖帯落葉広葉樹林、照葉樹林が広く分布するようになる。この植生からの可食植物という視点ではシイ・カシ類が挙げられるが、寒冷期に比べるとそれはかなり少なくなると言われている。寒冷下の時期において豊富な食物に恵まれていたことを記しておきたい。

動物相について考えるとき、陸橋の問題が大きく関わってこよう。つまり、海水準低下により外来種と呼ばれる新しい動物群が日本列島に入ることである。これらは主として北方より樺太・北海道を経由してきたもので、研究によれば最終氷期後半の最寒冷期よりは前ではなかったかと言われている。現存種と外来種の混合が考えられ、言葉をかえれば最終氷期後半での（哺乳）動物相は北方系要素をもったものと温暖系要素のものの混合であ

ると言える。具体的には、いわゆるマンモス動物群と黄土動物群であり、マンモス・ヘラジカ・ヒグマ・ナウマンゾウ・ヤベオオツノジカ・ハタネズミ・ノウサギ等である。山口地方においてもオオツノジカ・ナウマンゾウ・ヒグマといった化石が見つかっている。

動物相の研究は植物相のそれと比べると困難な面が多く、よって化石の発見例を待つという状況にあろう。山口地方に焦点を絞って考えることも今のところ不可能に近い。我々にとって最も重要なのは、山口地方の先土器時代人が、何の動物を狩猟対象としたのか、狩猟対象となり得る動物とは、をはっきり特定することであり、考古学資料からのアプローチを絶えず行なう必要がある。

5　遺跡の立地

ここでは、遺跡の一集中地区 Ib を中心に見ていきたい。この中でも遺跡の集中がいわゆる宇部台地に認められることは先に述べた。宇部台地とは行政区画では宇部市を中心に西は小野田市、東は阿知須町・小郡町・秋穂町・防府市にわたる広大な洪積台地の総称であり、瀬戸内海側は海岸段丘が非常に発達したところである。

宇部地域の洪積層は吉南(きちなん)層群と呼ばれ、その層序は下部から黒崎礫層・黒崎粘土層・宇部砂礫互層・宇部火山灰層・宇部砂質粘土層から成る。当台地は陸上で確認されているもので、三段の海岸段丘が見られ、段丘面は上から標準的に王子(おおじ)面・古殿(ふるどの)面・丸尾原(まるおばら)面と呼ばれている。さらにその下に沈水段丘としての宇部沖面が確認されている。

アルプス地方の四大別氷期と対比すれば、王子面形成期はミンデル・リス間氷期に、古殿面形成期はリス・ウルム間氷期に、丸尾原面はウルム氷期に比定され、さらにウルム氷期末に宇部沖面が形成されたとされる。

そして台地は、小河川によって開析谷が存在し、多くの浅谷が随所に見られる。よって独立丘陵状の地形ができあがっている。遺跡が集中する宇部市西岐波区においては特に顕著である。西岐波区に集中する遺跡群は、沢波川と浜田川によって挟まれる台地上に位置する。南方裏遺跡を除くと、沢波川の左岸に本郷・長桝第1地点・長桝第2地点・神楽田・南方の各遺跡が、そして浜田川の右岸に上ノ原・白土・西吉沢・宮ノ後遺跡が両河川に沿う形で見られる。吉田遺跡も吉田川の左岸に、岡ノ辻遺跡も小河川の右岸に位置する。もう少し詳細に見ると、各遺跡は南北方向の片側に河川を望む急斜度な地形をもち、周囲に浅い谷を見るという独立丘陵上に位置している。しかもその縁辺（先端）部に立地するという共通点が窺える。現水田面との比高差も、最低5m前後あり、多くは10mになる。こ

のように特徴的な遺跡立地をここでは沢波川・浜田川といった視点を含めたうえ、浅谷に重点を置いた何らかの要因を考えておきたい。静岡県磐田原台地・宮城県江合川流域の遺跡立地要因等も充分考えられ[注4)、14)、27)]るが、この件に関しては時期を改めたい。

なお、各遺跡の立地する場所は、地形斜3°～8°におさまることを付け加えておく。

次に、資料紹介という形で、先土器時代研究の基礎データを提示したい。

山陽町発見の新資料

ここに発表する資料は、河野豊彦氏の長年にわたる踏査により採集されたものである。氏は宇部市を中心とする他の遺跡の立地を基に、小野田市・山陽町を中心に、現在も精力的に踏査を続けておられるが、昭和59年を最初に現在まで採集されたものが今回の資料である。遺物は厚狭(あさ)郡山陽町大字郡(こおり)字湯無田(ゆむた)2974番地に所在する湯無田溜池（これより湯無田遺跡と称する）からのもので、山陽町内における先土器遺跡の発見はこれが初めてである。

以下先土器時代の遺物を中心に構成するが、まず未発表資料の公表について快諾頂いた河野豊彦氏に感謝の意を述べたい。

1　遺跡の立地と環境

湯無田遺跡のある山陽町は、厚狭郡に属する周防灘沿岸の地域であり、国道2号線が東西へ走る。農業が基幹産業であり、稲作を中心に野菜の栽培も盛んである。農業の面では戦後まもなく入植者による干拓農業が行なわれた。ここでは現在ブドウの生産・養鶏が主として見られており、ブドウについては町の代表的な産物になっている。

山陽町内の地形は大きく山地、丘陵、低地の三つに分かれる。丘陵は低い方から代表して厚狭丘陵、山陽丘陵と呼ばれ、各々瀬戸内下位面、瀬戸内上位面に比定されている。低地には厚狭、後潟(うしろがた)、埴生(はぶ)の各低地があり[15)]、特に、後潟低地は大部分が干拓地で構成される。東部には長門山地に源を発する厚狭川が南流しており、河口付近は干拓が進んでいる。山陽町内においては開作地へのかんがい用の溜池が無数にあり、湯無田溜池もその一つである。後潟低地に水を供給する湯無田溜池は、後潟低地から山地地形に向かってみられる二段の段丘のうちの上方の段丘面にあり、ここはいわゆる宇部台地の古殿面に比定できそうである。山陽町内における遺跡の分布は、現在のところ厚狭地区を中心にして厚狭川の右岸に集中する傾向が窺える。これまで、厚狭川河口付近の左岸には遺跡の存在はほとん

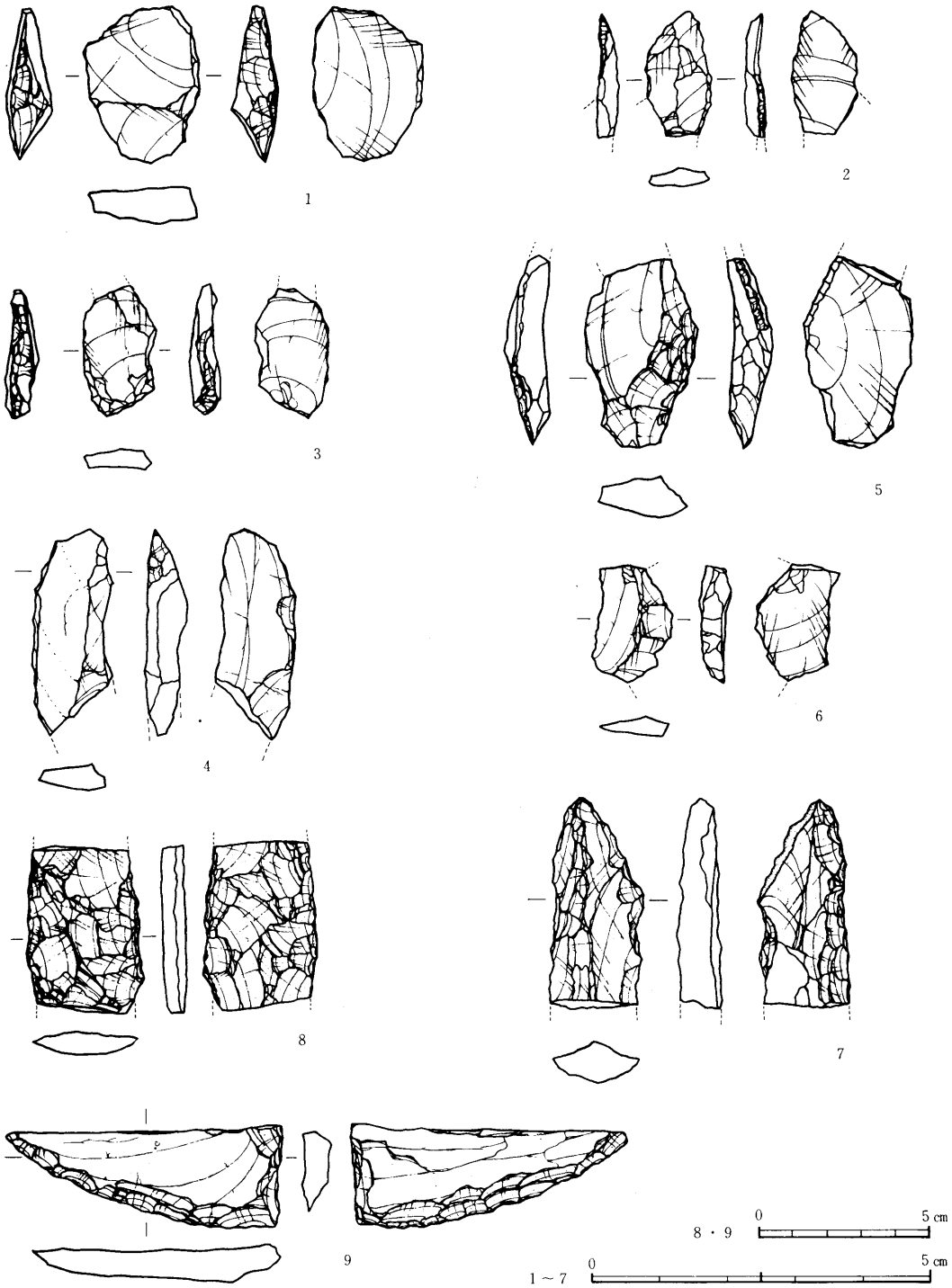


Fig. 97　湯無田遺跡の石器群

ど知られていなかったが、湯無田遺跡をはじめ、隣接する大谷溜池からも石鏃・剝片・石核等が河野氏によって採集されており、ここに新しくとも縄文時代からの人々の生活の舞台が明らかになってきた。

2　湯無田遺跡の石器群

1は素材の打面部と末端部にブランティングを施す二側縁加工のもので、やや横長の剝片を素材とする。素材の打面部は完全に除去され、加工が大きく行なわれたことがわかる。腹面側縁の3枚の剝離（落）痕については使用による可能性もある。加工は全て腹面からである。凝灰岩製。最大長1.7cm、最大幅2.3cm、最大厚0.6cm、重量2.3g。

2は小形の縦長剝片を素材とし、側縁の上半部・下半部にブランティングを見るものでこれにより素材剝片先端部は変形されている。基部は欠損。水晶製。最大長1.8cm、最大幅0.9cm、最大厚0.3cm、重量0.5g。

3は小形の縦長剝片を素材とする。打面・打点を残す。一側縁と片側縁上部にブランティングを施す。一側縁側では背面・腹面の両方向からの加工であり、緻密さに欠ける感じを受ける。片側縁上半部のものは、腹面からのものであるが、これも大まかである。打面部には素材剝片剝取前の打面調整痕が見られる。末端部を欠損する。水晶製。最大長1.9cm、最大幅1.1cm、最大厚0.3cm、重量0.8g。

4は横長の剝片を素材とするもので、腹面側からの3枚の剝離が見られる。おそらく一側縁全体に続くものではなかったか。それは加工途中のものかは定かでないが、大きな剝離によって切られており、その後欠損したものと考える。剝離の位置と素材の打面部の位置を考えたとき、ここには大きく急斜度な加工を想定しなければならない。少し疑問は残るが、この剝離痕はブランティングと見て良いのではないか。一応ナイフ形石器として捉えておく。また背面には節理面が見られる。メノウ製。最大長1.2cm、最大幅3.1cm、最大厚0.4cm、重量2.0g。

5は横長の剝片を素材とし、その打面部と末端部に二次加工を施すものである。打点、それに打面の半分を残す。先端部加工の一部はノッチ状を呈する。打面部の加工は背面側より先端部の加工は腹面側より施される。また片側縁は欠損している。器種認定に関してはナイフ形石器として捉えておく。（ノッチド）スクレイパーとも見れようか。黒曜石製。最大長1.6cm、最大幅2.8cm、最大厚0.6cm、重量2.4g。

6は縦長の剝片である。片側縁は欠損である。打面・打点を有する。背面の観察により、

数方向からの剝離が存在したことがわかる。非常に小形の剝片であるが、当遺跡でのナイフ形石器の素材としても充分成り立つものであろう。水晶製。最大長1.7㎝、最大幅1.2㎝、最大厚0.3㎝、重量0.6ｇ。

7は横断面三角形状を呈するもので、端部は欠損する。両側縁は大まかな剝離であり、稜上加工等は施されていない。一部礫面を残している。器種認定に関しては、大きく捉えてポイントとしておきたい。先端部はそれほど鋭くはない。時期の帰属は不用。讃岐岩質安山岩製。最大長3.1㎝、最大幅1.8㎝、最大厚0.6㎝、重量2.7ｇ。

8は上部・下部あるいは両端を欠損する“両面加工の石器”である。欠損部を想定して厚みとの関連を考えるとき、非常に平らなものになる。加工に関しては両端部において精密な剝離が施されており、例えば刃部としてここを強く意識しているかのようでもある。器種認定に際して、大きくポイントとして捉えることにも疑問が残る。時期の帰属も不明。玻璃質安山岩製。最大長5.0㎝、最大幅3.4㎝、最大厚0.7㎝、重量16.1ｇ。

9は横長の素材を用いるもので、末端部を刃部とし、緻密な刃部を作出する。側縁部の加工に注意しておきたい。器種は不明であるが、大きく捉えればスクレイパーである。時期の帰属も不明。凝灰岩製。最大長3.1㎝、最大幅8.1㎝、最大厚1.1㎝、重量24.1ｇ。

湯無田遺跡においては今回発表以外の採集遺物に、剝片約200点、縄文期の石鏃約50点がある。使用石材には黒曜石（姫島産を含む）・安山岩・水晶・チャート・メノウがあり、石鏃においては黒曜石・安山岩のみを用いる。水晶については縄文期以前の代表的石材と考える。最後になったが、ナイフ形石器については、水晶製のものは小形の縦長剝片を素材とし二側縁加工という非常に特徴的なものである。他の石材のナイフ形石器も主として二側縁加工であるが、横長の剝片を素材にするという点に相違がある。

3　おわりに

山口地方における最高学府としての使命と責任を持つ大学の果たす役割を考えるとき、特に地域住民との交流、そして学問の還元の意味からも、当資料館の役割は大きいと考える。考古学というのは一般市民にとって最も身近な学問であるにもかかわらず、嫌厭されている傾向にある。それは一言でいえば難しすぎるということで、考古学者の怠慢に他ならない。我々はこの点を再認識した上で、地域住民を中心に広く考古学の還元を行なう必要があり、特に当資料館の存在価値がこのことに立脚することは忘れてはならない。

この稿をまとめるに当たり、分布図・地名表の作成では三浦文夫氏、石材に関しては松

本**徑夫**氏・富樫孝志氏、地質・地形の面からは松里英男氏の御教示を頂いた。また特に河野豊彦氏には諸方々への御紹介を頂き終始暖かく見守って下さった。河村吉行・杉原和恵両氏をはじめ、他に多くの方々にお世話になっている。このノートが各方面で活用されることを願い、ここに改めて御援助頂いた方々に感謝の意を表したい。

〔注〕

1）ここではたとえ1点のみの表採地点でも1遺跡として把握した。今回新たに発表できた遺跡に関しては三浦文夫氏の御教示を得た。昭和62年度内も表採・発掘調査により新たな資料の増加が見られ、宇部市山口大学医学部構内でもナイフ形石器・スクレイパー・細石核・縦長の剝片等が検出されている（当年報Ⅵに掲載予定）。

2）石材に関しては全てを実見していない。基本的には参考文献より抽出した。また富樫孝志氏の御教示を得た。

3）現在疑問視する説が有力である。『第四紀研究』第20巻第3号（1981年）他。

4）当地域の地下湧水は14～15mでも見られることを地元の方にお教え頂いた。

〔引用・参考文献〕

1）山口県旧石器文化研究会『長桝遺跡発掘調査概報』（1985年）。
2）山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(1)～(6)」（『古代文化』第35～39巻、1983～1987年）。
3）黒田末寿・片山一道・市川光雄『人類の起源と進化』（有斐閣、1987年）。
4）山口地理学会編『山口の地質をめぐって』（築地書館、1982年）。
5）小野忠熙編著『日本の古代遺跡　山口』（保育社、1986年）。
6）鈴木忠司編『先土器時代の知識』（東京美術、1984年）。
7）辻誠一郎「後期更新世の自然環境」、長谷川善和「動物相」（『季刊考古学』第4号、雄山閣、1983年）。
8）宮本公胤「宇部市域の先土器文化」（『宇部地方史研究』第3号、1974年）。
9）高橋慎二「小郡湾周辺における先土器時代遺跡の実態とその考察」（『山口県先史時代表採遺物集成ならびに編年的研究』、周陽考古学研究所報Ⅰ、1978年）。
10）鈴木啓治「最終氷期の植物相と植生」、亀井節夫・広田清治「最終氷期の動物相」、中川久夫「最終氷期－日本における研究の現状から」（『月刊地球』第5巻第1号、1983年）。
11）亀井節夫・ウルム氷期以降の生物地理総研グループ「最終氷期における日本列島の動・植物相」、中川久夫「最終氷期における日本の気候と地形」（『第四紀研究』第20巻第3号、1981年）。
12）宇部市教育委員会『宇部の遺跡』（1968年）。
13）宇部市史編集委員会『宇部市史』（1963年）。
14）鈴木忠司編『寺谷遺跡』（1980年）。
15）山陽町史編集委員会『山陽町史』（1984年）。
16）河村吉行「堂道遺跡出土の旧石器～縄文時代の石器」（『堂道遺跡』、山口市埋蔵文化財調査報告第24集、山口市教育委員会、1987年）。
17）杉原荘介編『日本の考古学　先土器時代』（河出書房新社、1977年）。
18）藤野次史「旧石器時代の遺物」『毛割遺跡』（山口市教育委員会、1983年）。
19）高橋英太郎・河野通弘・長尾恵・大浜迪郎「宇部地域の洪積層」（『山口大学教育学部研究論叢』第7巻第2部、1957年）。
20）河野通弘・高橋英太郎・小野忠熙「本州西端部の洪積層とその問題」（『山口大学教育学部研究論叢』第14巻第2部、1964年）。
21）山口県『土地分類調査　宇部東部』（1972年）。
22）那須孝悌「先土器時代の環境」（『日本考古学　2　人間と環境』、岩波書店、1985年）
23）小野忠熙編『山口県の考古学』（吉川弘文館、1985年）。
24）㈶山口県教育財団・山口県教育委員会『綾羅木郷台地遺跡（上ノ山地区）』（山口県埋蔵文化財調査報告第91集、1986年）。
25）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。
26）山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。
27）東北歴史資料館『江合川流域の旧石器』（1985年）。
28）宝川昭男「下関市武久町の洪積層出土尖頭器」（『考古学ジャーナル』71号、1972年）。

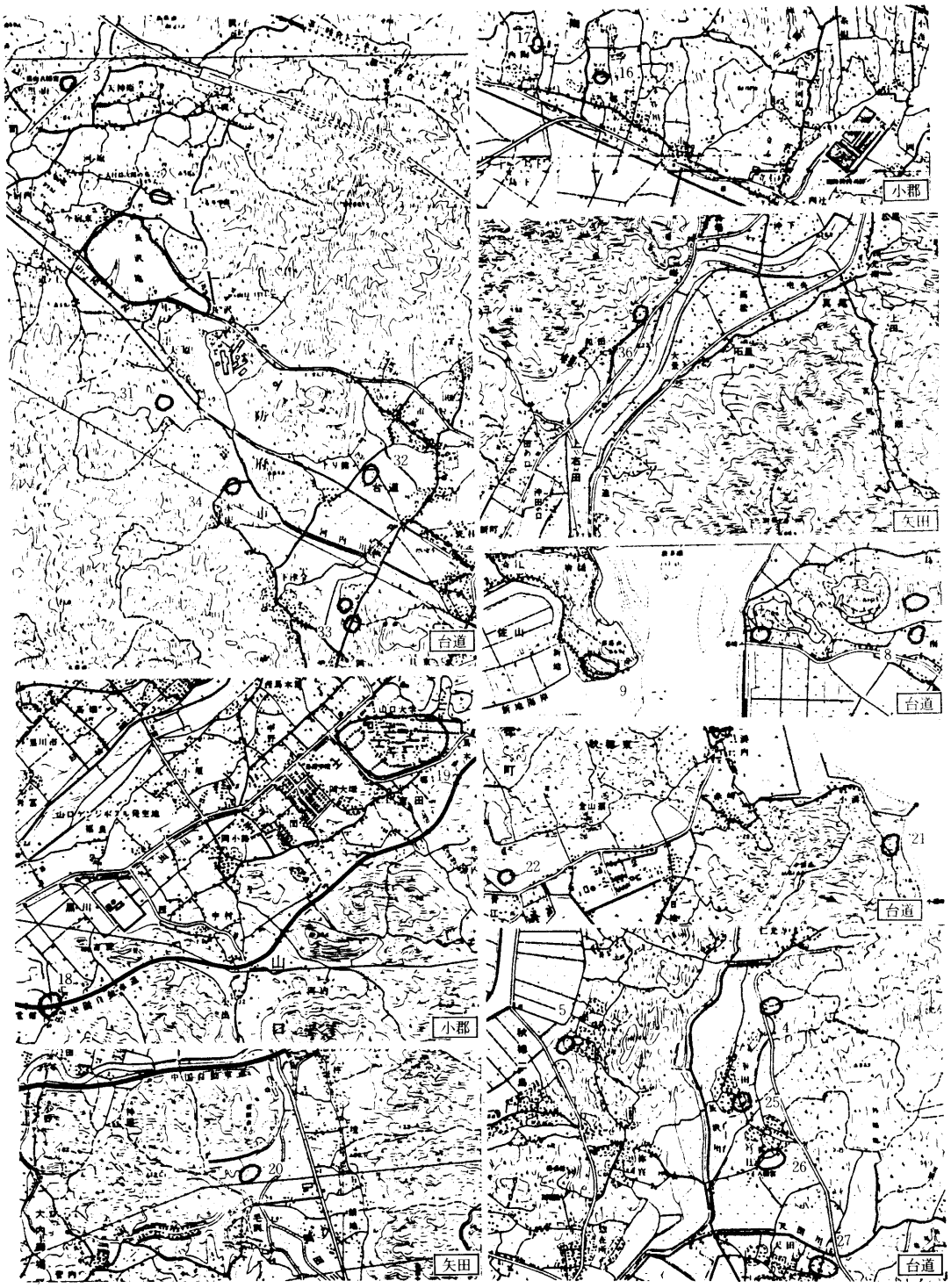


Fig. 98　先土器時代遺跡分布図(1)

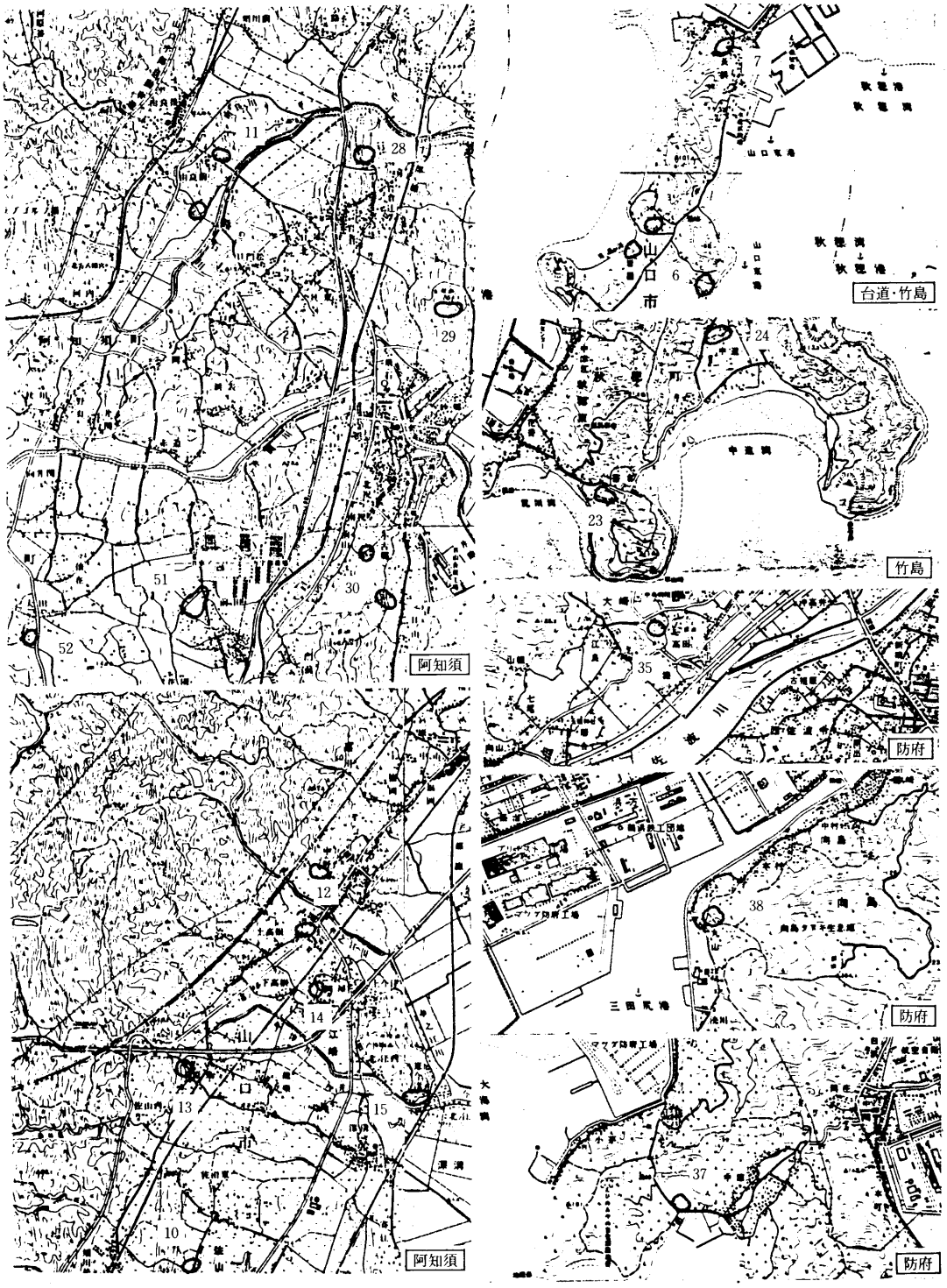
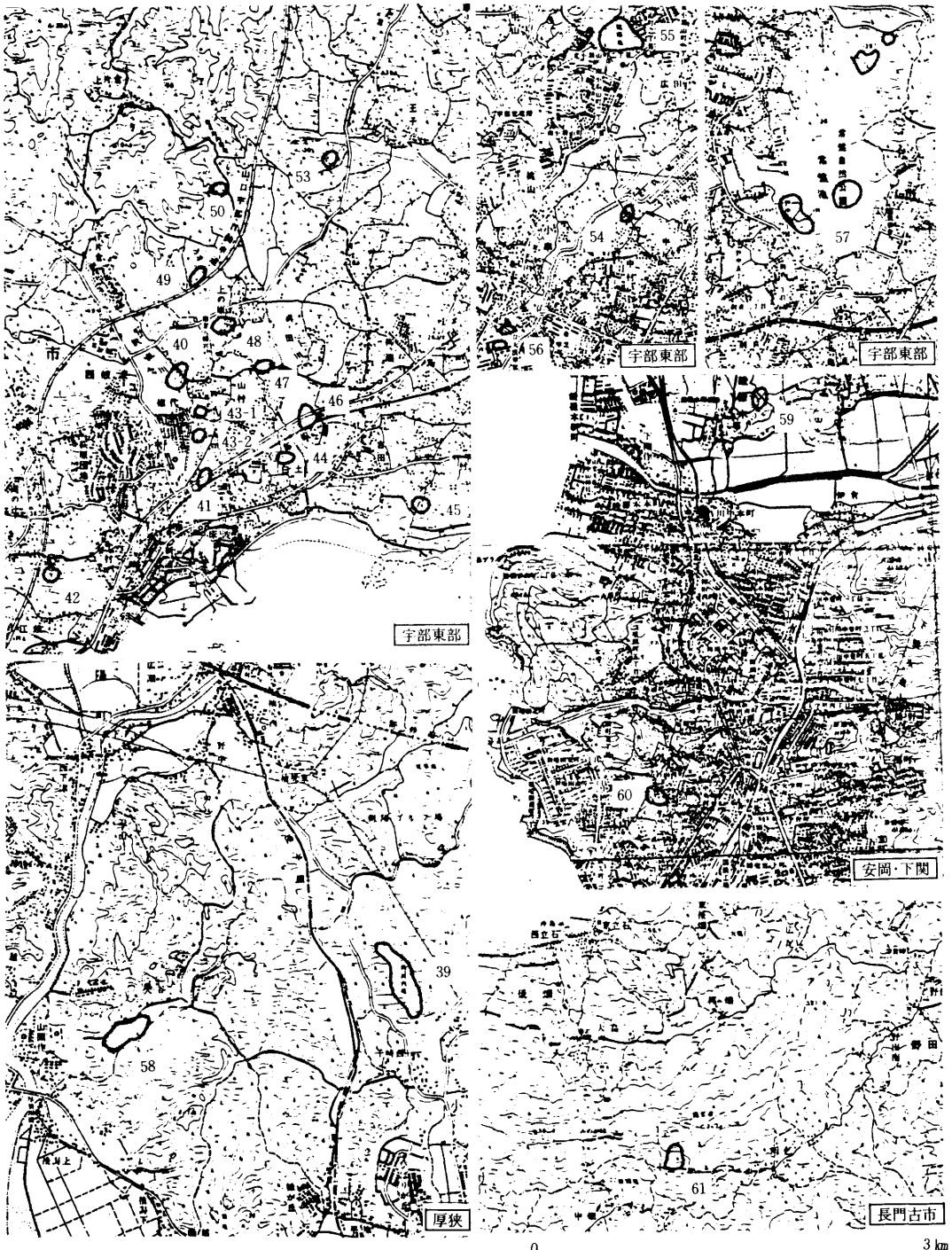


Fig. 99　先土器時代遺跡分布図(2)



※図内番号は地名表の番号と一致する。国土地理院発行1：25000(½)

Fig. 100　先土器時代遺跡分布図(3)

Tab. 15 山口地方先土器時代遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	海抜標高(m)	石器組成	使用石材	黒曜石との共伴	安山岩との共伴	地区	文献
1	河原(こうら)	山口市鋳銭司河原	20	細石刃、ナイフ形石器	黒曜石、玻璃質安山岩	玻璃質安山岩		Ⅰa	2)、9) ※杉原と同一
2	長沢池(ながさわいけ)	山口市鋳銭司今宿	20	細石刃、ナイフ形石器、スクレイパー 石核、剥片	黒曜石、頁岩	頁岩		〃	2)、9) 23)
3	和西(わにし)	山口市鋳銭司和西	20	ナイフ形石器、剥片	黒曜石、安山岩、珪質頁岩	安山岩 珪質頁岩	黒曜石 珪質頁岩	〃	2)
4	仁光寺(にんこうじ)	山口市秋穂二島字仁光寺	5～10	ナイフ形石器、剥片	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	2)
5	原の前(はらのまえ)	山口市秋穂二島大里	5～10	ナイフ形石器、剥片	安山岩		なし	〃	2)
6	美濃ケ浜(みのがはま)	山口市二島美濃ケ浜	15～25	ナイフ形石器、スクレイパー 石核、剥片	黒曜石、安山岩 水晶、流紋岩、玉ずい	水晶、流紋岩 玉ずい	黒曜石、流紋岩 玉ずい	〃	2)、9) 23)
7	長浜(ながはま)	山口市二島長浜	10	細石核、細石刃、剥片	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	2)、9)
8	幸崎(こうざき)	山口市二島幸崎	10～20	細石刃、ナイフ形石器、スクレイパー 尖頭器、台形(様)石器、剥片	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	2)、9)
9	藤尾(ふじお)	山口市佐山唐樋	10～20	ナイフ形石器、尖頭器	黒曜石、玻璃質安山岩	玻璃質安山岩		〃	2)、9)
10	二ノ見ケ丘(にのみがおか)	山口市佐山東佐山	20	ナイフ形石器	安山岩		なし	〃	2)
11	向川(むかいがわ)	山口市佐山油良向川	10	スクレイパー	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	2)
12	下中(しもなか)	山口市嘉川中野下中	10～20	ナイフ形石器	安山岩、水晶		水晶	〃	2)
13	原条(はらじょう)	山口市江崎原条	20	ナイフ形石器、剥片	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	2)
14	前村(まえむら)	山口市江崎岡屋前村	5	ナイフ形石器	安山岩		なし	〃	2) ※岡屋と同一
15	今津(いまず)	山口市江崎東今津	20～25	ナイフ形石器、剥片	黒曜石、安山岩 水晶、メノウ	安山岩、水晶 メノウ	黒曜石、水晶 メノウ	〃	2)、9)

No.	遺跡名	所在地	海抜標高(m)	石器組成	使用石材	黒曜石との共伴	安山岩との共伴	地区	文献
16	正護寺	山口市陶郷下	5	剝片	安山岩		なし	Ⅰa	2)
17	山田	山口市陶西陶	10～20	スクレイパー	安山岩		なし	〃	2)
18	堂道	山口市大字黒川字大蔵	20	細石核、ナイフ形石器、使用痕剝片 打面再生剝片、剝片	黒曜石(姫島)、水晶			〃	16)
19	吉田 (山口大学構内)	山口市大字吉田1677-1	19	細石刃、ナイフ形石器	黒曜石、チャート	チャート		〃	当年報Ⅶ掲載予定
20	毛割	山口市大字下小鯖字遊ケ原	53～55	ナイフ形石器、使用痕剝片 打面再生剝片、剝片	玻璃質安山岩 頁岩、水晶			〃	18)
21	小浜	吉敷郡秋穂町大海小浜	5～10	細石刃、ナイフ形石器	黒曜石、玻璃質安山岩 安山岩	安山岩 玻璃質安山岩	黒曜石 玻璃質安山岩	〃	2)
22	青江	吉敷郡秋穂町秋穂東青江	10	ナイフ形石器、舟底形石器、剝片	黒曜石、玻璃質安山岩 安山岩	安山岩 玻璃質安山岩	黒曜石 玻璃質安山岩	〃	2)
23	筈倉	吉敷郡秋穂町秋穂東筈倉	10～20	ナイフ形石器、剝片	安山岩		なし	〃	2)
24	中道	吉敷郡秋穂町秋穂東中道	5～10	ナイフ形石器、二次加工剝片	玻璃質安山岩 安山岩、チャート		玻璃質安山岩 チャート	〃	2)
25	幸田Ⅰ地点	吉敷郡秋穂町秋穂西字宮ノ旦	5～10	ナイフ形石器	黒曜石	なし		〃	三浦文夫氏御教示
26	宮ノ旦	吉敷郡秋穂町秋穂西字宮ノ旦	5～10	ナイフ形石器、スクレイパー、剝片	黒曜石	なし		〃	三浦文夫氏御教示
27	天田	吉敷郡秋穂町秋穂西字天田	5～10	細石刃	黒曜石	なし		〃	三浦文夫氏御教示
28	岩上	吉敷郡阿知須町岩倉	5～15	細石核、細石刃、ナイフ形石器 スクレイパー、剝片	黒曜石、水晶	水晶		〃	2)、9)
29	丸塚	吉敷郡阿知須町丸塚山	5～15	細石核、細石刃、ナイフ形石器				〃	2)、9)
30	日ノ山	吉敷郡阿知須町小古郷	10	ナイフ形石器	黒曜石 玻璃質安山岩	玻璃質安山岩		〃	2)
31	宮ノ前	防府市大道大原	15	細石核、細石刃、ナイフ形石器 スクレイパー、剝片	安山岩、頁岩 水晶、結晶片岩		頁岩、水晶 結晶片岩	〃	2)、9)

No.	遺跡名	所在地	海抜標高(m)	石器組成	使用石材	黒曜石との共伴	安山岩との共伴	地区	文献
32	上り熊(あがりくま)	防府市大道上り熊	5～15	ナイフ形石器	黒曜石	なし		Ⅰa	2)、9)
33	柴山裏(しばやまうら)	防府市大道旦東	5～15	細石刃、ナイフ形石器、剥片				〃	2)、9)
34	木床(きどこ)	防府市大道下津令木床	5～10	ナイフ形石器	黒曜石	なし		〃	2)
35	姫山(ひめやま)	防府市右田字大崎日ノ本	10	ナイフ形石器	黒曜石	なし		〃	2)、9)
36	和田(わだ)	防府市大字上右田字峪(かけ)	40～50	ナイフ形石器	黒曜石	なし		〃	三浦文夫氏御教示
37	湯ノ峠(ゆのとうげ)	防府市大字中関字田島湯ノ峠	5	ナイフ形石器、剥片	玻璃質安山岩			〃	三浦文夫氏御教示
38	丸山(まるやま)	防府市向島丸山	10～20	ナイフ形石器	安山岩		なし(?)	〃	三浦文夫氏御教示
39	西ケ河内池(にしがこうちいけ)	小野田市東高泊干崎	20	ナイフ形石器、スクレイパー、舟底形石器	安山岩、メノウ		メノウ	Ⅰb	2)、9)
40	南方(みなみかた)(潟)	宇部市西岐波区山村	30～35	細石核、細石刃、ナイフ形石器、スクレイパー、舟底形石器 彫器、台形(様)石器、楔形石器、剥片、剥片尖頭器	黒曜石、安山岩、 チャート、頁岩、水晶	安山岩、チャート 頁岩、水晶	黒曜石、チャート 頁岩、水晶	〃	1)、2) 9)
41	本郷(ほんごう)	宇部市西岐波区本郷	10～15	細石核、細石刃、ナイフ形石器、スクレイパー 尖頭器、楔形石器、打面再生剥片	黒曜石	なし		〃	1)、2) 9)
42	岡ノ辻(おかのつじ)	宇部市西岐波区大沢	10	ナイフ形石器、剥片				〃	1)、2) 9)
43-1	長桝(ながます)第1地点	宇部市西岐波区山村長桝	19	細石核、細石刃、ナイフ形石器、スクレイパー、舟底形石器 台形(様)石器、楔形石器、石核、剥片、石錐	黒曜石、玻璃質安山岩、安山岩 チャート、水晶、メノウ、シルト岩	安山岩、玻璃質安山岩、チャート、水晶 メノウ、シルト岩	黒曜石、玻璃質安山岩、チャート、水晶 メノウ、シルト岩	〃	1)
43-2	長桝(ながます)第2地点	宇部市西岐波区山村長桝	19～20	細石核、細石刃、ナイフ形石器、スクレイパー、舟底形石器 台形(様)石器、石核、打面再生剥片、周辺加工石器	黒曜石、安山岩、チャート、頁岩、 水晶、メノウ、シルト岩、玉ずい	安山岩、チャート 頁岩、水晶、メノウ シルト岩、玉ずい	黒曜石、チャート 頁岩、水晶、メノウ シルト岩、玉ずい	〃	1)
44	白土(しらつち)	宇部市西岐波区白土後	5	細石核、細石刃 剥片尖頭器、周辺加工尖頭器	黒曜石、安山岩、メノウ	安山岩、メノウ	黒曜石、メノウ	〃	1)、2)
45	吉田(よしだ)	宇部市西岐波区吉田	5～10	ナイフ形石器	安山岩		なし	〃	1)、2)
46	神楽田(かぐらでん)	宇部市西岐波区白土 神楽田～柳ケ瀬	10～15	細石核、ナイフ形石器、スクレイパー、尖頭器、舟底形石器、二次加工剥片 使用痕剥片、石核、打面再生剥片、剥片、両面加工石器	黒曜石、安山岩、チャート 水晶、メノウ、玉ずい	安山岩、チャート 水晶、メノウ、 玉ずい	黒曜岩、チャート 水晶、メノウ、 玉ずい	〃	1)、2)

No.	遺跡名	所在地	海抜標高(m)	石器組成	使用石材	黒曜石との共伴	安山岩との共伴	地区	文献
47	上ノ原(うえノはら)	宇部市西岐波区上ノ原西迫	15～20	細石刃、ナイフ形石器、スクレイパー、舟底形石器 台形(様)石器、石核、周辺加工石器、打器	黒曜石、玻璃質安山岩、安山岩、頁岩、流紋岩、シルト岩、珪質岩	安山岩、玻璃質安山岩、頁岩、流紋岩シルト岩、珪質岩	黒曜石、玻璃質安山岩、頁岩、流紋岩シルト岩、珪質岩	Ⅰb	1)、2)
48	南方(みなみかた)(潟)裏(うら)	宇部市西岐波区上ノ原2426	30	ナイフ形石器	メノウ			〃	1)、2)
49	宮ノ後(みやノあと)	宇部市西岐波区上ノ原清水	30	ナイフ形石器、尖頭器 舟底形石器、周辺加工尖頭器	黒曜石、安山岩 チャート、水晶	安山岩、チャート 水晶	黒曜石、チャート 水晶	〃	1)、2)
50	西吉沢(にしよしざわ)	宇部市西岐波区上片倉西吉沢	30	細石刃、ナイフ形石器、舟底形石器	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	1)、2)
51	前田(北)(まえだきた)	宇部市東岐波区前田	10～20	ナイフ形石器、剥片、石斧	水晶、玉ずい			〃	1)、2) 12)
52	平原(ひらはら)	宇部市東岐波区大田平原	10	舟底形石器	黒曜石		なし	〃	1)、2)
53	本山(もとやま)	宇部市東岐波区本山718-1	25～30	ナイフ形石器	安山岩		なし	〃	1)、2)
54	川津(かわつ)	宇部市上宇部中村川津	10	ナイフ形石器	チャート			〃	1)、2)
55	蛇瀬池(じやがせいけ)	宇部市川上広田蛇瀬池	30	剥片	玉ずい			〃	1)、2)
56	山口大学医学部構内	宇部市大字小串1444	1.5	細石核、ナイフ形石器 スクレイパー、剥片	黒曜石、玻璃質安山岩 チャート			〃	26)、当年報Ⅶ掲載予定
57	常盤池(ときわいけ)	宇部市常盤池	20	細石刃、ナイフ形石器、スクレイパー 剥片、剥片尖頭器	黒曜石、安山岩、頁岩 水晶、結晶片岩	安山岩、頁岩 水晶、結晶片岩	黒曜石、水晶、 結晶片岩	〃	1)、2) 9)
58	湯無田(ゆむた)	厚狭郡山陽町大字 郡字湯無田溜池2974	30～40	ナイフ形石器、剥片	水晶、チャート、流紋岩			〃	河野豊彦氏御教示
59	綾羅木郷台地(あやらきごうだいち) (上ノ山地区)	下関市大字綾羅木大歳恵のふ田	8～10	細石核、細石刃、ナイフ形石器	黒曜石	なし		Ⅱ	24)
60	笹山(ささやま)	下関市武久町1丁目笹山	30	尖頭器	黒曜石	なし		〃	28)
61	雨乞台(あまごいだい)	大津郡日置町雨乞	340	ナイフ形石器、剥片	黒曜石	なし		Ⅲ	23)

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

（設置）

第１条　山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

（資料館の業務）

第２条　資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

一　山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示および調査研究

二　山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行

三　その他埋蔵文化財に関する必要な業務

（運営委員会）

第３条　資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会に関する規則は、別に定める。

（館長）

第４条　資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

２　館長の任期は２年とし、再任を妨げない。

３　館長は、資料館の業務を掌理する。

（調査員）

第５条　資料館には調査員若干名を置く。

２　調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

３　調査員は、資料館の業務を処理する。

（特別調査員）

第６条　埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

２　特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

（雑則）

第７条　この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

（趣旨）

第１条　この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第３条第２項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　委員会は次の事項を審議する。

一　山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。

二　資料館の管理運営に関すること。

三　資料館の整備充実に関すること。

四　資料館の運営に要する経費に関すること。

五　その他必要な事項

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　資料館規則第４条第１項の館長

二　各学部および教養部の教官各１名

三　事務局長

２　前項第２号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

（任期）

第４条　前条第１項第２号の委員の任期は２年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

２　委員長は委員会を招集し、その議長となる。

（幹事）

第６条　委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（委員以外の出席）

第７条　委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

（事務）

第８条　委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

（雑則）

第９条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 16　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

（昭和61年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄　基雄	教授	60. 4. 1～62. 3.31	委員長
人文学部	近藤喬一	教授	59. 4. 2～62. 4. 1	館長
人文学部	中村友博	助教授	60. 5.29～62. 5.28	
教育学部	三浦　肇	教授	60. 4. 1～62. 3.31	
経済学部	及川　順	教授	60. 4. 1～62. 3.31	
理学部	岩田允夫	教授	60. 4. 1～62. 3.31	
工学部	島　敞史	教授	60. 4. 1～62. 3.31	
農学部	西野武蔵	教授	60. 4. 1～62. 3.31	
教養部	木村忠夫	教授	60. 4. 1～62. 3.31	
事務局	大谷　巖	事務局長	60.12. 1～	

（昭和62年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄　基雄	教授	62. 4. 1～64. 3.31	委員長・館長
人文学部	中村友博	助教授	62. 5.29～64. 5.28	
教育学部	三浦　肇	教授	62. 4. 1～64. 3.31	
経済学部	及川　順	教授	62. 4. 1～64. 3.31	
理学部	村上清文	助手	62. 4. 1～64. 3.31	
工学部	島　敞史	教授	62. 4. 1～64. 3.31	
農学部	藤田則之	教授	62. 4. 1～64. 3.31	
教養部	木村忠夫	教授	62. 4. 1～64. 3.31	
事務局	大谷　巖	事務局長	60.12. 1～	

Tab. 17　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻科目等	備考
人文学部	中村友博	助教授	日本考古学	昭和61・62年度
教育学部	三浦　肇	教授	地理学	昭和61・62年度
理学部	松本徹夫	教授	岩石学	昭和61・62年度
農学部	勝本　謙	助教授	植物分類学	昭和61・62年度
工業短期大学部	池谷元伺	教授	年代測定	昭和61年度・昭和62年５月20日まで

山口大学構内の主な調査

○旧調査区名は吉田遺跡調査団使用のもの
○41年から57年までの調査は全て吉田地区
○地点は吉田構内 Fig. 101、小串構内 Fig. 102、常盤構内 Fig. 103、亀山構内幼稚園・小学校部分 Fig. 104、亀山構内中学校部分 Fig. 105、光構内 Fig. 106を参照

Tab. 18　山口大学構内の主な調査一覧表

調査年度	旧調査地区名又は調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L・M・N－15	1	小野忠熙	事前	30？	弥生竪穴住居・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第1次発掘調査
	第Ⅱ地区家畜病院新営	S・T－19区 R・S－20区	2	〃	事前	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	吉田第2次発掘調査
	第Ⅱ地区	P・Q－19・20区	3	〃	試掘			弥生土器、土師器	吉田第3次発掘調査
	第Ⅳ地区牛舎新営	S－10区	4	〃	事前	300	弥生溝・土壙、古墳竪穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	吉田第4次発掘調査
	第Ⅳ地区	S・T－9～13区	5	〃	試掘				吉田第5次発掘調査
昭和42年	第Ⅲ地区杭列区	E－20区	6	〃	事前	1,100	杭列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	吉田第6次発掘調査
	第Ⅲ地区南区	G・H－22・23区	7	〃	事前		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	吉田第7次発掘調査
	第Ⅲ地区北区	I・J－20・21区	8	〃	事前	1,400	竪穴住居、溝、土壙、柱穴		吉田第8次発掘調査
	第Ⅲ地区東南区	H－23区 I・J・K－24区	9	〃	事前		弥生竪穴住居	弥生土器	吉田第9次発掘調査
	第Ⅲ地区野球場	I－22・23区 J－21・22・23区 K－22・23区	10	〃	試掘		中世柱穴	瓦質土器	吉田第10次発掘調査
	第Ⅴ地区学生食堂	I・J－19・20区	11	〃	事前		弥生溝、古墳土壙	弥生土器、土師器	吉田第11次発掘調査
	第Ⅴ地区	H・I・J・K・L・M・N－18・19・20区	12	山口大学吉田遺跡調査団	試掘		河川跡、柱穴、土壙	弥生土器、土師器	吉田第12次発掘調査
	第Ⅰ地区C区大学本部新営	K・L－14区	13	〃	事前	600	竪穴住居、溝、土壙	土師器、須恵器、瓦質土器	吉田第13次発掘調査
昭和44年	第Ⅴ地区教育学部			〃	試掘		河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第14次発掘調査
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	K－13区	14	〃	試掘		溝	弥生土器、木炭屑	吉田第15次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第2地点	L－13区	15	〃	〃			弥生土器、土師器、瓦質土器	吉田第16次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第3地点	L・M－13区	16	〃	〃		竪穴住居、土壙、柱穴	土師器	吉田第17次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N－13区	17	〃	〃		弥生竪穴住居、溝、土壙	弥生土器、土師器、石器、瓦質土器	吉田第18次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第5地点	L－13区	18	〃	〃		弥生溝	弥生土器	吉田第19次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第6地点	M－13区	19	〃	〃		古墳竪穴住居、弥生溝	弥生土器、土師器石器	吉田第20次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第7地点	〃	20	〃	〃		溝	弥生土器	吉田第21次発掘調査
	第Ⅰ地区E区第2学生食堂新営	N・O－15区	21	〃	事前	900	弥生～古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	吉田第22次発掘調査

調査年度	旧調査地区名又は調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和50年	第Ⅱ地区			山口大学吉田遺跡調査団	試掘			弥生土器	吉田第23次発掘調査
昭和51年	第Ⅲ地区			〃	〃		竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第24次発掘調査
昭和53年	人文学部校舎新営	M・N－21区	22	近藤喬一	試掘	180			吉田第25次発掘調査
	教育学部附属養護学校新営	A・B・C・D－20～24区	23	山口大学埋蔵文化財資料館山口市教育委員会	〃		溝、土壙	縄文土器弥生土器	吉田第26次発掘調査
昭和54年	理学部校舎新営	O－18・19区	24	山口大学埋蔵文化財資料館	〃	250			吉田第27次発掘調査
	農学部動物舎新営	P－18・19区	25	〃	〃	380			吉田第28次発掘調査
	本部管理棟新営	L－14区	26	〃	事前	740	溝、土壙、柱穴、中世井戸、土壙墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	吉田第29次発掘調査
昭和55年	経済学部校舎新営	K・L－21区	27	〃	〃				吉田第30次発掘調査
	農学部農業観測実験施設新営	Q－15区	28	〃	〃	50	溝、土壙		吉田第31次発掘調査
	本部	E・F－15・16区 F－20・21区 G・H－12・19区	29	〃	立会				工事続行 吉田第1次立会調査
	農学部	L・M－12・13区 N・O・P－10～12区 P・Q－17・18区	30	〃	〃				吉田第2次立会調査
昭和56年	教育学部校舎新営	H－19区	31	〃	事前	400	弥生竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	吉田第32次発掘調査
	教育学部音楽棟新営	H－16区	32	〃	〃	100	溝		吉田第33次発掘調査
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営	J－19・20区	33	〃	〃	130	旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	吉田第34次発掘調査
	正門橋脚新営	H－11区	34	〃	立会				工事続行 吉田第3次立会調査
	時計塔埋設	I－14区	35	〃	〃				工事続行 吉田第4次立会調査
	本部構内擁壁	K－14区	36	〃	〃				工事続行 吉田第5次立会調査
	教養部構内擁壁	I－16・17区	37	〃	〃				工法等変更6次立会
	構内循環道路舗装	J・K・L・M－15区 M・N－16区	38	〃	〃				工事続行　7次立会
	農学部中庭整備	O－17区	39	〃	〃				工事続行　8次立会
	暖房施設改修	O－16区	40	〃	〃				工法等変更9次立会
	学生部文化会車庫新営	L－8区	41	〃	〃				工法等変更10次立会
	学生部馬場整備	M・N－8・9区	42	〃	〃				工事続行　11次立会
昭和57年	附属図書館増築	M－16区	43	〃	事前	600	弥生～古墳溝、土壙、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	吉田第35次発掘調査
	大学会館新営	M－14・15区	44	〃	試掘	130	弥生竪穴住居、溝	弥生土器	新営予定地変更 吉田第36次発掘調査
	教育学部附属養護学校プール新営	B－22区	45	〃	立会				吉田第12次立会調査
	放射性同位元素総合実験室排水桝新営	O－18区	46	〃	〃				吉田第13次立会調査
	教養部自転車置場昇降口新営	K・L－17区	47	〃	〃				吉田第14次立会調査
	教養部中庭環境整備	J・K－16区	48	〃	〃				吉田第15次立会調査
昭和58年	大学会館新営	M・N－13区	49	〃	事前	2,000	古墳井戸、土壙、柱穴、中世井戸、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、瓦器、緑釉陶器、木簡、石器	吉田第37次発掘調査

調査年度	旧調査地区名又は調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和58年	ラグビー場防球ネット新営	G・H－19区	50	山口大学埋蔵文化財資料館	事前	120	弥生溝、弥生～古墳竪穴住居、土壙	弥生土器、土師器石製品	竪穴住居は工法変更により現地保存 吉田第38次発掘調査
	教育学部附属光小学校自転車置場新営		1		試掘		近世～近代石垣	陶磁器、瓦質土器、瓦	光第1次発掘調査
	工学部校舎新営		1	〃	〃	70		須恵器	遺構、遺物包含層なし 常盤第1次発掘調査
	工学部図書館増築		2	〃	〃	70			遺構、遺物包含層なし 常盤第2次発掘調査
	医学部体育館新営		1	〃	〃	260		土師器、瓦質土器、石器	小串第1次発掘調査
	教育学部附属山口小・幼稚園運動場整備		1	〃	〃	60	古墳竪穴住居、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	亀山第1次発掘調査
	理学部大学院校舎新営	M・N－20区 O－19・20区	51	〃	立会	410			工事続行 吉田第16次立会調査
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営	H・I－23区 I－12・13区 J－13区	52	〃	〃	180			工事続行 吉田第17次立会調査
	学生部アーチェリー場的台・電柱設置	M－8区	53	〃	〃	30			工事続行 吉田第18会調査
	学生部廐舎整備	L－7区	54	〃	〃	2			工事続行 吉田第19次立会調査
	学生部野球場散水栓取設	J－21区 K－22区	55	〃	〃				工事続行 吉田第20次立会調査
	教養部環境整備	I－16・17区 J・K－17区 K・L－17・18区	56	〃	〃	80			工事続行 吉田第21次立会調査
	学生部テニスコート改修	C－18区 D－17区 E－16区	57	〃	〃	12			工事続行 吉田第22次立会調査
	医学部図書館増築		2	〃	〃				小串第1次立会調査
	医学部体育館新営		3	〃	〃				工事続行 小串第2次立会調査
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	〃	事前		近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	記録保存 小串第2次発掘調査
	医学部体育館新営		5	〃	〃	65		土師器、瓦質土器、磁器	小串第3次発掘調査
	大学会館ケーブル布設	N－12・14区	58	〃	〃	160	弥生土壙、柱穴	弥生土器	吉田第39次発掘調査
	大学会館排水管布設	K・L－13区	59	〃	〃	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壙、古代～中世土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	記録保存 吉田第40次発掘調査
	医学部基幹整備(特高受変電設備)		6	〃	試掘	28		動物遺体(貝殻)	小串第4次発掘調査
	医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営		7	〃	〃	38			小串第5次発掘調査
	学生部テニスコートフェンス改修	B－17・18区 C－16・17・18・19区 D－15・16・17区 E－15・16区	60	〃	〃	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	工事規模内埋蔵文化財支障なし 吉田第41次発掘調査
	経済学部樹木移植	K－19・20・21区	61	〃	立会	8			工事規模内埋蔵文化財支障なし 吉田第23次立会調査
	工学部尾山宿舎排水管布設				〃	20			常盤第1次立会調査
	教育学部附属光小・中学校焼却場新営		2	〃	〃				光第1次立会調査
	学生部ボート艇庫合宿研修所整備			〃	〃	0.5			宇部市小野湖

調査年度	旧調査地区名又は調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和59年	学生部ヨット艇庫合宿研修所整備			山口大学埋蔵文化財資料館	立会				吉敷郡秋穂町
昭和60年	医学部外来診療棟新営		8		試掘	409		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	小串第6次発掘調査
	大学会館環境整備	L－14区 L・M・N－15区	62	〃	〃	592	弥生～中世遺物包含層、弥生竪穴住居、貯蔵穴、土壙、古代～近世土壙、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鉄器、窯壁	吉田第42次発掘調査
	医学部基礎研究棟新営		9	〃	〃	11		近世陶器	小串第7次発掘調査
	医学部看護婦宿舎改修		10	〃	〃	25		近世陶磁器	小串第8次発掘調査
	経済学部環境整備(樹木移植)	K－21区 L－20区	63	〃	立会	5			吉田第24次立会調査
	農学部附属農場飼料園排水溝修復整備	R－16～19区	64	〃	〃	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、鞴口、石器、鉄滓	吉田第25次立会調査
	農学部附属農場農道改修	V－15・16区	65	〃	〃	325			吉田第26次立会調査
	教育学部前庭環境整備(樹木移植)	I・J－19・20区	66	〃	〃	430			吉田第27次立会調査
	中央ボイラー棟車止設置	O・P－16区	67	〃	〃	2.5		須恵器	吉田第28次立会調査
	大学会館環境整備(樹木移植)	L・M－15区	68	〃	〃	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓	吉田第29次立会調査
	交通標識設置	J－20, N－14区 O－18区	69	〃	〃	3			吉田第30次立会調査
	農学部解剖実習棟周辺環境整備(実験動物運動場設置)	P・Q－17・18区	70	〃	〃	16			吉田第31次立会調査
	理学部環境整備(藤棚設置)	N－20・21区	71	〃	〃	4			吉田第32次立会調査
	農学部附属家畜病院舗装	S・T－19区	72	〃	〃	270			吉田第33次立会調査
	医学部看護婦宿舎改修		11	〃	〃	20			小串第3次立会調査
	医学部環境整備(樹木移植)		12	〃	〃	40			小串第4次立会調査
	工学部尾山宿舎擁壁取設等			〃	〃	65			常盤第2次立会調査
	工学部受水槽総改修		3	〃	〃	1.5			常盤第3次立会調査
	教育学部附属山口小学校散水栓改修		2	〃	〃	1			亀山第1次立会調査
	教育学部附属山口中学校球技コート整備		1	〃	〃	2			亀山第2次立会調査
	教育学部附属幼稚園環境整備(樹木移植)		3	〃	〃	1			亀山第3次立会調査
	教育学部附属光中学校外灯改修		3	〃	〃	1		土師器	光第2次立会調査
	熊野荘給湯機器取設			〃	〃	7			山口市熊野町
昭和61年	教育学部山口附属学校汚水排水管布設	幼稚園・小学校部分 中学校部分	4 2	山口大学埋蔵文化財資料館	試掘	57 20	中世土壙か 河川跡か杭列	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶磁器、不明鉄製品、石鏃、剝片、植物遺体	亀山第2次発掘調査
	国際交流会館新営	N－22・23区	73	〃	〃	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鉄砲玉、加工痕ある剝片	吉田第43次発掘調査
	山口銀行現金自動支払機設営(電線路埋設)	I・J－19・20区	74	〃	立会	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	吉田第34次立会調査

調査年度	旧調査地区名又は調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和61年	農学部附属農場農道整備	S－20区 U－19区	75	山口大学埋蔵文化財資料館	立会	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	工法等変更 吉田第35次立会調査
	農学部附属農場農道交通規制(施錠ポール設置)	L－10区 Q－15・16区	76	〃	〃	2			吉田第36次立会調査
	正門横(水田内)境界杭設置	I－10区	77	〃	〃	0.25	包含層か		吉田第37次立会調査
	経済学部環境整備(樹木移植・記念碑建立)	M－20区	78	〃	〃	3			吉田第38次立会調査
	吉田構内交通標識設置	H－23区,J－9区,P－22区,S－20区,W－16区	79	〃	〃	3		須恵器	吉田第39次立会調査
	市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設		80	山口市教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	〃	2,100	古墳・古代溝、古代河川跡、杭、弥生包含層	弥生土器、土師器、須恵器(墨書のあるもの含む)瓦質土器、製塩土器、石斧、板石	山口市教育委員会の補助 吉田第40次立会調査
	教養部自動販売機増設(屋根設置および観覧席移動)	K・L－18区	81	山口大学埋蔵文化財資料館	〃	3.5			吉田第41次立会調査
	教養部身体障害者用スロープ取設	L－15・16区	82	〃	〃	3			吉田第42次立会調査
	経済学部散水栓取設	L・M－20区	83	〃	〃	4			吉田第43次立会調査
	吉田構内水泳プール改修等	E・F－16区 H－15区	84	〃	〃	26.5	包含層		吉田第44次立会調査
	農学部附属農場水道管理設	S－12区	85	〃	〃	3			吉田第45次立会調査
	吉田構内汚水排水管等総改修	M－18区 O－15・16区	86	〃	〃	15.5		土師質土器	吉田第46次立会調査
	本部身体障害者用スロープ取設	L－14区	87	〃	〃	12			吉田第47次立会調査
	経済学部身体障害者用スロープ取設	K－20区 L－18～20区	88	〃	〃	88	弥生～古墳柱穴		工法等変更 吉田第48次立会調査
	附属図書館荷物運搬用スロープ取設	L－16区	89	〃	〃	8		弥生土器	吉田第49次立会調査
	教養部37番教室改修	K－16区	90	〃	〃	1			吉田第50次立会調査
	医学部附属病院外来診療棟新営		13	〃	〃	5			小串第5次立会調査
	医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等(雨水桝埋設)		14	〃	〃	18			小串第6次立会調査
	工学部尾山宿舎排水管改修			〃	〃	6			常盤第4次立会調査
	工学部身体障害者用スロープ取設		4	〃	〃	29			常盤第5次立会調査
	情報処理センター(常盤センター)空調設備取設		5	〃	〃	30			常盤第6次立会調査
	教育学部附属山口小学校電柱移設		5	〃	〃	0.5			亀山第4次立会調査
	教育学部附属光小学校創立記念事業(ブロンズ像建立)		4	〃	〃	2.5		須恵器、土師器	光第3次立会調査
	湯田宿舎給水管改修			〃	〃	35	杭		山口市湯田温泉
	経済学部宿舎下水管改修	6号宿舎 2号宿舎		〃	〃	1 7		土師質土器 瓦	山口市旭通り 山口市水の上町

※　昭和41年以降、吉田構内においては工事に際し、随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の調査分については調査名をすべて把握しているわけではなく、注意されたい。

Summary

This report accounts the results of archaeological researches in thirty excavated areas located on campus in 1986.

As Appendix, it carries another report of excavation at "the Preserved Site" on the Yoshida campus in 1984, and also carries two papers, Each attribute of the dwelling pits in the Kofun period, Yamaguchi Prefecture in the Japanese Paleolithic age.

Yamaguchi University Archaeological Museum was established as part of the crossfaculties public facilities of the University in 1978. We refer to a plan from the conference of the Manamement Committee first and gain appooval. We then carried out the reseach in relation to the construction work on campus. That's why our reserches are helpful to reconstruct the past society, environment and so on.

The current year we carried out researches as follow :

1 . Researches on the Yoshida campus

(1) Soundings in relation to the construction of the International Hall

We found a ditch and a river. The one dates from the Medieval age to the Modern. The other from the early Yayoi to the late Kofun period, was confirmed at least 19 meters wide. This is perhaps the same river that we excavated at the area of the Faculty of Economics in 1980.

Under construction of this hall, we need to examine at the basin of this river.

(2) Examinations under construction

As for the repair of the swimming pool and setting up a cash service machine by Yamaguchi Bank, we found each layer containing objects dating from the Yayoi to the Kofun period.

Besides, we discovered many pit holes and a ditch at two other areas, too : when we adjusted the road for University Farm, we discovered a ditch and many pit holes in the Muromachi period. Fixing the slope for physically handicapped persons at the doorway of the Faculty of Economics' buildings, we discovered a pit holes dating from the Yayoi to the Kofun period. These two constructions were practiced in order not to destroy the said ruins.

We also helped the Board of Education of Yamaguchi City with the examination at the road around the south of campus. As a result, we found a river dating from the Nara to the Heian period in front of the Veterinary Hospital, and two ditches were found in front of the handball court and the south gate. We found two layers containing many objects between the baseball ground and the south gate, too. The upper contains Sue wares, but doesn't many relics. The lower contains many relics dating from the early to the late Yayoi period. In addition, we guess the existence of some unknown underground cultural properties between the south gate and the rugby ground.

2 . Researches on the Kogushi campus

Though we didn't find any object, we confirmed a layar guessing to contain some objects around the University Hospital.

3 . Researches on the Tokiwa campus

We examined at the places where we fixed the slope for physically handicapped persons and an air–conditioner for the Information Processing Center. But didn't get any obvious object of study.

Around Oyama Dormitry, the result was about same.

4 . Researches on the Kameyama campus

(1) Soundings in relation to the laying drain pipes under ground at Yamaguchi Junior High School, Elementary School and Kindergarten

In the Kindergarden, we discovered some underground cultural properties at two points. At one point, there were layers containing many pieces of Yayoi earthenware. At the other, we found some pits in the Muromachi period.

In the Elementery School, we found some relics at five points. At the point No.9 among them, we could find a lot of early Haji wares (the late Furu type) in some layers. Putting some examinations till now together, we knew here were at least two kinds of pottery, that is, the late Syonai and the late Furu type.

In the Junior High School, we found some layers containing relics at two points. At the point No.3, we discovered many Haji wares in the Medieval age, mostly. We found some Haji wares of Ouchi B–type among them. This kind of Haji ware had been discovered only in the Ouchi Residence Site. At the point No.5, we found relics dating the late Jomon period and the Syonai period.

Around these points, we must make excavations with care from now.

(2) Examinations under construction

Fixing two telegraph posts in the Elementary School's ground, we examined but didn't get any obvious object of study.

5 . Researches on the Hikari campus

We found a few Sue and Haji wares, but they were brought by the wave. But we picked up many objects dating from the late Kofun to the Edo period on the beach of Mitarai Bay.

6 . Researches on the Yuda and the Faculty of Economic's dormitories

At the Yuda Dormitory, we didn't get any obvious object of study.

Around the Faculty of Economics' Dormitory, we first discovered much remains in the Muromachi period. We guess there are some unknown ruins around here.

Fig. 101　山口大学吉田構内地区割および調査区位置図

Fig. 102　山口大学小串構内調査区位置図

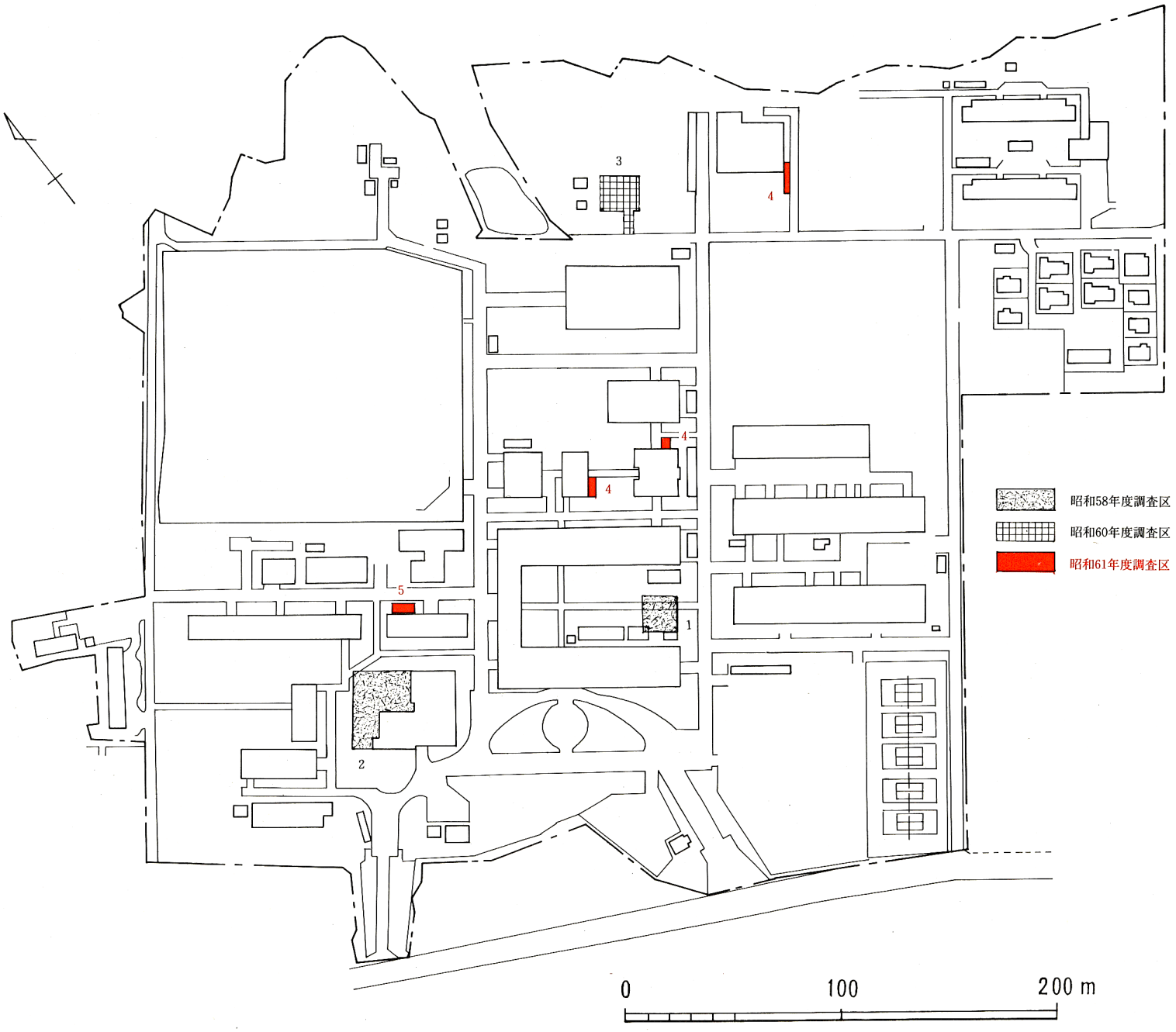


Fig. 103　山口大学常盤構内調査区位置図

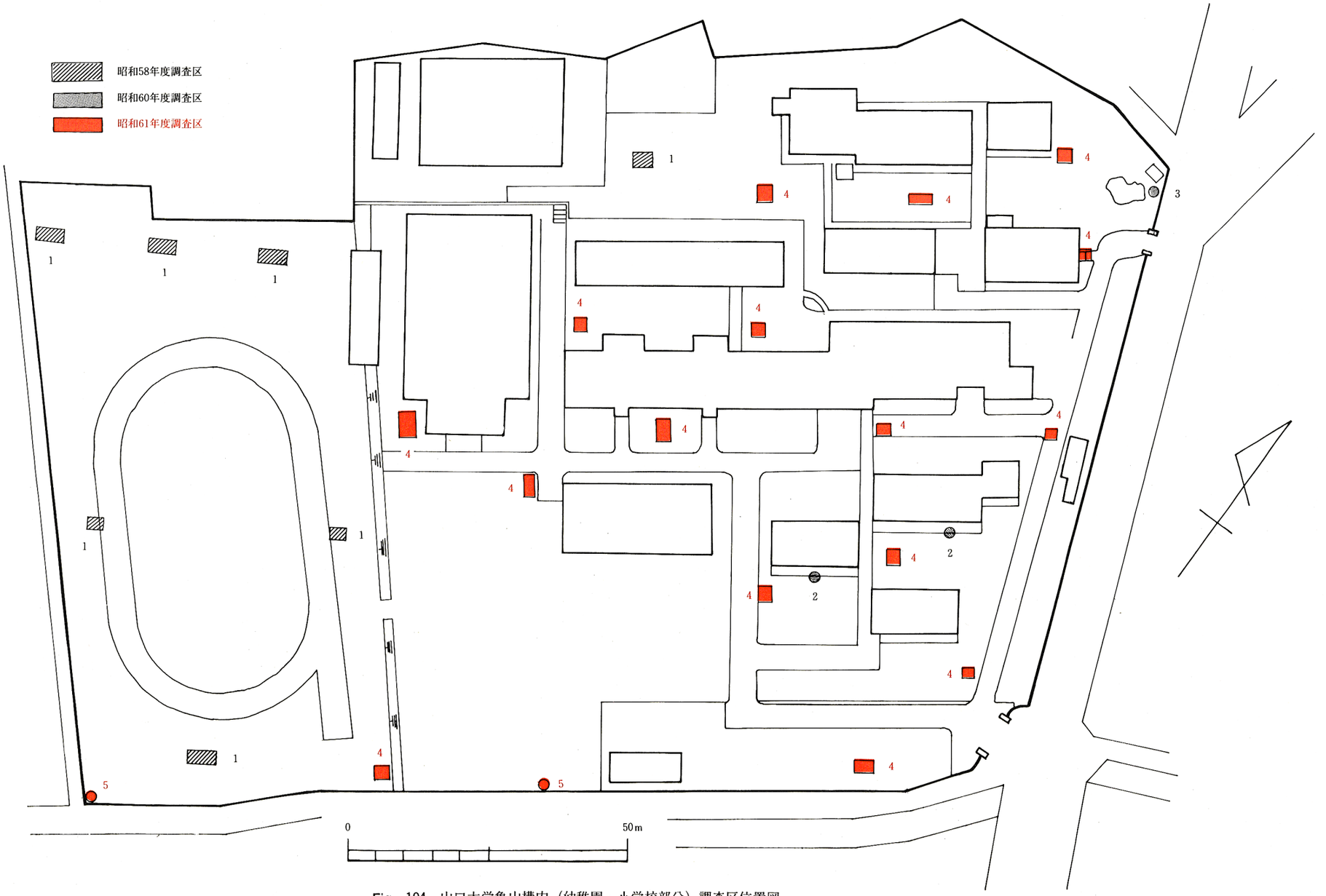


Fig. 104　山口大学亀山構内（幼稚園・小学校部分）調査区位置図

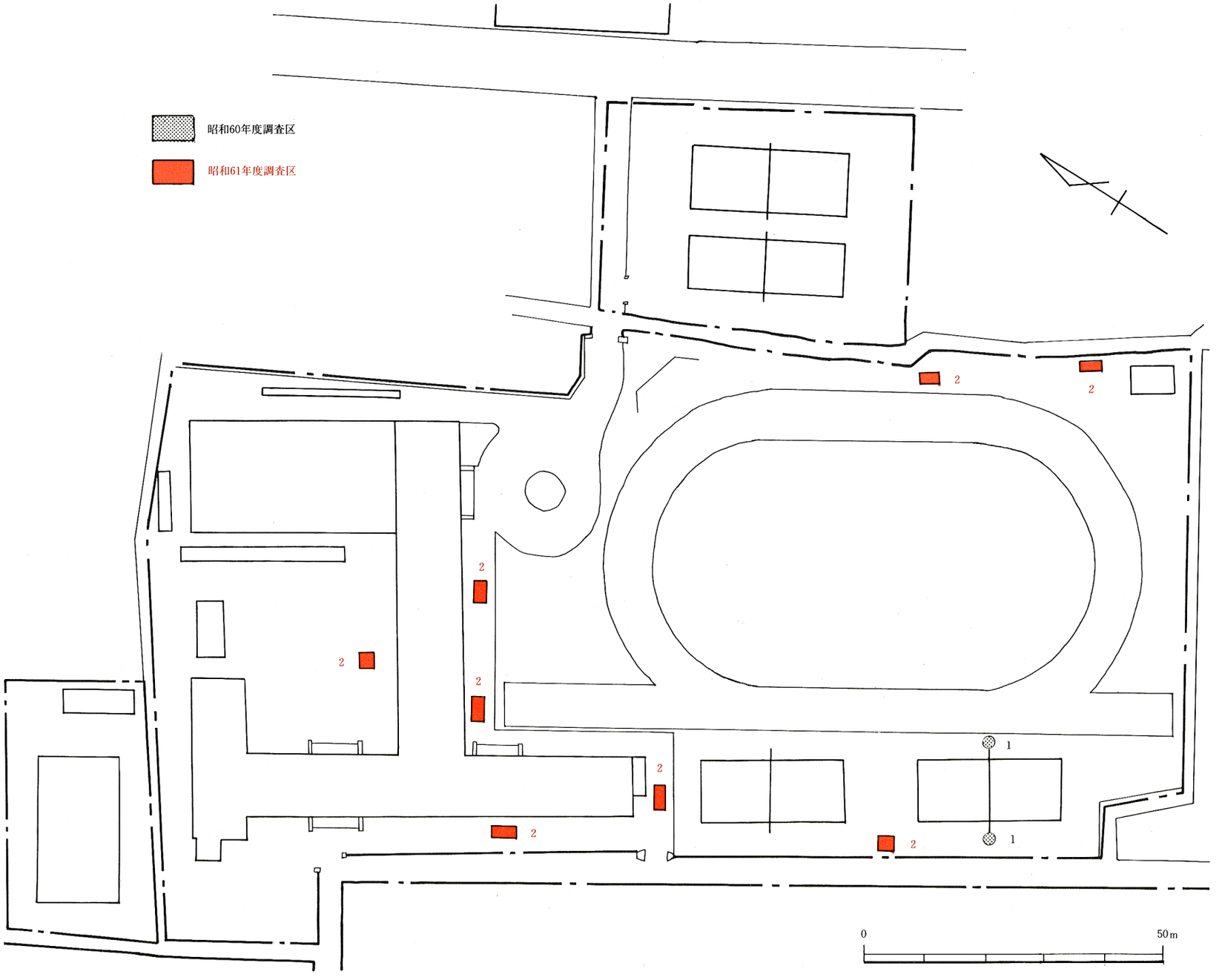


Fig. 105　山口大学亀山構内（中学校部分）調査区位置図

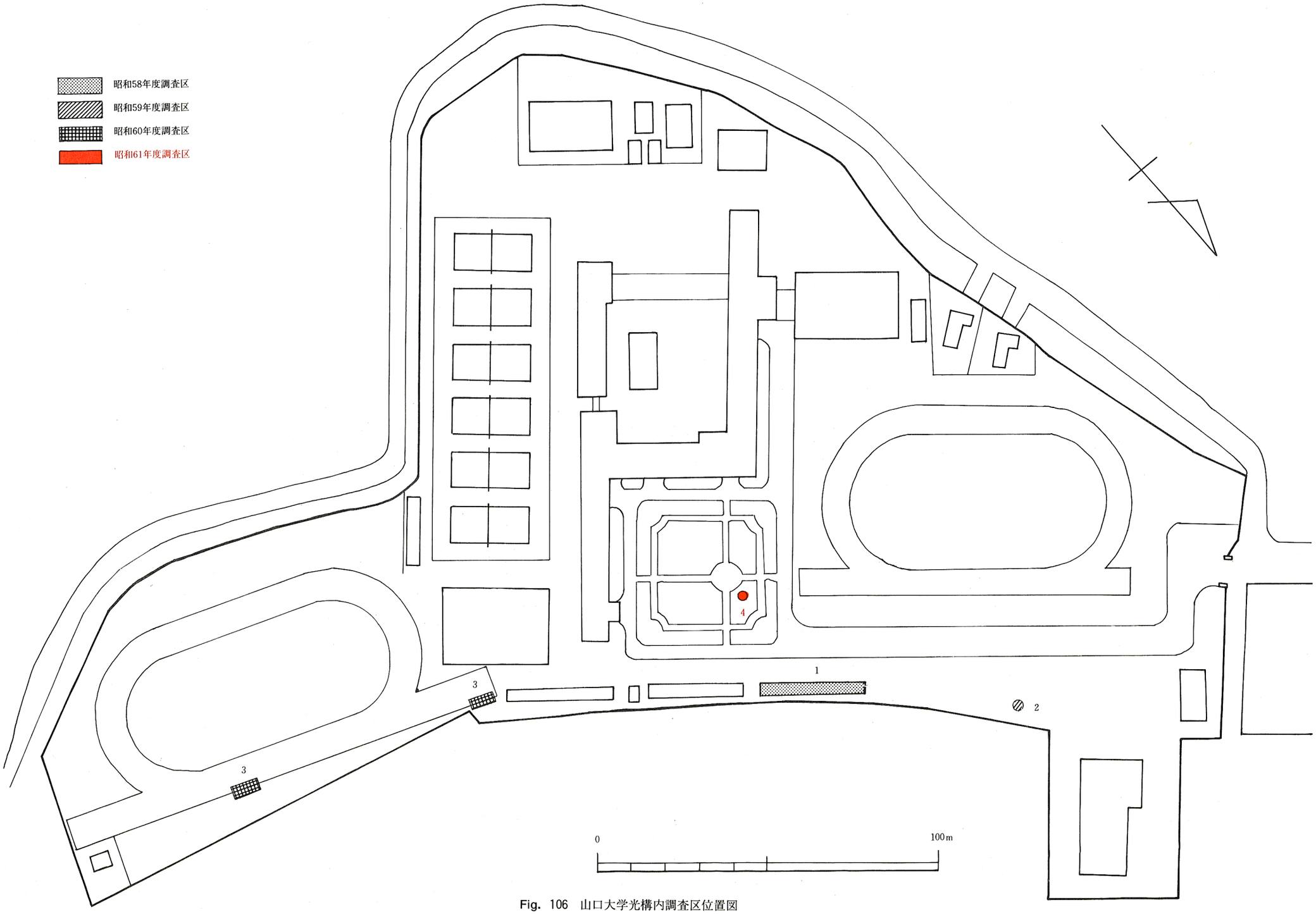


Fig. 106　山口大学光構内調査区位置図

Fig. 102　山口大学小串構内調査区位置図

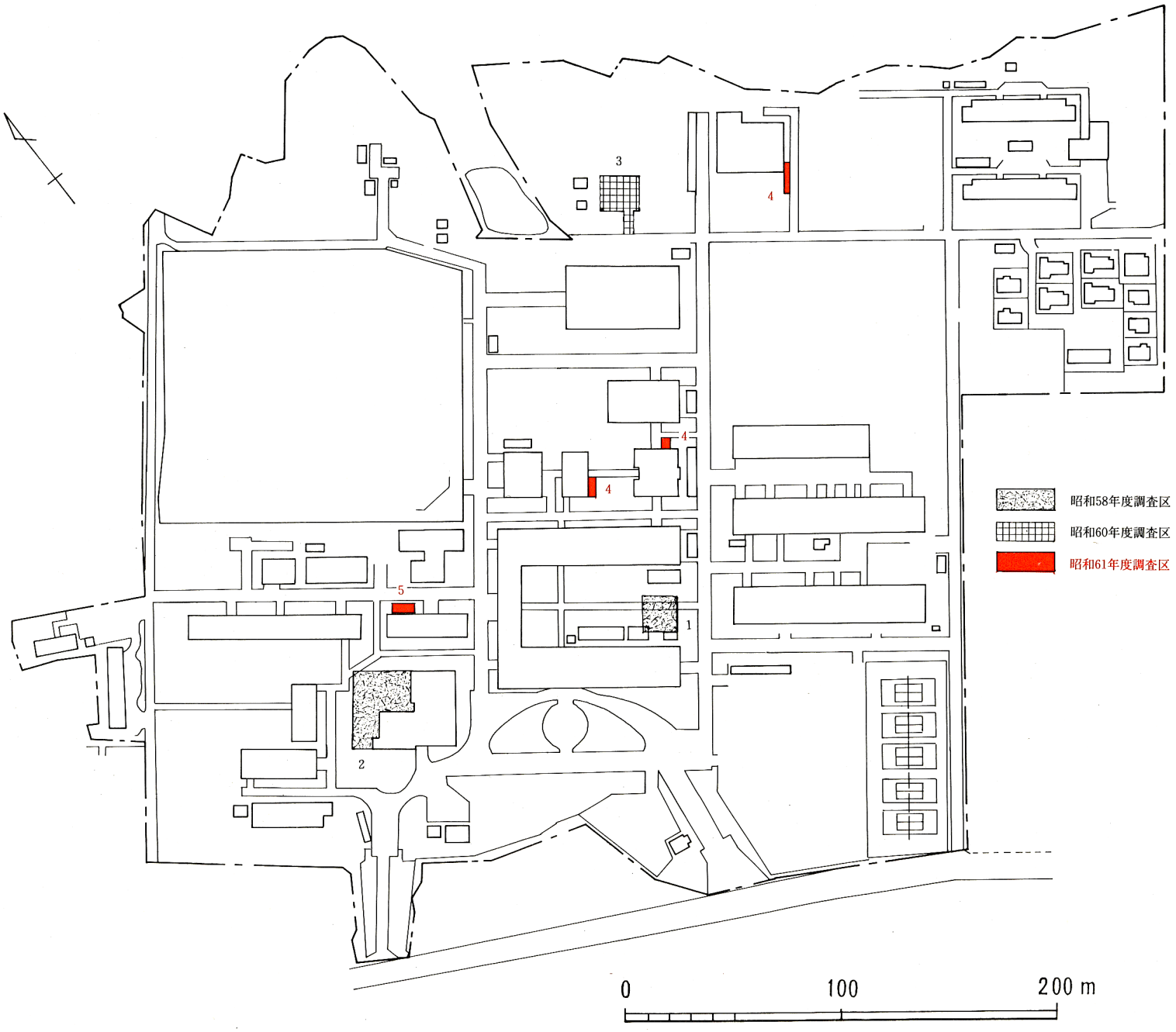


Fig. 103　山口大学常盤構内調査区位置図

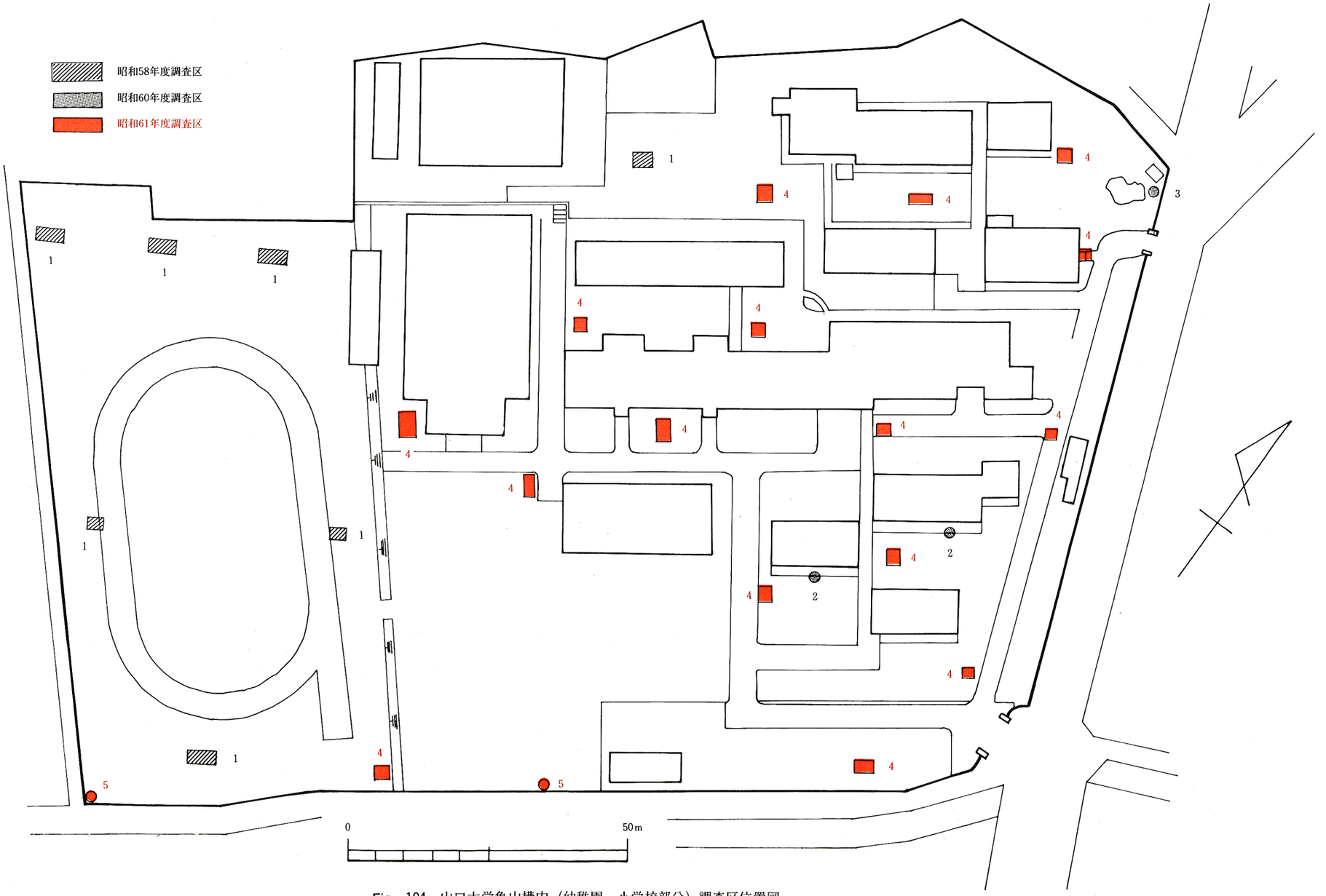


Fig. 104　山口大学亀山構内（幼稚園・小学校部分）調査区位置図

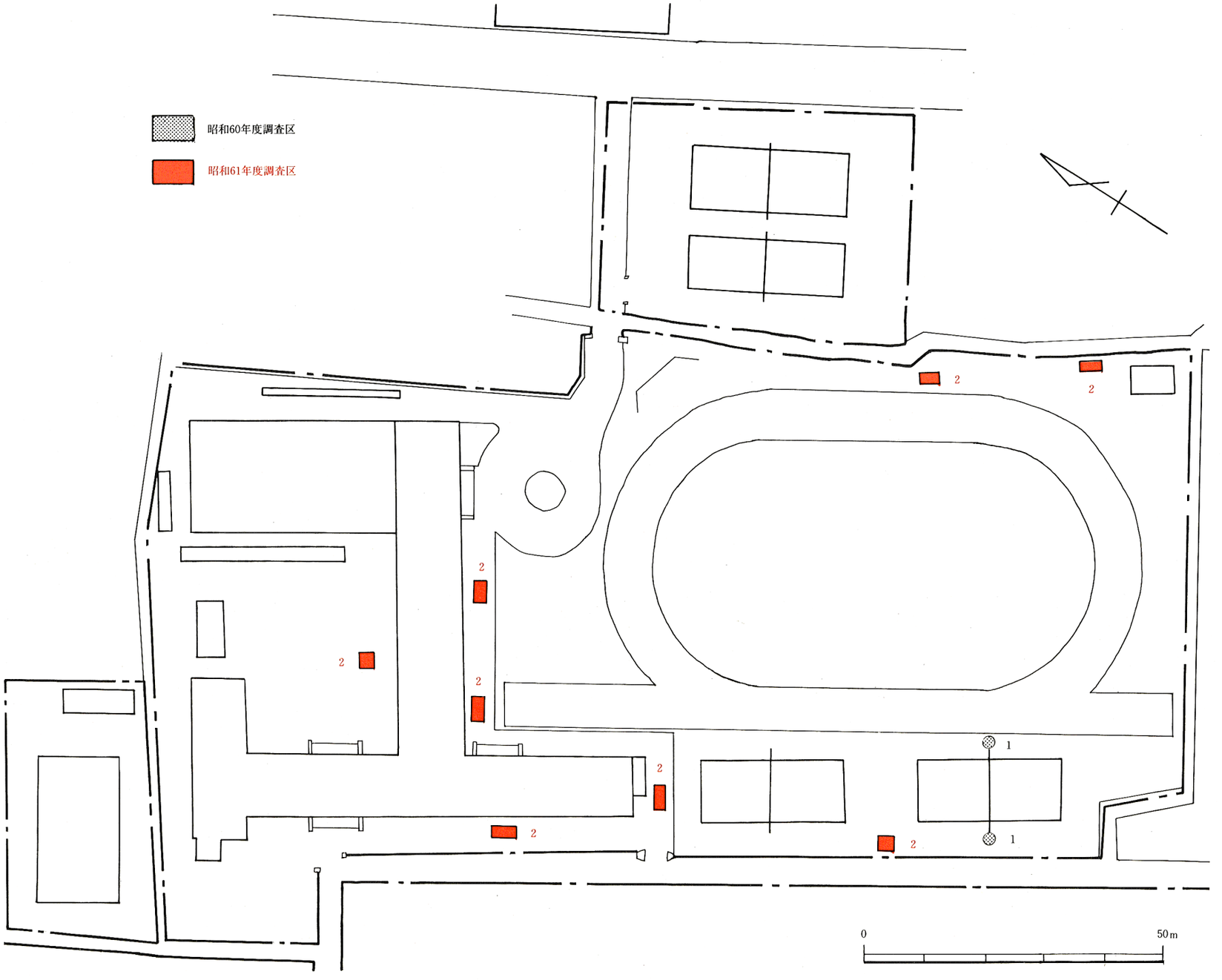


Fig. 105　山口大学亀山構内（中学校部分）調査区位置図

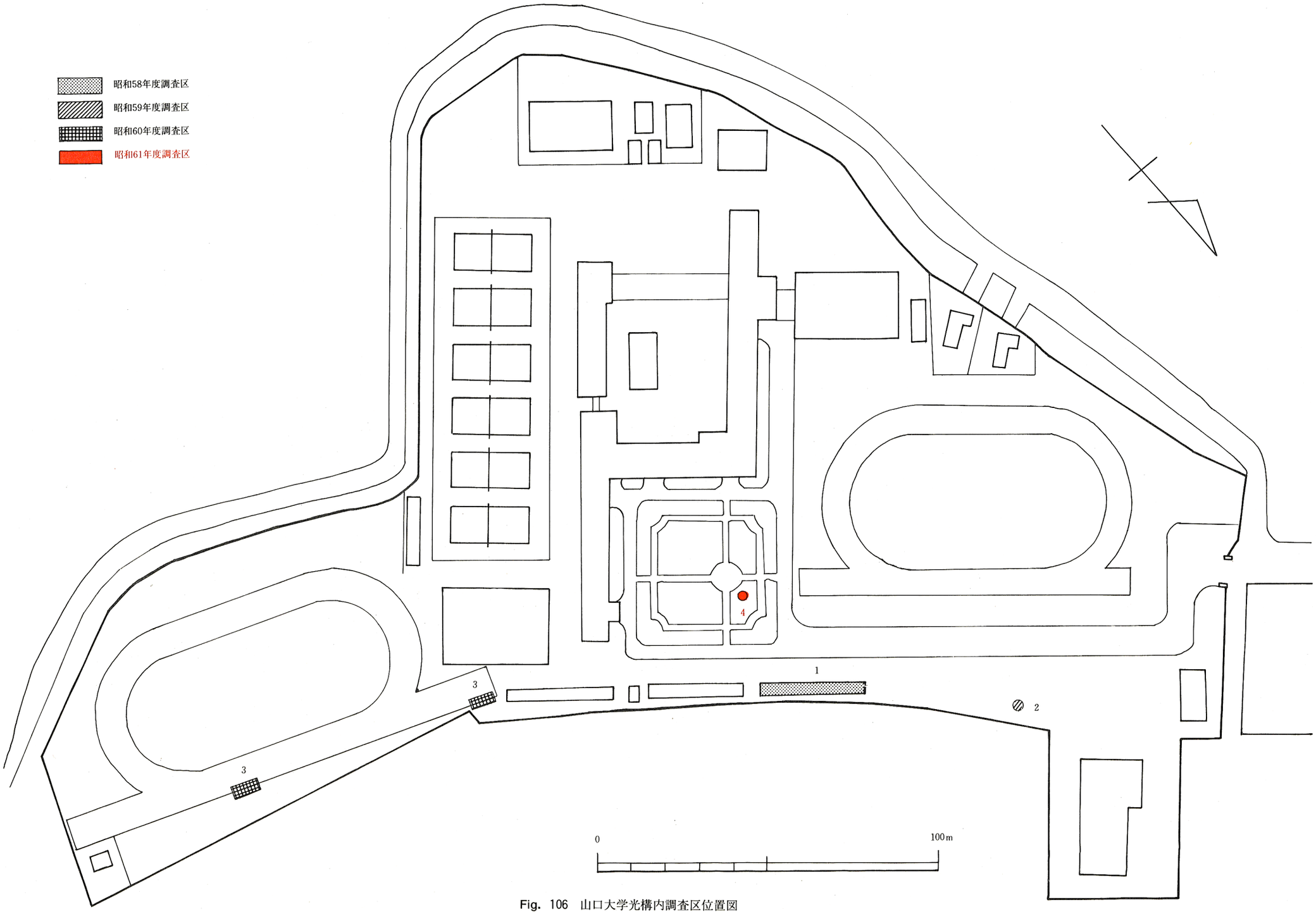
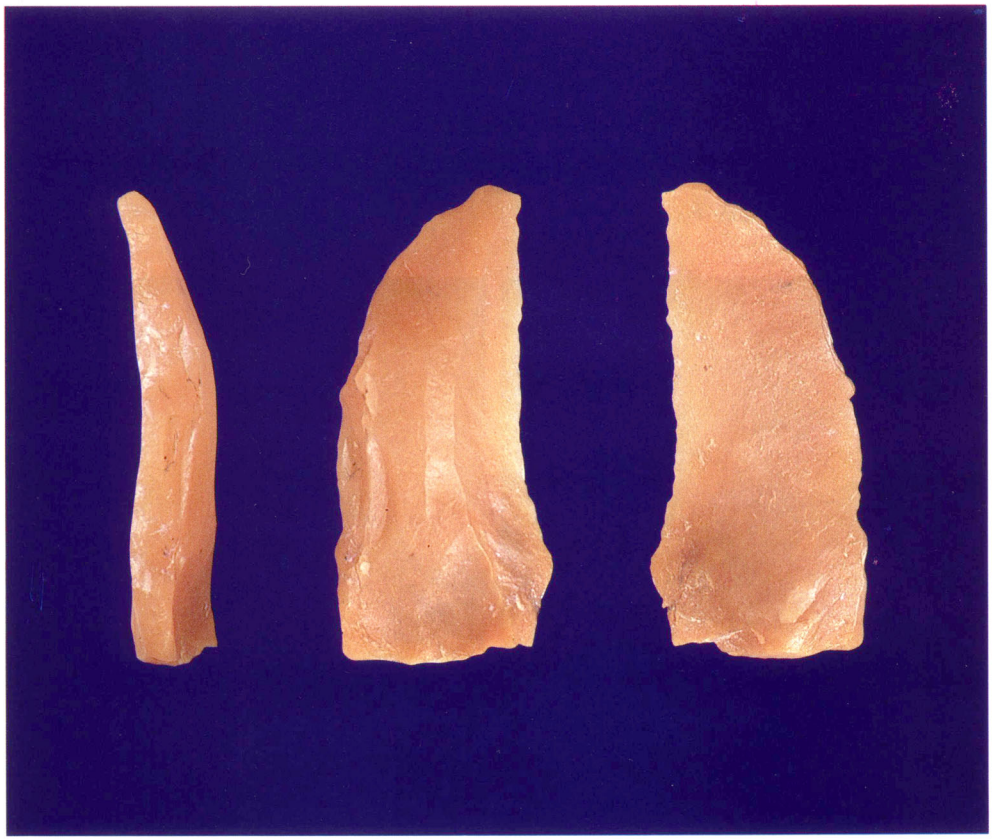


Fig. 106　山口大学光構内調査区位置図

PLATES



ナイフ形石器(Fig. 68-7)

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(1)(幼稚園)

(1) 第1トレンチ全景(西から)

(2) 第1トレンチ東壁土層断面(西から)

(3) 第3トレンチ全景(南から)

(4) 第4トレンチ全景(西から)

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(2)（小学校）

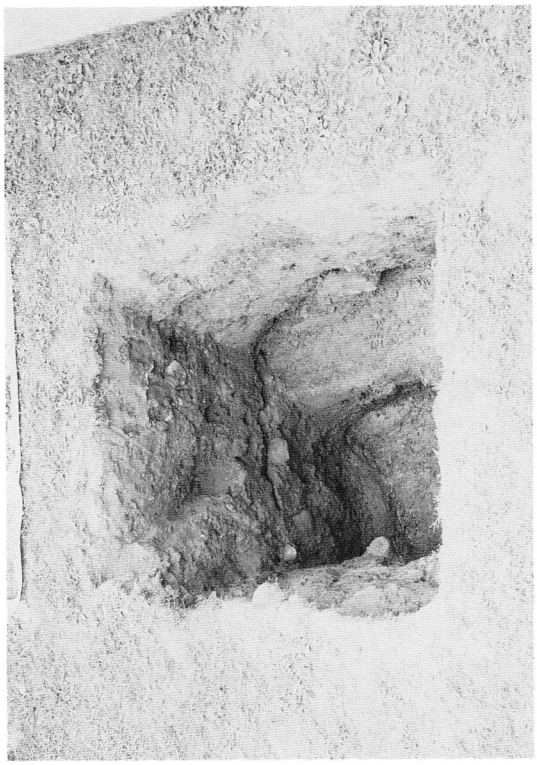
(1)　第5トレンチ全景(南から)

(2)　第6トレンチ全景(南から)

(3)　第7トレンチ全景(西から)

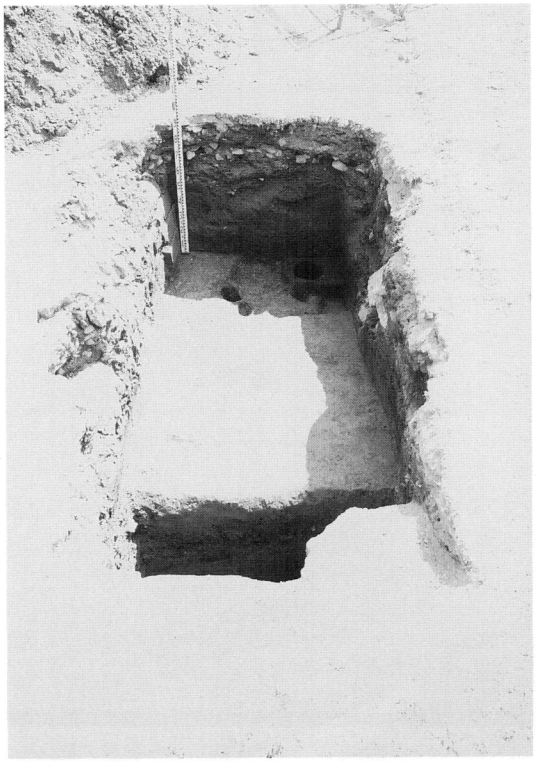
(4)　第9トレンチ全景(東から)

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(3)(小学校)



(1) 第10トレンチ全景(北から)

(2) 第11トレンチ全景(南から)



(3) 第12トレンチ全景(南から)

(4) 第13トレンチ全景(北から)

(1) 第13トレンチ南壁土層断面(北から)

(2) 第14トレンチ全景(北から)

(3) 第15トレンチ全景(北から)

(4) 第16トレンチ全景(南から)

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(5)（中学校）

(1) 第1トレンチ南壁土層断面(北から)

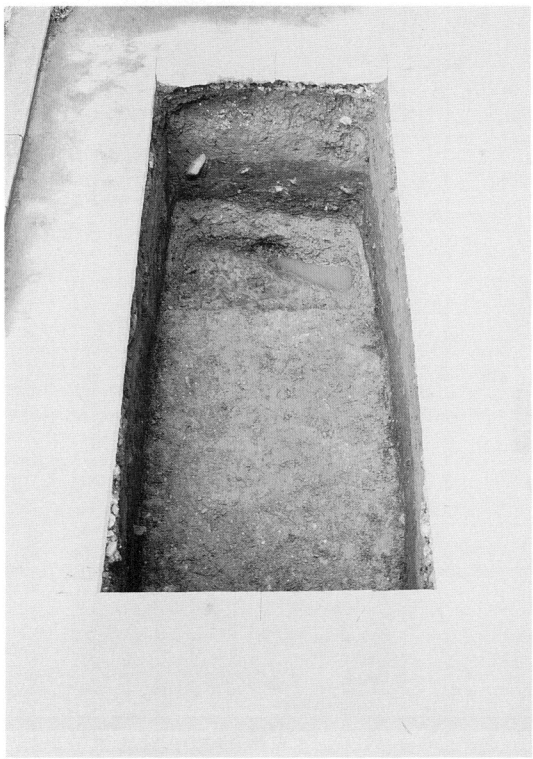
(2) 第2トレンチ南壁土層断面(北から)

(3) 第3トレンチ西壁土層断面(東から)

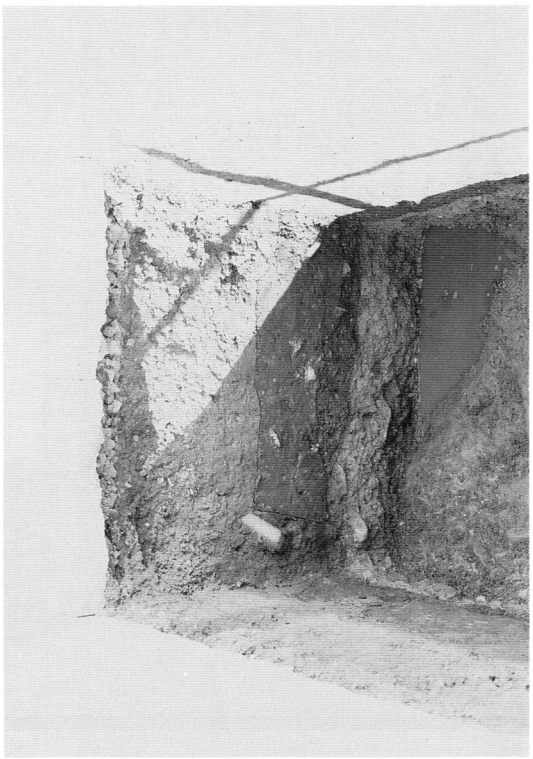
(4) 第4トレンチ西壁土層断面(東から)

(1) 第5トレンチ第4～6層遺物出土状況(南から)

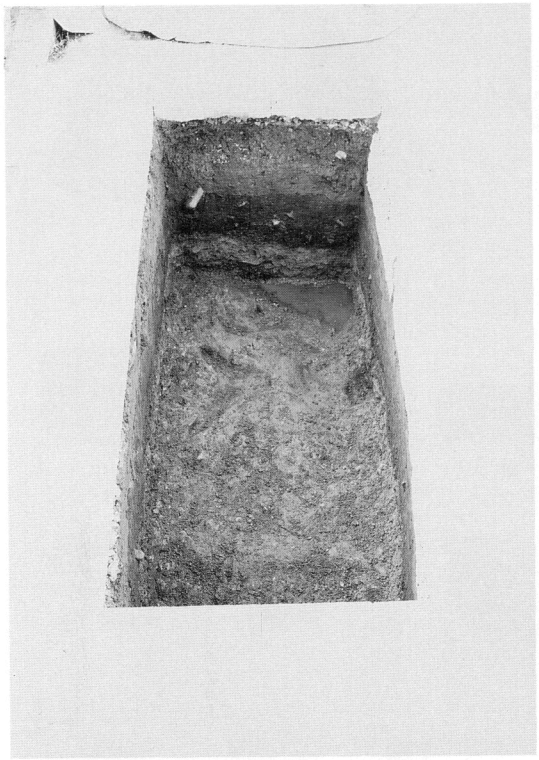
(2) 第5トレンチ第4～6層遺物出土状況(東から)



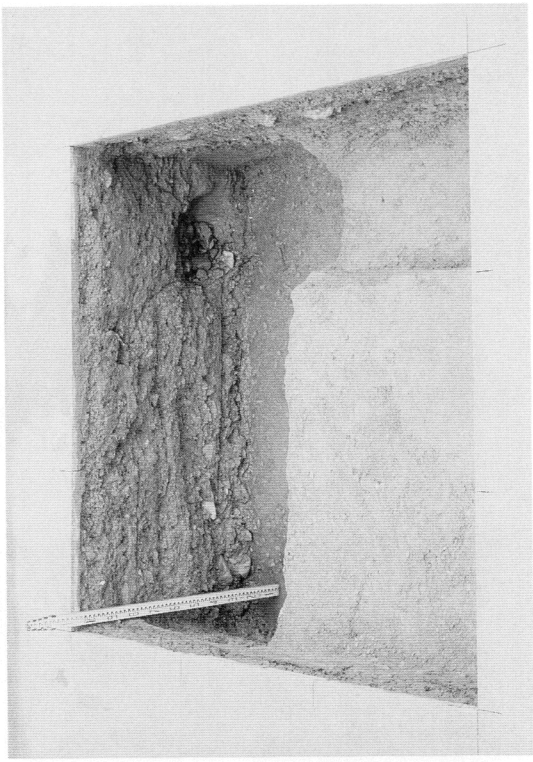
(3) 第5トレンチ第4～6層完掘状況(南から)



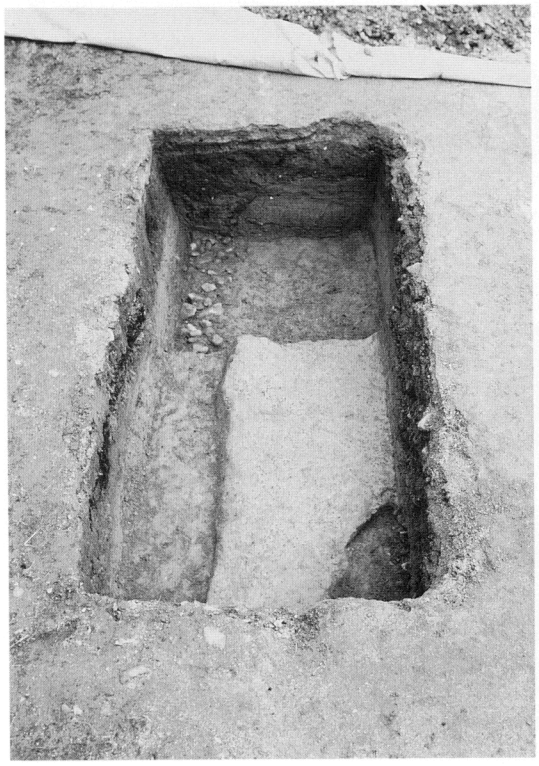
(4) 第5トレンチ北壁土層断面(南から)



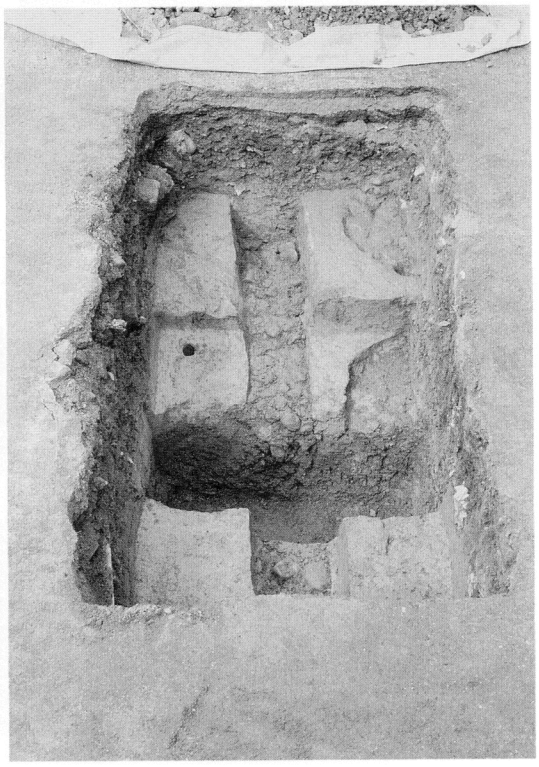
(1) 第5トレンチ完掘状況(南から)



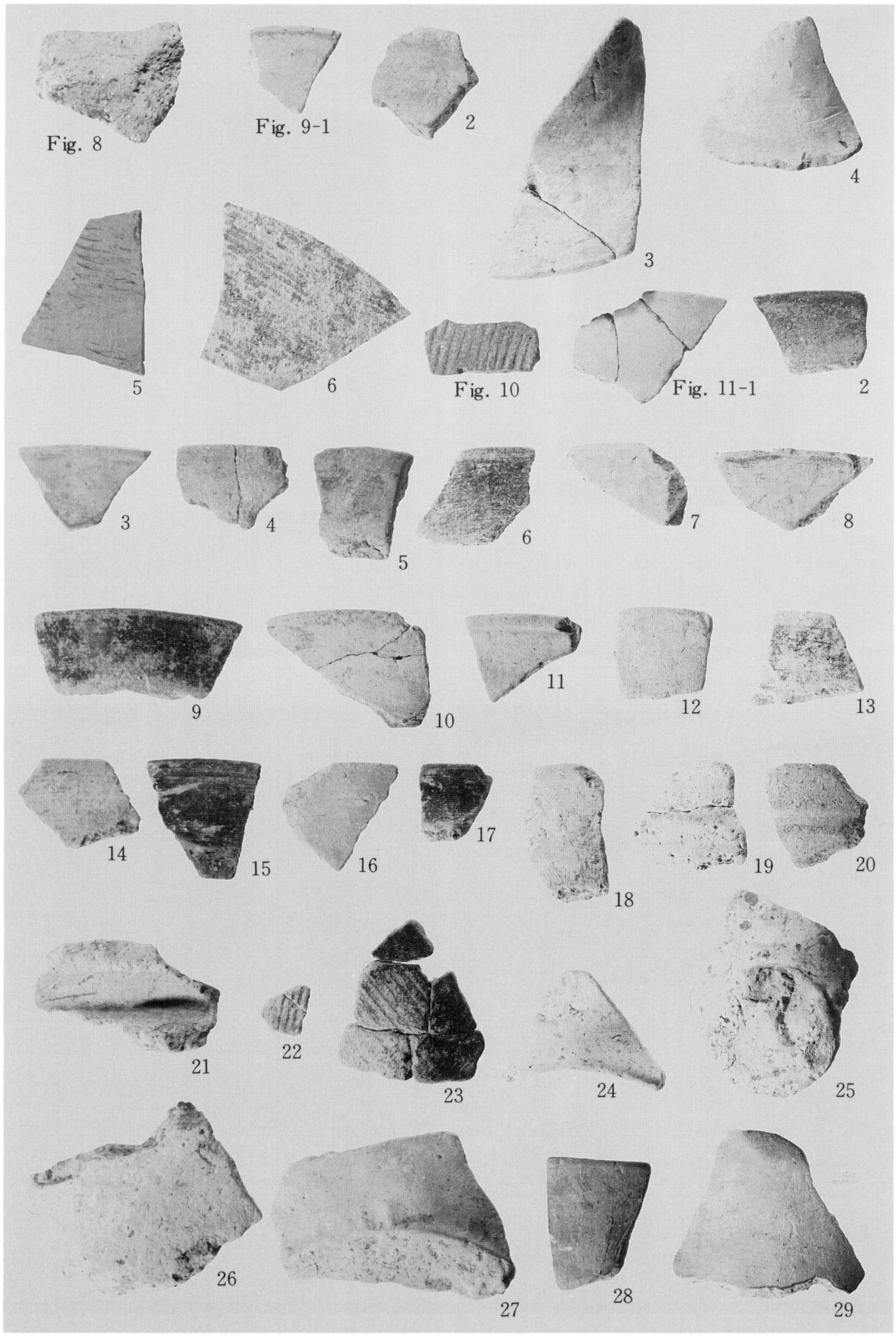
(2) 第6トレンチ全景(東から)



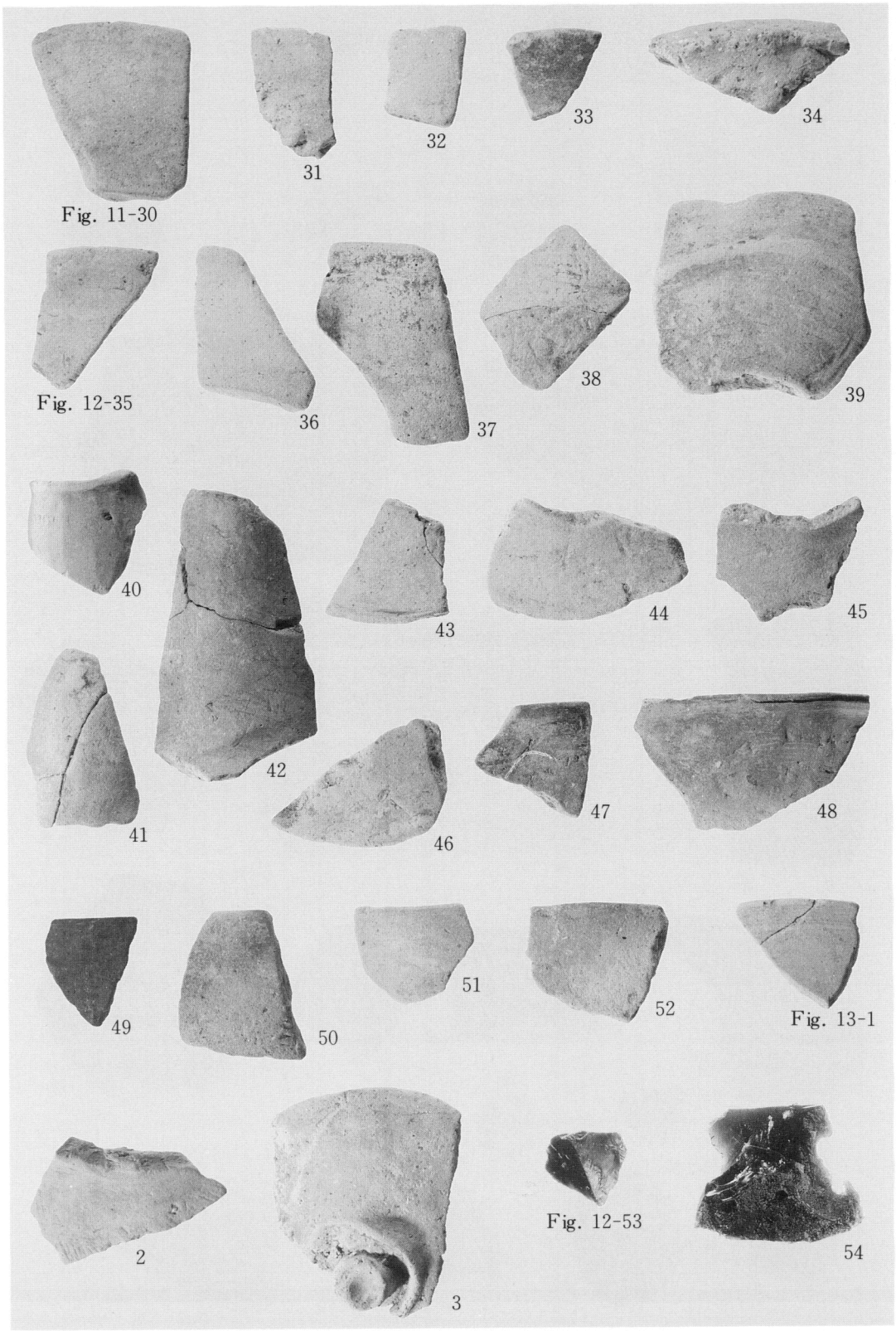
(3) 第7トレンチ全景(北から)



(4) 第8トレンチ全景(南から)



出土遺物 (1) (幼稚園・小学校)



出土遺物 (2) (幼稚園・小学校)

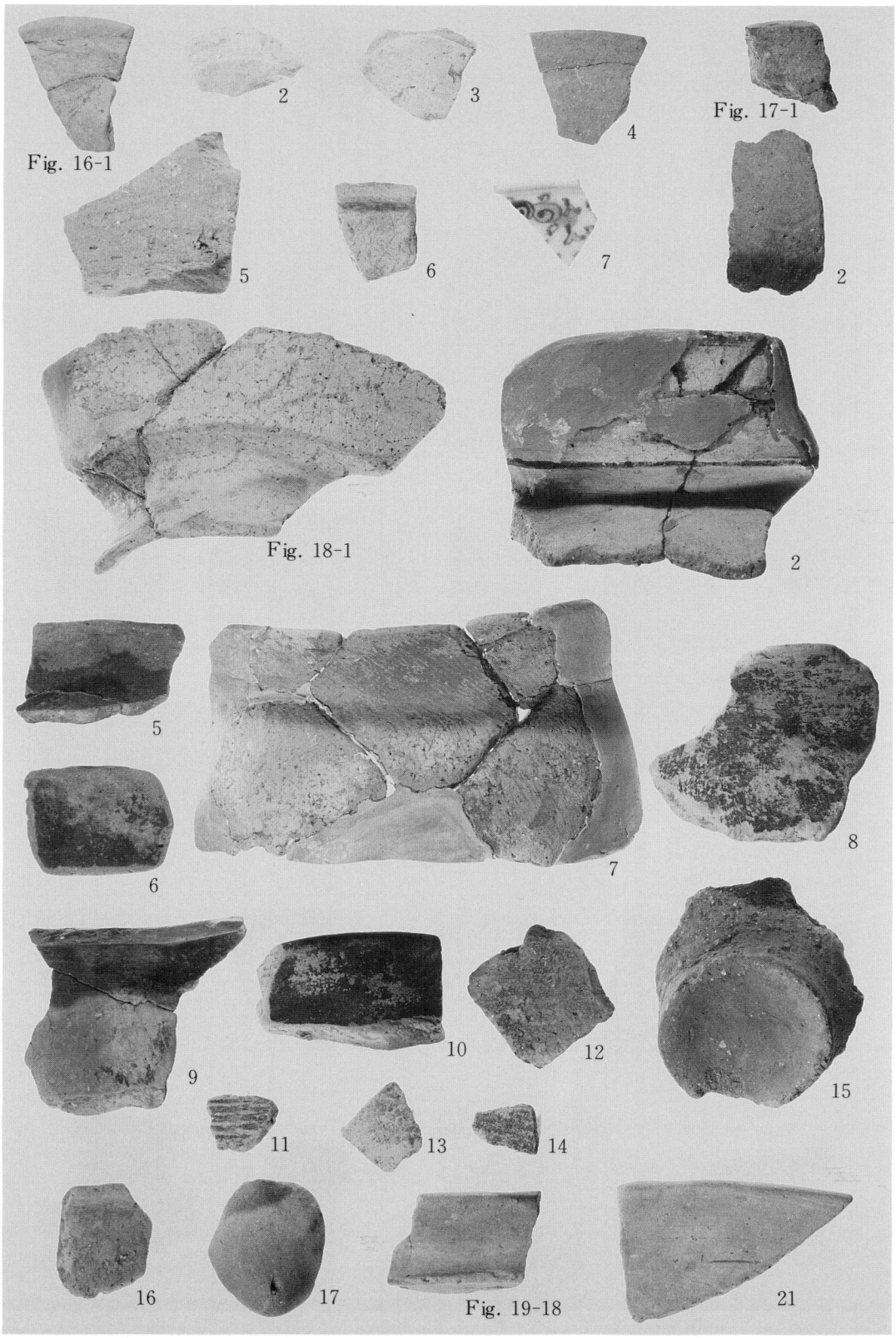


Fig. 16-1
2
3
4
Fig. 17-1
5
6
7
2
Fig. 18-1
2
5
6
7
8
9
10
12
15
11
13
14
16
17
Fig. 19-18
21

出土遺物 (3) (中学校)

Fig. 19-19

22

23

24

25

26

27

28

Fig. 20-1

4

6

8

Fig. 16-8

9

2

3

5

7

Fig. 21-1

2

Fig. 17-3

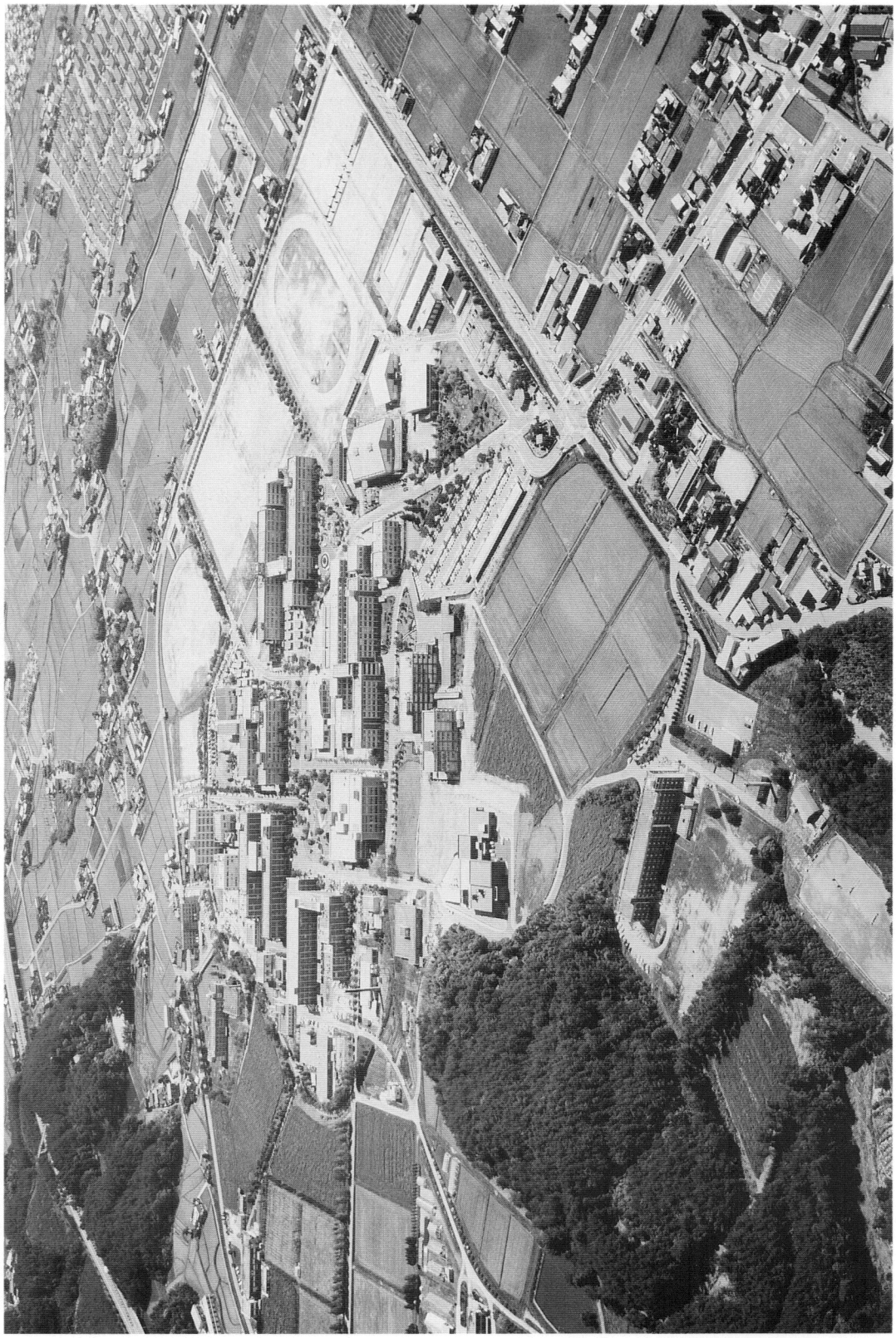
Fig. 18-3

Fig. 19-20

Fig. 18-4

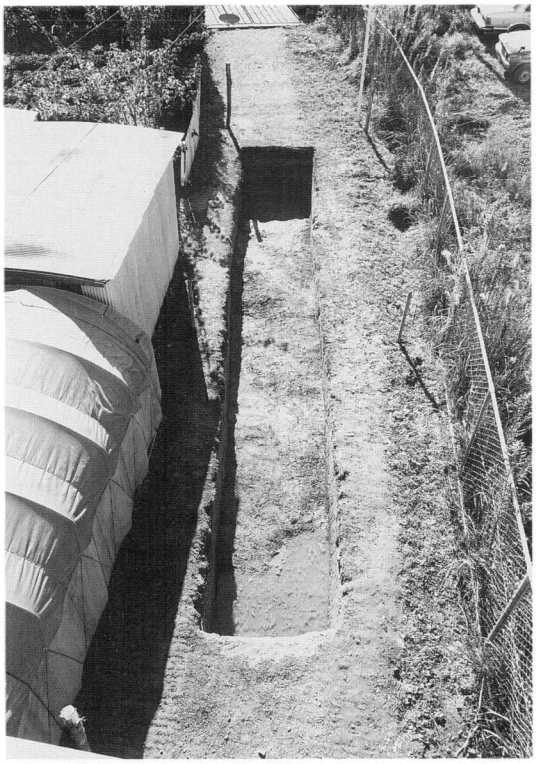
出土遺物 (4) (中学校)

PL. 12



吉田構内全景（北西から）

吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査(1)



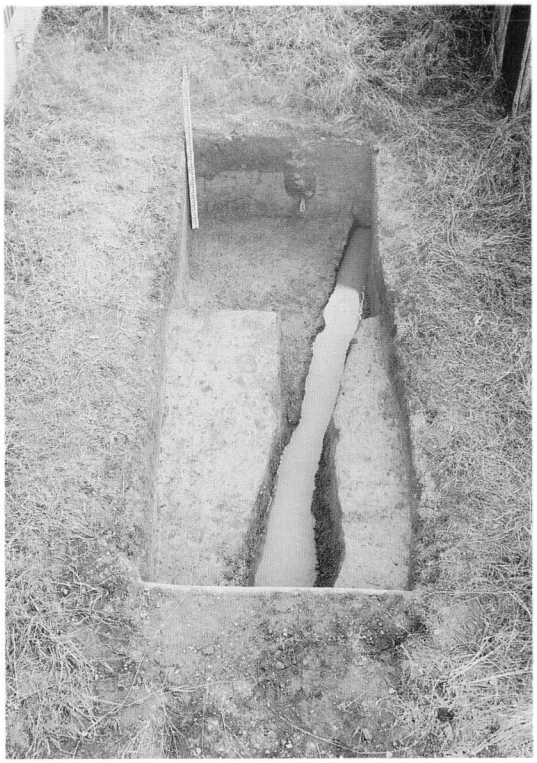
(1) Aトレンチ全景(北から)

(2) Aトレンチ遺物出土状況(東から)

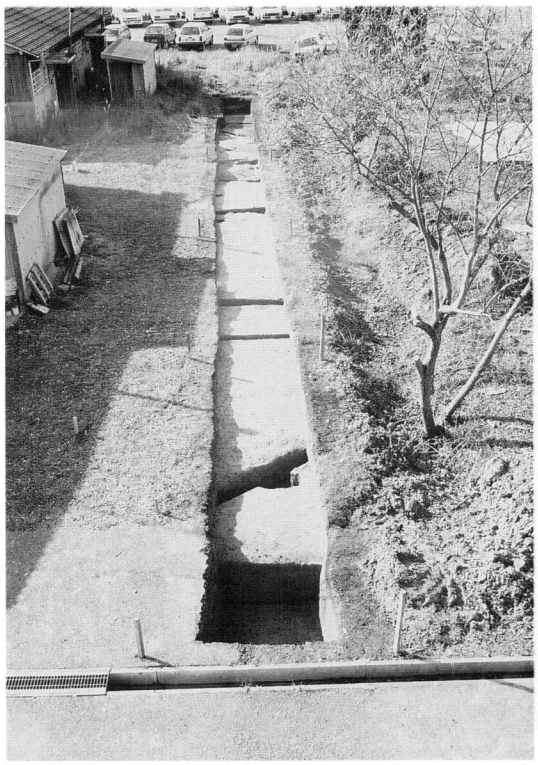
(3) Bトレンチ全景(北から)

(4) Bトレンチ南壁土層断面(北から)

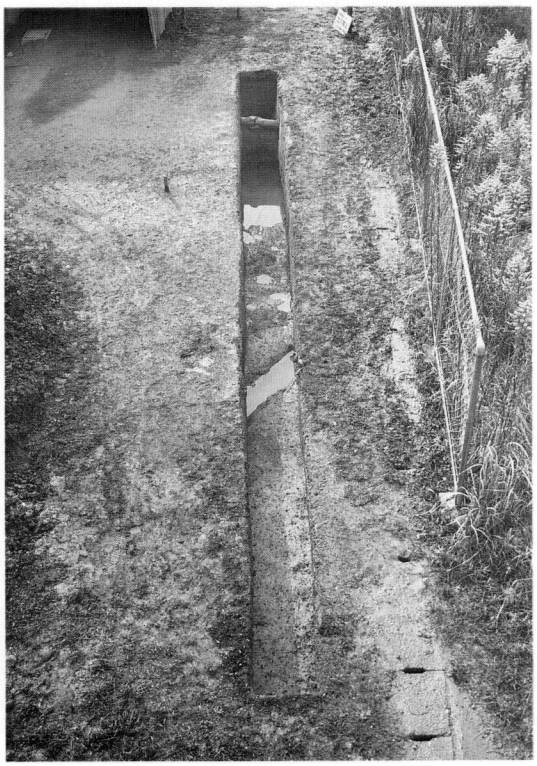
(1)　Cトレンチ全景(北から)



(2)　Dトレンチ全景(北から)

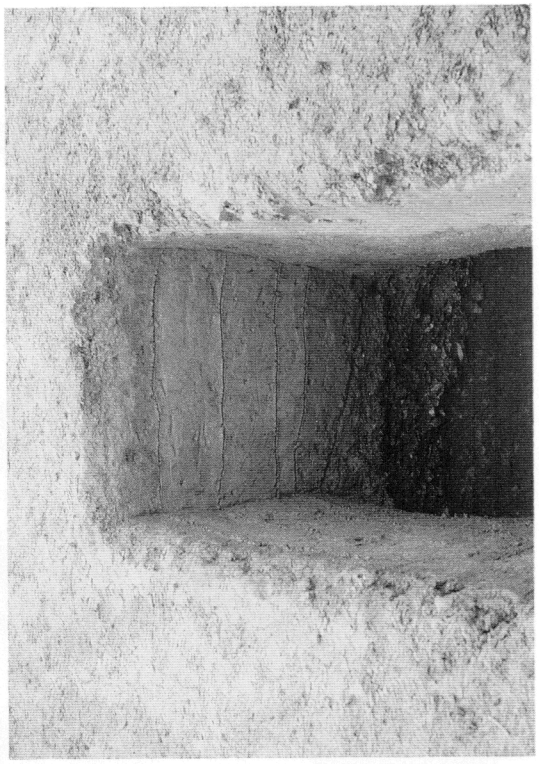


(3)　Eトレンチ全景(東から)

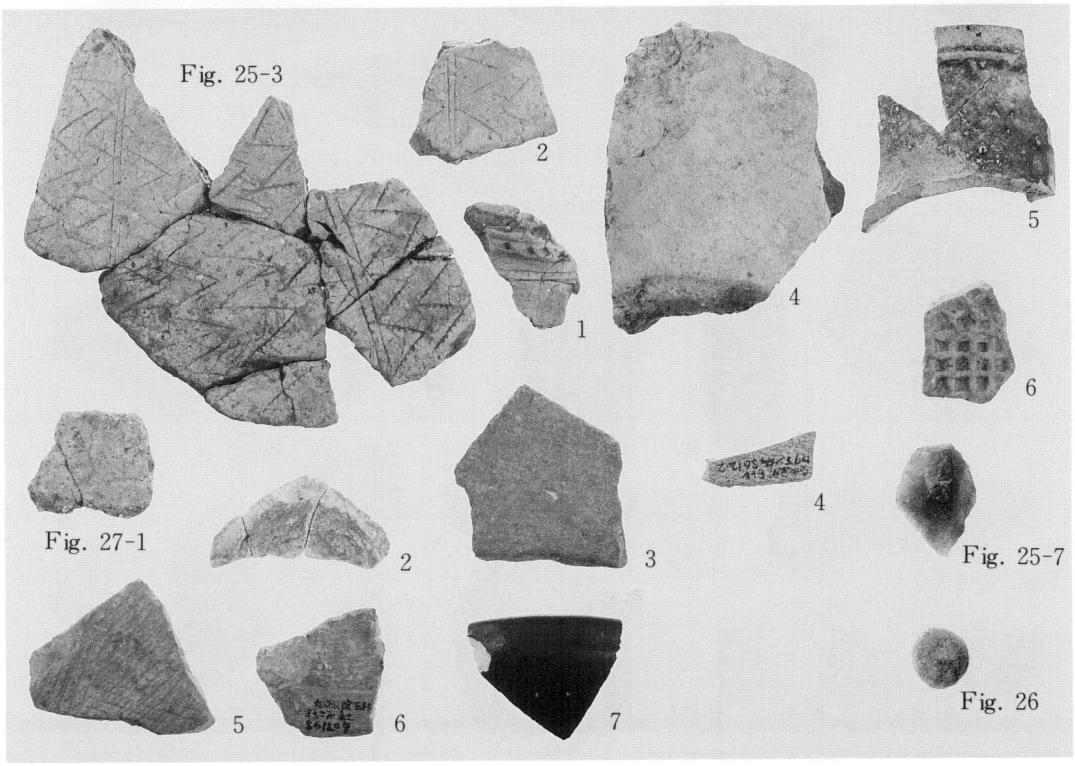


(4)　Fトレンチ全景(北から)

(1) Fトレンチ地山落ち込み状況(西から)



(2) Fトレンチ南壁土層断面(北から)



(3) 出 土 遺 物

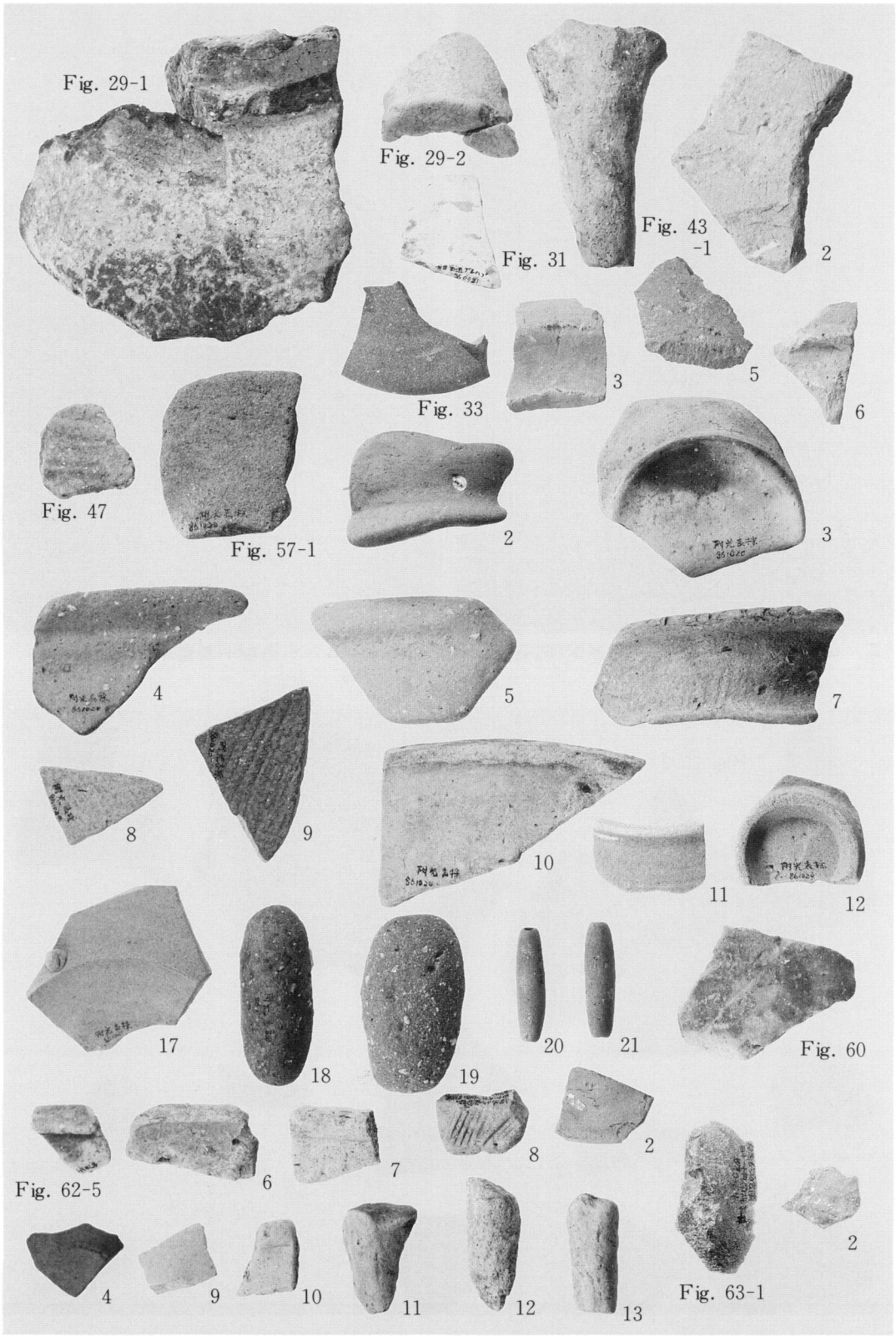
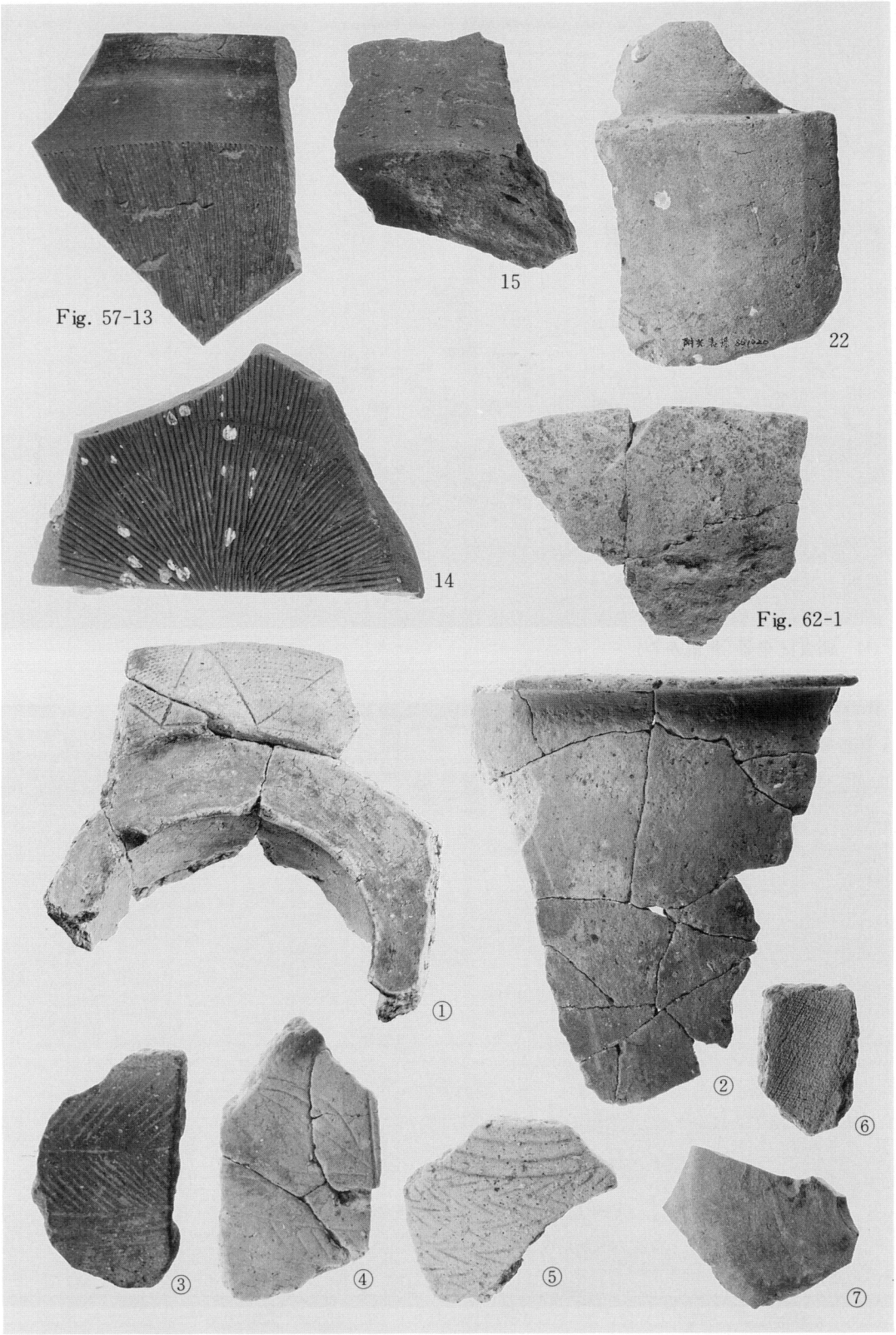


Fig. 29-1
Fig. 29-2
Fig. 31
Fig. 43
-1
2
3
5
6
Fig. 33
Fig. 47
Fig. 57-1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
12
17
18
19
20
21
Fig. 60
Fig. 62-5
6
7
8
2
4
9
10
11
12
13
Fig. 63-1
2

出 土 遺 物 (1)



出 土 遺 物 (2)

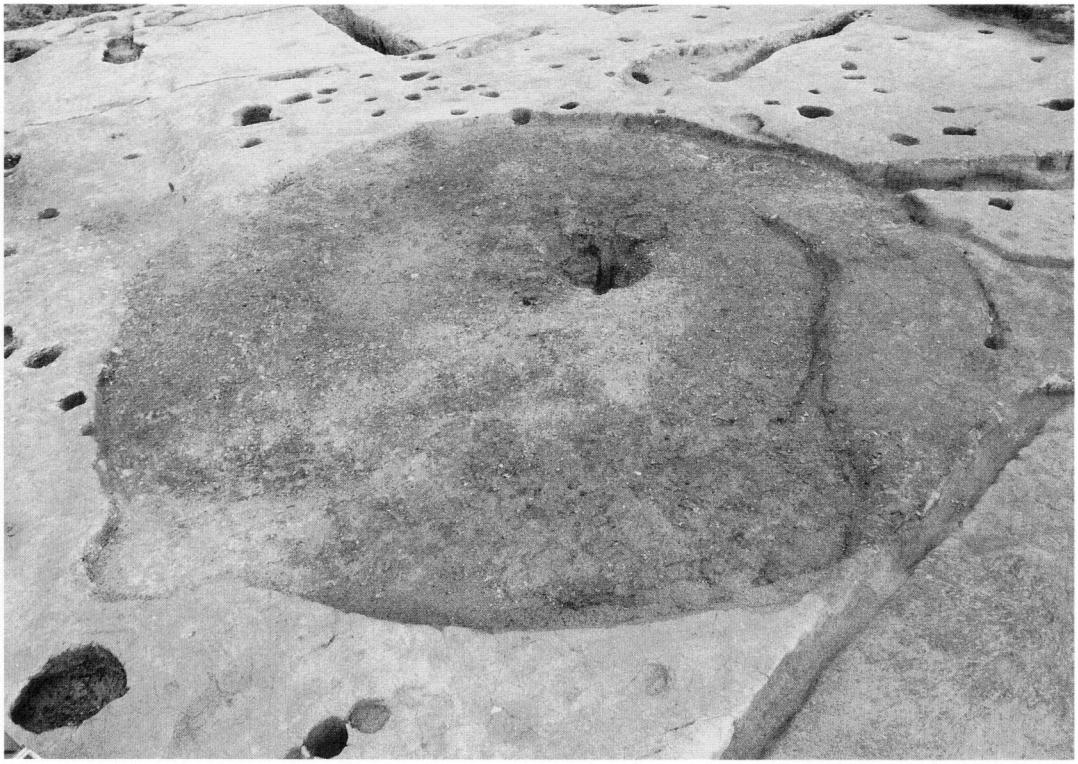
山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)(1)

(1) 調査区全景(北東から)

(2) 調査区全景(南西から)

(1) 第9号竪穴住居跡(東から)

(2) 第10～13号竪穴住居跡(南東から)



(1) 第11・12号竪穴住居跡(西から)

(2) 第13号竪穴住居跡(北西から)

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)(4)

(1) 第13号竪穴住居西隅の桁・梁材検出状況(南西から)

(2) 第13号竪穴住居跡東隅の桁・梁材検出状況(南から)

(3) 第13号竪穴住居跡の桁材縦断面(南東から)

(4) 第13号竪穴住居跡の桁材横断面(北東から)

(1) 第13号竪穴住居跡炉跡(北西から)

(2) 第13号竪穴住居跡炉跡(南東から)

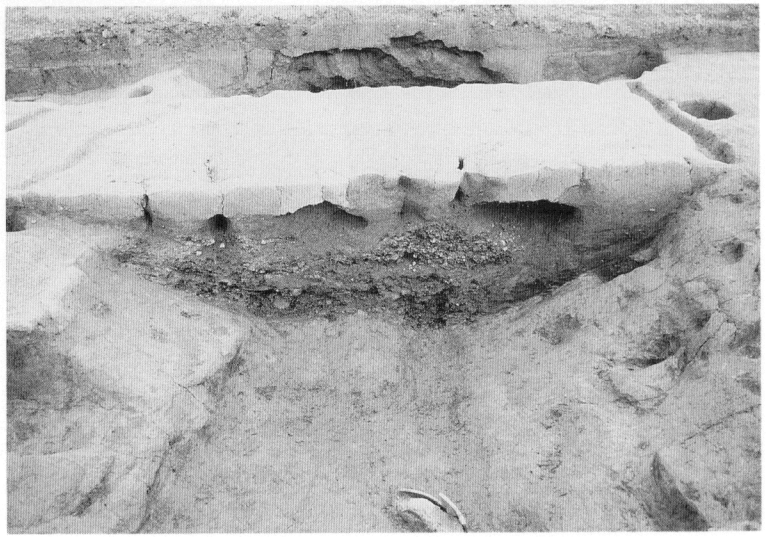
(3) 第17号竪穴住居跡(北東から)

(4) 第18号竪穴住居跡(南西から)

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)(6)

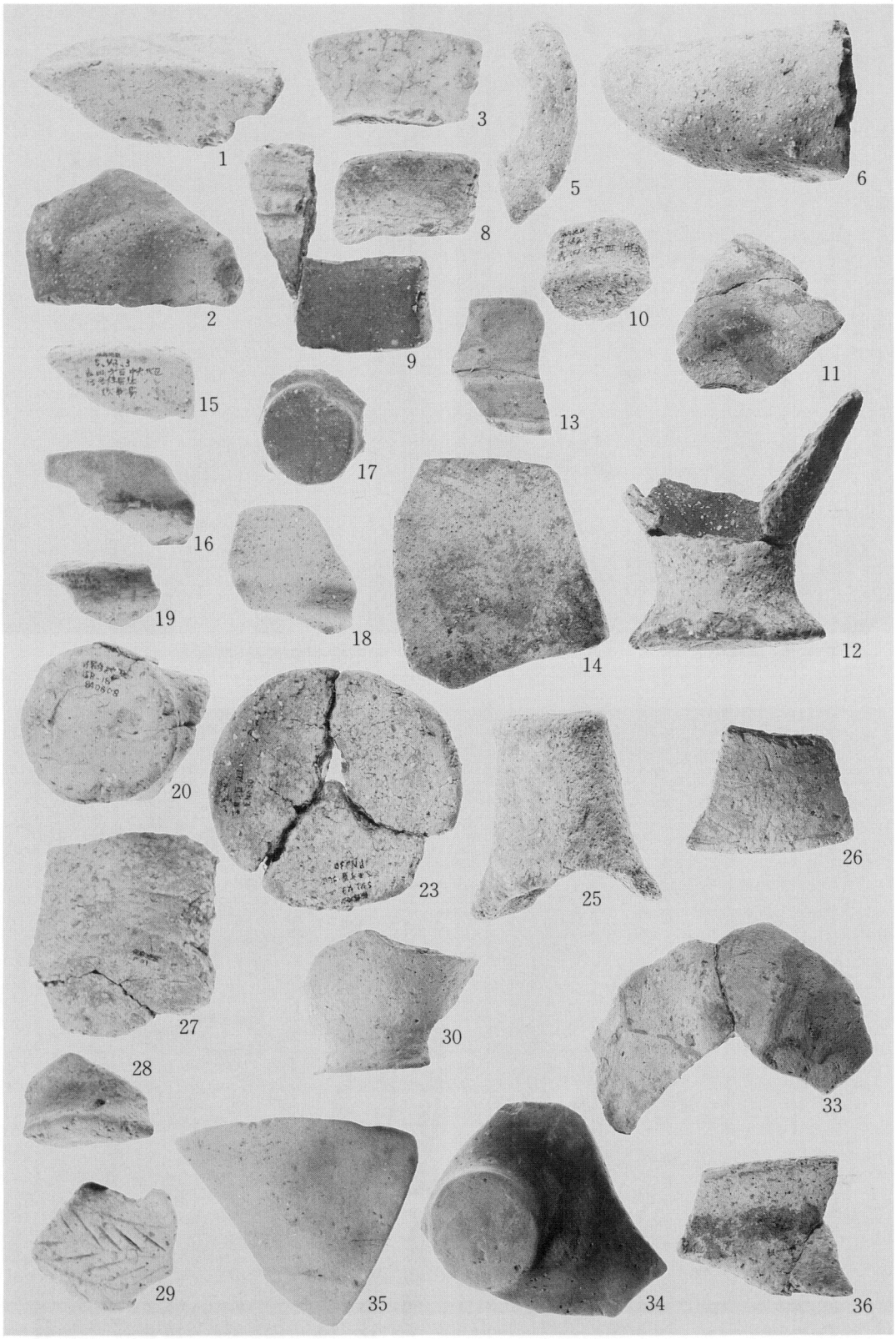
(1) 河川跡(南東から)

(2) 河川跡土層断面(南東から)

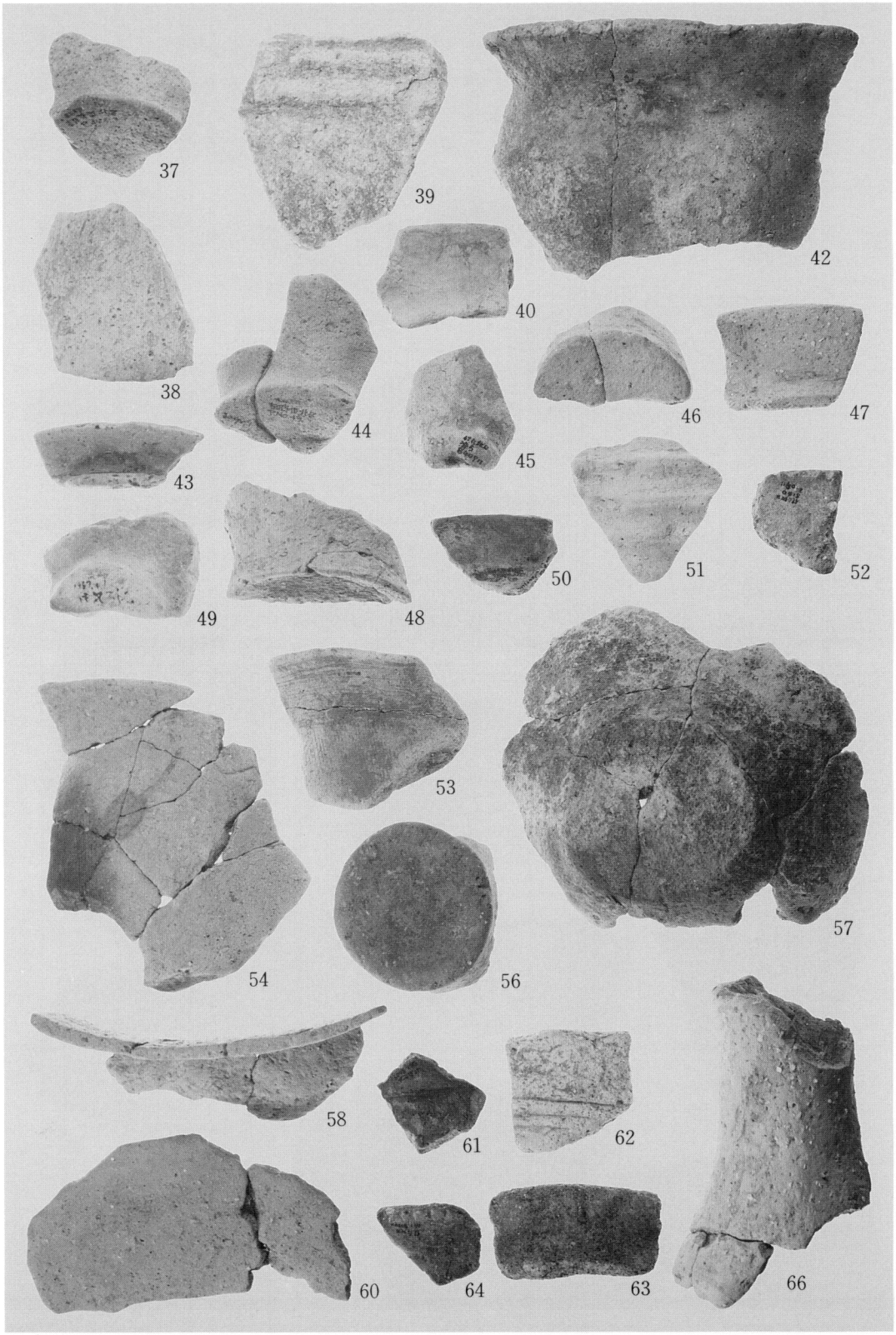


(3) 河川跡遺物出土状況(北東から)

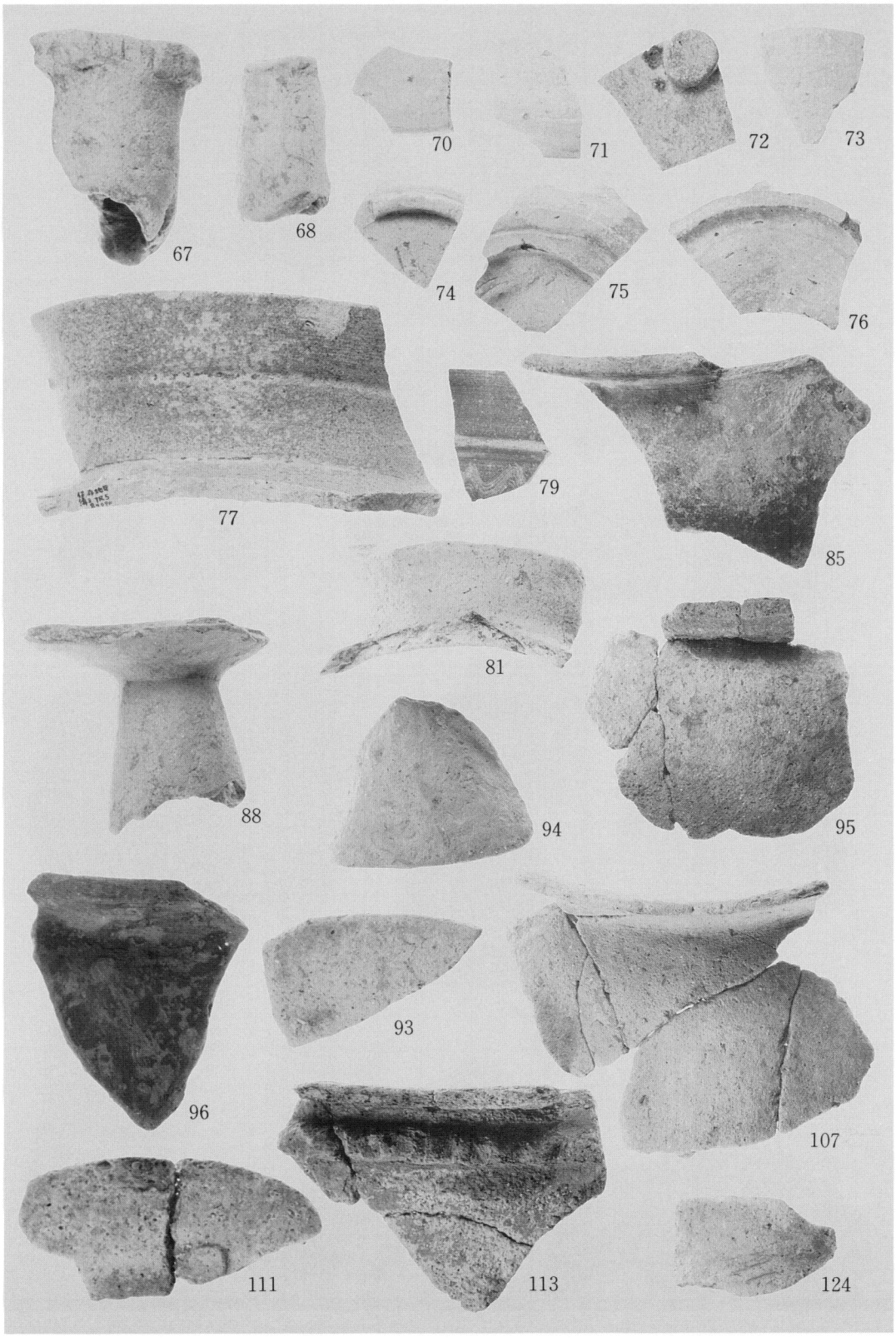
(4) 現地説明会風景


1
2
3
5
6
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
23
25
26
27
28
29
30
33
34
35
36

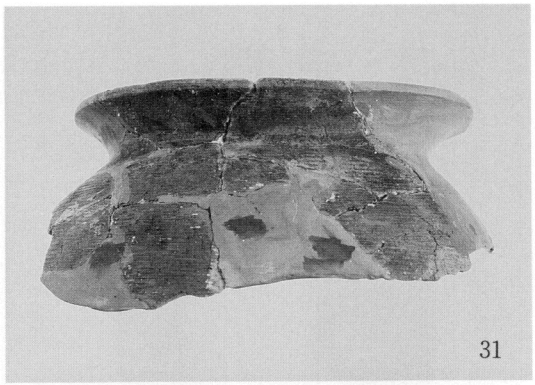
出 土 遺 物 (1)

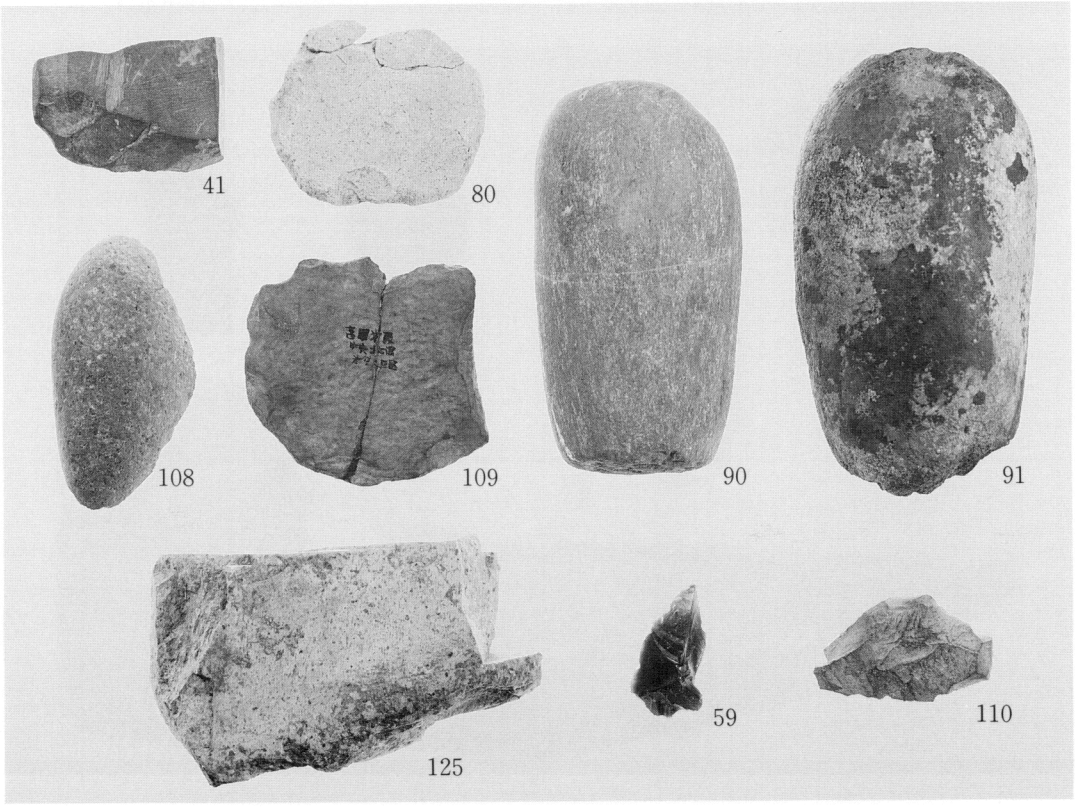

37
39
42
38
40
44
46
47
43
45
49
48
50
51
52
53
54
56
57
58
61
62
60
64
63
66

出 土 遺 物 (2)

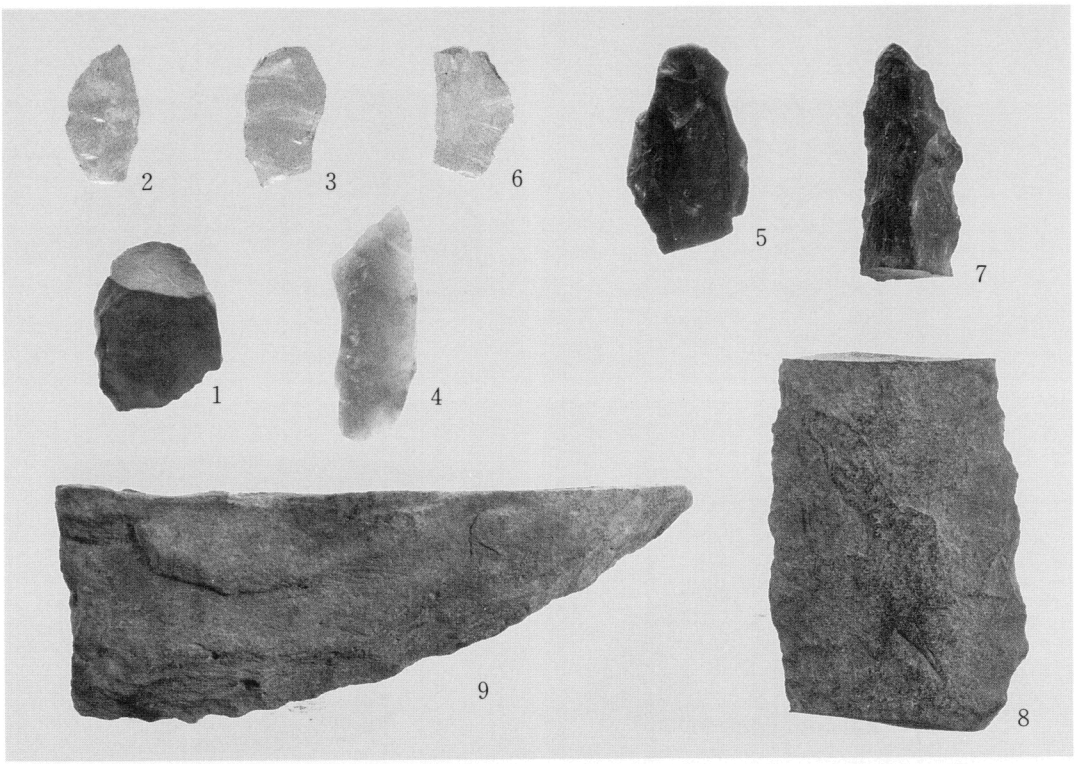


出 土 遺 物 (3)





出 土 遺 物 (4)



(1)　湯無田遺跡採集の石器群(表)

(2)　湯無田遺跡採集の石器群(裏)

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ

昭和63年３月

編集　山口大学埋蔵文化財資料館

発行　山口大学

〒753山口市大字吉田1677－１

印刷　桜プリント（企）

〒753山口市旭通り１－１－６

ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES AND STUDIES AT YAMAGUCHI UNIVERSITY Vol. Ⅵ

CONTENTS

Chapter

Ⅰ General outline of the project on Yamaguchi University campus in 1986 ····· 1

Ⅱ Soundings in relation to the laying drain pipes under ground at Yamaguchi Junior High School, Elementary School and Kindergarten on the Kameyama campus ···· 8

Ⅲ Soundings in relation to the construction of the International Hall on the Yoshida campus ·····39

Ⅳ Examination under construction performed on Yamaguchi University campus ···49

Appendix Ⅰ

The report of the Excavation at "the Preserved Site" on the Yoshida campus in 1984 ·····85

Appendix Ⅱ

Each attribute of the dwelling pits in the Kofun period ····· 129

Appendix Ⅲ

Yamaguchi Prefecture in the Japanese Paleolithic age ····· 147

The gist of researches and studies at Yamaguchi University ····· 167

Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum ····· 167

Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum Management Committee ····· 168

Lists of Researches in Yamaguchi University ····· 170

Summary ····· 175

Published by

Yamaguchi University Archaeological Museum

Yamaguchi, 1987